プロファイル管理 2308

プロファイル管理は、Citrix Virtual Appsサーバー、Citrix Virtual Desktops™で作成された仮想デスクトップ、および物理デスクトップのプロファイルソリューションとして意図されています。プロファイルを管理したい各コンピューターにプロファイル管理をインストールします。

Active Directoryグループポリシーオブジェクトを使用すると、Citrix®ユーザープロファイルの動作を制御できます。多くの設定を調整できますが、一般的には、これらのトピックで説明されているように、一部の設定のみを構成すれば十分です。

展開に適したポリシー選択の適切なセットを選択する最善の方法は、構成の決定の記事の質問に答えることです。

プロファイル管理の利用権はEULAに記載されています。

これらのトピックで使用されている用語については、用語集を参照してください。

新機能

修正された問題

Profile Management 2308 には、Profile Management 2305 と比較して、以下の修正された問題が含まれています。

- **既存のアプリケーションプロファイルの自動移行**設定は、Microsoft Windows 10 バージョン 21H2 を 22H2 以降にアップグレードした後、機能しない場合があります。
- ユーザーがマシンからログオフして再度ログオンした後も、削除されたプロファイルファイルがユーザー ストアに残る場合があります。
- 同じフォレスト内の2つのドメインに同じユーザー名のユーザーが存在するシナリオで、それらのユーザーが同じマシンにログオンすると問題が発生します。
- アクティブなユーザーセッションを持つVDAを再起動すると、致命的な例外やブルースクリーンエラーが発生する可能性があります。
- Profile Management は、プロファイル共有でより長いパス名に名前が変更されたファイルを同期できない場合があります。
- 以下の両方の条件が満たされている場合、Microsoft Outlook プロファイルが読み込まれないことがあります。
    - Outlook OST ファイル用に、グループポリシーまたはレジストリを介してカスタマイズされたパスが構成されている。
    - カスタマイズされたパスにユーザー環境変数が含まれている。
- Citrix® プロファイルコンテナが使用されている場合、Windows デスクトップへのログオン試行が失敗する可能性があります。
- **プロファイルコンテナから除外するフォルダー**設定が有効になっている場合、ログオフプロセスが遅くなることがあります。
- Windows Server 2012 R2 で Citrix Profile Management 2303 または 2305 とプロファイルコンテナを使用している場合、一時プロファイルの問題が発生する可能性があります。
- Profile Management 2305 がインストールされている場合、Microsoft Outlook は次のエラーメッセージを表示して起動に失敗する可能性があります。

C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager\upmoutlookhook.dll は、Windows で実行するように設計されていないか、エラーが含まれています。元のインストールメディアを使用してプログラムを再インストールするか、システム管理者またはソフトウェアベンダーにサポートを依頼してください。エラー状態 0xc0000428。

- Profile Management 2305 がインストールされているマシンでは、ユーザープロファイルのリセットに失敗する可能性があります。

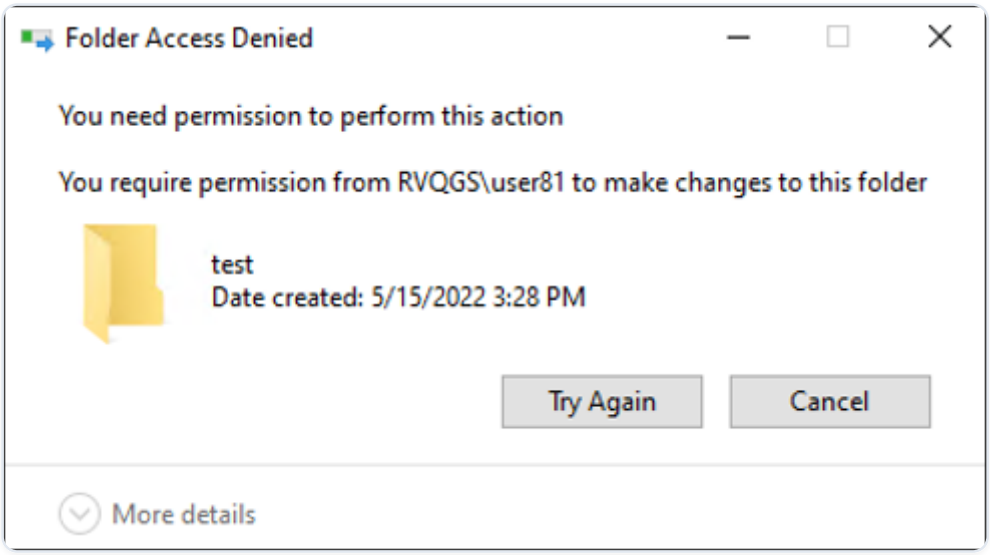
既知の問題

- フルプロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効になっている場合、ユーザーがマシンにログオンすると、次のメッセージが表示されます。
  - ユーザーがコンテナを有効にする前からOneDriveフォルダを使用しており、
  - コンテナが有効になってから、ユーザーが初めてマシンにログオンする場合。



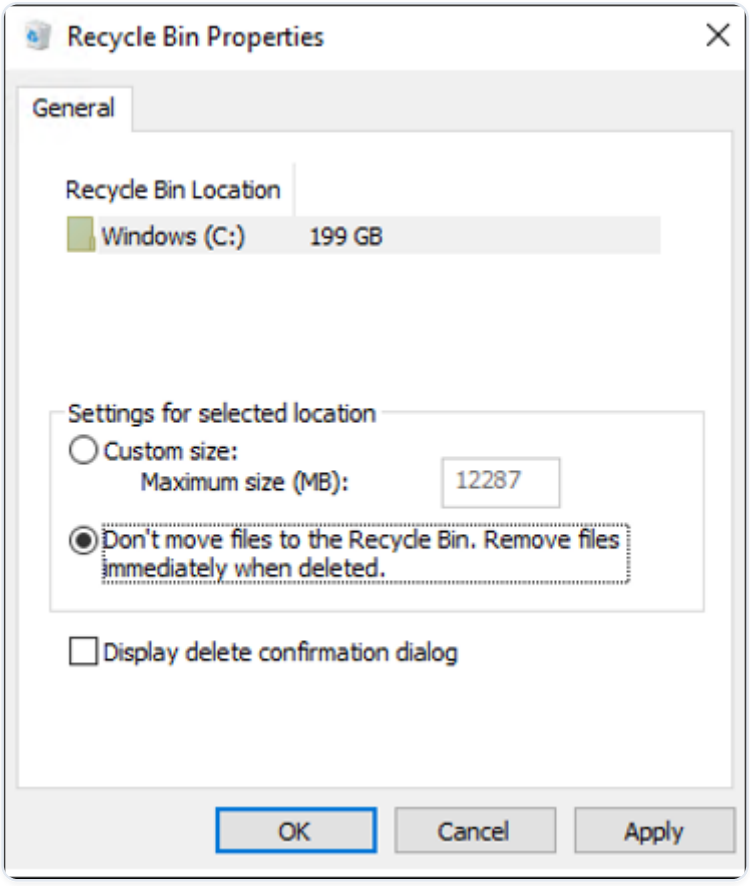
この問題を解決するには、**再試行**をクリックします。すると、OneDriveフォルダはコンテナに正常に移行されます。

- ユーザーが次の状況でフォルダをごみ箱に移動すると、「フォルダアクセス拒否」というメッセージが表示されます。
  - 部分プロファイルコンテナまたはOneDriveコンテナが有効になっている場合、ユーザーがいずれかのコンテナからフォルダを削除しようとすると。
  - フルプロファイルコンテナが有効になっている場合、ユーザーがユーザープロファイルフォルダ内にはないが、プロファイルと同じディスク上にあるフォルダを削除しようとすると。



この問題を回避するには、代わりに完全に削除を実行します。

- フォルダを選択し、**Shift + Delete**を押して完全に削除します。
- **ごみ箱のプロパティ**を**ファイルをゴミ箱に移動しないで、削除と同時にファイルを消去する**に設定します。



- スタートメニューの一部が表示されない場合があります。この問題を回避するには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

サードパーティ通知

Profile Management の現在のリリースには、以下のドキュメントで定義されている条件に基づいてライセンス供与されたサードパーティ製ソフトウェアが含まれている場合があります。

Profile Management サードパーティ通知

クイックスタートガイド

この記事では、Profile Management のインストールと構成に関するクイックリファレンスを提供します。

前提条件

すべてのシステム要件が満たされていることを確認してください。詳細については、「システム要件」を参照してください。

Profile Management をインストールする

Profile Management は、Virtual Delivery Agent (VDA) のインストールに含まれています。VDA の場合、Profile Management をインストールまたはアップグレードするには、VDA ソフトウェアをインストールまたはアップグレードするだけです。

Profile Management の展開は、.msi ファイルと、.adm または .admx ファイルのインストールで構成されます。ファイルをインストールするには、「インストールとセットアップ」の手順に従ってください。

> **注：**
>
> 潜在的な競合を避けるため、Citrix Profile Management プロセス (`%ProgramFiles%\Citrix\User Profile Manager\UserProfileManager.exe`) をアンチウイルスソフトウェアの除外リストに追加してください。詳細については、「Citrix Antivirus のベストプラクティス」を参照してください。

Profile Management を集中管理する場所を決定する

Profile Management を集中管理する方法は3つあります。次のいずれかの方法を選択してください。

- Active Directory の GPO を使用する
- Citrix Studio のポリシーを使用する

- ワークスペース環境管理™ (WEM) を使用する

  Active Directory の GPO を使用して Profile Management を構成する手順については、Knowledge Center の記事「CTX222893」を参照してください。

  Citrix Studioのポリシーを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX222893を参照してください。

  WEMを使用してProfile Managementを構成する手順については、Knowledge Centerの記事CTX229258を参照してください。

Profile Managementを構成する

基本設定を構成する

1. ユーザーストアを作成する

   ファイル共有の作成やフォルダー権限の設定など、安全なユーザーストアを作成するための推奨事項は、Microsoftの記事Deploying Roaming User Profilesで確認できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作において高いレベルのセキュリティを確保します。

2. ユーザーストアへのパスを指定する
3. Profile Managementを有効にする
4. 基本設定を確認する

   基本設定を確認するには、次の手順を実行します。

   a. Citrix Studioで、**Enable logging**、**Logon**、**Logoff**の各ポリシーを**Enabled**に設定します。

   b. VDAにログオンし、`gpupdate /force`を管理者として実行します。

   c. VDAからログオフし、再度ログオンします。

   d. デフォルトのログファイルパス`C:\Windows\System32\Logfiles\UserProfileManager`に移動し、`pm.log`ファイルを開いてログオンイベントを探し、次のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Starting logon processing…

   Finished logon processing successfully in [s]:
   ```

Profile Managementの構成を計画する

1. プロファイル管理の展開を計画するには、環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定します。ユーザープロファイルの**自動構成**機能は、Citrix Virtual Apps and Desktops展開におけるこの意思決定の一部を簡素化します。

   展開の推奨アプローチを決定するには、環境に関する以下の基本的な質問に答えてください。

   - パイロットまたは本番
   - プロファイルの移行または作成
   - 永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有
   - モバイルまたは静的
   - 使用中のアプリケーション

2. それに応じてプロファイル管理を構成するには、以下を実行します。

   - ユーザープロファイルをストリーミングします。「ユーザープロファイルのストリーミング」を参照してください。
   - アクティブライトバックを有効にする。詳細については、アクティブライトバックの構成を参照してください。
   - 必須プロファイルを指定します。「テンプレートまたは必須プロファイルの指定」を参照してください。
   - 除外を構成します。「項目の含める/除外」を参照してください。
   - フォルダーリダイレクトを構成します。「フォルダーリダイレクトの構成」を参照してください。
   - アプリケーションを構成します。「ネイティブOutlook検索エクスペリエンスを有効にする」を参照してください。

3. プロファイル管理設定を確認します。

   a. この記事で前述したように、基本設定を確認します。

   b. ポリシー設定については、`pm_configure.log` ファイルを確認し、次のメッセージが存在することを確認します。

   ```
   Configuration value read from Policy: LoggingEnabled=

   Configuration value read from INI file: CEIPEnabled=
   ```

```
Configuration value PSAlwaysCache set neither in policy nor in INI
file. Defaulting to:
```

トラブルシューティング

詳細については、トラブルシューティングを参照してください。

Profile Management の仕組み

Profile Management は、同じユーザーによる同時ドメインログオンがプロファイルに複雑さや一貫性の問題を引き起こす環境において、ユーザープロファイルの欠点を解決します。たとえば、ユーザーがローミングプロファイルに基づいて2つの異なる仮想リソースへのセッションを開始した場合、最後に終了するセッションのプロファイルが最初のセッションのプロファイルを上書きします。「最後の書き込みが優先される (last write wins)」として知られるこの問題は、ユーザーが最初のセッションで行ったパーソナライズ設定をすべて破棄します。

この問題は、リソースサイロごとに個別のプロファイルを使用することで対処できます。ただし、このアプローチでは、管理オーバーヘッドとストレージ容量の要件が増加します。もう1つの欠点は、ユーザーがアクセスするリソースサイロによって異なる設定を経験することです。

Profile Management は、簡単かつ信頼性の高い方法でプロファイルを最適化します。中間段階およびログオフ時に、レジストリの変更とプロファイル内のファイルおよびフォルダーは、各ユーザーのユーザーストアに保存されます。一般的に、ファイルが存在する場合、タイムスタンプが古い場合は上書きされます。

ログオン時に、ユーザーのレジストリエントリとファイルがユーザーストアからコピーされます。ローカルにキャッシュされたプロファイルが存在する場合、2つのセットは同期されます。その結果、すべてのアプリケーションとサイロのすべての設定がセッション中に利用可能になります。また、サイロごとに個別のユーザープロファイルを維持する必要もなくなります。Citrix® ストリーミングユーザープロファイルは、ログオン時間をさらに向上させることができます。

Profile Management は、ネットワーク障害を経験するモバイルユーザー（オフラインプロファイル機能が構成されている場合）や、異なるオペレーティングシステムからリソースにアクセスするユーザー（クロスプラットフォーム設定機能が構成されている場合）のアプリケーション設定を保護するのに役立ちます。

注：Profile Management は、ローカルアカウントではなくドメインユーザーのログオンを処理します。

ネットワークベースのプロファイルが使用されている場合は、組織で Profile Management の導入を検討してください。強制プロファイルやローミングプロファイルなどの他のソリューションを実装し、Microsoft Windows の標準的な知識でそれらを維持することも可能です。ただし、展開が

制限されている場合（たとえば、ユーザーのカスタマイズが制限されているため強制プロファイルが適切なコールセンターなど）を除き、Profile Management が推奨される場合があります。

Citrix は、ユーザー固有のデータがプロファイルとは別に保存されるように、フォルダーリダイレクトを使用することを推奨します。

ホームフォルダーとテンプレートのパスは、ネットワークの場所のみで構成する必要があります。

プロファイルについて

プロファイルの割り当て

Windowsでユーザーにプロファイルを割り当てるには、どのような方法がありますか?

この記事は、Citrix Profile Managementではなく、Microsoft Windowsにおけるプロファイルの割り当てについて説明しています。

ユーザーにプロファイルを割り当てるには、いくつかの方法があります。

- Active Directory (AD) のユーザーアカウントプロパティを使用する
- グループポリシー (GP) を使用する
- 上記の方法を使用して、Remote Desktop Services (旧称 Terminal Services) セッションに固有のプロファイルを割り当てる

これらの方法の一部は、特定のオペレーティングシステムでのみ利用可能です。

- **Remote Desktop Services**。Windows Server 2008 R2でRemote Desktop Servicesプロファイルを割り当てるには、GPO設定「Set path for Remote Desktop Services Roaming User Profile」を使用します。これは、「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Component\\Remote Desktop Services\\Remote Desktop Session Host\\Profiles」にあります。以前のマルチセッションオペレーティングシステムでは、「Computer Configuration\\Administrative Templates\\Windows Components\\Terminal Services」にある「Set path for TS Roaming Profiles」設定を使用します。

  個々のユーザーのプロファイルを構成するには、ADのユーザーアカウントプロパティページで個々のアカウントに「Set path for TS Roaming Profiles」を設定することもできます。ただし、通常はGPでこの割り当てを行う方がはるかに優れています。

  ターミナルサーバーで「Use mandatory profiles」設定を使用して、強制プロファイルの使用を強制できます。

- **Windows 7、Windows 8、およびWindows Server**: ユーザーアカウントプロパティページを使用して、個々のアカウントに移動プロファイルを設定します。また、Windows Server 2008 ADおよびWindows 7デバイスの場合、GPO設定「Set roaming profile path for all users logging on to this computer」を使用できます。これは、「Computer\\Administrative Templates\\System\\User Profiles」にあります。Windows 8またはWindows Server 2012コンピューターにログオンするユーザーの場合、Windows Server 2012のActive Directoryを使用してユーザーのホームフォルダーを設定することもできます。

複数の方法が使用される場合、ドメインユーザーにプロファイルを配信するための優先順位は何ですか?

Profile Managementがユーザーのプロファイルを管理するために使用される場合、他のどのプロファイル割り当て方法よりも優先されます。Profile Managementによってプロファイルデータが管理されていないユーザーには、複数の方法を使用してプロファイルが割り当てられる場合があります。実際に使用されるプロファイルは、次の優先順位に基づいています。

1. Citrixユーザープロファイル (つまり、Profile Managementによって作成されたプロファイル)
2. GPOによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
3. ユーザープロパティによって割り当てられたリモートデスクトップサービスプロファイル
4. GPOによって割り当てられた移動プロファイル (Windows Server 2008 AD および Windows 7 のみ)
5. ユーザープロパティによって割り当てられた移動プロファイル

Profile Managementのアーキテクチャ

この記事では、ユーザーストアとクロスプラットフォーム設定ストアのフォルダー構造について説明します。ユーザーストアはCitrix®ユーザープロファイルの集中管理場所です。クロスプラットフォーム設定ストアは別の場所です。

Profile Managementストアに関する重要な情報

ユーザーストアとクロスプラットフォーム設定ストアの構造は、情報提供とローカライズおよびトラブルシューティングを支援する目的でここに記載されています。プロファイルデータの問題を最小限に抑え、セキュリティを維持するために設計された、以下の重要な推奨事項に従ってください。

- どちらのストアの構造も変更しないでください。
- ストアのいかなる部分にも、ファイルやフォルダーを直接書き込まないでください。この点において、ユーザーストアはリダイレクトされたフォルダーとは異なります。

- ユーザーストアをリダイレクトされたフォルダーとは別に保管してください。たとえば、`\\server1\profiles\%username%`や`\\server1\folders\%username%`のように、同じファイルサーバーまたはDFS名前空間の異なる共有に保管できます。この手法により、バージョン1とバージョン2のプロファイルを同時にサポートしたり、両方のプロファイルバージョンで共有される単一のリダイレクトされたフォルダーセットをサポートしたりすることがはるかに容易になります。
- ユーザーがユーザーストアを見る必要はないため、ドライブ文字を割り当てないでください。
- ユーザーストアにクォータを課さないでください。プロファイルサイズを制限する場合は、クォータを使用するのではなく、項目を除外することを検討してください。

ユーザーストアのフォルダー構造

ユーザーストアは、デフォルトでユーザーのホームディレクトリにある**WINDOWS**フォルダーに設定されます。これにより、パイロットインストールは簡素化されますが、本番システムでは、ユーザーストアをネットワーク共有、または（最高の拡張性のために）DFS名前空間として構成してください。エンタープライズ対応のユーザーストアのサポートされる構成については、「Profile Managementによる高可用性と災害復旧」で説明されています。

安全なユーザーストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Webサイトの「ローミングユーザープロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高レベルのセキュリティを保証します。また、ユーザーストアへのアクセスを構成する際には、Citrixユーザープロファイルを変更または削除するために必要なAdministratorsグループを含めてください。

注： Windows 7およびWindows 2008 R2クライアントデバイスでは、Windows 2012 R2ファイルサーバーで共有を作成する際に、**Encrypt data access**チェックボックスを選択しないでください。

ルートレベルのユーザーストアのフォルダー構造を次の表に示します。

フォルダ	注
	ユーザー ストア内のプロファイルのルート。
`\UPM_Profile`	このフォルダーには、プロファイルからのファイルとフォルダーが含まれています。
`\UPM_Drive_C`	このフォルダーには、プロファイル外から含まれる項目（この場合はドライブ C から）が含まれています。このフォルダーは、Profile Management 4.x 以前からのアップグレード時

フォルダ	注
	に存在します。Profile Management 5.0 では、プロファイル外の項目の管理はサポートされていません。
`\Pending`	このフォルダーには、ロック ファイル、保留中のファイル、およびストリーミング機能が使用されている場合はスタンプ ファイルが含まれています。

いくつかの例を次の表に示します。

フォルダー名の例	注
`\UPM_Profile\Data`	ユーザー プロファイル内の **Data** フォルダーの同期されたコンテンツ。
`\UPM_Profile\AppData_upm_var`	ユーザー プロファイル内の非ローカライズされた Application Data フォルダーの同期されたコンテンツ。このフォルダーは、Profile Management 4.x 以前からのアップグレード時に存在します。バージョン 1 プロファイル（Application Data はその一例です）の管理は、Profile Management 5.0 ではサポートされていません。

保留領域

ユーザー ストアには保留領域が含まれます。この領域は、ストリーミングされたユーザー プロファイルとアクティブなライトバック機能で使用される一時的な領域です。ユーザーが最後のセッションからログオフした後、すべてのファイルは保留領域からユーザー ストアに同期されます。新しいセッションでは、ユーザー ストアと保留領域の両方からファイルがダウンロードされるため、ユーザーは常に最新のプロファイルを体験できます。

サーバーが応答しなくなった場合、保留領域のファイルをユーザー ストアに戻すタイムアウトを設定できます（ストリーミングされたユーザー プロファイル機能の一部として構成されている場合）。

複数のプラットフォームを持つユーザー ストアのフォルダー構造

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合、複数のプラットフォームが関係します。各プラットフォームのプロファイルを分離するために、プラットフォーム固有のフォルダーを定義する必要があります。通常、これはユーザー ストアへのパス ポリシーで Profile Management 変数を使用して行います（たとえば、パスに `%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` を使用します）。

クロスプラットフォーム設定ストアには、クロスプラットフォーム設定機能が構成された後、サポートされているアプリケーションの設定が保持されます。ストアの名前と場所は、構成時に指定します（クロスプラットフォーム設定ストアへのパス ポリシーを使用）。このストアには、オペレーティング システム間でローミングするユーザー設定のサブセットが保持されます。

たとえば、Windows XP と Windows 7 の間で設定をローミングしたい場合があります。プラットフォーム固有のフォルダーには、Windows XP と Windows 7 に固有のユーザー設定が含まれます。クロスプラットフォーム設定ストアには、これらのオペレーティング システム間でローミングする設定のサブセットが含まれます。ログオン時に、このサブセットはプラットフォーム固有のフォルダーにコピーされ、その一部として残ります。ログオフ時に、サブセットへの変更が抽出され、クロスプラットフォーム設定ストアに戻されます。

各プラットフォーム固有のフォルダーには、標準のサブフォルダー（例：UPM_Profile）が含まれています。詳細については、ユーザー ストアのフォルダー構造を参照してください。さらに、UPM_CPS_Metadataサブフォルダーも存在します。このシステムによって作成されたフォルダーには、オペレーティングシステム間で共有される一時設定が含まれています。

ユーザー ストアとADフォレスト

Citrixユーザープロファイルは、フォレストをまたいで管理することはできません。同じフォレスト内のドメインをまたいで管理することは可能で、同じログオン名を持つ複数のユーザーがフォレスト内の同じリソースにアクセスできます。これには、ユーザー ストアへのパスにある `%USERDOMAIN%` および `%USERNAME%` 変数を使用してプロファイルを一意に識別することが含まれます。

ただし、この場合、ユーザー ストアへのパスを設定する際に、同じログオン名を区別するために変数を使用する必要があります。これを行うには、ドメイン名変数をパスに追加します。また、ユーザー ストアにアクセス許可を設定し、Active Directoryのユニバーサルグループを使用してProfile Managementの処理済みグループ設定を有効にする必要があります。

%ProfVer%のような手動で定義されたシステム変数を使用して、オペレーティングシステムのバージョンを設定できます。または、Profile Management変数を使用して、オペレーティングシステム名、ビット数、またはプロファイルバージョンを設定することもできます。ADフォレスト内

のユーザー ストアパスの例については、ユーザー ストアへのパスを指定するを参照してください。

ユーザー ストアのローカライズ

次の表は、プロファイルデータがユーザー ストアに移動される際、およびユーザー ストアから移動される際に、Profile Managementがフォルダーをローカライズおよび非ローカライズする方法の概要を示しています。フォルダー名のみがローカライズおよび非ローカライズされます。たとえば、スタートメニューのエントリやレジストリ設定は、Profile Managementによって正しい言語に翻訳されません。

この情報は、Profile Management 4.x以前からアップグレードする場合にのみ関連し、その際にバージョン1のプロファイルが存在する可能性があります。バージョン1のプロファイルの管理は、Profile Management 5.0ではサポートされていません。

バージョン1英語フォルダー	ユーザー ストア フォルダー	ユーザープロファイルに対する完全パス
アクセシビリティ	Accessibility_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`
アクセサリ	Accessories_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
管理ツール	AdminTools_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
アプリケーションデータ	AppData_upm_var	`\Local Settings`
クッキー	Cookies_upm_var	
デスクトップ	Desktop_upm_var	
エンターテイメント	Entertainment_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`
お気に入り	Favorites_upm_var	
履歴	History_upm_var	`\Local Settings`
リンク	Links_upm_var	`\Favorites`
ローカル設定	LocalSettings_upm_var	

バージョン1英語フォルダー	ユーザー ストア フォルダー	ユーザープロファイルに対する完全パス
マイドキュメント	MyDocuments_upm_var	
マイミュージック	MyMusic_upm_var	`\My Documents`
マイピクチャ	MyPictures_upm_var	`\My Documents`
マイビデオ	MyVideos_upm_var	`\My Documents`
NetHood	NetHood_upm_var	
PrintHood	PrintHood_upm_var	
プログラム	Programs_upm_var	`\Start Menu`
最近	Recent_upm_vars	
スタートメニュー	StartMenu_upm_var	
テンプレート	Templates_upm_var	
インターネット一時ファイル	TemporaryInternetFiles_upm_var	`\Local Settings`
SendTo	SendTo_upm_var	
スタートアップ	Startup_upm_var	`\\Start Menu\Programs`
システムツール	SystemTools_upm_var	`\\Start Menu\Programs\Accessories`

プロファイル管理のユースケース

Citrix Profile Managementは、アプリケーションがユーザーにどのように配信されるか、またはどこに格納されているかに関わらず、さまざまなシナリオでユーザープロファイルを管理するために実装できます。以下に、これらのシナリオの例を示します。

- Citrix Virtual Apps™と公開アプリケーション
- Citrix Virtual Appsと公開デスクトップ

- Citrix Virtual Appsと分離環境にストリーミングされたアプリケーション
- Citrix Virtual Desktops™にストリーミングされたアプリケーション
- Citrix Virtual Desktopsにインストールされたアプリケーション
- 物理デスクトップにストリーミングされたアプリケーション
- 物理デスクトップにローカルにインストールされたアプリケーション

これらのシナリオのうち、Citrixは以下を最も一般的なユースケースと見なしています。

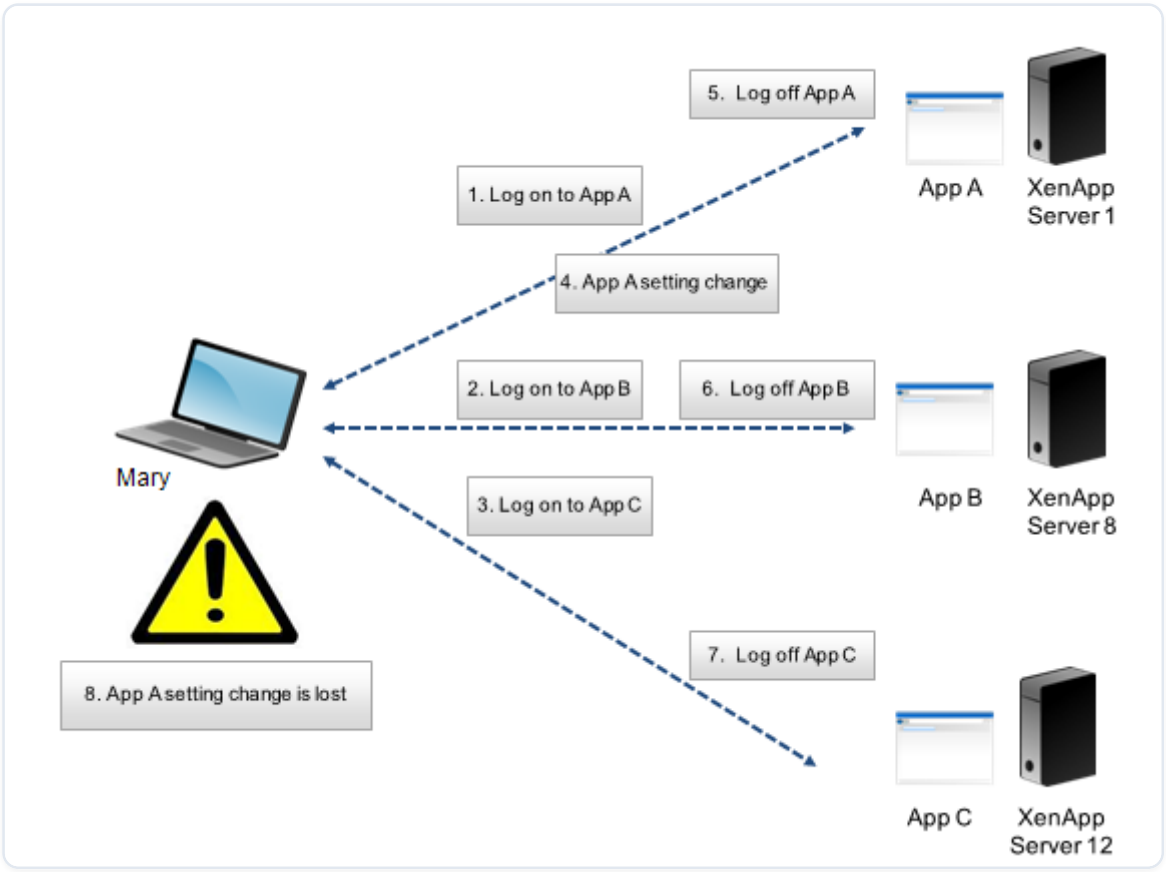
- **複数セッション** - ユーザーは複数のCitrix Virtual Appsサーバーサイロにアクセスするため、複数のセッションを開いています。ただし、サーバー上でのアプリケーション分離とストリーミングは、サーバーサイロの代替手段であることに注意してください。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。
- **「最後の書き込みが優先される」と移動プロファイルの整合性の問題** - 移動プロファイルへの最後の書き込みにより、すべての設定が保存されます。したがって、複数のセッションが開いていて一時的な変更が行われた場合、移動プロファイルが正しいデータを保持しない可能性があります。さらに、ネットワーク、ストレージの問題、またはその他の問題の結果として、設定がプロファイルに正しく書き込まれない可能性があります。このシナリオについては、このトピックで詳しく説明します。
- **大規模なプロファイルとログオン速度** - プロファイルの肥大化は、ユーザープロファイルを扱いにくくし、ストレージと管理の問題を引き起こす可能性があります。通常、ログオン時にWindowsはユーザーのプロファイル全体をネットワーク経由でローカルユーザーデバイスにコピーします。肥大化したプロファイルの場合、この動作はユーザーのログオン時間を長引かせる可能性があります。

複数セッション

特に大規模な環境では、同じファーム内であろうと複数のファーム内であろうと、異なるCitrix Virtual Appsサーバーに格納されている異なるアプリケーションにアクセスするために、ユーザーが複数のセッションを開く必要がある場合があります。可能な場合は、ユーザーが単一のサーバーからすべてのアプリケーションにアクセスできるようにし、それによって単一のセッションを可能にするために、同じCitrix Virtual Appsサーバーにアプリケーションを格納するためのアプリケーション分離またはストリーミングを検討してください。ただし、事業部門が特定のサーバーを制御している場合や、アプリケーションをストリーミングできない場合は、これが不可能な場合があります。

ユーザーが様々なCitrix仮想アプリサーバーからアプリケーションにアクセスすることが本当に必要であると判断された場合、プロファイルへの影響を特定する必要があります。

以下の図は、複数のセッションが存在する場合にアプリケーション設定が失われる可能性がある例を示しています。



例えば、MaryはApp A、App B、App Cにアクセスしたいと考えており、それぞれServer 1、Server 8、Server 12にルーティングされます。各アプリケーションにログオンすると、Maryのターミナルサービスローミングプロファイルが各サーバーにロードされ、各セッションのフォルダーがリダイレクトされます。MaryがServer1のApp Aにログオンしているときに、Setting1を変更し、そのセッションからログオフします。その後、Maryは他の2つのアプリケーションでの作業を完了し、ログオフします。

ログオフ時に、MaryがServer 1のセッション内で行った変更は上書きされます。これは、一時的な変更ではなく、最後に閉じられたセッション内の設定が保持されるためです。翌日、MaryがApp Aにログオンすると、彼女が行った変更が表示されないため、不満を感じます。

Profile Managementは、一般的にこの状況の発生を防ぐことができます。Profile Managementは、セッション中に変更された特定の「設定」のみを書き戻します。その他の変更されていない「設定」はすべてそのまま残ります。したがって、発生する可能性のある唯一の競合は、Maryが別のセッション内でSetting1を変更した場合です。ただし、このシナリオでProfile Managementが使用されている場合、ユーザーは最新の変更が保持されることを期待するでしょうし、実際にそうなります。

「最終書き込み優先」とローミングプロファイルの整合性の問題

このシナリオは、このトピックの最初のシナリオと似ています。「最終書き込み優先」の問題は様々な形で現れる可能性があり、アクセスするデバイスの数が増えるにつれてユーザーの不満が高まることがあります。

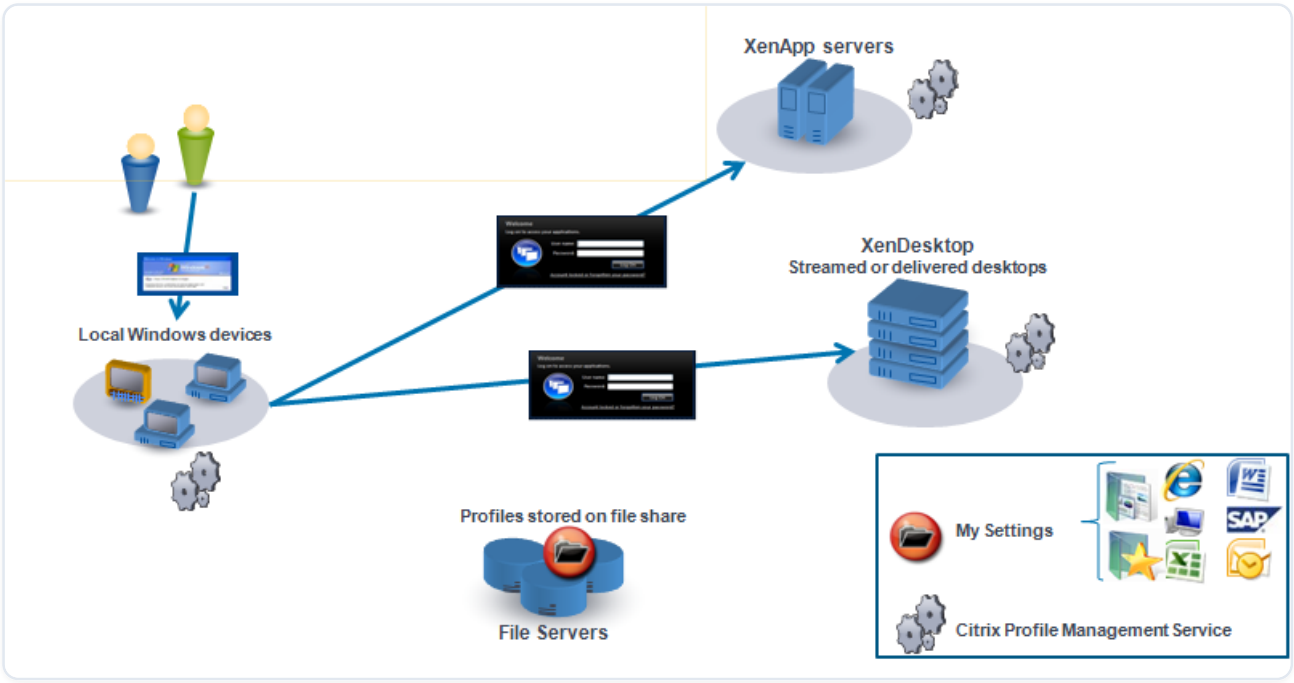
ローミングプロファイルは、リダイレクトされたフォルダーを除き、すべてのプロファイルデータを保持するため、ユーザープロファイルは大きくなる可能性があります。これにより、プロファイルをダウンロードする必要があるためログオン時間が増加するだけでなく、特にネットワークの問題がある場合、ログオフの書き込みフェーズ中に不整合の可能性が高まります。

Profile Managementを使用すると、特定のデータをユーザープロファイルから除外できるため、ユーザープロファイルを最小限のサイズに保つことができます。プロファイルには差分のみが書き込まれるため、ログオフの書き込みフェーズではデータ量が少なく、処理が高速になります。Profile Managementは、一時的なデータにプロファイルを使用するものの、アプリケーション終了時にそれらをクリーンアップしないアプリケーションにとって有益です。

複数のリソースへのアクセス

ユーザーが複数のリソースにアクセスするにつれて、プロファイルはより複雑になります。プロファイルがネットワークに保存されている場合、Microsoft Windows はレジストリを使用してユーザー設定を保存します。プロファイルはログオン時にネットワークからローカルデバイスにコピーされ、ログオフ時にネットワークにコピーし直されます。日常的に、ユーザーは複数のコンピューターにアクセスし、デスクトップとラップトップを切り替え、Citrix Virtual Apps and Desktops™ または Citrix DaaS (旧 Citrix Virtual Apps and Desktops service) で作成された仮想リソースにアクセスします。

この図は、単一の Citrix® ユーザープロファイルが、複数のリソースにログオンするユーザーにどのように追従するかを示しています。



例えば、ユーザーはローカルの物理デスクトップを持っており、そこから Citrix Virtual Apps で公開されたアプリケーションにアクセスします。また、Citrix Virtual Desktops で作成された仮想デスクトップにもアクセスします。設定が適切に構成されていない限り、ユーザーの設定はこれらすべてのリソースで統一されません。

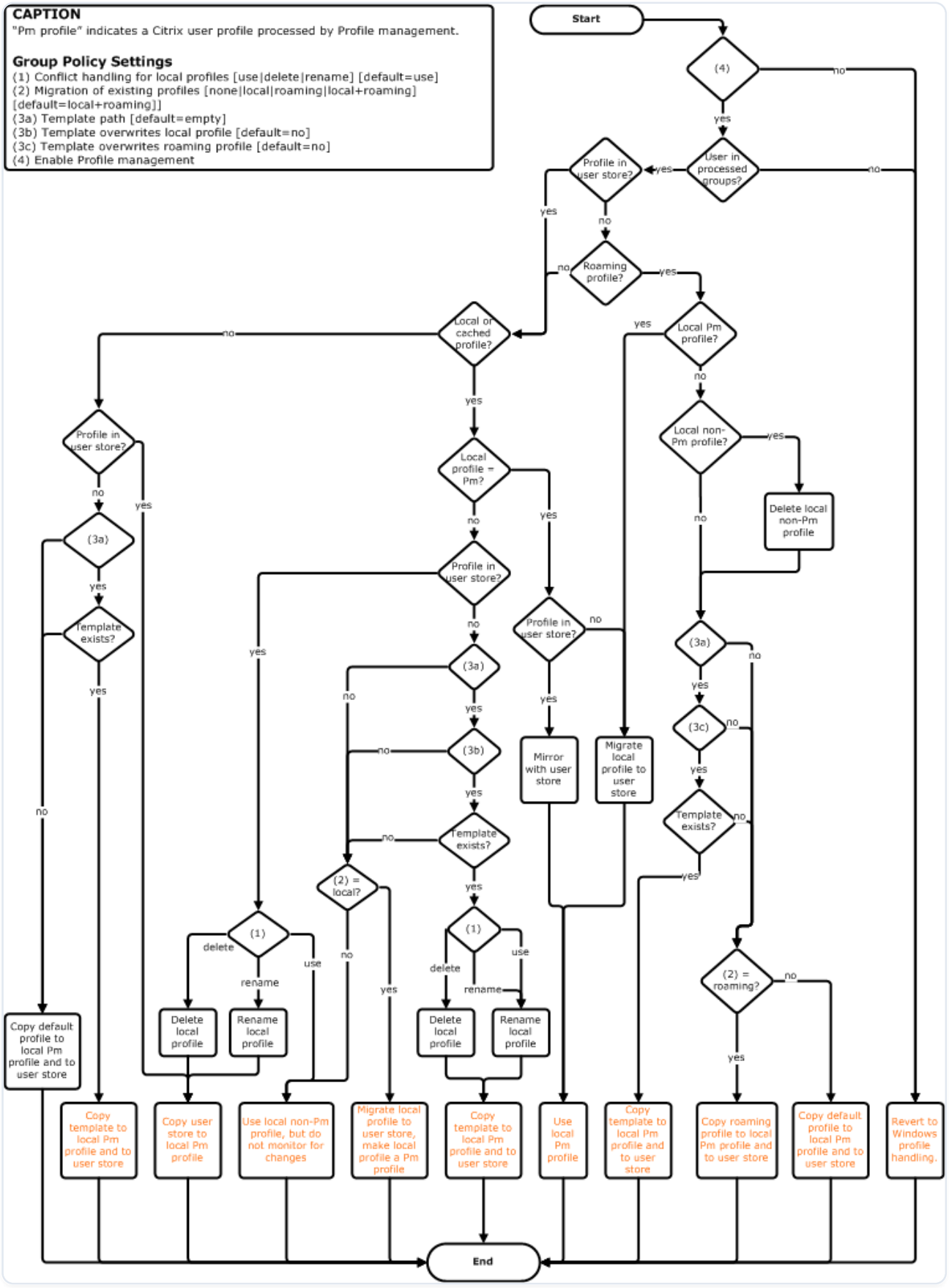
さらに、共有リソースにアクセスする場合、移動プロファイルの動作は「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。例えば、管理者が移動プロファイルを有効にし、ユーザーがローカルデスクトップの背景色を変更したとします。その後、ユーザーは Citrix 仮想デスクトップにログオンし、ローカルデスクトップからログオフし、仮想デスクトップからログオフします。ローカルデスクトップと仮想デスクトップの両方が同時に開いており、最後のログオフは仮想デスクトップからでした。したがって、仮想デスクトップセッションからの設定がプロファイルに最後に書き込まれたため、背景色の変更は失われます。

ログオン図

この図は、ユーザープロファイルの移行戦略の詳細を検討するのに役立ちます。また、パフォーマンスの以下の側面についても説明しています。

- プロファイルを移行すると、2つのネットワークコピーが発生し、ログオンプロセスが遅くなる可能性があります。たとえば、**デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルとユーザーストアにコピー**する操作には、次の2つのコピーが含まれます。1つはローミングプロファイルストアからローカルコンピューターへの完全なプロファイルコピー、もう1つはローカルコンピューターからユーザーストアへの完全なプロファイルコピーです。
- キャッシュされたプロファイルが使用される場合、ネットワークを介したプロファイルデータのコピーは行われません。

図を下から上に読みます。下部のボックスで目的の操作を確認し（例：**デフォルトプロファイルをローカルPmプロファイルとユーザーストアにコピー**）、パスをたどって必要な移行設定を特定します。

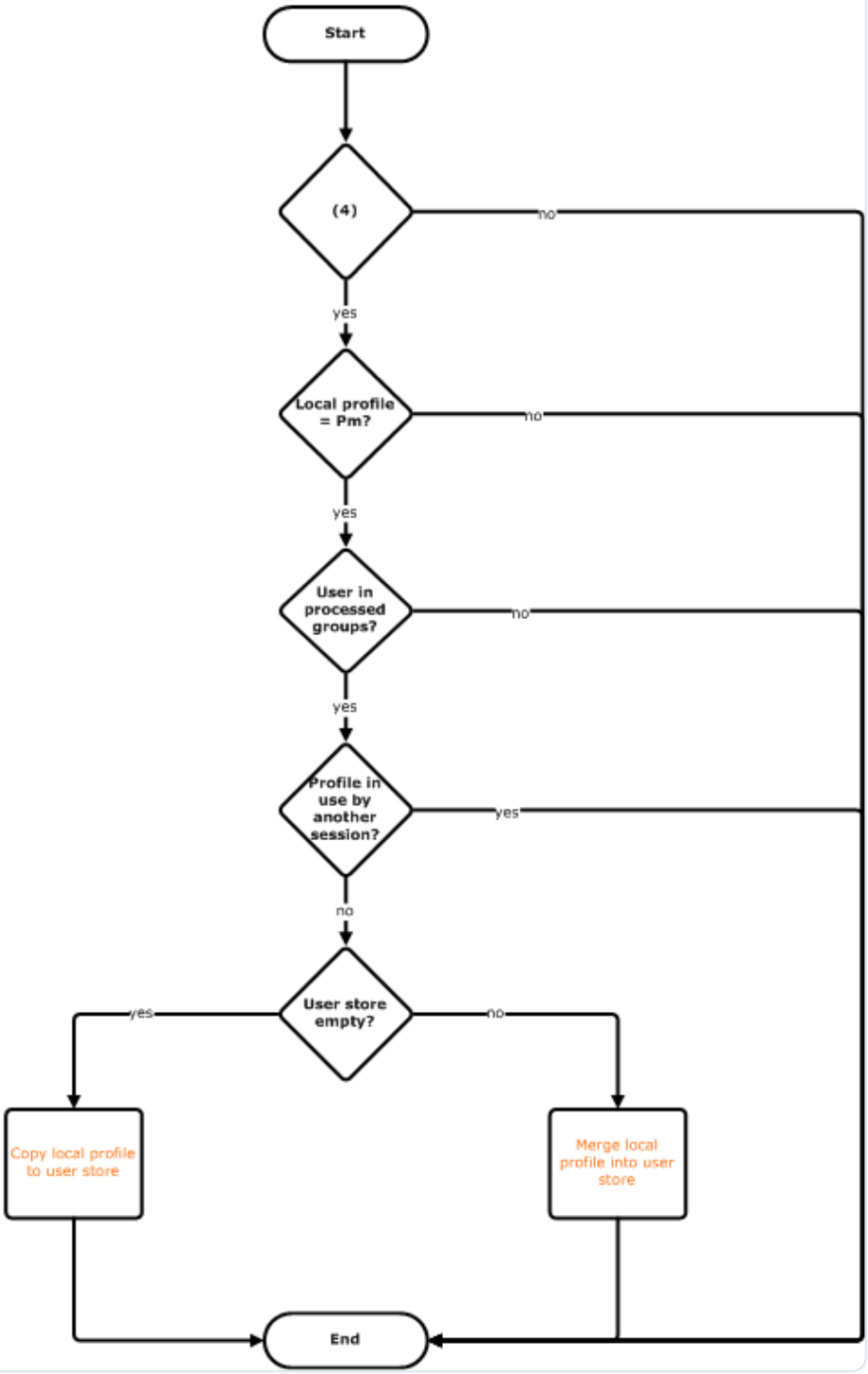


ログオフ図

この図は、ログオフ時にプロファイルデータをコピーまたはマージするために使用されるロジックを示しています。

CAPTION
"Pm" indicates a Citrix user profile processed by Profile management.

Group Policy Settings
(1) Conflict handling for local profiles [use|delete|rename] [default=use]
(2) Migration of existing profiles [none|local|roaming|local+roaming] [default=local+roaming]]
(3a) Template path [default=empty]
(3b) Template overwrites local profile [default=no]
(3c) Template overwrites roaming profile [default=no]
(4) Enable Profile management



展開計画

構成を決定する

Profile Management を構成するには、環境に関する以下の基本的な質問に答えることをお勧めします。

1. パイロットまたは本番
2. プロファイルの移行または作成
3. 永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有
4. モバイルまたは静的
5. どのアプリケーションが使用されているか

回答に基づいて、展開用に Profile Management を構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにできます。

次のステップ

- インストールとセットアップ
- トラブルシューティング

ヒント

Profile Management の設定を確認および展開する際は、以下のヒントを参照してください。

UPMConfigCheck ツールを使用して設定を確認する

UPMConfigCheck は、稼働中の Profile Management 展開を検査し、最適に構成されているかどうかを判断する PowerShell スクリプトです。詳細については、Knowledge Center の記事 CTX132805 を参照してください。

コンピューターをOUにグループ化する

複数のコンピューターセットに対して質問への回答が同じである場合は、それらをActive Directoryの組織単位 (OU) にグループ化することを検討してください。また、そのOUにアタッチ

された単一のグループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、プロファイル管理を構成することも検討してください。

これらの質問への回答が異なる場合は、コンピューターを別々のOUにグループ化することを検討してください。

あるいは、ドメインがWMIフィルタリングをサポートしている場合は、すべてのコンピューターを同じOUにグループ化し、WMIフィルタリングを使用して適切に構成されたGPOを選択できます。

パイロットまたは本番

パイロット展開の目的は、ソリューションを迅速かつ確実に実証できるようにすることです。重要な目標は、パイロットのコンポーネント数を減らすことかもしれません。Profile Management の場合、2つのコンポーネントは、ユーザー ストアと、プロファイルが処理されるユーザーの選択です。

ポリシー: ユーザー ストアへのパス

Citrix®ユーザープロファイル用のユーザー ストアのセットアップは、Windowsローミングプロファイル用のプロファイル ストアのセットアップとまったく同じです。

パイロット展開の場合、これらの考慮事項は無視できることがよくあります。「ユーザー ストアへのパス」ポリシーのデフォルト値は、ユーザーのホームディレクトリにある **Windows** フォルダーです。これは、単一のオペレーティングシステム（したがって、単一のプロファイルバージョン）のみが展開されている限り、単一プラットフォームのパイロットでうまく機能します。プロファイルバージョンについては、「プロファイルについて」を参照してください。このオプションは、ユーザーのホームディレクトリに十分なストレージがあり、ファイルサーバーのクォータが適用されていないことを前提としています。Citrixは、プロファイルでのファイルサーバークォータの使用を推奨していません。その理由は、「複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する」に記載されています。

本番展開の場合、セキュリティ、負荷分散、高可用性、および災害復旧を慎重に検討する必要があります。ユーザー ストアの作成と構成については、以下のトピックの推奨事項に従ってください。

- Profile Managementのアーキテクチャ
- ユーザー ストアの作成
- ユーザー ストアへのパスの指定
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

ポリシー: 処理されるグループ、除外されるグループ

本番展開の複雑さにより、Profile Managementのロールアウトをすべてのユーザーに同時にリリースするのではなく、段階的に行う必要がある場合があります。展開がロールアウトされている間、ユーザーは異なるリソースに接続するときに異なるプロファイルエクスペリエンスを受け取ることを伝えることができます。

パフォーマンス上の理由から、Profile Managementは組み込みのライセンスチェックではなく、EULAによってライセンスされます。ライセンスの割り当ては、ユーザーをActive Directory（AD）ユーザーグループに割り当てるか、適切なADグループが存在する場合は既存のADグループを使用することで管理することを選択できます。

パイロット展開では、Profile Managementの使用は、招待によって少数のユーザーグループ（複数の部門からの可能性あり）に制限され、単一の代表的なADグループを使用できない場合があります。この場合、「処理されるグループ」および「除外されるグループ」ポリシーは未構成のままにします。Profile Managementはグループメンバーシップのチェックを実行せず、すべてのユーザーが処理されます。

これらのポリシーの詳細については、「処理されるグループのプロファイルを定義する」を参照してください。

重要: いずれの場合も、Profile Management で処理されるユーザー数が、関連するEULAで定められた制限を超えないようにしてください。

プロファイルを移行または作成する

Profile Management の展開を利用して、組織のプロファイルを更新できます。最初は小規模でカスタマイズされたプロファイルを使用し、それへの追加を厳密に制御します。あるいは、既存のプロファイルを Profile Management 環境に移行し、長年にわたって蓄積された個人設定を保持する必要があるかもしれません。

既存のプロファイルを移行することを決定した場合は、「既存のプロファイルの移行」ポリシーと「ローカルプロファイルの競合処理」ポリシーを構成します。

次の図は、この質問に対する回答に基づいてこれらのポリシーを構成する方法を示しています。

図(/en-us/profile-management/2308/media/upm-migrate.png)

ポリシー: テンプレートプロファイル

まったく新しいプロファイルセットを作成する場合は、「テンプレートプロファイル」ポリシーを使用して、この目的のためのテンプレートを作成することを検討してください。詳細については、「テンプレートまたは必須プロファイルを指定する」を参照してください。テンプレートを

作成しない場合、Profile Management はユーザーにデフォルトの Windows プロファイルを提供します。テンプレートが不要な場合は、このポリシーを無効のままにします。

テンプレートプロファイルポリシーは、**ユーザーストアへのパス**ポリシーに似ています。このポリシーは、ユーザーが Profile Management によって管理されているコンピューターに初めてログオンしたときに、ユーザープロファイルを作成するための基礎として使用できるプロファイルの場所を指定します。

オプションで、すべてのログオンに対してテンプレートを Citrix® 必須プロファイルとして使用できます。計画の一環として、ユーザーがアクセスするアプリケーションの特定などのタスクを実行する必要があります。それに応じて、プロファイル内のレジストリの状態、ショートカット、およびデスクトップ設定を構成する必要があります。プロファイルフォルダーのアクセス許可を設定し、ユーザーのログオンスクリプトを変更する必要があります。

> **注:**
>
> Citrix Virtual Desktops™ 展開で必須プロファイルを選択する場合は、Profile Management の .adm または .admx ファイルではなく、Citrix Studio を使用することをお勧めします。

永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有

プロファイルを作成するマシンの種類は、構成の決定に影響します。主な要因は、マシンが永続的かプロビジョニング済みか、および複数のユーザーで共有されるか、1人のユーザー専用であるかです。

永続システムには何らかのローカルストレージがあり、その内容はシステムがシャットダウンしても永続することが期待されます。永続システムは、SANなどのストレージ技術を使用してローカルディスクを模倣する場合があります。対照的に、プロビジョニングされたシステムは、ベースディスクと何らかのIDディスクから「オンザフライ」で作成されます。ローカルストレージは通常、RAMディスクまたはネットワークディスクによって模倣され、後者は高速リンクを備えたSANによって提供されることがよくあります。プロビジョニング技術は通常、Provisioning ServicesまたはMachine Creation Services™（あるいはサードパーティ製の同等品）です。プロビジョニングされたシステムが永続的なローカルストレージを持つ場合もあり、これはPersonal vDisksによって提供されることがあります。これらは永続的と分類されます。

これら2つの要素を組み合わせると、以下のマシンタイプが定義されます。

- **永続的かつ専用** - 例としては、Machine Creation Services（Citrix virtual desktops™内）で作成された静的割り当てとPersonal vDiskを持つシングルセッションOSマシン、および物理ワークステーションとラップトップで作成されたPersonal vDiskを持つデスクトップがあります。
- **永続的かつ共有** - 例としては、Machine Creation Services（Citrix virtual desktops内）で作成されたマルチセッションOSマシン、およびCitrix virtual apps™サーバーがあります。
- **プロビジョニング済みかつ専用** - 例としては、Provisioning Services（Citrix virtual desktops内）で作成された、静的割り当てを持つがPersonal vDiskを持たないシングルセッションOSマシンがあります。
- **プロビジョニング済みかつ共有** - 例としては、Provisioning Services（Citrix virtual desktops内）で作成されたランダム割り当てを持つマルチセッションOSマシン、およびCitrix virtual appsサーバーで作成されたPersonal vDiskを持たないデスクトップがあります。

以下のProfile Managementポリシー設定は、異なるマシンタイプに対する推奨ガイドラインです。これらは通常うまく機能しますが、展開の要件に応じて逸脱することもできます。

注：Citrix virtual desktops展開では、「ログオフ時にローカルキャッシュされたプロファイルを削除」、「プロファイルストリーミング」、および「常にキャッシュ」は自動構成機能によって適用されます。

ポリシー	永続的かつ専用	永続的かつ共有	プロビジョニング済みかつ専用	プロビジョニング済みかつ共有
ログオフ時にローカルキャッシュされたプロファイルを削除	無効	有効	無効 (注 5)	有効
プロファイルストリーミング	無効	有効	有効	有効
常にキャッシュ	有効 (注 1)	無効 (注 2)	無効 (注 6)	無効
アクティブライトバック	無効	無効 (注3)	有効	有効
ローカル管理者ログオンの処理	有効	無効 (注4)	有効	有効 (注7)

注

1. このマシンタイプではプロファイルストリーミングが無効になっているため、「常にキャッシュ」設定は常に無視されます。
2. 「常にキャッシュ」を無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限 (MB単位) を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルにロードされるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。
3. Citrix Virtual Appsサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルへの変更を保存する場合を除き、「アクティブライトバック」を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
4. ホスト型共有デスクトップの場合を除き、「ローカル管理者ログオンの処理」を無効にします。この場合は、このポリシーを有効にします。
5. ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルの削除を無効にします。これにより、ローカルにキャッシュされたプロファイルが保持されます。マシンは個々のユーザーに割り当てられているため、プロファイルがキャッシュされているとログオンが高速になります。
6. 常にキャッシュを無効にします。ただし、このポリシーを有効にし、ファイルサイズ制限（MB単位）を定義することで、ログオン後できるだけ早く大きなファイルがプロファイルにロードされるようにすることができます。このサイズ以上のファイルは、できるだけ早くローカルにキャッシュされます。
7. Citrix仮想アプリサーバー間をローミングするユーザーのプロファイルを除き、ローカル管理者のログオン処理を有効にします。この場合、このポリシーを無効にします。

モバイルまたは静的

お使いのマシンはActive Directoryドメインに常時接続されていますか？ノートPCや同様のモバイルデバイスは、おそらく接続されていません。同様に、永続的なローカルストレージを持つ固定マシンであっても、長期間データセンターから分離される展開もあります。例えば、リモート支社が衛星通信によって本社と接続されている場合などです。別の例としては、インフラストラクチャが復旧中で、電力や通信が断続的になる災害復旧が挙げられます。

Typically, Profile Management is resilient to short network outages (less than 24 hours) so long as the user does not log off while the network is unavailable. In these circumstances, you can optimize Profile Management in several ways that significantly speed up the logon process. This is the static case.

Where extended periods of disconnection are expected or users must be able to log off or shut down their computers while disconnected from the corporate network, you cannot optimize Profile

Management. When users reconnect, logons are slow while the entire profile is fetched from the user store. This is the mobile case.

モバイルケース

長期間の切断（およびActive Directoryドメインへの断続的な接続のみ）の場合、オフラインプロファイルサポートポリシーを有効にします。このアプローチは、サポートされていない最適化を制御する以下のポリシーの効果を自動的に無効にします。これらのポリシーはグループポリシーでは無効になっていないように見えるかもしれませんが、効果はありません。

- プロファイルストリーミング
- 常にキャッシュ

注： もし オフラインプロファイルサポートが有効になっている場合、 **アクティブライトバック**は尊重されますが、コンピューターがネットワークに接続されている場合にのみ機能します。

静的ケース

ポリシー：オフラインプロファイルサポート

短期間の切断の場合、オフラインプロファイルサポートポリシーを無効にします。これにより、以下のいずれかのポリシーを設定できます。

ポリシー：ストリームユーザープロファイルグループ

Set the Streamed user profile groups policy to Unconfigured. Enabling this policy is effective only if Profile streaming is also enabled. Streamed user profile groups is used to limit the use of streamed profiles to specific Active Directory user groups. It is useful in some scenarios when migrating from older versions of Profile Management. For instructions on setting this policy, see Stream user profiles.

このポリシーに適用される高可用性と災害復旧に関する情報については、「シナリオ 4 - 移動ユーザー」を参照してください。

ポリシー: 保留中のエリアロックファイルのタイムアウト

「**保留中のエリアロックファイルのタイムアウト**」ポリシーを「未構成」に設定すると、保留中のエリアロックに対して1日間のタイムアウトを適用するデフォルトの操作が適用されます。これが唯一サポートされている値であるため、このポリシーを調整しないでください。

ポリシー: アクティブなライトバック

このポリシーの詳細については、「永続的またはプロビジョニング済み、および専用または共有」(/ja-jp/profile-management/2308/plan/upm-plan-decide-4a.html) を参照してください。

使用中のアプリケーション

展開で使用されているアプリケーションは、Profile Managementの構成方法に影響します。ただし、他の構成決定とは異なり、単純な「はい」または「いいえ」で答えられる推奨事項はありません。決定は、アプリケーションが永続的なカスタマイズをどこに保存するか（レジストリまたはファイルシステム）によって異なります。

アプリケーションが設定とユーザーのカスタマイズをどこに保存するかを特定するために、ユーザーのアプリケーションを徹底的に分析し、理解してください。アプリケーションバイナリを監視するには、Process Monitorなどのツールを使用します。Googleも役立つ情報源です。Process Monitorの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/procmon>`を参照してください。

アプリケーションの動作を理解したら、含める項目を使用して処理するファイルと設定を定義します。除外する項目を使用して処理しないファイルを定義します。デフォルトでは、`AppData\Local`内のファイルを除き、プロファイル内のすべてが処理されます。展開に以下のいずれかのアプリケーションが含まれる場合は、`AppData\Local`のサブフォルダーを明示的に含める必要がある場合があります。

- DropBox
- グーグル クローム
- Visual Studioのワンクリック発行で作成されたアプリケーション

シンプルなアプリケーション

シンプルなアプリケーションとは、適切に動作するアプリケーションのことです。これらは、パーソナライズ設定をHKCUレジストリハイブに、パーソナライズファイルをプロファイル内に保存します。シンプルなアプリケーションには基本的な同期が必要であり、その結果、以下の方法で項目を含めたり除外したりする必要があります。

- これらのポリシーにおける相対パス（%USERPROFILE%に対する相対パス）:
    - 同期するディレクトリ
    - 同期するファイル
    - 除外リスト - ディレクトリ
    - 除外リスト - ファイル
    - ミラーリングするフォルダー

  注: %USERPROFILE%はProfile Managementによって暗黙的に指定されます。これらのポリシーに明示的に追加しないでください。

- これらのポリシーにおけるレジストリ相対パス（HKCUルートに対する相対パス）：
  - 除外リスト
  - 包含リスト

項目の含め方と除外の仕方については、「Include and exclude items」を参照してください。

レガシーアプリケーション

レガシーアプリケーションは適切に動作しません。パーソナライズファイルをプロファイルの外部にあるカスタムフォルダーに保存します。推奨される解決策は、レガシーアプリケーションでProfile Managementを使用するのではなく、Citrix Virtual DesktopsのPersonal vDisk機能を使用することです。

複雑なアプリケーション

複雑なアプリケーションには特別な処理が必要です。アプリケーションのファイルは相互参照することがあり、相互に関連するグループとして扱われる必要があります。Profile Managementは、複雑なアプリケーションに関連する2つの動作をサポートしています。それは、Cookie管理とフォルダーミラーリングです。

Internet ExplorerでのCookie管理は、基本的な同期の特殊なケースであり、以下の両方のポリシーが常に指定されます。

- ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する
- ミラーリングするフォルダー

フォルダーミラーリング、Cookie管理、およびこれらのポリシーの設定方法の詳細については、トランザクションフォルダーの管理を参照してください。

クロスプラットフォームアプリケーション

クロスプラットフォームアプリケーションとは、複数のプラットフォームでホストされる可能性のあるアプリケーションです。Internet ExplorerおよびMicrosoft Officeの特定のバージョンでは、Profile Managementはプラットフォーム間でのパーソナライズ設定の共有をサポートしています。これらの設定は、レジストリまたはプロファイル内のファイルとして保存されます。

クロスプラットフォームアプリケーションの推奨ポリシー設定は、クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディに記載されています。

他のアプリケーションの設定をプラットフォーム間で共有したい場合は、SepagoのProfile Migratorを使用することをお勧めします。

JavaおよびWebアプリケーション

Javaアプリケーションはプロファイル内に多くの小さなファイルを残すことがあり、これによりプロファイルの読み込み時間が劇的に増加する可能性があります。したがって、`AppData\Roaming\Sun\Java`を除外することを検討してください。

ポリシーの概要

次の表は、さまざまな種類のアプリケーションに対してProfile Managementを構成するために使用するポリシーをまとめたものです。表では次の用語が使用されています。

- **相対**。ローカルボリューム上の相対パスで、%USERPROFILE%に対する相対パス（%USERPROFILE%は指定してはなりません）です。例: `AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`、`AppData\Roaming\Adobe\`。
- **絶対**。ローカルボリューム上の絶対パスです。例: `C:\BadApp*.txt`、`C:\BadApp\Database\info.db`。
- **レジストリ相対**。HKCUハイブ内のパスを指します。例: `Software\Policies`、`Software\Adobe`。
- **フラグ**。パス情報が不要な処理を有効または無効にするためにフラグを使用します。例: Enabled、Disabled。

ポリシー	ポリシータイプ (レジストリ、フォルダー、またはファイル)	ワイルドカードのサポート?	アプリケーションタイプ - シンプル	アプリケーションタイプ - レガシー	アプリケーションタイプ - 複雑
同期するディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	
同期するファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	
除外リスト - ディレクトリ	フォルダ	はい	相対	絶対値	
除外リスト - ファイル	ファイル	はい	相対	絶対値	

ポリシー	ポリシータイプ (レジストリ、フォルダー、またはファイル)	ワイルドカードのサポート?	アプリケーションタイプ - シンプル	アプリケーションタイプ - レガシー	アプリケーションタイプ - 複雑
包含リスト	レジストリ		レジストリ相対		
除外リスト	レジストリ		レジストリ相対		
ミラーするフォルダー	フォルダ			絶対値	相対
ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する					フラグ

ファイル名とフォルダー名でのワイルドカード処理

レジストリエントリではなくファイルやフォルダーを参照するポリシーは、ワイルドカードをサポートしています。詳細については、「ワイルドカードの使用」を参照してください。

含めるルールと除外するルール

Profile Managementは、ユーザープロファイル内のファイル、フォルダー、およびレジストリキーをユーザープロファイルから含めたり除外したりするためのルールを使用します。これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。その出発点から、最上位の例外を除外として構成し、次に最上位の例外に対するより深い例外を含めるように構成することができます。ルールに関する詳細情報（項目の含め方と除外方法に関する手順を含む）については、「項目の含め方と除外方法」を参照してください。

プロファイル内の英語以外のフォルダー名

バージョン1プロファイルを使用する英語以外のシステムでは、含めるリストと除外するリストに相対パスをローカル言語で指定します。たとえば、ドイツ語システムでは、**Documents**ではなく**Dokumenten**を使用します。複数のロケールをサポートしている場合は、含める項目または除外する項目を各言語で追加します。

次のステップ

1. 「構成の決定」に記載されているすべての質問に回答します。
2. 回答に基づいて、展開用にProfile Managementを構成します。その他のすべてのポリシーはデフォルトのままにすることができます。
3. 設定をテストおよび確認し、「ローカルGPOでProfile Managementをテストする」の説明に従ってProfile Managementを有効にします。

複数のプラットフォームの計画

複数のプラットフォームでのユーザープロファイルが課題となるのはなぜですか?

ユーザーが複数のコンピューティングデバイスにアクセスすることは一般的です。あらゆる種類のローミングプロファイルの課題は、これらのデバイス上のシステム間の違いから生じます。たとえば、デスクトップにローカルファイルへのショートカットを作成し、別のデバイスに移動したときにそのファイルが存在しない場合、デスクトップに壊れたショートカットが残ります。

シングルセッションオペレーティングシステム (OS) とマルチセッションOSの間でローミングする場合にも同様の問題が発生します。一部の設定 (電源設定やビデオ設定など) はサーバーに適用できない場合があります。さらに、各デバイスにアプリケーションが同様にインストールされていない場合、ローミング時に他の問題が発生する可能性があります。

一部のパーソナライズ設定 (マイ ドキュメント、お気に入り、OSやアプリケーションのバージョンに依存せずに機能するその他のファイルなど) は、他の設定よりもはるかに管理が容易です。しかし、ドキュメントタイプが1つのシステムでのみサポートされている場合、これらの設定でさえローミングが困難になることがあります。たとえば、あるユーザーがMicrosoft Projectを1つのシステムにインストールしているが、別のデバイスではそのファイルタイプが認識されない場合があります。同じアプリケーションが2つのシステムに存在し、一方のシステムに異なるアドオンがインストールされており、ドキュメントがそれを期待している場合、この状況はさらに悪化します。

アプリケーションのインストール方法を変更すると、どのように問題が発生しますか?

プラットフォームが同じようにインストールされていても、各プラットフォームでアプリケーションが異なるように構成されている場合、アプリケーションの起動時にエラーが発生する可能性があります。たとえば、あるプラットフォームのExcelではマクロやアドオンがアクティブになるが、別のプラットフォームではアクティブにならない場合があります。

スタートメニュー

スタートメニューにはリンク (LNKおよびLNK2ファイル) が含まれています。メニューのユーザー固有の部分はプロファイルに保存され、ユーザーはその部分を修正できます。カスタムリンク (実行可能ファイルやドキュメントへのリンク) を追加することは一般的です。さらに、言語固有のリンクは、同じアプリケーションに対して複数のスタートメニューエントリを生成します。また、ドキュメントを指すリンクは、他のコンピューターでは無効になる場合があります。その理由は、ドキュメントへのパスが別のシステムに対する相対パスであるか、アクセスできないネットワークパスであるためです。

デフォルトでは、Profile Managementはスタートメニューフォルダーの内容を保存しません。これは、実行可能ファイルを指すリンクがコンピューターに依存することが多いためです。ただし、システムが類似している状況では、Profile Management構成にスタートメニューを含めることで、ユーザーがデスクトップ間をローミングする際の整合性が向上します。あるいは、フォルダーリダイレクトを使用してスタートメニューを処理することもできます。

注: 最も無害に見える変更からでも、予測不能な副作用が生じることがよくあります。たとえば、Sepagoブログの `<https://helgeklein.com/blog/2009/09/citrix-user-profile-manager-upm-and-the-broken-rootdrive/>` の記事を参照してください。

常にプラットフォーム間でスタートメニューの動作をテストし、検証してください。

クイック起動ツールバー

クイック起動ツールバーにはリンクが含まれており、ユーザーが構成できます。デフォルトでは、**クイック起動**ツールバーはProfile Managementによって保存されます。一部の環境では、リンクがコンピューターに依存する可能性があるため、**クイック起動**ツールバーの保存が望ましくない場合があります。

ツールバーをプロファイルから除外するには、フォルダー除外リストに次のエントリを追加します: `AppData\Roaming\Microsoft\Internet Explorer\Quick Launch`。

作成するプロファイルの種類?

重要: 構造の違いがあるため、複数のプラットフォームを含む環境では、各ユーザーに対して個別のバージョン1とバージョン2のプロファイルを作成することをお勧めします。Windows VistaとWindows 7のプロファイル名前空間の違いにより、これらのプラットフォーム間でプロファイルを共有することは困難です。また、Windows XPとWindows Server 2003の間でも障害が発生する可能性があります。バージョン1およびバージョン2のプロファイルの詳細は、以下を参照してください。 プロファイルについて.

ここでの複数プラットフォームの定義には、複数のオペレーティングシステム（異なるビット数を含む）だけでなく、同じオペレーティングシステム上で実行される複数のアプリケーションバージョンも含まれます。次の例は、この推奨事項の理由を示しています。

- 32ビットシステムには、オペレーティングシステムに32ビットオペレーティングシステム固有の場所でアプリケーションを起動するよう指示するレジストリキーが含まれている場合があります。64ビットシステムでCitrix®ユーザープロファイルによってそのキーが使用されると、そのシステムにその場所が存在せず、アプリケーションが起動に失敗する可能性があります。
- Microsoft Office 2003、Office 2007、およびOffice 2010は、一部のWord設定を異なるレジストリキーに保存します。これらのアプリケーションが同じオペレーティングシステム上で実行される場合でも、Wordアプリケーションの3つの異なるバージョンに対して個別のプロファイルを作成する必要があります。

プロファイルの相互運用性を確保するために、CitrixユーザープロファイルでMicrosoftフォルダーリダイレクトを使用することをお勧めします。Windows VistaまたはWindows 7がWindows XPと共存する必要がある環境では、これはさらに重要です。

ヒント: 組織のデータ管理ポリシーによっては、Active Directoryから削除されたユーザーアカウントのプロファイルをユーザーストアおよびクロスプラットフォーム設定ストアから削除することをお勧めします。

複数のファイルサーバーでCitrix®ユーザープロファイルを共有する

Profile Managementの最もシンプルな実装は、ユーザーストアが1つの地理的場所のすべてのユーザーをカバーする1つのファイルサーバー上にあるものです。このトピックでは、複数のファイルサーバーを含む、より分散された環境について説明します。高度に分散された環境については、「Profile Managementによる高可用性と災害復旧」を参照してください。

注：ユーザーストアのサーバー側ファイルクォータは無効にしてください。クォータが満杯になるとデータ損失が発生し、プロファイルのリセットが必要になるためです。プロファイルに保持される個人データ（例：ドキュメント、音楽、画像）の量を制限するには、サーバー側ファイルクォータが有効になっている別のボリュームにフォルダーリダイレクトを使用する方が適切です。

ユーザーストアは複数のファイルサーバーに配置でき、これは多くのプロファイルをネットワーク全体で共有する必要がある大規模な展開において利点があります。Profile Managementは、ユーザーストアを単一の設定である**ユーザーストアへのパス**で定義するため、この設定に属性を追加することで複数のファイルサーバーを定義します。Active Directoryのユーザースキーマで定義され

ている任意のLDAP属性を使用できます。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/win32/adschema/attributes-all?redirectedfrom=MSDN>`を参照してください。

ユーザーが異なる都市にある学校にいて、それを表すために#l#属性（場所を示す小文字のL）が構成されているとします。ロンドン、パリ、マドリードに拠点があります。ユーザーストアへのパスを次のように構成します。

```
\&num;l#.userstore.myschools.net\profile&num;sAMAccountName#\%ProfileVer%\
```

パリの場合、これは次のように展開されます。

```
\\Paris.userstore.myschools.net\profile\JohnSmith\v1\
```

次に、利用可能なサーバー間で都市を分割します。たとえば、DNSでParis.userstore.myschools.netをServer1を指すように設定します。

この方法で属性を使用する前に、そのすべての値を確認してください。それらはサーバー名の一部として使用できる文字のみを含んでいる必要があります。たとえば、#l#の値にはスペースが含まれていたり、長すぎたりする場合があります。

#l#属性を使用できない場合は、同様のパーティショニングを実現する#company#や#department#などの他の属性についてADユーザースキーマを調べてください。

カスタム属性を作成することもできます。特定のドメインでどの属性が定義されているかを確認するには、`Sysinternals`ツールであるActive Directory Explorerを使用します。Active Directory Explorerは`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/sysinternals/downloads/adexplorer>`で入手できます。

注：プロファイルやサーバーを区別するために、%homeshare%などのユーザー環境変数を使用しないでください。Profile Managementはシステム環境変数を認識しますが、ユーザー環境変数は認識しません。ただし、関連するActive Directoryプロパティである`#homeDirectory#`を使用できます。したがって、ユーザーのHOMEディレクトリと同じ共有にプロファイルを保存したい場合は、ユーザーストアへのパスを`#homeDirectory#\profiles`として設定します。

ユーザーストアへのパスにおける変数の使用については、以下のトピックで説明されています。

- 「ユーザーストアへのパスを指定する」
- 「OU内およびOU間でプロファイルを管理する」
- 「Profile Managementによる高可用性と災害復旧」

OU内およびOU間でプロファイルを管理する

OU内

組織単位 (OU) 内でProfile Managementがプロファイルを管理する方法を制御できます。Windows Server 2008環境では、Windows Management Instrumentation (WMI) フィルタリングを使用して、.admまたは.admxファイルをOU内のコンピューターのサブセットに制限します。WMIフィルタリングは、Service Pack 1 (SP1) を適用したグループポリシー管理コンソール (GPMC) の機能です。

WMIフィルタリングの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc779036(v=ws.10)>`および`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/previous-versions/windows/it-pro/windows-server-2003/cc758471(v=ws.10)>`を参照してください。

SP1を適用したGPMCの詳細については、`<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=21895>`を参照してください。

以下の方法を使用すると、単一のOU内で単一のグループポリシーオブジェクト (GPO) を使用して、異なるOSのコンピューターを管理できます。各方法は、ユーザーストアへのパスを定義するための異なるアプローチです。

- ハードコードされた文字列
- プロファイル管理変数
- システム環境変数

ハードコードされた文字列は、1種類のコンピューターのみを含む場所を指定します。これにより、それらのコンピューターからのプロファイルをProfile Managementによって一意に識別できます。たとえば、Windows 7コンピューターのみを含むOUがある場合、**ユーザーストアへのパス**に`\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Windows7`を指定できます。この例では、Windows7フォルダーがハードコードされています。ハードコードされた文字列は、Profile Managementサービスを実行するコンピューターでのセットアップを必要としません。

Profile Management変数は、コンピューターを一意に識別するために柔軟に組み合わせることができ、セットアップを必要としないため、推奨される方法です。たとえば、異なるビット数のオペレーティングシステムで実行されているWindows 7およびWindows 8プロファイルを含むOUがある場合、**ユーザーストアへのパス**に`\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`を指定できます。この例では、2つのProfile Management変数は、Win7x86 (Windows 7 32ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイルを含む) およびWin8x64 (Windows 8 64ビットオペレーティングシステムで実行されているプロファイ

ルを含む) のフォルダーに解決される可能性があります。Profile Management変数の詳細については、Profile Managementポリシーを参照してください。

システム環境変数にはいくつかの構成が必要です。これらは、Profile Managementサービスを実行する各コンピューターで設定する必要があります。Profile Management変数が適さない場合は、次のようにシステム環境変数をユーザーストアへのパスに組み込むことを検討してください。

各コンピューターで、%ProfVer%という名前のシステム環境変数を設定します。(ユーザー環境変数はサポートされていません。) 次に、ユーザーストアへのパスを次のように設定します。

```
`\\upmserver\upmshare\%username%.%userdomain%\%ProfVer%`
```

たとえば、Windows 7 32ビットコンピューターの場合は%ProfVer%の値をWin7に、Windows 7 64ビットコンピューターの場合はWin7x64に設定します。Windows Server 2008 32ビットおよび64ビットコンピューターの場合は、それぞれ2k8および2k8x64を使用します。これらの値を多数のコンピューターで手動で設定するのは時間がかかりますが、Provisioning Servicesを使用する場合は、ベースイメージに変数を追加するだけで済みます。

ヒント: Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2012では、グループポリシーを使用して環境変数の作成と適用を高速化できます。グループポリシー管理エディターで、 **コンピューターの構成** > **基本設定** > **Windows の設定** > **環境** をクリックし、次に **操作** > **新規** > **環境変数** をクリックします。

OU間

Profile Management が OU 間でプロファイルを管理する方法を制御できます。OU の階層と GPO の継承によっては、複数の OU に適用される Profile Management ポリシーの共通セットを 1 つの GPO に分離できます。たとえば、**ユーザー ストアへのパス** と **Profile Management を有効にする** は、すべての OU に適用する必要があります。そのため、これらを専用の GPO に個別に保存し、これらのポリシーのみを有効にすることができます（他のすべての GPO では未構成のままにします）。

専用の GPO を使用して、継承されたポリシーを上書きすることもできます。GPO の継承の詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

Profile Managementにおけるドメインとフォレストのサポート

Profile Managementは、Windows Server 2008およびWindows Server 2012のドメインおよびフォレストの機能レベルをサポートしています。古いオペレーティングシステムはサポートされていません。

システム環境変数を使用すると、複数のドメインにおけるユーザー名の曖昧さを解消できます。詳細については、「OU内およびOU間でのプロファイルの管理」を参照してください。

Profile Management を使用した高可用性と災害復旧

前提条件として、ユーザー ストアの構造と作成方法をよく理解してください。詳細については、「Profile Management のアーキテクチャ」および「ユーザー ストアの作成」を参照してください。

これらのトピックでは、Citrix Profile Management に適用される高可用性と災害復旧のサポートされているシナリオについて説明します。シナリオを関連する基盤となる Microsoft テクノロジに関連付け、サポートされている内容を特定します。

- シナリオ 1: 地理的に隣接するユーザー ストアとフェールオーバー クラスターの基本的なセットアップ
- シナリオ 2: 複数のフォルダー ターゲットとレプリケーション
- シナリオ 3: 災害復旧
- シナリオ 4: 移動ユーザー
- シナリオ 5: ユーザー ストアの負荷分散

Profile Management は、信頼性の高い環境で動作することを前提としています。原則として、この信頼性は Active Directory (AD) とネットワーク ユーザー ストア (NUS) の可用性に適用されます。どちらかが利用できない場合、Profile Management はプロファイルを提供できず、Windows に責任を委ねます。Windows は通常、デフォルトのプロファイルを提供します。

移動プロファイルとの比較

災害復旧および高可用性のシナリオでは、Citrix Profile Management は Microsoft の移動プロファイルに影響するのと同じ問題の影響を受ける可能性があります。特に明記されていない限り、Profile Management はそのような問題を解決しません。

特に、次の点に注意してください。

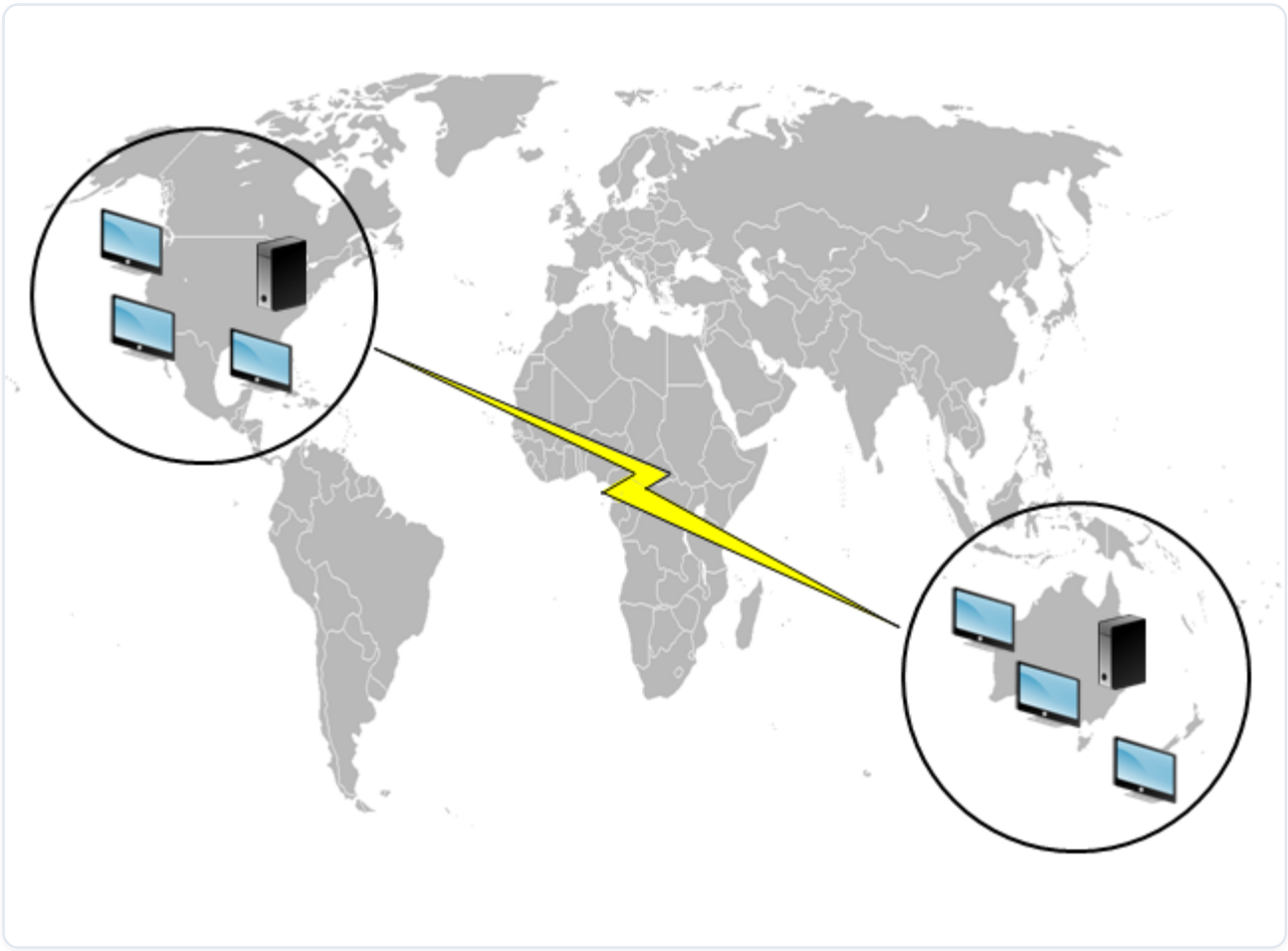
- Profile Management のサポートは、移動プロファイルもサポートされているシナリオに限定されます。
- オフライン ファイルのキャッシュ オプションは、移動ユーザー プロファイル共有で無効にする必要があります。同じ制限が Profile Management 共有にも適用されます。
- 移動プロファイルは DFS 共有からロードされません。同じ制限が Profile Management 共有にも適用されます。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2533009>` を参照してください。

シナリオ 1 - 地理的に隣接するユーザー ストアとフェールオーバー クラスターの基本設定

「ユーザーには、常に地理的に隣接した、優先されるネットワークユーザー ストア (NUS) をプロファイルに使用してほしい。」この場合、オプション 1 と 2 が適用されます。

「NUS をフェールオーバー クラスター上に配置して、高可用性を実現したい。」この場合、オプション 2 が適用されます。

次の図は、このシナリオを示しています。北米 (NA) のユーザーは、ブリスベンの NUS ではなく、ニューヨークの NUS を使用したいと考えています。目的は、遅延を減らし、オーストラリアまたはニュージーランド (ANZ) への大陸間リンクを介して送信されるトラフィックを最小限に抑えることです。



オプション 1 – DFS 名前空間

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、DFS 名前空間の概要 を参照してください。

このオプションの実装

DFS 名前空間は、ブログ記事で提示されている問題の一部を解決できます。

`\\MyCorp\Profiles` と呼ばれる NUS の名前空間を設定しましょう。これは名前空間のルートです。ニューヨークとブリスベン (およびその他のサイト) に名前空間サーバーを設定します。各名前空間サーバーには、各 Active Directory の場所に対応するフォルダーがあり、それらのフォルダーはニューヨークまたはブリスベンのサーバー上のターゲットを持っています。

Active Directory (ユーザー レコードの一部) には、次の場所が構成されている場合があります。

AD ロケーション属性 (#L#)	地理的な場所
ワガワガ	ANZ

AD ロケーション属性 (#L#)	地理的な場所
ダーウィン	ANZ
ブリスベン	ANZ
オークランド	ANZ
シアトル	該当なし
サンディエゴ	該当なし
ウェストパームビーチ	該当なし
ニューヨーク州ポキプシー	該当なし

次の図は、DFS 名前空間を使用してこれを設定する1つの方法を示しています。

グラフィック(/en-us/profile-management/2308/media/upm-ha-dr-scenario1-option1-1.png)

設定が完了したら、 設定を次のように構成します。

`\\MyCorp\Profiles#l#`

8つのサイトに属するユーザーのプロファイルは、シナリオで要求される地理的制約を満たすように、わずか2つのサーバーに分散されます。

代替案

名前空間ターゲットを順序付けし、次のように順序付けルールを使用できます。DFS名前空間が使用するターゲットを解決する際、ローカルサイト内のターゲットのみが選択されるように指定することが可能です。これは、特定のユーザーに対して、すべてのデスクトップとサーバーが同じサイトに属することが保証されている限り機能します。

例えば、通常ポキプシーを拠点とするユーザーがワガワガを訪れた場合、この手法は失敗します。そのユーザーのラップトッププロファイルはブリスベンから来るかもしれませんが、公開されたアプリケーションで使用されるプロファイルはニューヨークから来るかもしれません。

推奨される手法であるAD属性を使用すると、ユーザーが開始するすべてのセッションで同じDFS名前空間の選択が行われることが保証されます。その理由は、#l# がマシンの構成ではなく、ユーザーのAD構成から派生するためです。

オプション2 - フェールオーバークラスタリングを使用したDFS名前空間

参考資料

- 2ノードファイルサーバーフェールオーバークラスターの構成に関するステップバイステップガイドについては、2ノードクラスターファイルサーバーの展開 を参照してください。
- 名前空間の種類の選択に関する情報については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/choose-a-namespace-type>` を参照してください。

このオプションの実装

フェールオーバークラスタリングを追加することで、基本的な高可用性を提供できます。

このオプションの重要な点は、ファイルサーバーをフェールオーバークラスターにすることで、フォルダーターゲットが単一のサーバーではなくフェールオーバークラスターでホストされるようにすることです。

名前空間サーバー自体に高可用性が必要な場合は、スタンドアロンの名前空間を選択する必要があります。ドメインベースの名前空間は、名前空間サーバーとしてのフェールオーバークラスターの使用をサポートしていません。フォルダーターゲットは、名前空間サーバーの種類に関係なく、フェールオーバークラスターでホストされる場合があります。

重要: フェールオーバークラスター内のサーバーが失敗した場合、ファイルロックの状態が保持されない可能性があります。Profile Managementは、プロファイル処理中の特定の時点でNUS上のファイルロックを取得します。重要な時点でのフェールオーバーがプロファイルの破損につながる可能性があります。

シナリオ 2 - 複数のフォルダーターゲットとレプリケーション

「ローカルのNUSが利用できない場合、ユーザーが企業ネットワーク上の別のバックアップ場所からプロファイルデータを取得できるようにしたい。変更を行った場合、その変更は、優先NUSが再び利用可能になったときに、そこに戻される必要がある。」

このシナリオにおける基本的な要件は、ネットワーク上のプロファイルに対して代替の場所を提供することです。ユースケースには、ネットワークインフラストラクチャの部分的な障害や、フェールオーバークラスターなどのフォルダーターゲットの完全な利用不能が含まれます。

考慮すべきオプションは、複数のフォルダーターゲットの使用とDFSレプリケーションの使用です。

オプション 1 - 複数のフォルダーターゲットへの参照

背景情報

DFS名前空間のチューニングについては、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-namespaces/tuning-dfs-namespaces>`を参照してください。

このオプションについて

参照とは、ユーザーデバイスによって順番に試行されるターゲットの順序付きリストです。これは、ソフトウェアライブラリのようにターゲットが読み取り専用であるシナリオ向けに設計されています。ターゲット間にリンクがないため、この手法をプロファイルで使用すると、同期できない複数のプロファイルが作成される可能性があります。

ただし、参照内のターゲットに対して、順序付け方法とターゲット優先度の両方を定義することは可能です。適切な順序付け方法を選択すると、すべてのユーザーセッションによって一貫したターゲット選択が行われるように見えます。しかし実際には、ユーザーのすべてのデバイスが同じサイト内にある場合でも、サイト内ルーティングの問題により、異なるセッションによって異なるターゲットが選択される可能性があります。デバイスが参照をキャッシュすると、この問題はさらに複雑になる可能性があります。

重要: このオプションはProfile Managementの展開には適しておらず、サポートされていません。ただし、ファイルレプリケーションは、単一セッションのみが保証される一部の特殊な展開で使用されてきました。 アクティブライトバックが無効になっています。これらの特殊なケースについては、Citrix Consultingにお問い合わせください。

オプション 2 - 分散ファイルシステムレプリケーション

背景情報

- 分散ファイルシステムレプリケーション (DFSR) の概要については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/dfs-replication/dfsr-overview>`を参照してください。
- レプリケートされたユーザープロファイルデータに関するサポートステートメントについては、`<https://techcommunity.microsoft.com/t5/ask-the-directory-services-team/microsoft-8217-s-support-statement-around-replicated-user/ba-p/398230>`を参照してください。
- DFSRが分散ファイルロックをサポートしない理由を理解するには、`<https://blogs.technet.com/b/askds/archive/2009/02/20/understanding-the-lack-of-distributed-file-locking-in-dfsr.aspx>`を参照してください。

このオプションの実装

DFSレプリケーションは、帯域幅が制限されたネットワーク接続を介したフォルダ同期を提供します。このオプションは、単一の名前空間フォルダ定義が参照する複数のフォルダターゲットを同期するため、オプション1の問題を解決するように見えます。実際、フォルダがフォルダ定義のターゲットとして追加されると、レプリケーショングループに属するものとして指定できます。

考慮すべきレプリケーションには2つの形式があります。

- 一方向レプリケーション（アクティブ-パッシブレプリケーションとも呼ばれる）は、重要なデータを安全なリポジトリにバックアップするために設計されています。このレプリケーションは、例えば災害復旧サイトの維持に適しています。パッシブターゲットがリフェラルに対して無効にされ、災害復旧計画がアクティブ化されたときにのみ呼び出される限り、プロファイル管理で機能させることができます。
- 双方向レプリケーション（アクティブ-アクティブレプリケーションとも呼ばれる）は、グローバル共有データへのローカルな読み書きアクセスを提供することを目的としています。ここでは、即時レプリケーションは必ずしも要件ではありません。共有データは頻繁には変更されない可能性があります。 重要: アクティブ-アクティブDFSRはサポートされていません。

スケジュールは、データがレプリケートされる頻度を定義します。頻繁なスケジュールはCPUと帯域幅の両方でより負荷が高くなりますが、即時更新を保証するものではありません。

プロファイル管理は、その操作のさまざまな時点で、(共有)ユーザーストアへの更新を調整するために、NUSで特定のファイルをロックする必要があります。通常、これらの更新はセッションの開始時と終了時、およびアクティブライトバックが有効になっている場合はセッションの途中で行われます。DFSレプリケーションでは分散ファイルロックがサポートされていないため、プロファイル管理はNUSとして1つのターゲットしか選択できません。この設定により、双方向レプリケーション（アクティブ-アクティブレプリケーション）の価値は事実上なくなり、したがってプロファイル管理には適しておらず、サポートされていません。一方向レプリケーション（アクティブ-パッシブレプリケーション）は、災害復旧システムの一部としてのみプロファイル管理に適しています。その他の用途はサポートされていません。

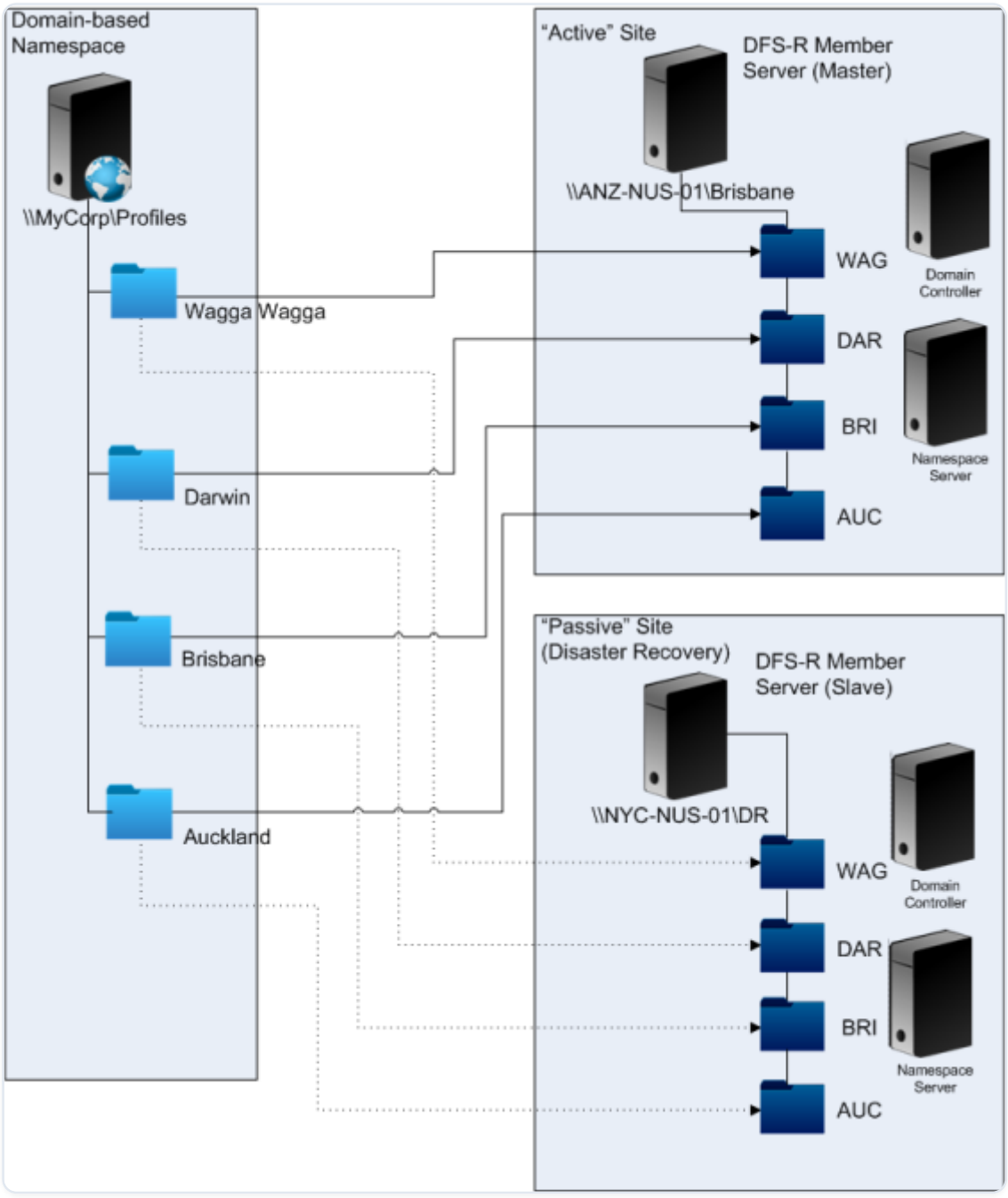
シナリオ 3 - ディザスターリカバリー

「Citrix®ユーザープロファイルを処理するための完全なディザスターリカバリーサイトをどのように設定すればよいですか？」

Profile Management は、ディザスターリカバリー (DR) に必要な主要な機能をサポートしています。

- **DFS 名前空間**。ドメインベースの名前空間サーバーは、DRサイトが独自の名前空間サーバーを持つことができるため、このシナリオでは推奨されます。(スタンドアロンの名前空間サーバーはレプリケートできませんが、フェールオーバークラスターでホストできます。)
- **複数のフォルダーターゲットとDFSレプリケーション**。各NUSに対して、少なくとも2つのターゲットを提供しますが、通常運用では1つのみを有効にします。無効になっているターゲット（DRサイト上）が最新の状態に保たれるように、一方向のDFSレプリケーションを設定します。
- **個々のフォルダーターゲットをホストするためのフェールオーバークラスター**。オプション。DRサイトのリソースを無駄にする可能性があります。

この図では、ドメインベースの名前空間がNUSを管理します。(シナリオ1の図では意図的に名前空間を含んでいませんでした。) DRサイトを含む各サイトに名前空間サーバーを含めることができます。すべてのサーバーは、名前空間の同じビューをサポートします。



DR計画がアクティブ化された場合、DRサイトのNUSは、マスターNUSからレプリケートされた変更で最新の状態になります。ただし、名前空間サーバーはまだ名前空間の誤ったビューを反映しているため、その構成を更新する必要があります。各フォルダーについて、マスターサイトのフォルダーターゲットを無効にし、DRサイトのフォルダーターゲットを有効にする必要があります。

ADの更新が伝播された後、名前空間サーバーはDRフォルダーターゲットを正しく特定し、DRサイトはProfile Managementによって使用できるようになります。

注: ユーザーストアへのパス設定は、実際のサーバーではなく名前空間フォルダーを参照するため、Profile Managementの構成を更新する必要はありません。

実際には、DRサイトは通常プロファイルには使用されないため、一方向または双方向のレプリケーションが可能です。災害が終了すると、DRサイトからマスターサイトへの接続により、災害中にNUSに加えられた変更がマスターサイトにレプリケートされます。

シナリオ 4 - 移動するユーザー

「スタッフが異なるオフィス間を移動する際、地理的に近いNUSを使い続けられるように、優先NUSを変更したいと考えています。」

このシナリオの難しさは、ユーザーのログオンセッションが複数の場所から集約される可能性があることです。彼らは通常、デスクトップセッションをあるサイトから別のサイトへとローミングします。しかし、多くのアプリケーションは、ユーザーのデスクトップの現在の場所を認識しないバックエンドサーバーでホストされています。

さらに、ユーザーは、おそらくホームロケーションでホストされている切断されたセッションに再接続する可能性があります。もし何らかの理由でセッションがユーザーの新しい場所にあるNUSに切り替わることを強制された場合、パフォーマンスが低下します。

ホットデスクを利用する出張者にとって、**プロファイルストリーミング**と**常にキャッシュ**の設定を使用することが最善の選択肢です。固定されたマシンでは、Citrix®ストリーミングユーザープロファイルを使用して、依然として迅速にログオンできます。常にキャッシュを有効にすると、プロファイルの残りの部分がバックグラウンドで読み込まれます。

シナリオ 5 - ユーザー ストアの負荷分散

「複数の地理的に隣接したネットワーク ユーザー ストア (NUS) 間でユーザーの負荷分散を行いたい。」

背景情報

Microsoft DFS 名前空間テクノロジーの概要については、「DFS 名前空間の概要」を参照してください。

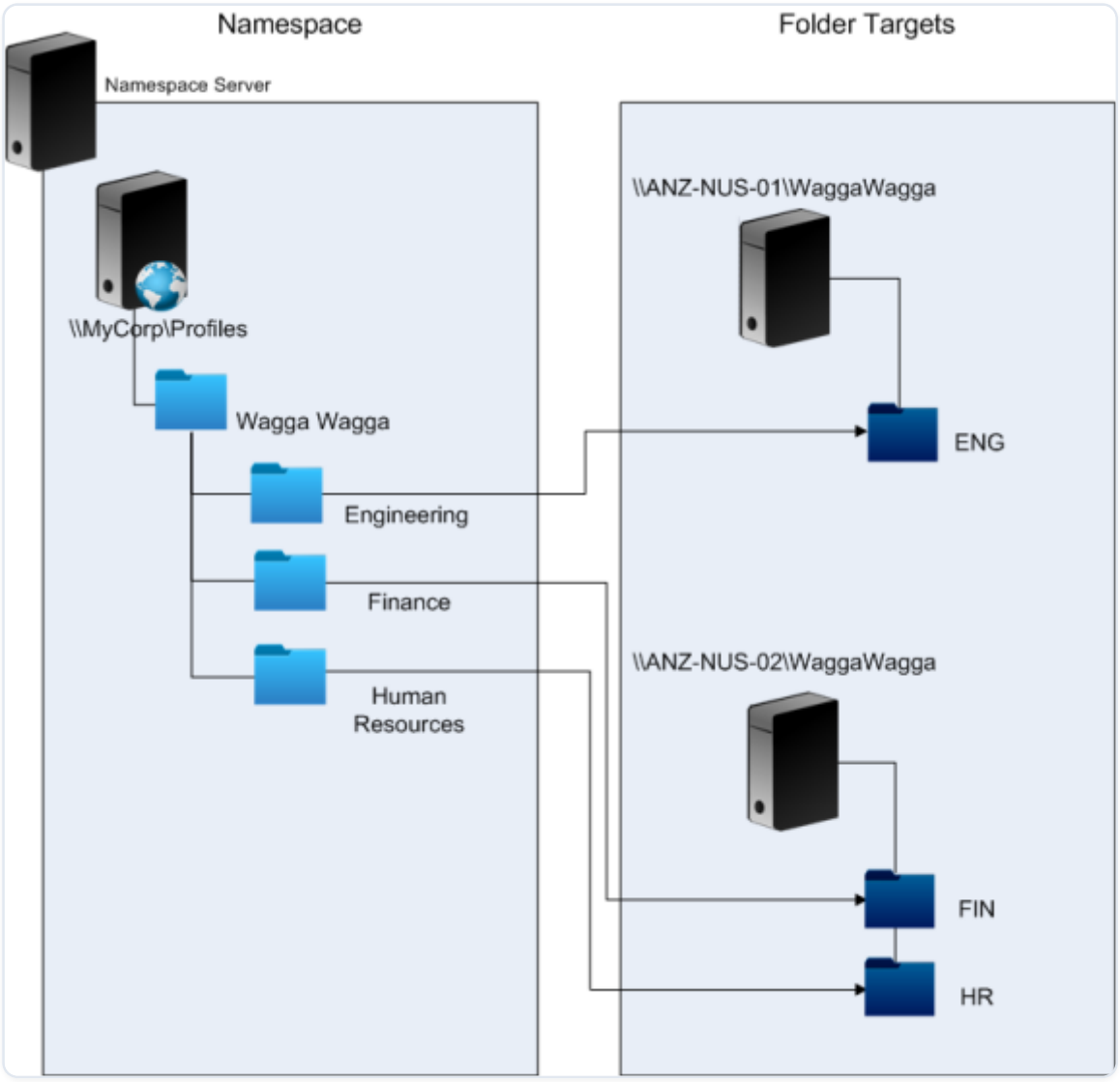
シナリオ 1 とは異なり、このシナリオでは、複数の NUS を必要とするほど大規模な単一サイトがあります。DFS 名前空間を使用することで、シナリオ 1 のソリューションを改善できます。

シナリオ 1 (オプション 1) では、DFS 名前空間を使用して、複数のサイトを同じサーバー上の異なるフォルダーにマップしました。同様の手法を使用して、名前空間のサブフォルダーを異なるサーバー上のフォルダーにマップできます。

理想的には、#department# のように、ユーザー アカウントを同様のサイズのチャンクに分割する AD 属性が必要です。シナリオ 1 と同様に、#department# は常に定義され、正しいフォルダー名が含まれていることが保証されている必要があります。

シナリオ 1 と同様に、NUS 用の名前空間を `\\MyCorp\Profiles` と設定します。

この図は、名前空間の設定方法を示しています。



セットアップが完了したら、ユーザー ストアへのパス設定を次のように構成します。

`\\MyCorp\Profiles#l##department#`

この構成により、ワガワガのユーザーは、両方ともローカルである 2 つの NUS サーバーに分散されます。

Profile Management を使用したフォルダーリダイレクトの計画

Profile Management はフォルダーリダイレクトをサポートしており、その使用が推奨されます。

Active Directory (AD) を使用すると、アプリケーションデータやドキュメントなどのフォルダーをネットワークの場所に保存（リダイレクト）できます。フォルダーの内容はリダイレクトされた場所に保存され、ユーザープロファイルには含まれないため、プロファイルのサイズが削減されます。AD のバージョンによっては、リダイレクトできるフォルダーとできないフォルダーがあります。さらに、フォルダーリダイレクトを構成することで、強制プロファイルを使用しているユーザーでも、プロファイルの使用を制限しながら一部の設定、ファイル、その他のデータを保存できます。

一般的なガイドラインとして、ネットワーク帯域幅が許す限り、セッション中に定期的にアクセスしないすべてのユーザーデータに対してフォルダーリダイレクトを有効にすることをお勧めします。

リダイレクト可能なすべてのフォルダーが AD でアクセスできるわけではありません。特定のオペレーティングシステムでリダイレクトできるフォルダーは、レジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User Shell Folders` にあります。

フォルダーリダイレクトに関する重要な情報

Profile Management でフォルダーリダイレクトを使用する際の重要な注意点は次のとおりです。

- XenDesktop 7 では、Citrix Virtual Desktops™ ポリシーを使用して Studio でリダイレクトするフォルダーを指定します。詳しくは、Citrix Virtual Desktops のドキュメントを参照してください。
- フォルダーリダイレクトを正常に構成するには、バージョン1とバージョン2のプロファイル間のフォルダー構造の違いに注意してください。
- フォルダーリダイレクトを使用する際のセキュリティに関するその他の考慮事項については、Secure および Microsoft TechNet Web サイトの「Folder Redirection Overview」の記事を参照してください。
- ユーザー ストアは、リダイレクトされたフォルダーに使用される共有とは異なるものとして扱います。
- リダイレクトされたフォルダーを除外リストに追加しないでください。

このビデオで詳細を確認してください:

サードパーティのディレクトリ、認証、およびファイルサービス

この記事では、Microsoft が提供するサービス以外のディレクトリ、認証、およびファイルサービスに対するサポートについて説明します。

ディレクトリサービス

重要: Active Directory (AD) は、Profile Management の運用に不可欠です。その他のディレクトリサービスはサポートされていません。これらのサービスには以下が含まれます。

- ノベル eDirectory.
- Windows 2000 Server またはそれ以前のオペレーティングシステム (OS)。Windows 2000 Server は AD をサポートしていますが、必要なレベルではありません。詳細については、「Profile Management でのドメインとフォレストのサポート」を参照してください。Microsoft Windows NT 4.0 は AD より前のものです。
- Samba 4 またはそれ以前。

認証サービス

その他の認証サービスは、ドメイン内で AD と共存できますが、Profile Management ではサポートされていません。その理由は、Profile Management Service と同様に、これらのサービスが winlogon.exe と相互作用し、ユーザーログオンプロセスに問題を引き起こす可能性があるためです。たとえば、Novell の認証サービスは、ユーザーがプリンターやファイル共有などの Novell リソースにアクセスすることを許可しますが、サポートされていません。

ファイルサービス

サードパーティのファイルサービスは、ユーザーストアおよびフォルダーリダイレクト (使用されている Windows オペレーティングシステムでサポートされている場合) に使用できます。ファイルサーバーは、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) タイプである必要があり、NTFS ファイルシステムをサポートしている必要があります。これらの理由から、以下がサポートされています。

- ウィンドウズ サーバー 2003 以降
- サンバ 3

重要: Novell ディレクトリに対する認証が必要なため、Novell ファイルサービスはサポートされていません。

複数のプラットフォーム上のプロファイルとProfile Managementの移行に関するFAQ

このセクションでは、複数のWindowsオペレーティングシステム、または単一オペレーティングシステムの複数のバージョンやビット数を持つ環境でプロファイルを使用することに関する質問と回答を掲載しています。

プロファイルとの互換性の問題を確実に回避するにはどうすればよいですか?

異種環境をサポートする必要性と、ユーザーとそのデバイスを追跡するためのパーソナライズ設定の必要性とのバランスを取ります。通常、これら2つのニーズのバランスは、管理者とIT部門のみが決定できます。ユーザープロファイルを次のように調整することで、異なるシステムを管理します。プロファイルがローミングする場合、問題は適切に処理されるか、必要に応じて設定は完全に無視され、まったく追跡されないようにする必要があります。これは、多くのサードパーティ製ソフトウェアソリューションの基礎となります。

トラブルシューティングを最小限に抑えるには、同じデバイス設定（インストールされているアプリケーション、OSバージョンなど）間でプロファイルをローミングするようにしてください。しかし、現代の多くのシナリオでは、これは容易に達成できず、不完全なユーザーエクスペリエンスにつながります。たとえば、ユーザーは複数のオペレーティングシステムを使用しているからといって、お気に入りやマイドキュメントを複製する必要はありません。このような場合、管理者はフォルダーリダイレクトを使用することでユーザーエクスペリエンスを向上させることができます。このMicrosoft機能の使用は、他のシナリオでも推奨されます。

異なるシステム間でプロファイルを共有できますか?

Citrixでは、プラットフォームごとに1つのベースプロファイルを持つことを推奨しています。これは、オペレーティングシステムごとに1つのプロファイルを持つことと必ずしも同じではありません。この推奨事項の詳細については、「複数のプラットフォームの計画」を参照してください。これにより、互いに機能しない可能性のある設定や、特定のOSに適用されない設定の数が最小限に抑えられます。たとえば、デスクトップの電源設定は、サーバーシナリオやリモートデスクトップサービス（旧ターミナルサービス）を含むシナリオには適用されません。

プロファイルの数を簡素化して減らし、複数のOSで使用しようとすると、設定の競合のリスクが高まります。システムが同じでない場合、このリスクはさらに増大します。たとえば、Microsoft Officeのアドインがすべてのデバイスに存在しない場合があります。幸いなことに、特定のデバイ

スに適用されないこのような設定は、多くの場合無視されます。無視されない場合にサポートの問題が発生します。アドインが存在しない場合、Microsoft Excelは起動に失敗します。

Profile Managementは、複数のバージョンまたはプラットフォーム間で設定をどのように有効にしますか?

Citrix®は、複数のベースプロファイル間で共通設定をローミングする機能を提供します。Citrixは、Microsoft Office、Internet Explorer、壁紙などの設定のローミングを可能にします。これらの種類のシナリオをサポートする能力は、アプリケーションがプラットフォーム間の設定のローミングをサポートする程度によって制限されます。次の質問のリンクは、Microsoftの立場とベストプラクティスをカバーしています。

Microsoftは、プラットフォームとバージョン間でローミングプロファイルをどのようにサポートしていますか?

関連情報については、「ローミングユーザープロファイルの展開」を参照してください。

Office 2007のツールバー設定については、「クイックアクセスツールバーのカスタマイズ」を参照してください。

標準のMicrosoft Windowsプロファイルソリューションが技術的、カスタム、またはビジネス要件を完全に満たさない場合、Profile Managementは実行可能なソリューションとなります。

x86プラットフォームとx64プラットフォーム間でプロファイルを共有することは可能ですか?

Windows x86とx64間で1つのプロファイルを共有することは一般的には機能する可能性がありますが、いくつかの問題が発生する可能性があります。

いくつかの理由があります。例えば、その理由の1つは、使用ごとのファイル関連付けが `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes` に保存されることです。非管理者がFirefoxをデフォルトブラウザとして設定した場合、32ビットシステムには以下が保存されます。

`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Classes\FirefoxHTML\shell\open\command` -\> " `C:\Program Files\Mozilla Firefox\firefox.exe` " -requestPending -osint -url "%1"

このパスを含むプロファイルがWindows x64で使用される場合、OSはFirefoxの64ビット版を探しますが、これは存在しません。代わりに、32ビット版が `C:\Program Files (x86)\Mozilla Firefox` にインストールされている可能性があります。その結果、ブラウザが起動しません。

逆もまた同様です。x64プラットフォームで設定されたパスがx86プラットフォームで使用される場合です。

複数のプラットフォームで1つのプロファイルがどのように動作するかをテストしたいです。どこから始めればよいですか?

複数のプラットフォームで1つのプロファイルを使用する実験を行うには、テストと検証が重要です。推奨されるアプローチは、プラットフォームごとに1つのプロファイルを持つことです。複数のプラットフォームで単一のプロファイルがどのように動作するかを調べたい場合は、以下の情報が役立つかもしれません。

次の質問に答えることで、何が問題を引き起こす可能性があるかを特定することから始めます。このトピックの残りの質問を、問題への対処と追跡のアイデアとして使用してください。

プラットフォーム間で機能する項目：

- マイドキュメントと「お気に入り」
- 設定情報（デフォルトを含む）をプロファイル内に完全に保存するアプリケーション

機能しない可能性がある項目：

- ハードコードされたデータ、パスデータなどを保存するアプリケーション
- x64またはx86プラットフォームに固有の設定
- すべてのシステムに存在するわけではないExcelアドインなど、同一ではないアプリケーションのインストール。これらのインストールは、アプリケーションによって異なるあらゆる種類のエラー状態を引き起こす可能性があります。

ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることができますか?

はい。Profile Management は、ローカルデスクトップ、Citrix Virtual Apps、Citrix Virtual Desktops™、またはこれらの任意の組み合わせに基づいてプロファイルを適用できます。

適切な Profile Management 設定が有効になっている場合、Remote Desktop Services (旧 Terminal Services) プロファイルは、ユーザーがターミナルサーバーまたは Citrix Virtual Apps セッションを持っている場合にのみ使用されます。この設定は、ユーザーが Remote Desktop Services セッションを介してログオンするときに、既存のプロファイル (Citrix ユーザープロファイルを除く) をすべて上書きします。

Windows 7 では、GPO コンピューター設定を使用して、ユーザーがログオンするコンピューターに基づいてプロファイルを割り当てることができます。繰り返しになりますが、これは GP に基づいているため、プロファイルの割り当ては GPO が適用される OU に依存します。

コンピューターに基づくプロファイルの割り当てが望ましいのはなぜですか?

個別のユーザーエクスペリエンスが必要な場合、ユーザーがログオンするコンピューターにプロファイルを割り当てることは有用です。たとえば、管理者は、Remote Desktop Services (旧 Terminal Server) セッションで使用されるプロファイルを、デスクトップで使用されるプロファイルとは別に保持することを決定する場合があります。

Profile Management は Windows ユーザープロファイルを Citrix ユーザープロファイルに移行しますか?

Profile Management を構成して、ユーザーがログオンするときに既存のローミングプロファイルとローカルプロファイルを自動的に移行できます。また、テンプレートプロファイルまたはデフォルトの Windows プロファイルを新しい Citrix ユーザープロファイルのベースとして使用することもできます。

Profile Management の移行の計画と設定については、「プロファイルの移行または作成」を参照してください。ソフトウェアが Windows ユーザープロファイルを Citrix ユーザープロファイルに移行する方法の詳細については、「ログオン図」を参照してください。

どのプロファイルを Citrix ユーザープロファイルに移行できますか?

Profile Management は、Windows ローカルプロファイルと Windows ローミングプロファイルを移行できます。必須プロファイル (.man ファイル) は Profile Management によって無視されますが、Citrix ユーザープロファイルのテンプレートとして使用できます。Profile Management が正しく機能するように、すべてのユーザーへの必須プロファイルの割り当てを無効にしてください。

既存の Windows 必須プロファイルをテンプレートとして使用するには、「テンプレートまたは必須プロファイルを指定する」を参照してください。

テンプレートプロファイルを使用するにはどうすればよいですか?

Profile Management を使用すると、新しい Citrix ユーザープロファイル作成のベースとして使用されるテンプレートプロファイルを指定できます。通常、初めてプロファイルを割り当てられたユーザーは、ログオンする Windows デバイスのデフォルトユーザープロファイルを受け取ります。これは許容できるかもしれませんが、異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルにバリエーションがあると、ユーザーのために作成されるベースプロファイルに違いが生じることを意味します。したがって、テンプレートプロファイル機能をグローバルなデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

ユーザーがプロファイルデータに変更を加えるのを防ぎたい場合は、テンプレートプロファイルを Citrix 必須プロファイルとして識別することもできます。

詳細については、テンプレートまたは必須プロファイルの指定を参照してください。

インストールとセットアップ

インストールパッケージをダウンロードする

開始する前に、有効なCitrix®アカウントがあることを確認してください。

ダウンロードを完了するには、次の手順に従います。

1. Citrix Virtual Apps and Desktopsダウンロードページにアクセスします。
2. ダウンロードしたいバージョン（例: 2206）を見つけて展開し、**制限付きダウンロードにアクセスするためにサインイン**をクリックします。
3. Citrixアカウントの資格情報でサインインします。
4. **Citrix Virtual Apps and Desktops™ 7** `<Version_Number>` **> 製品ソフトウェア > Citrix Virtual Apps and Desktops 7** `<Version_Number>`**, すべてのエディション**を選択します。
5. **製品ISOに含まれているが、個別にパッケージ化されているコンポーネント**ノードを展開し、**Profile Management**サブノードの**ファイルのダウンロード**をクリックします。
6. 表示される**ダウンロード契約**ダイアログボックスで、ダウンロードを開始するために契約に同意します。

   ダウンロードが完了すると、`ProfileMgmt_<version_number>.zip` ファイル（例: ProfileMgmt_2206.zip）がダウンロードフォルダーに表示されます。

ダウンロードに含まれるファイル

ダウンロードしたパッケージを解凍します。パッケージに含まれるファイルについては、次の表を参照してください。

ファイル名	説明	場所
x86.msi	32ビットシステム用インストーラー	
x64.msi	64ビットシステム用インストーラー	

ファイル名	説明	場所
CitrixBase.adml および CitrixBase.admx	Profile Managementポリシー階層用ADMXテンプレートファイル	`\Group Policy Templates\CitrixBase`
ctxprofile.adml および ctxprofile.admx	Profile Managementポリシー設定用ADMXテンプレートファイル	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)

Profile Managementのインストール

Profile Managementは、VDAインストーラーのオプションコンポーネントです。VDAと一緒に、または個別にインストールできます。この記事では、Profile Management独自のインストーラーを使用してProfile Managementをインストールする方法について説明します。

VDAと一緒にProfile Managementをインストールする方法について詳しくは、Citrix Virtual Apps and Desktopsドキュメントの「VDAのインストール」を参照してください。

概要

ユーザープロファイルを管理する各コンピューターにProfile Managementをインストールする必要があります。通常、配布ツール、イメージングソリューション、またはストリーミングテクノロジーを使用して、コンピューターでMSIインストーラーを実行します。また、任意のコンピューターに直接インストールすることもできます。サイレントインストールがサポートされています。

一般的なインストール手順は次のとおりです。

1. MSIインストーラーを実行する。
2. グループポリシーを使用してProfile Managementを構成するには、ADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加します。

> **注:**
>
> すべてのユーザーコンピューターに同じバージョンのProfile Managementをインストールすることをお勧めします。また、同じバージョンのADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加してください。このアプローチにより、異なるユーザープロファイルストア構

> 造（異なるバージョン）が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

MSIインストーラーを実行する

この手順では、Profile Managementを単一のコンピューターにインストールします。

1. 管理者としてコンピューターにログオンします。
2. インストールパッケージのルートフォルダーにあるMSIインストーラーを実行します。インストールウィザードが表示されます。
3. 画面の指示に従ってインストールを完了します。
4. コンピューターを再起動します。

インストーラーは、DLLやその他のファイルに加えて、インストール場所（デフォルトでは`C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager`）にこれらのファイルを作成します。

ファイル名	説明
UPMPolicyDefaults_all.ini	Profile Management .iniファイル
UserProfileManager.exe	Profile Managementによって管理されるコンピューター上で機能を実行するWindowsサービス

コマンドラインからMSIインストーラーを実行する

コマンドラインからMSIインストーラーを実行すると、ユーザーの操作なしでインストールを完了できます。

コマンドラインインストールでは、以下のインストールオプションも提供されます。

- `/norestart`オプションを使用して再起動を抑制します。

  オペレーティングシステムによっては、コンピューターが再起動するまでProfile Managementが機能しない場合があります。たとえば、Windows 7ワークステーションを再起動する必要はありません。
- 必要に応じて`INSTALLDIR`を指定します。
- Profile Managementの.iniファイルのインストールを防ぐには、`INSTALLPOLICYINIFILES`を`no`に設定します。

以前のバージョンで.iniファイルを使用しており、その設定をこのバージョンで使用したい場合は、インストール後に各設定をGroup Policy Editorの対応するProfile Managementポリシーに手動で転送してください。

- アップグレードには`OVERWRITEINIFILES=yes`オプションを使用します。詳細については、「Profile Managementのアップグレード」を参照してください。

次の例では、ユーザーインターフェイスを表示せず、再起動なしでProfile Managementをインストールします。UACが有効になっている場合、`msiexec`コマンドを管理者権限で実行します。たとえば、管理者として実行したコマンドプロンプトから実行します。

```
msiexec /i <path to the MSI file> /quiet [/norestart]
[INSTALLDIR=<installation directory>]   [OVERWRITEINIFILES=yes]
[INSTALLPOLICYINIFILES=no]
```

Profile Managementのアンインストール

この手順は、単一のコンピューターからProfile Managementをアンインストールします。開始する前に、コンピューターの管理者であることを確認してください。

1. データ損失を避けるため、すべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. プログラムと機能のインストール済みプログラムの一覧から、**Profile Management**を選択し、**アンインストール**をクリックします。
3. **はい**をクリックします。
4. コンピューターを再起動します。

サイレントモードでProfile Managementをアンインストールすることもできます。

ADMXテンプレートファイルをグループポリシーに追加する

グループポリシーを使用してProfile Managementを構成する方法に応じて、ADMXテンプレートファイルを*ドメインコントローラー*または*コンピューター*に追加します。

- OU内のコンピューターに対してProfile Managementを一元的に構成するには、ADMXテンプレートファイルをすべてのドメインコントローラーに追加します。
- 各コンピューターに対してProfile Managementを個別に構成するには、ADMXテンプレートファイルをそのコンピューターに追加します。

インストールパッケージから以下のファイルをコピーし、ドメインコントローラーまたはコンピューター上の場所に貼り付けます。詳細な手順については、以下の表を参照してください。

ファイル名	元 (インストールパッケージ)	先 (ドメインコントローラーまたはコンピューター)
CitrixBase.adml	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>` (例: `C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`)
CitrixBase.admx	`\Group Policy Templates\CitrixBase`	`C:\Windows\PolicyDefinitions`
ctxprofile.adml	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions\<language>` (例: `C:\Windows\PolicyDefinitions\en-US`)
ctxprofile.admx	`\Group Policy Templates\<language>` (例: `\Group Policy Templates\en`)	`C:\Windows\PolicyDefinitions`

ADMX テンプレートファイルの詳細については、こちらの Microsoft の記事を参照してください。

GPO を使用して Profile Management ポリシーを構成する

ADMX ファイルをドメインコントローラーに追加したら、以下の手順に従って Profile Management ポリシーを表示および構成します。

1. ドメインコントローラーで、**Active Directory ユーザーとコンピューター**を開きます。Profile Management がインストールされているコンピューターを含む OU を特定します。
2. **グループポリシーの管理**を開き、OU を右クリックして、**このドメインに GPO を作成し、ここにリンク**を選択し、GPO を作成します。

> **注:**

> GPO にセキュリティフィルタリングを適用する場合は、認証済みユーザーグループまたはコンピューターグループのいずれかを使用してください。個々のユーザーのみを含むセキュリティグループは使用しないでください。

3. **グループポリシーオブジェクト**から、新しく作成した GPO を右クリックし、**編集**を選択します。グループポリシー管理エディターウィンドウが表示されます。
4. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート... > Citrix コンポーネント > Profile Management**を選択します。すべての Profile Management ポリシーが表示されます。
5. 必要に応じて Profile Management を構成します。

ローカルGPOでProfile Managementをテストする

プロダクション環境にProfile Managementを展開する前に、テスト環境をセットアップすることをお勧めします。ドメイングループポリシーオブジェクト（GPO）に設定を転送するための完全にサポートされ、より簡単な方法は、マシンへのローカルインストールに基づいています。

一般的なワークフローは次のとおりです。

1. マシンにProfile Managementをインストールします。
2. (/ja-jp/profile-management/2308/plan/configuration.html)に記載されている質問への回答に基づいて、ローカルGPOを使用してProfile Managementポリシーを構成します。
3. Profile Managementを有効にする(/ja-jp/profile-management/2308/configure/enable.html)。
4. ログオンおよびログオフの動作をテストします。
5. 満足のいく結果が得られるまで、ローカルGPO設定を調整します。

概要

マシンがプロダクションOUのメンバーである場合、ローカルGPOを使用してProfile Managementを安全にテストできます。ローカルGPOポリシーは、OUおよびドメインのポリシーが利用できない場合に有効になります。ローカルGPOを使用する場合は、他の場所（たとえば、ドメインやサイトなど）でProfile Management GPOが使用されていないことを確認してください。

ドメインGPOを使用してグループポリシーを構成できない場合は、ローカルGPOを長期的なソリューションとして使用できます。ただし、この方法では、次のような複雑さが環境に導入されます。

- 各マシンには、Profile Management ADMXファイルがインストールされている必要があります。

- ドメインユーザーは、複数のマシンにアクセスする際に設定を維持できない可能性があります。

> **重要:**

> ローカルGPOを長期的なエンタープライズソリューションとして使用することはお勧めしません。

ユーザーエクスペリエンスをテストする

プロファイルソリューションを実装する際は、ユーザーがさまざまなマシンからリソースにアクセスする際のユーザーエクスペリエンスの違いを最小限に抑える必要があります。

ユーザーのレジストリとファイルは、物理マシン、プロファイル構成、およびオペレーティングシステムによって異なる場合があります。したがって、ユーザーがローミングするマシンのシステムインストール間の違いに対処するようにProfile Managementを構成する必要があります。

そのためには、本番環境を模倣した方法でユーザーのリソースへのアクセスを確認します。これらのリソースには、以下が含まれる場合があります。

- ローカルにインストールされたアプリケーションを持つマシン
- ストリーミングされたアプリケーションまたはローカルにインストールされたアプリケーションを含む仮想デスクトップ
- 仮想アプリサーバーで公開またはストリーミングされた仮想アプリ
- ターミナルサービス クライアント

オペレーティングシステムのバリエーションをテストする

ユーザーは異なるオペレーティングシステムからアプリケーションにアクセスする場合があります。それらの間のバリエーションにより、単一のユーザープロファイル内で競合する設定が作成される可能性があります。

詳細については、「プロファイルバージョン」を参照してください。

ユーザー ストアを作成する

この記事では、組織に最適な方法でユーザー ストアを作成する方法について説明します。ここにある情報を確認するだけでなく、ユーザー ストアへのパスを可能な限り効率的に構成するように

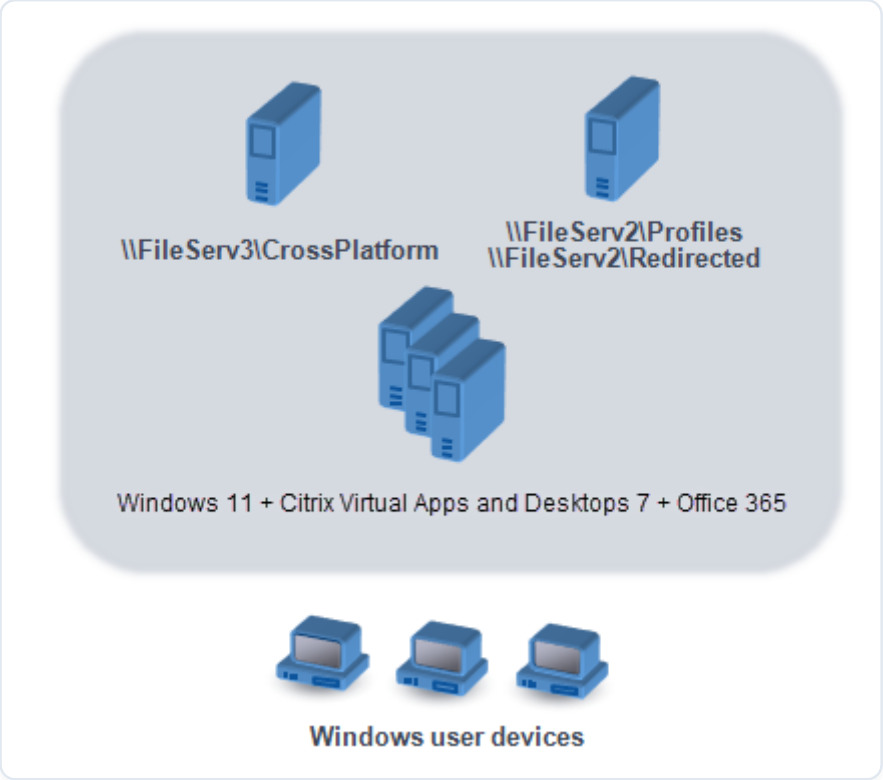
してください。たとえば、変数を適切に使用してパスを構成します。この件に関するアドバイスと例については、「ユーザー ストアへのパスを指定する」を参照してください。

ユーザー ストアは、Citrix®ユーザー プロファイルを保存するための中央ネットワーク ロケーションです。

ユーザー ストアには、任意のServer Message Block (SMB) またはCommon Internet File System (CIFS) ファイル共有を使用できます。ベスト プラクティスとして、以下を確実に実施してください。

- 共有がCitrixユーザー プロファイルで使用されるアカウントからアクセス可能であること。
- 共有がプロファイル データを保存するのに十分な大きさであること。
- ディスクまたはネットワーク障害が発生した場合に、共有が堅牢であること。

この図は、リダイレクトされたフォルダー アイテムのストレージ、クロスプラットフォーム設定ストア (別のファイル サーバー上)、およびMicrosoft Officeを実行しているWindows 11仮想デスクトップ (Citrix Virtual Desktops™で公開) に関連するユーザー ストアの例を示しています。仮想デスクトップにアクセスするユーザー デバイスも参考として示されています。



安全なユーザー ストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Webサイトの「移動ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で入手できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高レベルのセキュリティを保証します。また、ユーザー スト

アへのアクセスを構成する際には、Citrixユーザー プロファイルを変更または削除するために必要なAdministratorsグループを含めてください。

展開に複数のプラットフォームが含まれる場合は、「複数のプラットフォームの計画」でバージョン1およびバージョン2のプロファイル タイプに関する情報を確認してください。ユーザー ストアの構造については、「Profile Managementのアーキテクチャ」を参照してください。

注：アプリケーションがユーザー プロファイル内のファイルのアクセス制御リスト (ACL) を変更しても、Profile Managementはそれらの変更をユーザー ストアに複製しません。この動作は、Windowsの移動プロファイルと一貫しています。

このビデオで詳細を確認してください。



アップグレードと移行

Profile Management のアップグレード

この記事では、Active Directory を使用して Profile Management の展開をアップグレードする方法について説明します。

重要： このアップグレードプロセスでは、手順の順序に従うことが重要です。新しい .adm または .admx ファイルをグループポリシーに追加した後にのみ、すべてのコンピューターでソフトウェアをアップグレードしてください。事前にアップグレードすると、ログファイルが2つの場所に保存される可能性があります。1つは古いバージョンのログファイルを含み、もう1つは新しいバージョンのファイルを含みます。この考慮事項は、特に Citrix Virtual Desktops™ の展開に影響します。

また、スケジュールされたメンテナンス期間中にアップグレードすることも重要です。または、Active Directory のレプリケーションによって変更が展開全体に伝播される時間帯にアップグレードしてください。通常、アップグレードには最大24時間かかることがあります。

アップグレードプロセスには以下が含まれます。

1. グループポリシーオブジェクト（GPO）を作成し、新しい .adm または .admx ファイルを新しい GPO に追加する

   \- または -

   この記事の後半で説明するように、既存の .adm または .admx ファイルをアップグレードする.
2. この記事の後半で説明するように、すべてのコンピューターで .msi ファイルをアップグレードする.
3. GPO を適用する.

既存の .adm ファイルをアップグレードするには

以前のバージョンの Profile Management .adm ファイルがグループポリシーに存在する場合、以下の手順を使用してアップグレードできます。アップグレード時に、以前のバージョンのすべてのポリシー設定が保持されます。

1. ドメインコントローラーで、次のいずれかを実行します。

   - 既存の .adm ファイルをインポートします。ファイルはダウンロードパッケージの GPO_Templates フォルダーにあります。
   - ダウンロードパッケージの GPO_Templates フォルダーから .admx ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions` フォルダーにコピーし、.adml ファイルを `C:\Windows\PolicyDefinitions\<localized` フォルダー\>にコピーします。たとえば、英語のオペレーティングシステムでは、\<localized folder\> は en-US です。

2. Profile Management を構成するために使用するコンピューターで、グループポリシーオブジェクトエディターを開きます。
3. グループポリシーオブジェクトエディターで、**管理用テンプレート**を右クリックし、**テンプレートの追加と削除**を選択します。
4. Profile Management の既存の .adm ファイル（例: ctxprofile5.4.1）を選択し、**削除**をクリックしてから**閉じる**をクリックします。管理用テンプレート\\Citrix フォルダーが削除されます。
5. **管理用テンプレート**を右クリックし、もう一度**テンプレートの追加と削除**を選択します。
6. **追加**をクリックし、新しいバージョンの .adm または .admx ファイルの場所（例: ctxprofile5.5.0）を参照して選択し、**閉じる**をクリックします。新しいファイルがインポートされますが、以前の設定は保持されます。

.msi ファイルをアップグレードするには

すべてのユーザーデバイスに同じバージョンの Profile Management をインストールし、その同じバージョンの .adm または .admx ファイルをすべてのドメインコントローラーの各グループポリシーオブジェクトに追加することをお勧めします。これにより、異なるユーザープロファイルストア構造（異なるバージョンからのもの）が存在する場合に発生する可能性のあるプロファイルデータの破損を防ぐことができます。

新しい設定を有効にする前に、すべてのコンピューターを最新バージョンの Profile Management にアップグレードすることをお勧めします。使用しているバージョンで設定が新しいかどうかを確認するには、Profile Management ポリシーを参照してください。

1. アップグレードするコンピューターからすべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. 各コンピューターで .msi ファイルを実行して、既存のバージョンに新しいバージョンの Profile Management をインストールします。詳細については、インストールとセットアップを参照してください。

.ini ファイルをアップグレードするには

以前のバージョンの Profile Management で .ini ファイルを編集し、新しいバージョンにアップグレードします。ソフトウェアはファイルが編集されたことを検出し、デフォルトでは上書きしません。既存の .ini ファイル設定を保持し、新しいバージョンの新しい設定を使用するには、次のいずれかを実行する必要があります。

- 新しいバージョンの .ini ファイルから新しい設定を、既存の編集済み .ini ファイルに手動で追加します。
- 既存の編集済みバージョンの .ini ファイルのコピーを保存します。アップグレード中にファイルを強制的に上書きするには、OVERWRITEINIFILES=yes コマンドラインオプションを使用します。保存した設定をアップグレードされた .ini ファイルに追加します。例:

  ```
  msiexec /i <path to the MSI file\> /quiet [INSTALLDIR=<installation directory>] [OVERWRITEINIFILES=yes] [INSTALLPOLICYINIFILES=no]
  ```

注

HDX™ を介して Profile Management ポリシーを構成するには、次の操作を行う必要があります。

- Delivery Controller をアップグレードします。これは、HDX が XenApp および XenDesktop のレイアウト `image-full\x64\Citrix Desktop Delivery Controller` にある UserProfileManager_PowerShellSnapIn.msi ファイルから Profile Management ポリシー設定を読み取るためです。
- Profile Management の最新バージョンを入手するために、VDA をアップグレードします。

その他のリソース

- Profile Management ポリシー
- インストールとセットアップ

構成

構成の優先順位

Profile Management は、グループポリシーと .ini ファイルを使用して構成できます。構成設定は次のように適用されます。

1. グループポリシーで定義された設定が優先されます。ポリシー設定が**未構成**に設定されている場合にのみ、.ini ファイルが照会されます。

   注: 組織単位内のサイトおよびドメインにグループポリシーオブジェクトを選択的に適用する場合、さらに優先順位が適用されます。「グループポリシー: フィルタリングとアクセス許可」を参照してください。ドメインおよびOUグループポリシーは、ローカルポリシーよりも優先されます。
2. 設定がポリシーによって定義されていない場合、Profile Management は .ini ファイルから設定を読み取ろうとします。
3. 設定がグループポリシーまたは .ini ファイルで構成されていない場合、デフォルト設定が使用されます。

グループポリシーと .ini ファイルで同じ設定を異なる方法で構成したい場合があります。たとえば、グループポリシー設定でデフォルトのログ記録を有効にし、トラブルシューティングに使用するコンピューターで .ini ファイルを使用して詳細なログ記録を有効にする場合などです。

Profile Management .ini ファイルについて

デフォルト構成

Profile Management には、.ini ファイルに保存されたデフォルト構成が付属しています。このファイルは、Profile Management Service が認識できるようにインストールフォルダーに配置する必要があります。デフォルト構成は、ほとんどの環境に適しています。すべてのグループのすべてのユーザーのプロファイルを処理します。

Windows XP または Windows Server 2003 で実行されている Profile Management の非英語展開がある場合、UPMPolicyDefaults_all.ini を使用して、.ini ファイルの適切な言語バージョンを作成する必要があります。このファイルのコピーを言語に合わせて名前を変更し（たとえば、スペイン語

の場合は UPMPolicyDefaults_all_es.ini）、フォルダー名をローカライズします。次のファイル名を使用します。

- フランス語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_fr.ini
- ドイツ語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_de.ini
- スペイン語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_es.ini
- 日本語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_ja.ini
- 簡体字中国語オペレーティングシステムの場合、UPMPolicyDefaults_all_zh-CN.ini

.iniファイルを変更する

.iniファイルにエントリを追加する場合は、変数と値が正しい形式であることを確認してください。

フラグ（オン/オフインジケーター）は次の形式である必要があります。

```
<variable>=<value>
```

値が1の場合は設定が有効になり、その他の値または値がない場合は無効になります。たとえば、次のエントリは`ServiceActive`設定を有効にします。

```
ServiceActive=1
```

次のいずれかのエントリは、設定を無効にします。

```
ServiceActive=ON

ServiceActive=OFF

ServiceActive=TRUE

ServiceActive=FALSE

ServiceActive=
```

リストエントリは次の形式である必要があります。

```
<value>=
```

次のエントリは、同期するMicrosoft Officeファイルを指定します。

```
[SyncFileList]

AppData\Local\Microsoft\Office\*.OfficeUI
```

グループポリシー設定への変更は、ターゲットコンピューターで手動または自動のポリシー更新が行われたときに有効になります。.iniファイルへの変更は、推奨されるコマンド**gpupdate /force**を発行したときに有効になります。または、ターゲットコンピューターでProfile Management Serviceを再起動したときに変更が有効になります。

Profile Managementを有効にする

デフォルトでは、展開を容易にするため、Profile Managementはログオンまたはログオフを処理しません。Profile Managementは、他のすべてのセットアップタスクを実行し、Citrix®ユーザープロファイルが環境でどのように動作するかをテストした後にのみ有効にしてください。

グループポリシーを使用してProfile Managementを有効にするには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrixコンポーネント > Profile Management**で、**Profile Managementを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

UPMPolicyDefaults_all.iniファイルを使用してProfile Managementを有効にすることもできます。これを行うには、次の手順に従います。

1. Profile Managementがインストールされているマシンで、`C:\Program Files\Citrix\User Profile Manager\UPMPolicyDefaults_all.ini`に移動します。
2. メモ帳を使用してUPMPolicyDefaults_all.iniを開きます。
3. 構成を編集して、特定の要件を反映させます。

この設定がグループポリシーで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がグループポリシーまたは.iniファイルで構成されていない場合、Profile ManagementはWindowsユーザープロファイルを一切処理しません。

次の方法でProfile Managementを有効にすることもできます。

- Citrix Studio。Citrix Studioを使用してProfile Managementを有効にする手順については、Knowledge Centerの記事CTX222893を参照してください。
- Workspace Environment Management (WEM)。WEMを使用してProfile Managementを有効にする手順については、Knowledge Centerの記事CTX229258を参照してください。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

このビデオで詳細を確認してください:



ユーザー ストアへのパスを指定する

ユーザー ストアへのパスを指定する前に、 Profile Management architecture を参照し、展開に関連する場合は、次の影響を理解してください。

- 多言語プロファイルの保存
- 含める項目と除外する項目の組み合わせ

1. Profile Management で、 ポリシーをダブルクリックします。
2. を選択し、ユーザー設定（レジストリの変更と同期されたファイル）が保存されるディレクトリ（ユーザー ストア）へのパスを入力します。

パスは次のいずれかです。

- **相対パス**。このパスはホームディレクトリに対する相対パスである必要があります。ホームディレクトリは通常、Active Directory (AD) のユーザーの #homeDirectory# 属性として構成されます。
- **UNC パス**。このパスは通常、サーバー共有または DFS 名前空間を指定します。
- **無効または未構成**。この場合、`\#homeDirectory#\Windows`の値が想定されます。

この設定には、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数（例: %ProfVer%）。システム環境変数は通常、追加のセットアップが必要です。詳細については、(/ja-jp/profile-management/2308/plan/administer.html) を参照してください。
- ハッシュで囲まれた AD ユーザー オブジェクトの属性（例: #sAMAccountName#）。

- Profile Management 変数。詳細については、(/ja-jp/profile-management/2308/policies/settings.html) を参照してください。

ユーザー環境変数は、`%username%` および `%userdomain%` を除いて使用できません。場所やユーザーなどの組織変数を定義するために、カスタム AD 属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#` は、ユーザー設定を UNC パス `\\server\share\JohnSmith` に保存します（現在のユーザーの #sAMAccountName# が JohnSmith に解決される場合）。
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` は `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64` に展開される場合があります。

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、この設定がNTUSER.DATを含むフォルダーの1つ上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profile` に含まれている場合、ユーザー ストアへのパスを `\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64` として設定します (`\UPM_Profile` サブフォルダーではありません)。

この図は、AD属性、環境変数、およびProfile Management変数を組み込んだ、ユーザー ストアへの一般的なパスのコンポーネントを示しています。

図(/en-us/profile-management/2308/media/upm-path-to-user-store.png)

ユーザー ストアへのパスを指定する際に変数を使用する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーでCitrixユーザープロファイルを共有する(/ja-jp/profile-management/2308/plan/multiple-file-servers.html)
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する(/ja-jp/profile-management/2308/plan/administer.html)
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧(/ja-jp/profile-management/2308/plan/high-availability-disaster-recovery.html)

ユーザーストアへのパスが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリのWindowsサブディレクトリに保存されます。

ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、ホームドライブ上のWindowsディレクトリが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

アイテムの包含と除外

この記事では、Profile Management がユーザープロファイルからアイテムを包含および除外するために使用するプロセスについて説明します。ユーザーのログオンおよびログオフエクスペリエンスを向上させるために、デフォルトの包含リストまたは除外リストを変更することを決定した場合は、このプロセスを理解していることを確認してください。この変更が必要かどうかを判断するには、「使用中のアプリケーション」を参照してください。

たとえば、Microsoft Word は高度にカスタマイズ可能で頻繁に使用されるアプリケーションであり、どのようにアクセスされてもローミングユーザーに同じエクスペリエンスを提供する必要があるため、包含する場合があります。逆に、エンタープライズアプリケーションは一部のグループではめったに使用されないため、ログオンおよびログオフごとにプロファイルデータをダウンロードする必要がないため、除外する場合があります。

デフォルトでは、ローカルプロファイル内のすべてのファイルとフォルダーはユーザー ストアと同期されます。同期したくないファイルやフォルダーは、除外リストに追加することで指定できます。フォルダーを除外した場合でも、同期したいサブフォルダーは包含リストに追加することで指定できます。

包含および除外できるもの:

- プロファイル内に含まれるファイルとフォルダー。
- 個人設定を保存するHKCUハイブ内のレジストリエントリ。HKLMハイブ内のエントリはデフォルトでは処理されず、そのように構成することもできません。

アイテムを包含および除外する前に

ユーザープロファイルの内容を調整する前に、組み込みのWindowsパフォーマンスモニター（Perfmon）カウンターのセットを使用することを検討してください。これらはプロファイルの動作に関する洞察を提供します。利用可能なカウンターには、プロファイルサイズとローカルコンピューターでCitrix®ユーザープロファイルを作成するのにかかる時間の測定値が含まれます。

プロファイルをローカル（Profile Managementを実行するコンピューター上）にキャッシュするかどうかを決定する必要がある場合があります。この決定に影響を与える要因には、展開内のCitrix製品、ローカルコンピューター上の利用可能なスペース、および展開内のユーザー数があります。

ファイルとフォルダー

包含および除外されるすべてのフォルダー名は言語固有です。ただし、ユーザー ストア内のフォルダー名は、オペレーティングシステムの言語に依存しない形式です。

オペレーティングシステムによってローカルとして扱われるディスク上のファイルまたはフォルダーを同期できます。ネットワークマップされたドライブ上のファイルまたはフォルダーは同期できません。

レジストリ

既存のユーザーの場合、HKCUハイブ全体がユーザー ストアにコピーされます。新規ユーザーの場合、Microsoftローカル、ローミング、デフォルト、またはテンプレートプロファイルのハイブがコピーされます。ユーザー ストアに変更が加えられると、包含が追加され、除外がハイブから削除されます。

不要なキーを含むテンプレートプロファイルがある場合は、Sepago の Profile Nurse などのツールを使用して、それらをユーザー ストアから削除します。

除外について

除外はログオン時ではなくログオフ時に処理されます。これらはユーザー ストアからデータを削除するのではなく、新しいデータが書き込まれるのを防ぎます。

デフォルトの除外を除いて、通常、Profile Management を初めて展開するときに項目を除外する必要はありません。その後、アプリケーションのパフォーマンスを追跡し、ユーザーからフィードバックを収集するにつれて、複数のアプリケーションの設定が競合する場合や、不要な設定が収集された結果、ユーザーの NTUSER.DAT ファイルが大きくなる場合に、項目を除外する必要が生じる可能性があります。

リダイレクトされたフォルダーを除外として追加しないでください。

重要: Citrix は、`AppData\LocalLow` フォルダーを同期から除外することを推奨します。デフォルトの構成では、除外リストにはすでに `AppData\LocalLow` が含まれています。さらに、`AppData\Local` フォルダーから一部のコンテンツを除外することもできます。`AppData\LocalLow` または `AppData\Local` を除外しない場合、大量のデータがネットワーク

経由で転送される可能性があり、ユーザーはログオンの遅延を経験する可能性があります。これらのフォルダーは、標準の Windows ローミング プロファイルでは同期されません。

含めるルールと除外するルール

Profile Management がファイル、フォルダー、およびレジストリ キーを含めたり除外したりする際に、次のルールが使用されます。

1. すべての項目はデフォルトで含まれます
2. 同じパスが含める項目と除外する項目の両方として構成されている場合、含める項目が優先されます
3. 同じフォルダー内では、含める項目が除外する項目よりも優先されます
4. フォルダー階層の上位にある除外する項目よりも、含める項目が優先されます
5. フォルダー階層の上位にある含める項目よりも、除外する項目が優先されます

これらのルールにより、合理的で直感的な動作が実現されます。すべての項目はデフォルトで含まれます。この開始点から、最上位の例外を除外として構成し、次に最上位の例外に対するより深い例外を含める項目として構成するといったことができます。

既定の包含と除外

> **注記:**
>
> 既定の包含と除外は、ファイルベースのプロファイルソリューションにのみ適用されます。

> このトピックでは、Profile Management が処理に含める既定の項目と除外する既定の項目について説明します。展開内のアプリケーションによっては、追加の（既定以外の）項目が必要になる場合があります。含める、または除外する追加項目を決定するのに役立つ情報として、「使用中のアプリケーション」を参照してください。

重要: .ini ファイルではなくグループポリシーを使用する場合（または、.ini ファイルでのテストが成功した後でグループポリシー展開を展開する場合）、インストールされている .ini ファイルとは異なり、.adm または .admx ファイルには、既定で含められる項目も除外される項目もありません。既定の項目は手動でファイルに追加する必要があります。これらの項目は、このトピックの表に示されています。次の点に注意してください。

- Profile Management ポリシー を使用して、.ini ファイルと .adm または .admx ファイルの設定名をマッピングし、Profile Management 変数（例: \!ctx_internetcache\!）がどのように展開されるかを理解します
- .ini ファイルから包含と除外を貼り付ける際は、各項目から末尾の =（等号）を削除します
- 包含と除外に先頭のバックスラッシュを追加しないでください

レジストリ包含リスト

既定値
空

レジストリ除外リスト

既定値
Software\Microsoft\AppV\Client\Integration=
Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing=
Software\Microsoft\Speech_OneCore=

注: Microsoft App-V を使用している場合、この除外は正しくなく、異なる除外が必要です。 プロファイル管理とApp-V。

フォルダーの包含リスト

既定値
空

プロファイル内のすべてのフォルダーは、デフォルトで含まれます。

フォルダーの除外リスト

この表のフォルダーは、同期から除外されます。

既定値
!ctx_internetcache!=
!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\Cache=

既定値
!ctx_localappdata!\Google\Chrome\ユーザーデータ\デフォルト\キャッシュされたテーマ画像=
!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIcons=
!ctx_localappdata!\Google\Chrome\User Data\Default\JumpListIconsOld=
!ctx_localappdata!\GroupPolicy=
!ctx_localappdata!\Microsoft\AppV=
!ctx_localappdata!\Microsoft\Messenger=
!ctx_localappdata!\Microsoft\Office\15.0\Lync\Tracing=
!ctx_localappdata!\Microsoft\OneNote=
!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook=
!ctx_localappdata!\Microsoft\ターミナルサーバークライアント=
!ctx_localappdata!\Microsoft\UEV=
!ctx_localappdata!\Microsoft\ウィンドウズライブ=
!ctx_localappdata!\Microsoft\ウィンドウズライブコンタクト=
!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\アプリケーションショートカット=
!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Burn=
!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\CD書き込み=
!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\Notifications=
!ctx_localappdata!\Packages=
!ctx_localappdata!\Sun=
!ctx_localappdata!\ウィンドウズ ライブ=
!ctx_localsettings!\Temp=

既定値
!ctx_roamingappdata!\Microsoft\AppV\Client\Catalog=
!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\cache=
!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\log=
!ctx_roamingappdata!\Sun\Java\Deployment\tmp=
$Recycle.Bin=
AppData\LocalLow=
トレース=

ファイル包含リスト

既定値
<空>

プロファイル内のすべてのファイルは、既定で含まれます。

ファイル除外リスト

既定値
空

デフォルトでは、プロファイル内のファイルは除外されません。

アイテムのインクルードとエクスルード

前提条件として、インクルードとエクスルードの仕組みを理解していることを確認してください。詳細については、「アイテムのインクルードとエクスルード」を参照してください。デフォルトでインクルードおよびエクスルードされるアイテムについては、「デフォルトのインクルードとエクスルード」を参照してください。

アイテムをインクルードおよびエクスルードする際に、複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

アイテムを除外するには

1. **Profile Management** \> **Registry**で、**Exclusion list**ポリシーをクリックします。
2. **Enabled**を選択します。
3. **Show**をクリックし、ログオフ時にProfile Managementで同期させたくない`HKCU`ハイブ内のレジストリキーを追加します。例：`Software\Policies`。
4. **Profile Management** \> **File system**で、**Exclusion list - directories**ポリシーをダブルクリックします。
5. **Enabled**を選択します。
6. **Show**をクリックし、Profile Managementで同期させたくないフォルダーを追加します。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイル（%USERPROFILE%）からの相対パスを使用してフォルダーを指定し、パスの先頭のバックスラッシュは省略します。
   - プロファイルの場所を特定するには変数`%USERPROFILE%`を使用しますが、このポリシーに変数を直接入力しないでください。
   - Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

     例：

     - `Desktop`。`Desktop`フォルダーを同期しません。
     - `MyApp\tmp`。`%USERPROFILE%\MyApp\tmp`フォルダーを同期しません。
7. **Profile Management** \> **ファイルシステム**で、**除外リスト - ファイル**ポリシーをダブルクリックします。
8. **有効**を選択します。
9. **表示**をクリックし、Profile Managementで同期したくないファイルを追加します。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイル (%USERPROFILE%) に対する相対パスでファイル名を指定します。このポリシーでは、変数 (%USERPROFILE%) を入力しないでください。
   - ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。Profile Management 7.15以降では、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。

- Profile Management 2112以降では、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

  例:

  - `Desktop\Desktop.ini`。`Desktop`フォルダー内の`Desktop.ini`を無視します。
  - `AppData*.tmp`。`AppData`フォルダーとそのサブフォルダー内の`.tmp`拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
  - `AppData*.tmp|`。`AppData`フォルダー内でのみ`.tmp`拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
  - `Downloads*\a.txt`。`Downloads`フォルダーの直下のサブフォルダー内の`a.txt`を無視します。

除外リストが無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

「**除外リスト - ディレクトリ**」が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

「**除外リスト - ファイル**」が無効になっている場合、ファイルは除外されません。この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

アイテムを含めるには

> **ヒント:**
>
> 特定のトップレベルフォルダーを含めることができます。共同作業環境では、この手順により、重要なフォルダーを他の管理者に通知できるという利点があります。

1. **Profile Management** \> **Registry**で、**Inclusion list**ポリシーをダブルクリックします。
2. **Enabled**を選択します。

3. **Show**をクリックし、ログオフ時にProfile Managementで処理させたい `HKEY\_CURRENT\_USER` ハイブ内のプロファイル関連のレジストリキーを追加します。例: `Software\Adobe`。
4. **Profile Management** \> **File system** \> **Synchronization**で、**Directories to synchronize**ポリシーをダブルクリックします。
5. **Enabled**を選択します。
6. **Show**をクリックし、除外されたフォルダー内にあるが、Profile Managementで同期させたいフォルダーを追加します。例: `Desktop\exclude\include` は、フォルダー `Desktop\exclude` が同期されていない場合でも、 `include` サブフォルダーが同期されるようにします。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイルに対する相対パスを使用してフォルダーを指定します。
   - Profile Management 2112以降、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

7. **Profile Management** \> **ファイルシステム** \> **同期**で、**同期するファイル**ポリシーをダブルクリックします。
8. **有効**を選択します。
9. **表示**をクリックし、除外されたフォルダー内にあるが、Profile Managementで同期したいファイルを追加します。

   次の点に注意してください。

   - ユーザープロファイルに対する相対パスでファイルを指定します。
   - ファイル名でのワイルドカードはサポートされており、再帰的に適用されます。ただし、ワイルドカードをネストすることはできません。Profile Management 7.15以降では、垂直バー (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限し、サブフォルダーには適用されないようにすることができます。
   - Profile Management 2112以降では、フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。

     例：

     - `AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat`。デフォルト構成で除外されているフォルダー内のファイルを指定します。

    - `AppData\Local\MyApp*.cfg`。`AppData\Local\MyApp`フォルダーとそのサブフォルダー内の`.cfg`拡張子を持つすべてのファイルを指定します。
    - `Downloads*\a.txt`。`Downloads`フォルダーの直下のサブフォルダー内の`a.txt`を指定します。

- Profile Managementは、各ユーザーのプロファイル全体を、インストールされているシステムとユーザーストアの間で同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザープロファイルに含める必要はありません。

ここで**インクルージョンリスト**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、HKEY_CURRENT_USERハイブ全体が処理されます。

ここで**同期するディレクトリ**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

ここで**同期するファイル**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

ワイルドカードの使用

ファイルやフォルダーを参照するポリシーでは、疑問符 (`?`) やアスタリスク (`*`) などの DOS スタイルのワイルドカード文字を使用できます。例としては、ファイルの包含/除外リストやフォルダーの包含/除外リストなどがあります。疑問符 (`?`) は単一の文字に一致します。アスタリスク (`*`) はゼロ個以上の文字に一致します。

Profile Management 7.15 以降では、縦棒 (`|`) を使用して、ポリシーを現在のフォルダーのみに制限できます。

次の点に注意してください。

- ファイル名のワイルドカードは再帰的に機能しますが、フォルダー名のワイルドカードは機能しません。ワイルドカードを使用する場合は、有効なパスを指定してください。

- ワイルドカードをサポートするポリシーは、環境変数や Active Directory 属性の使用など、他の種類の変数をサポートしません。レジストリエントリを参照するポリシーではワイルドカードを使用できません。

例

ワイルドカード `<path name>\h*.txt` は house.txt、h.txt、house.txt.txt に一致しますが、ah.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c.txt` は abc.txt に一致しますが、ac.txt には一致しません。

ワイルドカード `<path name>\a?c*d.txt` は abcd.txt と abccd.txt に一致しますが、acd.txt には一致しません。

プロファイルルートフォルダーでのポリシーの構成:

- `*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダーにある拡張子 .txt のすべてのファイルを指定します。
- `*h.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダーにあるこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `h*.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダーにあるこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `a?c.txt` は、ルートフォルダーとそのサブフォルダーにあるこのワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `*.txt|` は、ルートフォルダー内のみにある .txt 拡張子を持つすべてのファイルを指定します。

プロファイル以外のルートフォルダーでのポリシーの構成:

- `AppData*.txt` は、AppData フォルダーとそのサブフォルダー内にある、このワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。
- `AppData*h.txt` は、AppData フォルダーとそのサブフォルダー内にある、このワイルドカードに一致するすべてのファイルを指定します。

ログオン除外チェックを有効にする

ログオン除外チェックを有効にする機能は、ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストア内のプロファイルに除外されたファイルとフォルダーが含まれている場合に、Profile Management が何を行うかを制御します。デフォルトでは、この機能は無効になっています。

除外されたファイルとフォルダーとは、それぞれ**除外リスト - ファイル**および**除外リスト - ディレクトリ**ポリシーに追加するファイルとフォルダーを指します。ユーザーがログオフすると、Profile Management は除外されたファイルとフォルダーをユーザー ストアに同期しません。ただし、除外リストに追加する前に、除外されたファイルとフォルダーがユーザー ストアに存在する場合があります。**ログオン除外チェックを有効にする**ポリシーを使用すると、ユーザーがログオンしたときに、Profile Management でそれらのファイルとフォルダーを無視するか、ユーザー ストアから削除させることができます。

この機能を使用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルシステム**で、**ログオン除外チェック**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. ドロップダウンメニューからオプションを選択します。デフォルトでは、**除外されたファイルまたはフォルダーを削除**が選択されています。
5. **OK**をクリックします。

この機能には、次の3つのオプションがあります。

- **除外されたファイルまたはフォルダーを削除**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストアから除外されたファイルとフォルダーを削除します。
- **除外されたファイルまたはフォルダーを無視**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストアから除外されたファイルとフォルダーを無視します。
- **除外されたファイルまたはフォルダーを同期**。ユーザーがログオンしたときに、ユーザー ストアからローカルプロファイルに除外されたファイルとフォルダーを同期します。

> **警告:**
>
> **除外されたファイルまたはフォルダーを削除**を選択すると、Profile Management はユーザー ストアから除外されたファイルとフォルダーを完全に削除します。除外されたファイルとフォルダーを再度含めた場合でも、ログオン時に Profile Management はキャッシュされたローカルプロファイルからそれらを削除します。

> 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。ログオフして、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

.iniファイルを使用してログオン除外チェックを有効にするには、次の手順を実行します。

1. Profile Management .iniファイルを開きます。
2. セクションにEnableLogonExclusionCheck項目を追加します。
3. EnableLogonExclusionCheck項目の値を次のように設定します。
   - ユーザーストアから除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーを無視するには、値を1に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=1。
   - ユーザーストアから除外リストで指定された除外ファイルとフォルダーを削除するには、値を2に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=2。
   - チェックを無効にするには、値を0に設定します。例: EnableLogonExclusionCheck=0。
4. Profile Management .iniファイルを保存して閉じます。
5. 変更を有効にするには、`gpupdate /force`コマンドを実行します。

構成の優先順位:

1. この設定がグループポリシーオブジェクト (GPO) で構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がGPOにも.iniファイルにも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

ユーザープロファイルのストリーミング

デフォルトでは、ユーザーがログオンすると、Citrix Profile Management はユーザープロファイル全体をユーザー ストアからローカルコンピューターにフェッチします。ユーザープロファイル内の大きなファイルは、ログオンの遅延を引き起こす可能性があります。ユーザーのログオンエクスペリエンスを向上させるには、プロファイルストリーミング機能を有効にできます。

この機能を有効にすると、Profile Management は、ログオン後にプロファイルファイルとフォルダーがアクセスされたときにのみフェッチします。

> **注:**

> ユーザープロファイルには、ファイル、フォルダー、およびレジストリエントリが含まれます。この機能はファイルとフォルダーに適用されますが、レジストリエントリには適用されません。レジストリエントリは常にユーザーログオン時にフェッチされます。

プロファイルストリーミング機能を有効にする

次のポリシーを使用して、プロファイルストリーミング機能を有効にします。

- **プロファイルストリーミング。**このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*ファイル*がローカルコンピューターにフェッチされます。
- **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする。**このポリシーを有効にすると、ユーザーがアクセスしたときにプロファイル*フォルダー*がローカルコンピューターにフェッチされます。

ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ストリーミングユーザープロファイル**にアクセスします。
3. **プロファイルストリーミング**をダブルクリックします。**有効**を選択し、**OK**をクリックします。
4. **フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**をダブルクリックします。**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

プロファイルストリーミングの機能強化を有効にする

プロファイルストリーミング機能を有効にした後、必要に応じてさまざまな機能強化を適用できます。

例1：ユーザーから、大きなプロファイルファイルの読み込みが遅いという報告がありました。この場合、**常にキャッシュ**ポリシーを有効にし、大きなファイルの最小サイズを指定します。Profile Managementは、ユーザーログオン*中に*、そのサイズより大きいファイルをローカルプロファイルにキャッシュします。

例2：組織内で、ユーザーが特定のプロファイルフォルダに頻繁にアクセスします。そのため、プロファイルストリーミングが有効になっている場合でも、ユーザーログオン時にそれらのフォルダをローカルプロファイルにフェッチしたいと考えています。この目標を達成するには、**プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーを有効にし、プロファイルストリーミングからフォルダを除外します。

必要に応じて機能強化を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ストリーミングユーザープロファイル**にアクセスします。
2. 大きなファイルの読み込み時間を短縮するには、Profile Managementがログオン*中に*大きなファイルをローカルプロファイルにキャッシュするように有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

   a. **常にキャッシュ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. キャッシュするプロファイルファイルのサイズの下限 (MB) を設定します。プロファイル全体をキャッシュするには、制限をゼロに設定します。

      注:

      - 制限を超えるファイルは、Profile Managementがユーザーログオン*中に*バックエンド処理スレッドを開始するとすぐに、ローカルプロファイルにキャッシュされます。
      - 制限を下回るファイルは、ユーザーがアクセスしたときに引き続きローカルプロファイルにフェッチされます。

   d. **OK**をクリックします。

3. ドメイン内の特定のユーザーグループにのみプロファイルストリーミングを適用するには、次の手順に従います。

   a. **ストリーミングユーザープロファイルグループ**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. ユーザーグループのリストを入力します。エントリを区切るには`Enter`を押します。

   d. **OK**をクリックします。

   注：デフォルトでは、このポリシーは無効になっており、プロファイルストリーミングはドメイン内のすべてのユーザーグループに適用されます。

4. 特定のプロファイルフォルダとファイルをプロファイルストリーミングから除外するには、次の手順に従います。

   a. **プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーをダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. 「**表示**」をクリックします。

d. Profile Managementでストリーミングしたくないフォルダーを追加します。詳細については、この記事の後半にあるプロファイルストリーミングの除外を有効にするを参照してください。

5. 同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、次の手順に従います。

   a. **保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**をダブルクリックします。

   b. 「**Enabled**」を選択します。

   c. **OK**をクリックします。 詳細については、この記事の後半にある保留領域のプロファイルストリーミングを参照してください。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳細については、`<https://technet.microsoft.com/ja-jp/library/bb490983.aspx>`を参照してください。

構成の優先順位

ストリーミングされたユーザープロファイルの各ポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPOまたは.iniファイルで**プロファイルストリーミング**が構成されていない場合、**プロファイルストリーミング**は無効になります。
- GPOで**常にキャッシュ**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、無効になります。
- **ストリーミングされたユーザープロファイルグループ**が無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。この設定がGPOで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がGPOまたは.iniファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。
- GPOまたは.iniファイルで**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**が構成されていない場合、フォルダーのプロファイルストリーミングは無効になります。
- GPOまたは.iniファイルで**プロファイルストリーミングの除外を有効にする**が構成されていない場合、すべてのフォルダーがストリーミングされます。
- GPOまたは.iniファイルで**保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**が構成されていない場合、保留領域のプロファイルストリーミングは無効になります。

プロファイルストリーミング除外を有効にする

プロファイルストリーミングの除外が有効になっている場合、Profile Managementは除外リスト内のフォルダーをストリーミングしません。ユーザーがログオンすると、除外リスト内のすべてのフォルダーとファイルがユーザーストアからローカルコンピューターにすぐにフェッチされます。

プロファイルストリーミングの除外を有効にするには、次の手順に従います。

1. プロファイル管理で、**ストリーミングされたユーザープロファイル**をダブルクリックします。
2. **プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ**ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. **表示**をクリックします。
5. Profile Managementでストリーミングしないフォルダーを追加します。フォルダー名は、絶対パスまたはユーザープロファイルからの相対パス (`%USERPROFILE%`) として指定できます。その変数を使用してプロファイルの場所を特定しますが、このポリシーに変数自体を入力しないでください。パスの先頭のバックスラッシュは省略してください。

例:

- Desktop。Desktopフォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。
- `MyApp\tmp`。`%USERPROFILE%\MyApp\tmp`フォルダーは、ユーザーログオン時にフェッチされます。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイル内の次のフォルダーはデフォルトで除外されます。

- `AppData\Local\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Credentials`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Crypto`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\Protect`
- `Appdata\Roaming\Microsoft\SystemCertificates`

注:

- このポリシーは、プロファイルストリーミングが有効になっている場合にのみ有効になります。
- このポリシーは、ワイルドカード`*`および`?`をサポートしていません。
- エントリを区切るには、`Enter`と入力します。

- プロファイルストリーミング除外リストを手動で編集する場合は、ログオンがハングするのを避けるために、前述のデフォルトで除外されているフォルダーを追加する必要があります。

保留領域のプロファイルストリーミング

Profile Managementは、保留領域を使用して、同じユーザーの同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存します。デフォルトでは、この領域はプロファイルストリーミング機能の例外です。この機能が有効になっている場合でも、ユーザーがログオンすると、この領域のファイルとフォルダーはローカルプロファイルにフェッチされます。

同じユーザーの同時セッションで最適なログオンエクスペリエンスを確保するには、プロファイルストリーミング機能の拡張として、**保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする**機能を有効にします。このポリシーを有効にすると、Profile Managementは、ユーザーがログオンするときではなく、アクセスしたときに保留領域のファイルとフォルダーをローカルプロファイルにフェッチします。その領域に大きなファイルがある場合、ユーザーのログオン時間が大幅に短縮されます。

ユーザー ストアのレプリケート

ユーザー ストアのレプリケートポリシーを使用すると、ユーザーのログオンおよびログオフごとにユーザー ストアを複数のパスにレプリケートできます。これにより、プロファイルの冗長性が提供され、ユーザープロファイルの可用性が高レベルで保証されます。

- ユーザーログオン中、Profile Managementは次のように動作します。
  a. プライマリユーザー ストア（`path to user store`で指定）に接続して、ユーザープロファイルをローカルコンピューターにフェッチしようとします。
  b. プライマリ ストアが利用できない場合、Profile Managementは、アクセス可能なレプリケートされたユーザー ストア（`Paths to replicate a user store`で指定）に接続できるまで、順次接続を試行します。その後、アクセス可能なストアからユーザープロファイルをフェッチします。
  c. 以前利用できなかったストアがアクセス可能になると、Profile Managementはデータの一貫性を確保するために、そのストアを他のストアと同期します。
- ユーザーログオフ中、Profile Managementはローカルプロファイルをプライマリユーザー ストアとレプリケートされたユーザー ストアの両方に書き戻します。

> **注：**

- この機能は、ファイルベースとコンテナベースの両方のプロファイルソリューションで利用できます。
- レプリケートされたプロファイルコンテナは、ユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供しますが、セッション内フェールオーバーには対応していません。
- このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフ時間が長くなる可能性があります。

グループポリシーを使用して**ユーザー ストアのレプリケート**ポリシーを構成するには、次の手順を実行します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**にアクセスし、**ユーザー ストアのレプリケート**ポリシーをダブルクリックします。
3. ポリシーを**有効**に設定します。
4. 「**ユーザー ストアをレプリケートするパス**」の横にある「**表示**」をクリックし、「**値**」フィールドにパスを入力します。

   ユーザープロファイルの一部でプロファイルコンテナが有効になっている場合、コンテナベースのプロファイルとファイルベースのプロファイルを異なる場所にレプリケートできます。そのためには、パスをこの形式で入力します: `<path to the replicated file-based profiles>|<path to the replicated container-based profiles>`。例: `\\path_a|\\path_b` は、Profile Management がファイルベースのプロファイルを `\\path_a` に、コンテナベースのプロファイルを `\\path_b` にレプリケートすることを示します。
5. 「**OK**」をクリックし、もう一度「**OK**」をクリックします。

注:

セッション中に変更されたファイルとフォルダをユーザー ストアに同期するには、アクティブライトバックを有効にする ポリシーを有効にします。

変更を有効にするには、Profile Management がインストールされているマシンでコマンドプロンプトから **gpupdate /force** コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。

プロファイルコンテナをセットアップする

重要:

この機能はWindows 7では動作しません。

ユーザープロファイル内の大きなフォルダーは、ユーザーログオンの遅延を引き起こす可能性があります。ログオンエクスペリエンスを向上させるために、Profile ManagementはVHDXベースのプロファイルソリューションであるプロファイルコンテナを提供します。このソリューションにより、選択したプロファイルフォルダーをVHDXプロファイルディスクに保存できます。ユーザーがログオンすると、VHDXプロファイルディスクがマウントされ、プロファイルフォルダーがすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナを使用すると、次のいずれかの目標を達成できます。

- コンテナベースのプロファイルソリューションをセットアップする: ユーザープロファイル全体をプロファイルコンテナに保存します。
- ファイルベースのプロファイルソリューションのユーザーエクスペリエンスを最適化する: ユーザープロファイルの一部をプロファイルコンテナに保存します。

ワークフロー

プロファイルコンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. (オプション) プロファイルコンテナのストレージ容量とパスをカスタマイズする。
2. ニーズに合わせてプロファイルコンテナを有効にします。
    - ユーザープロファイルの一部にプロファイルコンテナを有効にする (ファイルベースのプロファイル最適化ソリューション)
    - ユーザープロファイル全体にプロファイルコンテナを有効にする (コンテナベースのプロファイルソリューション)

    注:

    コンテナベースのプロファイルソリューションが有効になっている場合、以下のユーザープロファイル（存在する場合）は、初回使用時に自動的にコンテナに移行されます。

- ローカルのWindowsユーザープロファイル
- Citrix®ファイルベースプロファイルソリューションのユーザープロファイル

3. プロファイルコンテナーからフォルダーとファイルを除外する（オプション）(#optional-include-and-exclude-folders-and-files)。
4. 展開でマルチセッションシナリオが一般的な場合は、必要に応じてプロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にします。
5. プロファイルデータが拡張するにつれてプロファイルコンテナーが動的にサイズを拡大できるようにするには、プロファイルコンテナーのVHD自動拡張を有効にして構成します。
6. ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナーを有効にしている場合は、必要に応じて以下のいずれかのポリシーを有効にできます。

   - プロファイルの冗長性を提供して高いレベルのプロファイル可用性を保証するには、ユーザーストアのレプリケートを有効にします。
   - ローカルコンピューターにユーザープロファイルをキャッシュするには、プロファイルコンテナーのローカルキャッシュを有効にします。
   - プロファイルコンテナーへのアクセスを一度に1つに制限するには、プロファイルコンテナーへの排他的アクセスを有効にします。

注：

- プロファイルコンテナーで**プロファイルコンテナーへの排他的アクセスを有効にする**設定が有効になっている場合、**プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にする**設定は自動的に無効になります。
- **プロファイルコンテナーのローカルキャッシュを有効にする**ポリシーと**プロファイルコンテナーのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーは互換性がなく、同時に有効にすることはできません。

考慮事項

コンテナーベースのプロファイルソリューションが有効になっている場合、以下の考慮事項に注意してください。

- ファイルベースのプロファイルソリューションは自動的に無効になり、以下のポリシーは適用されなくなります。

- プロファイルストリーミング

  例外: プロファイルストリーミングは、 ポリシーが有効な場合にのみ、プロファイルコンテナに適用されます。詳細については、「プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする」を参照してください。

- ファイルシステム
- アクティブライトバック
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

コンテナベースのプロファイルソリューションに適用されるポリシーを表示するには、「ファイルベースおよびコンテナベースのソリューションのポリシー」を参照してください。

- Outlook の検索インデックスローミング機能との下位互換性を維持するため、Profile Management は、以下のファイルをそれぞれ保存するために使用される2つの VHDX ディスクを保持します。

  - Outlook 検索インデックスデータベース
  - オフライン Outlook データファイル (`.ost`)

(オプション) プロファイルコンテナのストレージ容量とパスをカスタマイズする

デフォルトでは、プロファイルコンテナはユーザーストアに保存され、デフォルトのストレージ容量は50 GBです。

たとえば、ユーザーストアのパスを次のように構成します。`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`。

プロファイルコンテナは、次の場所に保存されます。`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\ProfileContainer\!ctx_osname!`。

プロファイルコンテナの別のネットワーク場所を指定し、そのデフォルトのストレージ容量を変更できます。詳細については、「VHD ファイルのストレージ容量とパスを指定する」を参照してください。

ユーザープロファイルの一部に対してプロファイルコンテナを有効にする

ユーザーストアでのログオン時間を短縮するには、プロファイルコンテナ機能を有効にし、それらの大きなプロファイルフォルダをプロファイルコンテナに追加できます。

注：

プロファイルコンテナに追加するフォルダは、ユーザーストアにも存在します。プロファイルコンテナ機能を有効にすると、Profile Managementはプロファイルコンテナとユーザーストア間でフォルダを同期させます。

プロファイルコンテナ機能を有効にしてから無効にしたとします。一貫性のあるユーザープロファイルを確保するため、Profile Managementはユーザーストアプロファイルをプロファイルコンテナと同期させます。この同期はユーザーログオン時に行われます。除外リスト内のフォルダはユーザーストアにコピーされません。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナ**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式でフォルダを追加します。サイズの大きいキャッシュファイルを含むフォルダを追加することをお勧めします。たとえば、Citrix Filesコンテンツキャッシュフォルダをリストに追加します: `AppData\Local\Citrix\Citrix Files\PartCache`。

コンテナベースのプロファイルソリューションを有効にする

コンテナベースのプロファイルソリューションを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix Components > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**で、**プロファイルコンテナ**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **表示**をクリックし、アスタリスク (`*`) をプロファイルコンテナリストに追加します。
5. **OK**をクリックします。

(オプション) フォルダーとファイルを含める/除外する

プロファイルコンテナーが肥大化するのを防ぐため、フォルダーやファイルをそこから除外できます。必要に応じて、親フォルダーが除外されている場合にフォルダーやファイルを含めることもできます。

プロファイルコンテナーからフォルダーを除外する

> **重要:**
>
> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナーを有効にした場合でも、フォルダーリダイレクト設定は有効になります。リダイレクトするフォルダーを**プロファイルコンテナーから除外するフォルダー**リストに入れないでください。そうしないと、フォルダーリダイレクトが機能しません。

1. **プロファイルコンテナーから除外するフォルダー**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で除外するフォルダーを入力します。

   フォルダー名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。例:

   - `Desktop` は `Desktop` フォルダーを示します。
   - `Downloads*` は `Downloads` フォルダーのすべての直下サブフォルダーを示します。

> **注:**
>
> ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナーを有効にした場合（*コンテナーベースのプロファイルソリューション*）、`appdata\local\temp` フォルダーはプロファイルコンテナーから自動的に除外されます。

> 構成の優先順位:

1. 設定が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

3. ここでも.iniファイルでも設定が構成されていない場合、フォルダは除外されません。

プロファイルコンテナにフォルダを含める

除外されたフォルダのサブフォルダをプロファイルコンテナに含めるには、次の手順に従います。

1. **プロファイルコンテナに含めるフォルダ**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるフォルダを入力します。

次の点に注意してください。

- このリストのフォルダは、除外されたフォルダのサブフォルダである必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。
- フォルダ名でのワイルドカードはサポートされていますが、再帰的には適用されません。
- ポリシーを有効にして空のリストを構成することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでも設定が構成されていない場合、除外リストにないフォルダはプロファイルコンテナに含まれます。

プロファイルコンテナにファイルを含める

プロファイルコンテナからフォルダを除外した後、そのフォルダ内のファイルをプロファイルコンテナに含めることができます。詳細な手順は次のとおりです。

1. **プロファイルコンテナに含めるファイル**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **表示**をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で含めるファイルを入力します。

次の点に注意してください。

- このリストのファイルは、除外されたフォルダ内にある必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダ名でのワイルドカードがサポートされていますが、再帰的には適用されません。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は `Desktop\Desktop.ini` ファイルを示します。
- `AppData*.tmp` は、`AppData` フォルダとそのサブフォルダ内の `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。
- `AppData*.tmp|` は、`AppData` フォルダ内のみの `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを示します。
- `Downloads*\a.txt` は、`Downloads` フォルダの直下のサブフォルダ内の `a.txt` を示します。

ポリシーを有効にして空のリストを設定することは、設定を無効にすることと同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでも設定が構成されていない場合、除外リストにないファイルはプロファイルコンテナに含まれます。

プロファイルコンテナからファイルを除外する

Profile Management 2112以降、プロファイルコンテナからファイルを除外できます。詳細な手順は次のとおりです。

1. 「**プロファイルコンテナから除外するファイル**」ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**有効**」を選択します。
3. 「**表示**」をクリックし、ユーザープロファイルへの相対パスの形式で除外するファイルを入力します。

次の点に注意してください:

- ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。ポリシーを現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- Profile Management 2112以降、フォルダー名内のワイルドカードがサポートされますが、再帰的には適用されません。

構成の優先順位:

設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。

ここで設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここで、または.iniファイルのいずれでも設定が構成されていない場合、ファイルは除外されません。

(オプション) VHD自動拡張を有効にして構成する

ユーザープロファイルは通常、時間の経過とともに増大します。ストレージ管理を簡素化するには、プロファイルコンテナのVHD自動拡張機能を有効にします。この機能を有効にすると、コンテナが90%の使用率に達したときに、最大容量80 GBで自動的に10 GB拡張されます。必要に応じて、これらのデフォルト設定を特定のニーズに合わせてカスタマイズできます。

> **ヒント:**
>
> VHD自動拡張設定をより詳細に制御するには、ユーザーレベルのポリシー設定を使用できます。組織は、標準の自動拡張設定のセットを持つことができますが、特定のユーザーに対して、より大きな最大容量などの固有の設定を提供することもできます。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. VHD自動拡張を有効にするには、次の手順を使用します:
   a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > プロファイルコンテナー設定**」に移動します。
   b. 「**プロファイルコンテナーの VHD 自動拡張を有効にする**」ポリシーをダブルクリックします。
   c. 「**有効**」を選択します。
   d. 「**OK**」をクリックします。
3. プロファイルコンテナーが自動拡張をトリガーするデフォルトのストレージ使用率を変更するには、次の手順に従います。
   a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」に移動します。
   b. 「**プロファイルコンテナーの自動拡張しきい値**」ポリシーをダブルクリックします。
   c. 「**有効**」を選択します。

d. 「**自動拡張しきい値 (%)**」フィールドで、必要に応じてパーセンテージを入力します。

e. 「**OK**」をクリックします。

4. プロファイルコンテナーが自動的に拡張するストレージ容量の量を変更するには、次の手順に従います。

a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」に移動します。

b. 「**プロファイルコンテナーの自動拡張増分**」ポリシーをダブルクリックします。

c. 「**有効**」を選択します。

d. 「**自動拡張増分 (GB)**」フィールドで、必要に応じて数値を入力します。デフォルトは 10 (GB) です。

e. 「**OK**」をクリックします。

5. プロファイルコンテナが自動的に拡張できる最大ストレージ容量を変更するには、次の手順に従います。

a. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > 詳細設定** に移動します。

b. 「**Profile container auto-expansion limit**」ポリシーをダブルクリックします。

c. 「**Enabled**」を選択します。

d. 「**Auto-expansion limit (in GB)**」フィールドで、必要に応じて数値を入力します。デフォルトは80 (GB) です。

e. 「**OK**」をクリックします。

(オプション) プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

デフォルトでは、Profile Managementはプロファイルコンテナへの同時アクセスをサポートしています。ただし、すべての同時セッションの中で、1つのセッションのみが読み取り/書き込み権限を持ち、プロファイルの変更をコンテナにマージできます。

Profile Managementが同時アクセスを処理する方法は次のとおりです。

- セッションログオン時:

  読み取り/書き込みセッションが存在するかどうかを確認します。存在する場合、現在のセッションは読み取り専用になります。それ以外の場合は、読み取り/書き込みセッションになります。

- セッションログオフ時:

  a. プロファイルコンテナをマウント解除します。

  b. 現在のセッションが読み取り専用の場合、プロファイルの変更を破棄します。

  c. 読み書きセッションのプロファイル変更を、他の同時セッションがない場合にプロファイルコンテナにマージします。

マルチセッションライトバックを有効にするには、プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを使用します。

(オプション) プロファイルコンテナへの排他的アクセスを有効にする

デフォルトでは、プロファイルコンテナは同時アクセスを許可します。必要に応じて、**Citrix Components > Profile ManagementProfile container settings > Enable exclusive access to VHD containers** を使用して、プロファイルコンテナへの同時アクセスを無効にできます。その結果、プロファイルコンテナは一度に1つのアクセスのみを許可します。

> **注:**
>
> - この設定は、ユーザープロファイル全体に対して有効になっているプロファイルコンテナにのみ適用されます。
> - プロファイルコンテナでこの設定が有効になっている場合、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**設定は自動的に無効になります。

詳細については、「VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする」を参照してください。

(オプション) プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする

プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする機能は、プロファイルコンテナがユーザープロファイル全体に対して有効になっている場合にのみ有効になります。**プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする**ポリシーを有効にすると、ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナ内のユーザープロファイルがユーザーのローカルユーザープロファイルにキャッシュされます。

> **重要:**

OneDriveなど、コンテナベースのプロファイルソリューションでのみ動作するアプリケーションは、このポリシーが有効になっていると正しく機能しない場合があります。OneDriveが正しく機能するようにするには、このポリシーを無効にするか、OneDriveコンテナポリシーを有効にしてください。

デフォルトでは、ユーザーログオン時にユーザープロファイル全体がキャッシュされます。ユーザーログオン時間を短縮するには、**プロファイルストリーミング**ポリシーを有効にできます。その結果、ユーザープロファイル内のプロファイルフォルダは、ログオン後にオンデマンドでキャッシュされます。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

ヒント:

FSLogix Profile Containerの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/fslogix/configure-profile-container-tutorial>`を参照してください。Citrix Profile Managementプロファイルコンテナの詳細については、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナを参照してください。

概要

VHD-based profile solutions such as the FSLogix Profile Container and the Citrix Profile Management profile container do not support saving changes in multi-session scenarios. They let only one session (in read/write mode) write changes. Changes in other sessions (in read-only mode) are discarded.

しかし、マルチセッションシナリオはCitrix仮想アプリのユースケースで一般的です。これらのユースケースを容易にするために、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを提供します。このポリシーにより、FSLogix Profile ContainerとCitrix Profile Managementプロファイルコンテナの両方でマルチセッションライトバックを有効にできます。同じユーザーが異なるマシンで複数のセッションを起動した場合、Profile Managementは各セッションで行われた変更をユーザーのプロファイルコンテナに同期して保存します。

ユーザーログオン中、ユーザーのプロファイルコンテナディスクがマウントされ、I/O要求はマウントされたディスクにリダイレクトされます。その後、Profile Managementはユーザーストアからローカルプロファイルに変更を同期します。

ユーザーログオフプロセス中、Profile Managementはセッションで使用されるFSLogix Profile Containerモードによって動作が異なります。

- 読み取り専用モードが使用されている場合、Profile Managementは変更をユーザーストアに書き戻します。
- 読み取り/書き込みモードが使用されている場合、Profile Managementはユーザーストアからの変更をローカルプロファイルに適用します。その後、変更はユーザーのプロファイルコンテナにマージされます。

> **注:**
>
> FSLogix Profile Containerが使用されている場合、マルチセッションライトバック機能はプロファイルストリーミングと互換性がありません。

> 以下のイベントが変更と見なされます。

- 作成
- 変更
- 削除
- 名前変更

ライトバック戦略

Profile Management は、「最後の書き込みが優先される」戦略を使用して変更を適用します。

- ファイル/フォルダーの作成と変更の場合、ファイル/フォルダーの最終書き込み時刻を比較して変更をライトバックします。
- ファイル/フォルダーの削除と名前変更の場合、変更に関連付けられたタイムスタンプを比較して変更をライトバックします。Profile Management は、変更が発生したときにタイムスタンプをログに記録します。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にするポリシーを**有効**に設定することで、マルチセッションライトバック機能を使用できます。このポリシーは、デフォルトで**無効**に設定されています。

- FSLogix Profile Container でこの機能を使用するには、次の手順を完了します。

    - FSLogix プロファイル コンテナ
        - FSLogix Profile Container がインストールされ、有効になっていることを確認します。
        - プロファイルタイプが**読み取り/書き込みプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする**に設定されていることを確認します。
    - Citrix プロファイル管理
        - **Profile Management を有効にする**ポリシーを有効に設定します。
        - **ユーザー ストアへのパス**ポリシーを有効なパスで設定します。
        - (オプション) **処理されたグループ**および**除外されたグループ**ポリシーを設定します。処理するユーザーグループが、FSLogixプロファイルコンテナ内のグループと一致していることを確認します。
        - **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。このポリシーは、GPOまたはCitrix Studioで設定できます。詳細については、この記事の後半の手順を参照してください。
- Citrix Profile Managementプロファイルコンテナのマルチセッションライトバック機能を使用するには、次の手順を実行します。
    - **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。
    - Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ機能を有効にする。

> **注：**

> **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**は、**プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする**と互換性がなく、同時に有効にすることはできません。

> **プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成** > **管理用テンプレート** > **Citrixコンポーネント** > **Profile Management** > **詳細設定**で、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。

3. **有効**を選択し、**OK**をクリックします。

変更を有効にするには、Profile Managementがインストールされているマシンで、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

アプリケーションへのアクセスを制御する

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、ルールを使用してアプリケーションへのアクセスを制御できます。この機能により、アプリケーションとイメージの管理を効率化できます。たとえば、異なる部門に同一のマシンを提供しながら、それぞれの固有のアプリケーション要件を満たすことができ、イメージの数を削減できます。

この記事では、アプリケーションアクセス制御を有効にし、制御ルールを構成するプロセスについて説明します。また、この機能を使用して仮想環境でのイメージ管理を簡素化する例も示します。

> **注:**
>
> この機能は、Active Directory (AD) 環境と非ドメイン参加 (NDJ) 環境の両方に適用されます。

概要

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、非表示ルールを構成することで、ユーザー、マシン、プロセスからアプリケーションを非表示にできます。

非表示ルールは次の2つの部分で構成されます。

- **非表示にするオブジェクト。** アプリケーションに対して非表示にするファイル、フォルダー、およびレジストリエントリ。

  たとえば、アプリケーションを非表示にするには、ファイル、フォルダー、レジストリエントリなど、そのアプリケーションに関連付けられているすべてのオブジェクトを指定する必要があります。
- **割り当て。** アプリケーションを非表示にする対象のユーザー、マシン、およびプロセス。

割り当ての種類

非表示ルールにおける割り当ては、プロセス、ユーザー、マシンの3つのカテゴリに分類されます。具体的な割り当ての種類は次のとおりです。

カテゴリ	種類
プロセス	該当なし
ユーザー	• ADおよびAzure Active Directory (AAD) ユーザー • ADおよびAADユーザーグループ
マシン	• AD、AAD、およびNDJマシン • ADマシン群 (組織単位 (OU) でグループ化) • NDJマシン群 (マシンカタログでグループ化)

注:

- アプリケーションアクセス制御のコンテキストでは、OUはマシンのみのコンテナとして使用され、ユーザー用ではありません。その結果、OU割り当ては、OU内のマシンからのみアプリを非表示にし、OU内のユーザーからは非表示にしません。
- NDJマシンは、Citrix®が作成および電源管理するマシンに限定されます。

非表示ルールに複数の割り当てが構成されている場合、次の考慮事項に注意してください。

- これらの割り当てが同じカテゴリ（たとえば、ユーザーAとユーザー グループB）である場合、アプリケーションはこれらの割り当てで指定されたすべてのオブジェクト（ユーザーAとユーザーグループBのすべてのユーザー）から非表示になります。

- これらの割り当てが異なるカテゴリ（たとえば、ユーザーAとマシンX）である場合、アプリケーションはこれらのすべての割り当てで指定された条件が満たされたとき（ユーザーAがマシンXにサインインしたとき）に非表示になります。
- これらの割り当てが *プロセス* カテゴリである場合、アプリケーションはこれらの割り当てで指定されたすべてのプロセスから非表示になります。

> **注:**
>
> ルールに割り当てが構成されていない場合、ルールで指定されたアプリケーションは非表示になります。

ワークフロー

アプリケーションアクセス制御機能を使用すると、Profile Managementは、提供されたルールに基づいて、ユーザー、マシン、およびプロセスからアプリケーションを非表示にできます。アプリケーションアクセス制御を実装するワークフローの概要は次のとおりです。

1. 非表示ルールを作成および生成します。使用できるツールは2つあります。
    - GUIベースのツール – WEM ツールハブ > アプリアクセス制御用ルールジェネレーター
    - PowerShellツール – Profile Managementインストールパッケージに含まれています。詳細については、「Rule Generatorを使用してルールを作成、管理、展開する」を参照してください。
2. GPOを使用して、環境内のマシンに非表示ルールを適用します。詳細については、「GPOを使用してアプリケーションアクセス制御を有効にする」を参照してください。

Rule Generatorを使用してルールを作成、管理、展開する

このセクションでは、PowerShellベースのRule Generatorを使用してルールを作成、管理、展開する方法について説明します。

開始する前に、ツールを実行するマシンが次の要件を満たしていることを確認してください。

- Windows 10または11、あるいはWindows Server 2016、2019、または2022で動作します。
- (AD環境のみ) ユーザーおよびマシンと同じドメインにあります。

一般的な手順は次のとおりです。

1. **Windows PowerShell** を管理者として実行します。

2. Profile Managementインストールパッケージ内の **\tool** フォルダーにアクセスし、**CPM_App_Access_Control_Config.ps1** を実行します。
3. 画面の指示に従って、非表示ルールを作成、管理、生成します。

   a. マシンにインストールされている各アプリケーションとその状態を表示します。

      - **未構成**。アプリケーションに対してルールは構成されていません。
      - **構成済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されていますが、それらのいずれもマシンには適用されていません。
      - **構成済みで適用済み**。アプリケーションに対して1つ以上のルールが構成されており、少なくとも1つのルールがマシンに適用されています。

   アプリケーションリスト(/en-us/profile-management/2308/media/app-access-control-tool-app-list.png)

   b. アプリケーションリストから、非表示にしたいアプリケーションをインデックスを入力して選択します。アプリケーションに関連付けられているすべてのファイル、フォルダー、およびレジストリエントリが表示されます。

   追加の選択(/en-us/profile-management/2308/media/app-access-control-tool-add-extra.png)

   c. 選択したアプリケーションの追加のファイル、フォルダー、またはレジストリエントリを非表示にするには、対応するアクションタイプを選択し、その名前とパスを入力してオブジェクトを追加します。さらに追加するには、この手順を繰り返します。

   考慮事項:

      - パス内のシステム環境変数（%windir%など）はサポートされていますが、ユーザー環境変数（%appdata%など）はサポートされていません。
      - ファイルとフォルダーでは、ワイルドカード `*` と `?` がサポートされています。文字列に複数のアスタリスク（'*'）がある場合、2つのアスタリスク間の文字は無視されます。たとえば、文字列 `c:\users\Finance*Manangement*` では、文字 `*Management*` は単一のアスタリスク（*）として扱われます。

> **注:**
>
> 特定のファイル、フォルダー、およびレジストリ エントリに関連付けることで、アプリケーションを手動で定義することもできます。

d. ルールの割り当てを構成します。詳細には、割り当てタイプを指定し、アプリケーションを非表示にする特定のオブジェクトを入力します。詳細については、次の表を参照してください。

割り当てを選択 (/en-us/profile-management/2308/media/app-access-control-tool-add-assignment.png)

> **注:**
>
> ルールに割り当てを構成しない場合、ルールで指定されたアプリは非表示になります。

割り当てタイプ	説明
ADユーザー、ユーザーグループ、またはOU	垂直バー（|）で区切って、ADドメイン名を入力します。
ADマシン	垂直バー（|）で区切って、DNSホスト名を入力します。
NDJマシンカタログ	カタログ名を縦棒 (|) で区切って入力します。例: `Machine_catalog_name1|Machine_catalog_name2`
NDJマシン	WEM WebコンソールでAAD/NDJオブジェクトセレクターを使用してマシン名を取得し、それらの名前を縦棒 (|) で区切って入力します。例: `Machine_name1|Machine_name2`。すべてのドメインに参加していないマシンを追加するには、「**NDJ***」と入力します。
	NDJマシン名では、ワイルドカード `*` と `?` がサポートされています。
	注: 文字列内に複数のアスタリスク (`*`) がある場合、2つのアスタリスク間の文字は無視されます。たとえば、文字列 `ResearchDep*Virtual*TeamMachine*`

割り当てタイプ	説明
	では、文字 `*Virtual*` は単一のアスタリスク (`*`) として扱われます。
Azure ADユーザー	WEM WebコンソールでAAD/NDJオブジェクトセレクターを使用してユーザーのSIDと名前を収集し、`sid1\name1|sid2\name2` の形式で入力します。例: `/azuread/989c2938-6527-4133-bab1-f3860dd15098\Tester1|/azuread/82bdde32-d5d9-4d64-b0ff-9876d4488d05\Tester2`
Azure ADグループ	WEM WebコンソールでAAD/NDJオブジェクトセレクターを使用してグループのSIDと名前を収集し、`sid1\name1|sid2\name2` の形式で入力します。例: `/azuread/989c2938-6527-4133-bab1-f3860dd15098\TestGroup1|/azuread/82bdde32-d5d9-4d64-b0ff-9876d4488d05\TestGroup2`

4. 他のアプリケーションの非表示ルールを作成するには、手順3を繰り返します。
5. 画面の指示に従って、構成したルールの生データを生成し、後で使用するために.txtファイルに保存します。
6. ルールが期待どおりに機能するかどうかをテストするには、画面の指示に従って、このマシンまたはマシンのグループにルールを展開します。

> **注:**
>
> このツールを使用して本番環境にルールを展開することはお勧めしません。

GPO を使用してアプリアクセス制御を有効にする

非表示ルールを作成して生成したら、GPO を使用して環境内のマシンに適用できます。

GPO を使用して制御ルールをマシンに適用するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > アプリアクセス制御**にアクセスします。
3. **アプリアクセス制御**をダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択します。
5. 生成されたルールを保存した .txt ファイルを開き、内容をコピーして、**アプリアクセス制御ルール**フィールドに貼り付けます。
6. **OK**をクリックします。

この機能の構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定が GPO、Studio、または WEM を使用していない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

例

このセクションでは、イメージのアプリアクセス制御を実装する手順を例で説明します。

要件

この例における要件は以下のとおりです。

- 営業、人事、エンジニアリング部門向けの仮想マシンを作成するために、単一のイメージを使用します。
- 以下のアプリケーションへのアクセスを制御します。
  - Microsoft Excel: 人事部門のユーザーには非表示にします。
  - Visual Studio Code: 営業部門または人事部門のユーザーには非表示にします。

ソリューション

インストールされているアプリケーションへのアクセスを制御するために、Profile Managementをインストールします。

テンプレートマシンのインストール

イメージをキャプチャするためのテンプレートマシンをインストールします。手順は以下のとおりです。

1. 新しいマシンを、ユーザーおよびマシンと同じADドメインに参加させます。
2. マシンに以下のソフトウェアをインストールします。
    - 必要に応じて、Windows 10または11、あるいはWindows Server 2016、2019、または2022
    - Profile Managementバージョン2303以降
    - 必要なすべてのアプリケーション

非表示ルールを作成および生成する

1. テンプレートマシンで、ルールジェネレーターツールを使用して非表示ルールを作成および生成します。
    - ルール1：人事部のユーザーからMicrosoft Excelを非表示にする（アプリケーション：Microsoft Excel; 割り当て：HRユーザーグループ）
    - ルール2：営業部または人事部のユーザーからVisual Studio Codeを非表示にする（アプリケーション：Visual Studio Code; 割り当て：営業ユーザーグループおよびHRユーザーグループ）
2. 2つのルールの生データを生成し、.txtファイルに保存します。

ツールの使用方法の詳細については、「ルールジェネレーターを使用してルールを作成、生成、および展開する」を参照してください。

これで、テンプレートマシンからイメージをキャプチャできます。

GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする

仮想マシンが作成されたら、GPOを使用してアプリのアクセス制御を一元的に有効にし、生成されたルールをマシンに適用します。詳細については、「GPOを使用してアプリのアクセス制御を有効にする」を参照してください。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にして構成する

既定では、ほとんどのProfile Managementポリシーはマシンレベルで機能します。これらのポリシー設定をコンテナ（サイト、ドメイン、またはOU）に適用すると、誰がログオンしても、そのコンテナ内のマシンに適用されます。

「*ユーザーレベルのポリシー設定*」機能が有効になっている場合、これらのマシンレベルのポリシーはユーザーレベルで機能します。つまり、ユーザーまたはグループ固有の設定を構成できま

す。これらの設定をコンテナに適用すると、指定されたユーザーまたは指定されたグループのユーザーがそのコンテナ内のマシンにログオンした場合にのみ適用されます。

設定の競合が発生した場合、Profile Managementは次の優先順位で処理します。

1. ユーザー固有の設定
2. ユーザーグループ固有の設定
3. マシンレベルの設定

構成手順

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする
2. ユーザーまたはグループのポリシー設定を構成する
3. (オプション) ユーザーグループの優先順位を指定する。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする

To apply user-level Profile Management settings, you must first enable the *user-level policy settings* feature. You can accomplish this goal using various tools such as Group Policy Object (GPO), Workspace Environment Management™ (WEM), or Web Studio.

GPOを使用してこの機能を有効にするには、次の手順に従います。

1. GPOを作成し、サイト、ドメイン、またはOUなどのターゲットマシンを保持するコンテナにリンクします。
2. GPO のグループポリシー管理エディターを開きます。
3. **ポリシー \> 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) \> Citrix コンポーネント \> Profile Management \> 詳細設定** にアクセスします。
4. **ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする** ポリシーをダブルクリックします。
5. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効** を選択し、**OK** をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、無効になります。

ユーザーとグループのポリシー設定を構成する

このセクションでは、ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する方法について説明します。

たとえば、組織には経理、営業、マーケティングなどのグループがあります。経理グループは独自のユーザーストアを使用し、他のグループはユーザーストアを共有します。この要件を満たすには、経理グループにユーザーレベルの **ユーザーストアへのパス** ポリシーを構成し、組織にマシンレベルの **ユーザーストアへのパス** 設定を構成します。

ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成するには、次の手順に従います。

1. ユーザーとグループのセキュリティ識別子 (SID) を取得する
2. ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する

ユーザーとグループのセキュリティ識別子 (SID) を取得する

ユーザーまたはグループのユーザー固有の Profile Management 設定を構成する前に、まずドメイン名に基づいてその SID を取得します。詳細な手順は次のとおりです。

1. ドメインコントローラーにログオンします。
2. 「**Windows PowerShell**」を管理者として実行します。
3. PowerShellコマンドラインから、必要に応じて次のいずれかのコマンドを実行します。
   - ユーザーのSIDを取得するには、`Get-ADUser -Identity <ADUser>`と入力します。例: `Get-ADUser -Identity user5`
   - グループのSIDを取得するには、`Get-ADGroup -Identity <ADGroup>`と入力します。例: `Get-ADGroup -Identity HR_Group`
4. 返された結果からSIDをコピーします（たとえば、次の結果の `S-1-5-21-2069497100-3951106413-1778302672-1117`）。

```
PS C:\Users\Administrator> get-aduser -identity user5


DistinguishedName : CN=user5,CN=Users,DC=bvt,DC=local
Enabled           : True
GivenName         : user5
Name              : user5
ObjectClass       : user
ObjectGUID        : 9cc82246-4939-4068-aeb3-4a6025206c1f
SamAccountName    : user5
SID               : S-1-5-21-2069497100-3951106413-1778302672-1117
Surname           :
UserPrincipalName : u
```

ユーザーまたはグループ固有のポリシー設定を構成する

ユーザーレベルのポリシー設定は、以下を使用して構成できます。

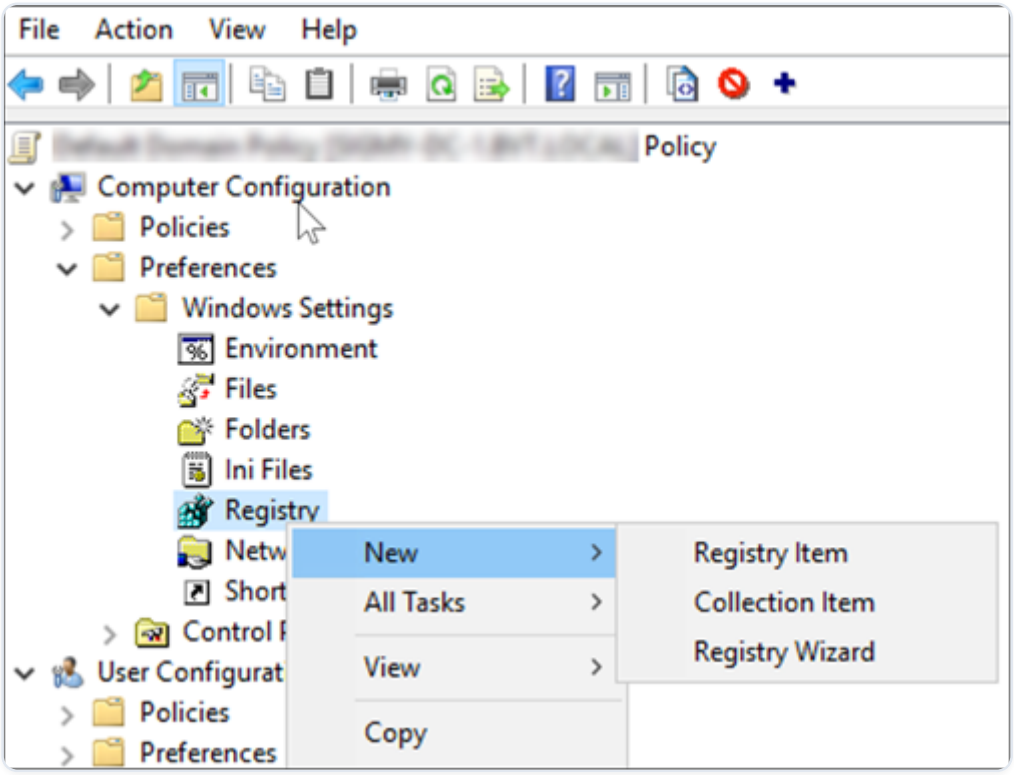
- グループポリシー設定 (GPP)
- WEM Web コンソール

GPPを使用して設定を構成する

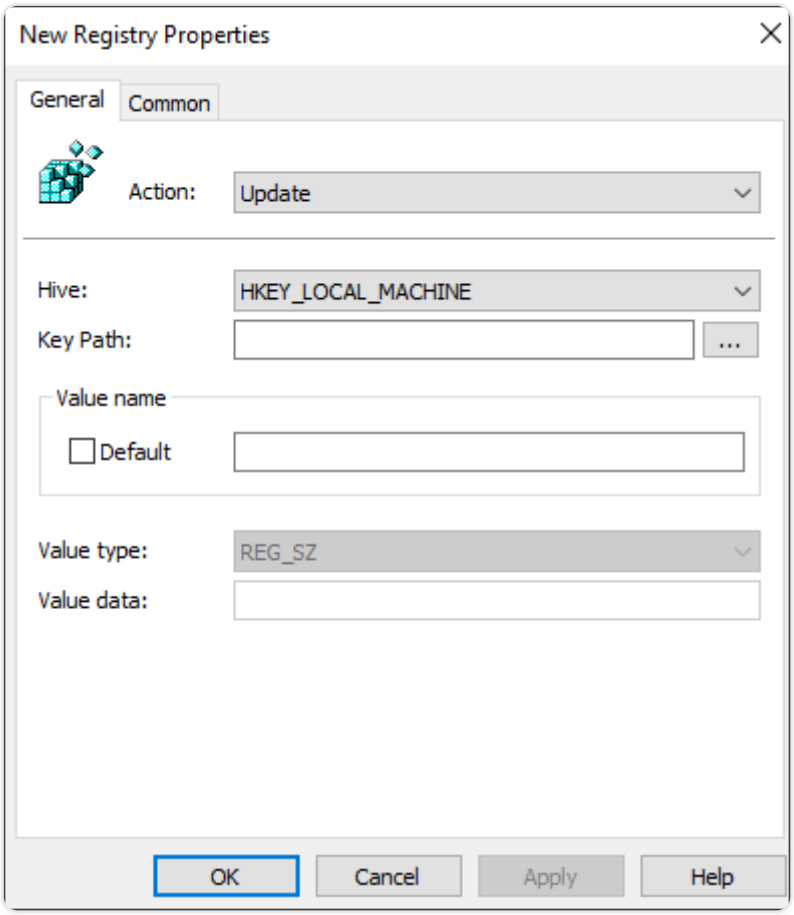
GPPを使用してユーザーレベルのポリシー設定を構成できます。グループポリシーの一部として、GPP設定はGPOを介してドメイン参加済みコンピューターに自動的に配布されます。

ユーザーまたはグループのポリシー設定を構成するには、次の手順に従います。

1. ターゲットGPOのグループポリシー管理エディターを開きます。



2. **コンピューターの構成 \> 基本設定 \> Windows の設定 \> レジストリ** に移動し、**新規 \> レジストリ項目** を右クリックします。**新規レジストリのプロパティ** ウィンドウが表示されます。

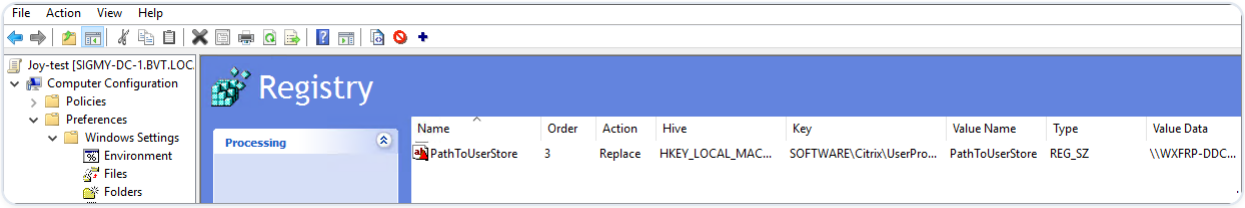


3. **全般** タブで、次の表に示すように、ユーザーまたはグループ固有のポリシーを構成します。この表では、ユーザーの *Path to user store* ポリシー (SID: `S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108`) を設定する構成例も確認できます。

フィールド	説明	例
アクション	既定のままにします。	更新
ハイブ	既定のままにします。	HKEY_LOCAL_MACHINE
キーパス	ユーザーまたはグループ固有のポリシーのレジストリ キーパスを入力します。まず、GPP プロパティ設定 テーブルでポリシー名を検索してキーパスを取得します。次に、キーパス内の `<SID>` を実際の SID に置き換えます。	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108`
値の名前	ポリシーのレジストリ値の名前を入力します。ポリ	ユーザー ストアへのパス

フィールド	説明	例
	シーの値の名前を見つけるには、GPP プロパティ設定テーブルでポリシー名を検索します。	
値のタイプ	ポリシーのレジストリ値のタイプ (REG_SZ または REG_DWORD) を選択します。ポリシーの値のタイプを見つけるには、GPP プロパティ設定 テーブルでポリシー名を検索します。	REG_SZ
値のデータ	ポリシーのレジストリ値のデータ (設定値) を入力します。値のデータはポリシーによって異なります。詳細については、GPP プロパティ設定 テーブルを参照してください。	`\\WXFRP-DDC-1\UPM1\#sAMAccountName#\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`!

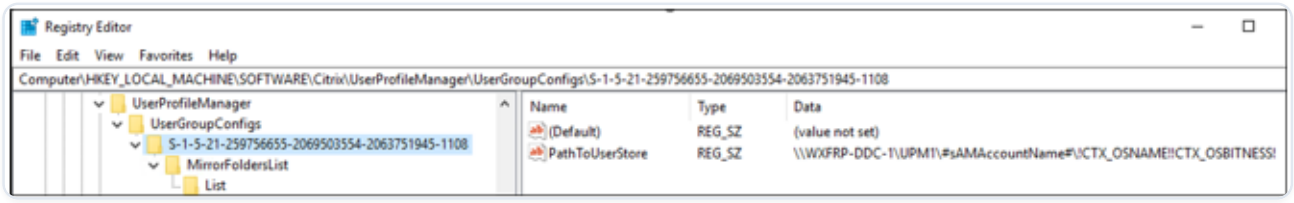
4. 「**Common**」タブをクリックし、「**適用されなくなったときにこの項目を削除する**」を選択します。メッセージボックスが表示されます。
5. 承認を確認するには、**OK**をクリックします。**General**タブの**Action**オプションが**Replace**に変更されます。
6. **OK**または**Apply**をクリックします。変更はドメインコントローラーに保存されます。構成結果（たとえば、*ユーザー ストアへのパス* ポリシー）が表示されます。



7. このGPOに対してユーザーまたはグループ固有のポリシー設定をさらに構成するには、それぞれの手順2〜6を繰り返します。Examplesセクションの構成例を参照してください。

これらのポリシー設定をコンピューターに手動で同期するには、コンピューターで`groupupdate/force`コマンドを実行します。ユーザーレベルのポリシー設定を有効にするには、コンピューターからログオフして再度ログオンします。

次のスクリーンショットに示すように、ユーザーレベルのポリシー設定は次のレジストリキーに表示されます: `HKLM\SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`。



WEM Web Consoleを使用して設定を構成する

WEM Web Consoleを使用してユーザーレベルのポリシー設定を構成できます。詳細については、Workspace Environment Management ServiceドキュメントのGPOの作成を参照してください。

例

このセクションでは、ユーザーレベルのポリシー設定を構成するためのいくつかの例を示します。

Profile Management を有効にする

GPP設定を使用して、ユーザーまたはグループの**Enable Profile Management**ポリシーを構成します。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108
値の名前	ServiceActive
値のタイプ	REG_DWORD
値のデータ	1

レジストリ内の場所:

プロファイル管理を有効にするためのレジストリの結果(/en-us/profile-management/2308/media/registry_key_service_activate.png)

ミラーリングするフォルダー

> **注:**

ファイルとフォルダーのリストを含むユーザー固有のポリシーを構成するには、複数のGPPレジストリアイテムを構成する必要があります。

ユーザーまたはグループの**ミラーするフォルダー**ポリシーを構成するには、次の手順に従います。

1. これらのGPP設定を使用してポリシーを有効にします。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108\MirrorFoldersList
値の名前	有効
値のタイプ	REG_DWORD
値のデータ	00000001

   レジストリ内の場所:

   ミラーするフォルダー1のレジストリの結果(/en-us/profile-management/2308/media/registry_key_folder_mirror_enable.png)

2. これらのGPP設定を使用して、ミラーするフォルダー（例：AppData\Local\Packages）を追加します。

フィールド	値
キーパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\S-1-5-21-259756655-2069503554-2063751945-1108\MirrorFoldersList\List
値の名前	AppData\Local\Packages
値のタイプ	REG_SZ
値のデータ	AppData\Local\Packages

   注:

> 「**値の名前**」フィールドと「**値のデータ**」フィールドの両方に、ミラーリングするフォルダーを入力します。

> レジストリ内の場所:

ミラーリングするフォルダーのレジストリ内の結果 2(/en-us/profile-management/2308/media/registry_key_folder_mirror_list.png)

3. このポリシーにフォルダーを追加するには、手順2を繰り返します。

(オプション) ユーザーグループの優先順位を指定する

ユーザーが競合するポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合は、それらのグループの優先順位を指定します。

設定の競合が発生した場合、最も優先順位の高いグループのポリシー設定が優先されます。優先順位が指定されていない場合、アルファベット順で最も早いSIDを持つグループが優先されます。

GPOを使用して優先順位を設定するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー \> 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) \> Citrix コンポーネント \> Profile Management \> 詳細設定**にアクセスします。
3. 「**ユーザーグループの優先順位を設定**」ポリシーをダブルクリックします。ポリシーウィンドウが表示されます。
4. 「**Enabled**」を選択します。
5. 「**ユーザーグループの優先順位**」フィールドに、グループのセキュリティ識別子（SID）またはドメイン名を優先順位の降順で入力し、セミコロン（`;`）で区切ります。

   例:

   `ctxxa.local\groupb;S-1-5-21-674278408-26188528-2146851469-1174;ctxxa.local\groupc;`
6. **OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、優先順位は指定されません。

GPPプロパティ設定

この表は、ユーザーレベルのプロファイル管理ポリシーのGPPプロパティ設定を一覧表示します。

注:

この表には6つの列が含まれています。一部はビューポートを超えて表示される場合があります。非表示の列を表示するには、下にスクロールして水平スクロールバーを使用してください。

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
Profile Management を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ServiceActive	0:無効; 1:有効;	
処理されるグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProcessedGroups`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\Proc`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	essedGroups\List				
除外されるグループ	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExcludedGroups	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExcludedGroups\List	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ローカル管理者によるログオンの処理	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>	REG_DWORD	ProcessAdmins	0:無効; 1:有効;	
ユーザーストアへのパス	SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>	REG_SZ	PathToUserStore	絶対パス、またはホームディレクトリからの相対パス。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ユーザーストアの移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	MigrateUserStore	以前使用していたユーザー ストア パス。	
アクティブライトバック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBack	0:無効; 1:有効;	
アクティブライトバックレジストリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBackReg	0:無効; 1:有効;	
セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSMidSessionWriteBackSessionLock	0:無効; 1:有効;	
オフラインプロファイルのサポート	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OfflineSupport	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DeleteCachedProfilesOnLogoff	0:無効; 1:有効;	
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	ProfileDeleteDelay	遅延 (秒単位)。	
既存プロファイルの移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	MigrateWindowsProfilesToUserStoreEnabled	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	MigrateWindowsProfilesToUserStore	1:ローカルとローミング; 2:ローカル; 3:ローミング; 4:なし;	
既存のアプリケーションプロファイルの自動移行	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ApplicationProfilesAutoMigrationEnabled	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ローカルプロファイルの競合処理	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LocalProfileConflictHandling	1:ローカルプロファイルを使用; 2:ローカルプロファイルを削除; 3:ローカルプロファイルの名前を変更;	
テンプレートプロファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	TemplateProfilePath	テンプレートプロファイルへのパス。	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileOverridesLocalProfile	0:無効; 1:有効;	テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileOverridesRoamingProfile	0:無効; 1:有効;	テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	TemplateProfileIsMandatory	0:無効; 1:有効;	すべてのログオンでCitrix必須プロファイルとして使用されるテンプレートプロファイル
ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LoadRetries	再試行回数。	
自動構成を無効にする	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	DisableDynamicConfig	0:無効; 1:有効;	
問題が発生した場合にユーザーをログオフする	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	LogoffRatherThanTempProfile	0:無効; 1:有効;	
カスタマーエクスペリエンス向上プログラム	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CEIP有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
Outlook の検索インデックスローミングを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookSearchRoamingEnabled	0:無効; 1:有効;	
Outlook 検索インデックスデータベース - バックアップと復元	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookEdbBackupEnabled	0:無効; 1:有効;	
Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	OutlookOstVhdxMaxNum	Outlook OST ファイルを保存するための VHDX ディスクの最大数。	
プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	FSLogixProfileContainerSupport	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
ユーザーストアをレプリケートする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MultipleRemoteStoreReplication`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MultipleRemoteStoreReplication\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CredBasedAccessEnabled	0:無効; 1:有効;	
VHDX ファイルのストレージ パスをカスタマイズする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	PathToVhdStore	VHDXファイルを保存するパス。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableVolumeReattach	0:無効; 1:有効;	
ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	SyncGpoStateEnabled	0:無効; 1:有効;	
OneDrive コンテナを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\OneDriveContainer`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\OneDriveContainer\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
VHDディスクの圧縮をトリガーす	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_DWORD	CompactVHDFreePortion	空き容量比率 (%)。	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
る空き領域の比率	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>`				
VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CompactVHDIterations	ログオフ回数。	
VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CompactVHDnDefrag	0:無効; 1:有効;	
プロファイルコンテナ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainer`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\Prof`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`ileContainer\List`				
プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	ProfileContainerLocalCache	0:無効; 1:有効;	
プロファイルコンテナから除外するフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルコンテナに含めるフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナから除外するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListFile`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfil`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`eManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerExclusionListFile\List`				
プロファイルコンテナに含めるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListFile`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ProfileContainerInclusionListFile\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
VHDディスクの圧縮を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroup`	REG_DWORD	EnableVHDCompact	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`Configs\<SID>`				
除外リスト	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExclusionListRegistry`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\ExclusionListRegistry\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
包含リスト	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\InclusionListRegistry`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\InclusionListRegistry\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
NTUSER.DATのバックアップ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LastKnownGoodRegistry	0:無効; 1:有効;	
除外リスト - ファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListFiles`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusion`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`ListFiles\List`				
除外リスト - ディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListDir`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncExclusionListDir\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ログオン除外チェック	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	LogonExclusionCheck	0:除外されたファイルまたはフォルダーを同期する; 1:除外されたファイルまたはフォルダーを無視する; 2:除外されたファイルまたはフォルダーを削除する;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
大容量ファイルの処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\LargeFileHandlingList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\LargeFileHandlingList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
同期するディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncDirList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\Sync`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`DirList\List`				
同期するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncFileList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SyncFileList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
ミラーリングするフォルダー	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\MirrorFoldersList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\Mirr`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`orFolder sList\Lis t`				
フォルダーのミラーリングを高速化する	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>`	REG_DWO RD	Accelerate FolderMirro ring	0:無効; 1:有効;	
プロファイルストリーミング	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>`	REG_DWO RD	PS有効	0:無効; 1:有効;	
ペンディングエリアのプロファイルストリーミングを有効にする	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>`	REG_DWO RD	PSForPend ingAreaEn abled	0:無効; 1:有効;	
常にキャッシュ	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\ UserGroup Configs\< SID>`	REG_DWO RD	PSAlways Cache	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE \Citrix\U serProfil eManager\`	REG_DWO RD	PSAlways CacheSize	このサイズ以上のファイルをキャッシュ	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`UserGroupConfigs\<SID>`			する (MB単位)。	
保留中のエリアロックファイルのタイムアウト (日数)	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	PSPendingLockTimeout	保留中のエリアロックファイルのタイムアウト (日数)。	
ストリーミングされたユーザープロファイルグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\PSUserGroupsList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\PSUserGroupsList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\Stre`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`amingExclusionList`				
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\StreamingExclusionList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
クロスプラットフォーム設定を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	CP有効	0:無効; 1:有効;	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\CPUserGroupList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\CPUserGroupList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
クロスプラットフォーム定義へのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	CPSchemaPath	クロスプラットフォーム定義へのパス。	
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	シーピーパス	クロスプラットフォーム設定ストアへのパス。	
クロスプラットフォーム設定の作成元	Software\Policies\Citrix\UserProfileManager<SID>	REG_DWORD	CPMigrationFromBaseProfileToCPStore	0:無効; 1:有効;	
Citrix Virtual Appsの最適化を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	XenAppOptimizationEnabled	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_SZ	XenAppOptimizationDefinitionPath	Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス。	
重複排除のために共有ストアに含めるファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileInclusionList`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileInclusionList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
共有ストアから除外するファイル	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFi`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
	`leExclusionList`				
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>\SharedStoreFileExclusionList\List`	REG_SZ	リスト項目	リスト項目	
プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	有効	0:無効; 1:有効;	
プロファイルコンテナの自動拡張しきい値	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendThreshold	自動拡張しきい値 (パーセント)	
プロファイルコンテナの自動拡張増分	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendSize	自動拡張増分 (GB単位)	

ポリシー名	キーパス	値の型	値の名前	値のデータ	値の説明
プロファイルコンテナの自動拡張制限	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	AutoExtendLimit	自動拡張制限 (GB単位)	
VHD コンテナーのデフォルト容量	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	VhdCapacity	デフォルト容量 (GB単位)	
VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DisableConcurrentAccessToProfileContainer	0:無効; 1:有効;	プロファイルコンテナ
	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	0:無効; 1:有効;	OneDriveコンテナ
UWPアプリのローミング	`SOFTWARE\Citrix\UserProfileManager\UserGroupConfigs\<SID>`	REG_DWORD	EnableUwpAppsRoaming	0:無効; 1:有効;	

Azure AD参加済みおよびドメイン非参加のVDAマシンのサポートを有効にする

Citrix Profile Managementは、顧客管理のAzureサブスクリプションで、Azure AD参加済みおよびドメイン非参加のVDAマシン向けにプロファイル管理を提供できるようになりました。

前提条件

- プロファイルマネジメント 2203以降
- VDAバージョン2203以降
- Workspace Environment Management (WEM)を使用してプロファイルストレージサーバーの資格情報を保存する場合は、WEMエージェントバージョン2109.2.0.1以降

Profile Managementを有効にする

Azure AD参加済みまたはドメイン非参加のVDAマシンでProfile Managementを有効にするには、次の設定を完了します。

1. **Profile Management**で、**Profile managementを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。
2. **ユーザーストアへのパス**ポリシーを、VDAからアクセス可能な有効なパスに設定します。たとえば、ユーザーストアがファイルサーバーまたはAzure Files共有上にある場合、アクセス可能です。
3. **プロファイルコンテナ**ポリシーを**有効**に設定し、プロファイルコンテナリストにアスタリスク (*) を追加します。詳細については、「ユーザープロファイル全体に対するプロファイルコンテナを有効にする」を参照してください。
4. **ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**ポリシーを**有効**に設定します。次に、Profile ManagementがユーザーストアにアクセスできるようにWEMまたはWindows資格情報マネージャーにプロファイルストレージサーバーの資格情報を保存します。詳細については、「ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする」を参照してください。

ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

デフォルトでは、Citrix Profile Management は現在のユーザーを偽装してユーザー ストアにアクセスします。この動作では、現在のユーザーがユーザー ストアに直接アクセスする権限を持っている必要があります。対照的に、「**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**」ポリシーを使用すると、Profile Management はストア自身の資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできます。

このポリシーにより、ユーザー ストアの展開とアクセスにおいて、より柔軟性が得られます。たとえば、このポリシーを使用すると、現在のユーザーがアクセス権を持たないファイル共有 (Azure Files など) にユーザー ストアを展開できます。または、ユーザー ストアへのアクセス時に Profile Management が現在のユーザーを偽装しないようにしたい場合は、このポリシーを有効にできます。

注:

Profile Management は 2 種類のプロファイル ソリューションを提供しており、ユーザー ストアは両方のストレージ場所として機能します。

- ファイルベースのソリューション。ユーザー プロファイルは、ログオン時にリモート ユーザー ストアからローカル コンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- コンテナーベースのソリューション。ユーザー プロファイルは VHDX ファイル (プロファイル コンテナーとして知られています) に保存されます。これらの VHDX ファイルは、ログオン時にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

このポリシーは、ファイルベースとコンテナーベースの両方のソリューションで利用できます。Profile Management バージョン 2212 より前のバージョンでは、このポリシーはコンテナーベースのソリューションでのみ利用可能です。

セキュアなユーザー ストアの作成の詳細については、Microsoft TechNet Web サイトの「ローミング ユーザー プロファイル用のファイル共有を作成する」を参照してください。

Profile Management がストア自身の資格情報を使用してユーザー ストアにアクセスできるようにするには、次の両方のアクションを実行する必要があります。

- Profile Management が実行されている各マシンで、「**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**」ポリシーを有効にします。
- ストアの資格情報をそれらのマシンに追加します。

その目標を達成するには、次のいずれかの方法を使用できます: Workspace Environment Management™ (WEM) サービス および GPO。

> **注:**
>
> コンテナーベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザー ストアの NTFS アクセス許可は保持されます。

WEMサービスを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

WEMを使用すると、Profile Managementが実行されている各マシンで同じ資格情報を入力する必要がなくなります。ポリシーを有効にし、WEMサービスコンソールでユーザーストアの資格情報を一度だけ入力します。その後、WEMサービスはこれらの設定を各マシンに適用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 管理コンソールで、**ポリシーとプロファイル > Citrix Profile Management設定 > ユーザー ストアの資格情報** に移動します。
2. **ユーザー ストアの資格情報** タブで、**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする** チェックボックスをオンにします。

   WEMでユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にするチェックボックスを選択する(/en-us/profile-management/2308/media/selecting-the-enable-credential-based-access-to-user-store-check-box-in-wem.png)
3. **追加** をクリックします。**新しい資格情報** ダイアログボックスが表示されます。

   WEM の新しい資格情報ダイアログボックス(/en-us/profile-management/2308/media/the-new-credential-dialog-box-in-wem.png)
4. プロファイルストレージサーバーのFQDNまたはIPアドレスと、その資格情報を入力します。
5. **OK** をクリックします。

GPOを使用して資格情報ベースのアクセスを有効にする

GPOを使用してポリシーを有効にすることを選択した場合、Profile Managementが実行されている各マシンで資格情報を手動で追加する必要があります。

ポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。

2. 「**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**」にアクセスし、「**ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする**」をダブルクリックします。
3. 「**有効**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。

Windows 資格情報マネージャーに資格情報を追加する

Profile Managementは、ユーザー ストアにアクセスするためにマシンに保存されている資格情報を使用します。Profile Managementが実行されている各マシンで、ユーザー ストアの資格情報を**Windows資格情報マネージャー**に追加します。詳細な手順は次のとおりです。

1. Sysinternals Web サイトから **PsExec** をダウンロードし、ファイルを `C:\PSTools` に解凍します。
2. **スタート**メニューから**コマンドプロンプト**を右クリックし、**管理者として実行**を選択します。コマンドシェルが起動します。
3. `C:\PSTools\PsExec -s -i cmd` コマンドを実行します。別のコマンド シェルが起動します。

> **注:**
>
> `-s` パラメーターは、ローカル システム アカウントを使用してツールを実行していることを示します。その結果、資格情報を安全に保存できます。

4. 新しいコマンドシェルで、`rundll32.exe keymgr.dll, KRShowKeyMgr`コマンドを実行します。「**保存されているユーザー名とパスワード**」ダイアログボックスが表示されます。
5. 「**保存されているユーザー名とパスワード**」ダイアログボックスで、「**追加**」をクリックします。
6. プロファイルストレージサーバーのFQDNまたはIPアドレスとその資格情報を入力し、デフォルトの資格情報タイプはそのままにして、「**OK**」をクリックします。

大容量ファイル処理を有効にする

プロファイル内に存在する大容量ファイルは、ログオンまたはログオフが遅くなる一般的な原因です。Citrix®は、大容量ファイルをユーザー ストアにリダイレクトするオプションを提供しま

す。このオプションにより、ネットワーク経由でこれらのファイルを同期する必要がなくなります。

グループポリシーで大容量ファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. **Profile Management**の下にある**File system**フォルダーを開きます。
2. **Large File Handling - Files to be created as symbolic links**ポリシーをダブルクリックします。
3. 処理するファイルを指定します。

UPMPolicyDefaults_all.iniファイルで大容量ファイル処理を有効にするには、次の手順を実行します。

1. .iniファイルに**\[LargeFileHandlingList\]**セクションを追加します。
2. そのセクションの下で処理するファイルを指定します。

ファイルを参照するポリシーでワイルドカードを使用できます。例：`\\!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.ost`

これらのファイルがCitrix Profile Managementの除外リストに追加されていないことを確認してください。

> **注**
>
> 一部のアプリケーションでは、ファイルの同時アクセスが許可されていません。Citrixでは、大容量ファイル処理ポリシーを定義する際に、アプリケーションの動作を考慮することをお勧めします。

> Citrixは、Microsoftセキュリティ更新プログラムMS15-090を適用することを推奨します。一般的なセキュリティ対策として、Microsoft Windowsシステムを常に最新の状態に保つようにしてください。

ファイルの重複排除を有効にする

ユーザー ストア内のさまざまなユーザー プロファイルに同一のファイルが存在する場合があります。ユーザー ストアにファイルの重複インスタンスが保存されていると、ストレージ コストが増加します。

ファイルの重複排除ポリシーを使用すると、Profile Management はユーザー ストアから重複ファイルを削除し、それらのインスタンスを中央の場所 (*共有ストア* と呼ばれる) に 1 つだけ保存できます。これにより、ユーザー ストアでのファイルの重複が回避され、ストレージ コストが削減されます。

ファイルの重複排除を有効にし、共有ストアに含めるファイルを指定するには、次のポリシーを構成します。

1. **ファイルの重複排除 > 重複排除のために共有ストアに含めるファイル**
2. (オプション) **ファイルの重複排除 > 共有ストアから除外するファイル**

ファイルの重複排除ポリシーを構成すると、Profile Management はユーザー ストアと同じパスに共有ストアを作成します。例：

- ユーザー ストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\%USERNAME%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`!
- 共有ストアへのパス: `\\server\profiles$\%USERDOMAIN%\SharedFilesStore`

重複排除のために共有ストアにファイルを含める

ユーザー ストアに重複ファイルが存在する場合は、ファイルの重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定します。

> **重要:**
>
> 共有ストアに重複排除されたすべてのファイルは、すべてのドメイン ユーザーが読み取ることができるため、個人データや機密データの重複排除は推奨しません。

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループ ポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > プロファイル管理 > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. **共有ストアに含める重複排除ファイル**をダブルクリックします。
4. **有効**を選択します。
5. **共有ストアに含めるファイルのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
6. ユーザープロファイルに対する相対パスでファイル名を入力します。

ワイルドカードは、以下の考慮事項とともにサポートされます。

- ファイル名のワイルドカードは再帰的に適用されます。現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
- フォルダー名のワイルドカードは再帰的に適用されません。

例:

- `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloadsフォルダー内のprofilemgt_x64.msiファイル
- `*.cfg` — ユーザープロファイルフォルダーとそのサブフォルダー内の.cfg拡張子を持つファイル
- `Music*` — Musicフォルダーとそのサブフォルダー内のファイル
- `Downloads*.iso` — Downloadsフォルダーとそのサブフォルダー内の.iso拡張子を持つファイル
- `Downloads*.iso|` — Downloadsフォルダー内のみの.iso拡張子を持つファイル
- `AppData\Local\Microsoft\OneDrive**.dll` — AppData\Local\Microsoft\OneDriveフォルダーの直下のサブフォルダー内の.dll拡張子を持つファイル

7. **OK**をクリックし、もう一度**OK**をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、共有ストアは無効になります。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、共有ストアは無効になります。

共有ストアからファイルを除外する

ワイルドカード文字を使用すると、ファイルのグループを一度にすべて共有ストアに含めることができます。グループから一部のファイルを除外するには、**共有ストアから除外するファイル**ポリシーを次のように有効にして構成します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート：ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルの重複排除**にアクセスします。
3. **共有ストアから除外するファイル**をダブルクリックします。

4. **有効**を選択します。
5. **共有ストアから除外するファイルのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
6. ユーザープロファイルに対する相対パスでファイル名を入力します。

   ワイルドカードはサポートされていますが、以下の考慮事項があります。

   - ファイル名内のワイルドカードは再帰的に適用されます。現在のフォルダーのみに制限するには、縦棒 (`|`) を使用します。
   - フォルダ名内のワイルドカードは再帰的に適用されません。

   例:

   - `Downloads\profilemgt_x64.msi` — Downloadsフォルダ内のprofilemgt_x64.msiファイル
   - `*.tmp` — ユーザープロファイルフォルダとそのサブフォルダ内の.tmp拡張子を持つファイル
   - `AppData*.tmp` — AppDataフォルダとそのサブフォルダ内の.tmp拡張子を持つファイル
   - `AppData*.tmp|` — AppDataフォルダ内のみの.tmp拡張子を持つファイル
   - `Downloads*\a.txt` — Downloadsフォルダの直下のサブフォルダ内のa.txtファイル
7. **OK** をクリックし、もう一度 **OK** をクリックします。

構成の優先順位

1. この設定が無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

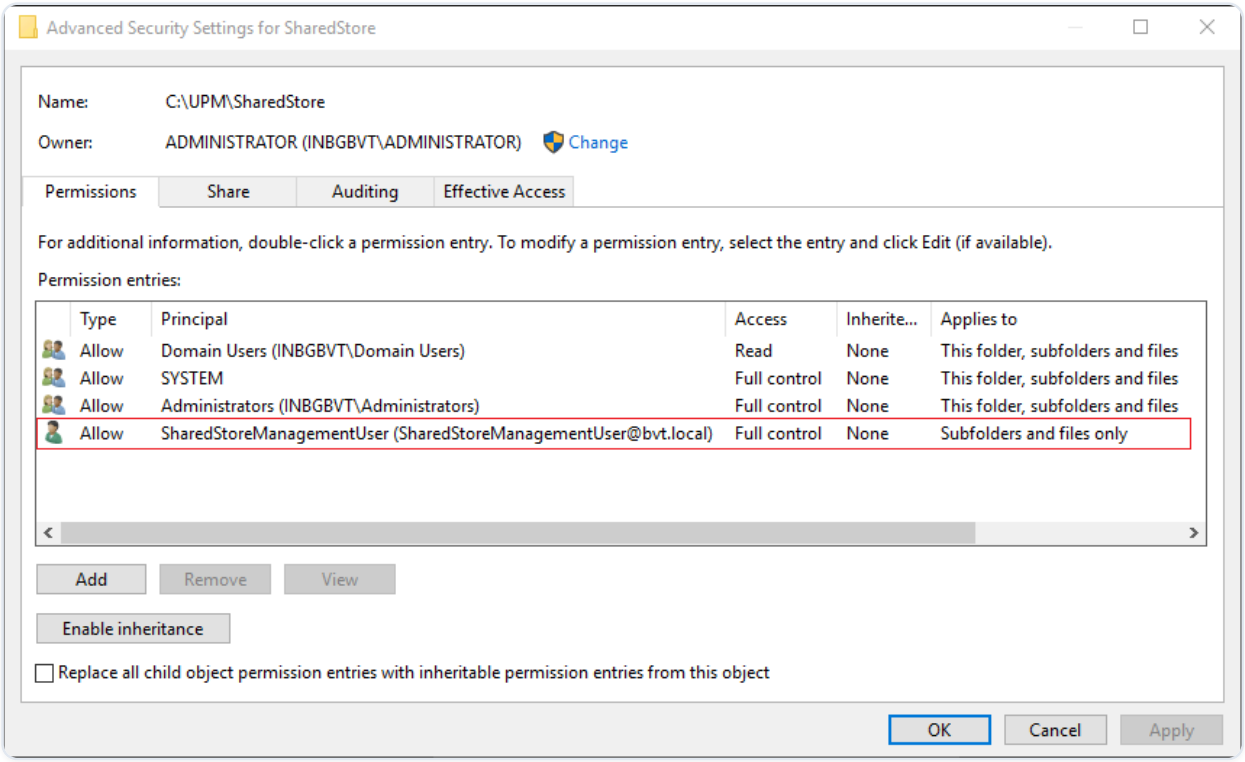
共有ストアのセキュリティ設定を構成する

共有ストアが存在しない場合、Profile Managementは以下の権限設定で自動的に共有ストアを作成します。

- ドメインコンピューター: フルコントロールアクセス
- ドメインユーザー: 読み取りアクセス

デフォルト設定ではドメインコンピューターにフルコントロールアクセスが付与されるため、セキュリティ向上のために共有ストアを手動で作成し、資格情報ベースのアクセスを実装することをお勧めします。そのためには、次の手順に従ってください。

1. 「**ユーザー ストアへのパス**」設定の `%USERNAME%` パラメーターと同じディレクトリレベルに共有ストアフォルダーを作成します。たとえば、「**ユーザー ストアへのパス**」設定が `\\SERVER\UPM_USER_STORE\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!` の場合、共有ストアフォルダーは `\\SERVER\UPM_USER_STORE\SharedStore` でなければなりません。
2. 共有ストアに対して次の権限を付与します。この図に示すように、ユーザー `SharedStoreManagementUser` は共有ストアにアクセスするために使用される資格情報です。



3. 各VDAで、共有ストアにアクセスするために `SharedStoreManagementUser` ユーザーアカウントのWindows資格情報を追加します。この目的のために、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用できます。詳細については、ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする に記載されている手順を参照してください。

ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを有効にする

Outlookの検索インデックスローミングを有効にする機能は、ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。この機能により、オフラインOutlookデータファイル (.ost) とユーザー固有の検索データベースが、ユーザープロファイルとともにローミングされます。

前提条件

この機能は、以下の要件を満たすマシンで利用できます。

- オペレーティングシステム:
  - Microsoft Windows 10 バージョン 1709 以降
  - Windows Server 2016 以降のバージョン
- Microsoft Outlook 2019、2016、または2103、あるいはMicrosoft Office 365

この機能を有効にするには、マシンでMicrosoft Windows Search Serviceが有効になっていることを確認してください。デフォルトでは、Windowsデスクトップでは有効になっており、Windowsサーバーでは無効になっています。Windowsサーバーでサービスを有効にする方法の詳細については、このMicrosoftの記事を参照してください。以下のバージョンがテストされ、サポートされています。

- 7.0.20348.380, 7.0.20348.138,7.0.20344.1
- 7.0.21286.1000, 7.0.21343.1000
- 7.0.17134.376, 7.0.17134.285, 7.0.17134.228, 7.0.17134.1
- 7.0.16299.402, 7.0.16299.248, 7.0.16299.15
- 7.0.15063.413
- 7.0.14393.2457, 7.0.14393.2430, 7.0.14393.2368, 7.0.14393.2312, 7.0.14393.2273, 7.0.14393.2248, 7.0.14393.1884, 7.0.1493.1593
- 7.0.1393.2125, 7.0.1393.1884, 7.0.1393.1770
- 7.0.10240.17443
- 7.0.9600.18722

> **注:**
>
> この機能は、Microsoft Windows Search Service の将来のバージョンをサポートすることが期待されています。この機能が特定の将来のバージョンの Microsoft Windows Search Service をサポートしない場合は、Citrix テクニカルサポートにお問い合わせください。

仕組み

VHDX (Virtual Hard Disk) は、仮想マシン用の仮想および論理ディスクストレージ領域を表すために使用されるディスクファイル形式です。Outlook の検索インデックスローミングを有効にする機能は、VHDX ファイルに依存して動作します。

VHDX ファイルは、この機能を使用する各ユーザーに対して作成されます。VHDX ファイルは、ユーザー固有のプロファイルを、そのユーザーのプロファイル専用の個別の仮想ディスクに保存します。Profile Management は、ログオン時に VHDX ファイルをマウントし、ログオフ時にアンマウントします。VHDX ファイルは次の2種類です。

- OutlookOST.vhdx ファイル。オフライン Outlook データファイル (`.ost`) を保存します。
- OutlookSearchIndex.vhdx ファイル。OutlookOST.vhdx ファイルに保存されているオフラインフォルダーファイルの検索インデックスデータベースを保存します。

> **注:**

> デフォルトでは、Profile Management はセッション中にデタッチされた VHDX ファイルを自動的に再アタッチします。詳しくは、「セッションでデタッチされた VHDX ディスクを自動的に再アタッチする」を参照してください。

> Profile Management は、デフォルトで 30 GB の VHDX 容量を提供します。ストレージクォータを適切に計画してください。VHDX の実際の使用量が以前に構成したクォータを超えると、VHDX ファイルはアンマウントされます。

キャッシュ Exchange モードとオンラインモード間の自動切り替え

Profile Management は、Outlook コンテナが有効なマシンで中断のない Outlook サービスを提供します。

- ユーザーログオン時にOutlookコンテナが機能するためのすべての条件が満たされていることを検出すると、Profile ManagementはOutlookのキャッシュされたExchangeモードを自動的に有効にします。キャッシュされたExchangeモードが有効になっている場合、ユーザーはメールボックスデータのためにOutlookコンテナにリンクされます。これらの条件には以下が含まれます。
  - Outlookの検索インデックスローミングを有効にするポリシーが有効になっています。
  - Outlookコンテナがアタッチされています。

    - カスタマイズされたOSTパスが設定されていないか、Outlookコンテナのマウントパスである`appdata\local\microsoft\outlook`に設定されています。

- セッション中にコンテナがデタッチされたことを検出すると、Profile ManagementはOutlookをキャッシュされたExchangeモードからオンラインモードに切り替えます。ユーザーはメールボックスデータのためにExchange Serverにリンクされます。
- セッション中にコンテナが再アタッチされたことを検出すると、Profile ManagementはOutlookをキャッシュされたExchangeモードに戻します。

同時セッションのサポート

Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする機能により、Profile Managementは同じユーザーの同時セッションでネイティブのOutlook検索エクスペリエンスを提供します。

この機能は、ユーザーの各同時セッションにOutlook OSTファイルのコピーを割り当てます。デフォルトでは、Profile ManagementはOutlook OSTファイルを保存するために2つのVHDXディスクを提供します（ディスクごとに1ファイル）。ユーザーがさらにセッションを開始した場合、追加のOutlook OSTファイルはローカルプロファイルに保存されます。

ストレージ容量に余裕がある場合は、VHDXディスクのデフォルト数を増やすことができます。たとえば、数を3に設定します。その結果、Profile Managementは最初の3つのセッションのOSTファイルをVHDXディスクに保存し、それ以降のセッションのOSTファイルはローカルプロファイルに保存します。

Outlook検索インデックスデータベースの自動バックアップと復元

Profile Managementは、検索インデックスデータベースの最後に確認された正常なコピーのバックアップを自動的に保存し、破損が発生した場合はそのコピーに復元できます。

この機能が有効になっている場合、Profile Managementは、ログオン時にデータベースが正常にマウントされるたびに、検索インデックスデータベースのバックアップを保存します。新しいバックアップが正常に保存された後、Profile Managementは以前に保存されたバックアップを削除します。Profile Managementは、そのバックアップを検索インデックスデータベースの正常なコピーとして扱います。検索インデックスデータベースのマウント試行が失敗した場合、Profile Managementは検索インデックスデータベースを最後に確認された正常なコピーに自動的に復元します。

> **重要:**

- Profile Managementは、ポリシーが有効になった後、検索インデックスデータベースが最初に作成された時点では、そのバックアップを保存しません。
- Profile Management は、新しいバックアップが正常に保存された後、以前に保存されたバックアップを削除します。バックアップは、VHDX ファイルの利用可能なストレージ領域をより多く消費します。

機能の有効化

ネイティブの Outlook 検索エクスペリエンスを提供するには、**Outlook の検索インデックスローミングを有効にする**機能を有効にし、必要に応じてその拡張機能を有効にします。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. 次の手順で機能を有効にします。
    a. **Outlook の検索インデックスローミングを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    b. **有効**を選択します。
    c. **OK**をクリックします。
4. 同じユーザーの同時セッションでこの機能をサポートするには、次の手順に従います。
    a. **Outlook 検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    b. **有効**を選択します。
    c. 利用可能なストレージ容量がある場合は、**Outlook OST ファイルを保存するための VHDX ディスクの最大数**フィールドで、デフォルトの VHDX ディスクの数を増やします。このフィールドの詳細については、「同時セッションのサポート」を参照してください。
    d. **OK**をクリックします。
5. この機能の高い安定性を提供するには、次の手順に従います。
    a. 「**Outlook 検索インデックス データベースのバックアップと復元**」ポリシーをダブルクリックします。
    b. 「**有効**」を選択します。
    c. 「**OK**」をクリックします。

6. この機能の可用性を高めるには、次の手順に従います。

    a. 「**セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする**」ポリシーをダブルクリックします。

    b. 「**有効**」を選択します。

    c. 「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行し、すべてのセッションからログオフしてから、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

> **注：**
>
> この機能を Microsoft Windows 10 1809 以降、および Windows Server 2019 以降で動作させるには、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows Search` の下に DWORD 値 `EnablePerUserCatalog = 0` を追加します。レジストリ設定を有効にするには、VDA を再起動します。

OneDriveコンテナを有効にする

OneDriveコンテナを使用すると、OneDriveフォルダーをユーザーとともにローミングできます。その結果、ユーザーはどのコンピューターからでも同じOneDriveフォルダーにアクセスできます。

OneDriveコンテナは、VHDXベースのフォルダーローミングソリューションです。Profile Managementは、ファイル共有上にユーザーごとにVHDXファイルを作成し、ユーザーのOneDriveフォルダーをVHDXファイルに保存します。VHDXファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

Profile Managementは次の2つのプロファイルソリューションを提供しており、OneDriveコンテナは両方に適用されます。

- **ファイルベース**。ユーザープロファイルは、ログオン時にリモートユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされ、ログオフ時に書き戻されます。
- **コンテナベース**。ユーザープロファイルはVHDXファイル（プロファイルコンテナとして知られています）に保存されます。これらのVHDXファイルは、ログオン時に自動的にアタッチされ、ログオフ時にデタッチされます。

OneDriveコンテナを展開するための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. (オプション) VHDXファイルの保存パスを指定する
2. OneDriveコンテナを有効にして構成する

> **注：**
>
> Citrix Profile Management 2206以降、コンテナベースのソリューションを使用している場合、OneDriveフォルダーはデフォルトでユーザーとともにローミングされます。ただし、別のコンテナを使用してOneDriveフォルダーをローミングしたい場合は、OneDriveコンテナを有効にすることもできます。

(オプション) VHDXファイルの保存パスを指定する

デフォルトでは、OneDriveコンテナのVHDXファイルは、ユーザーストアと同じストレージサーバーに保存されます。

たとえば、ユーザーストアのパスを次のように構成します。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!`!

OneDriveコンテナのVHDXファイルは、その後、に保存されます。

`\\myprofileserver\profiles$\%username%.%domain%\!ctx_osname!.!ctx_osbitness!\OneDrive`

必要に応じて、OneDriveフォルダーのVHDXディスクを保存するための別のファイル共有を指定できます。詳細については、「VHDXファイルの保存パスを指定する」を参照してください。

OneDriveコンテナを有効にして構成する

OneDriveコンテナポリシーを有効にし、VHDXファイルに保存するOneDriveフォルダーを指定します。詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrixコンポーネント > プロファイル管理 > 詳細設定**にアクセスし、**OneDriveコンテナを有効にする**をダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

4. **OneDriveフォルダーのリスト**フィールドで、**表示**をクリックします。
5. ユーザープロファイルに対する相対パスの形式でOneDriveフォルダーを入力し、**OK**をクリックします。

   たとえば、OneDriveフォルダーの絶対パスが`%userprofile%\OneDrive - Citrix`の場合、リストに`OneDrive - Citrix`を追加します。

   > **注：**
   >
   > 相対パスには、`!CTX_OSNAME!`や`!CTX_OSBITNESS!`などの変数を含めることはできません。

6. **OK**をクリックします。

UWPアプリのローミングを有効にする (プレビュー)

UWPアプリのローミングを有効にするポリシーを使用すると、UWP (Universal Windows Platform) アプリをユーザーとともにローミングさせることができます。その結果、ユーザーは異なるデバイスから同じUWPアプリにアクセスできます。

> **注：**
>
> - このポリシーはWindows 10とのみ互換性があり、他のWindowsバージョンまたはWindows Serverバージョンとは互換性がありません。
> - **ユーザーストアのレプリケート**ポリシーは、UWPアプリのVHDXディスクレプリケーションをサポートしていません。

仕組み

UWPアプリのローミングを有効にするポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは次のように動作します。

1. ユーザーがUWPアプリのインストールを開始すると、Profile Managementはインストールプロセスを監視します。
2. 環境内でアプリの初回インストールである場合、Profile Managementは`{User_Store_File_Share_Path}\AppStore\`フォルダーにVHDXディスクを作成し（*UWP*

アプリコンテナーと呼ばれます）、そのディスクにアプリ（個人設定を除く）を保存します。同じアプリのその後のインストールでは、Profile Managementは追加のVHDXディスクを作成しません。したがって、各UWPアプリはUWPアプリコンテナー内に単一のVHDXディスクを持ちます。

3. ユーザーがマシンにログオンすると、ユーザーがインストールしたUWPアプリのVHDXディスクがアタッチされます。ユーザーがログオフすると、それらのディスクはデタッチされます。

> **重要：**
>
> - UWPアプリのローミングは、ポリシーが有効になった後にユーザーごとのパッケージを使用してインストールされたUWPアプリにのみ適用されます。言い換えれば、アプリがインストールされた後にポリシーが有効になった場合、そのアプリはユーザーごとのパッケージを使用して再インストールされるまでローミングの恩恵を受けません。
> - すべてのユーザーがUWP VHDXディスクを共有します。

GPOを使用してUWPアプリのローミングポリシーを有効にする

詳細な手順は次のとおりです。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定** にアクセスします。
3. **UWP アプリのローミング** ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効** を選択し、**OK** をクリックします。
5. UWP ローミングのログオンおよびログオフエクスペリエンスを向上させるには、次のように **フォルダーミラーリングの高速化** ポリシーを有効にします。

    a. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ファイルシステム > 同期** にアクセスします。

    b. **フォルダーミラーリングの高速化** ポリシーをダブルクリックします。

    c. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効** を選択し、**OK** をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

- この設定が GPO、Studio、または Workspace Experience Management (WEM) を使用して構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。

- この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

VHD設定を構成する

この記事では、VHDXベースの機能をカスタマイズおよび最適化する方法について説明します。

- VHDコンテナーのストレージ容量とパスを指定する](#specify-the-storage-capacity-and-path-for-vhd-containers)

  適用対象: プロファイルコンテナー、OneDriveコンテナー、フォルダーミラーリングコンテナー、およびOutlook検索インデックスコンテナー。

- VHDディスク圧縮設定を有効にして構成する](#enable-and-configure-vhd-disk-compaction-settings)

  適用対象: プロファイルコンテナー、OneDriveコンテナー、およびフォルダーミラーリングコンテナー

- VHDコンテナーへの排他的アクセスを有効にする](#enable-exclusive-access-to-vhd-containers)

  適用対象: プロファイルコンテナーおよびOneDriveコンテナー

- セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチを有効にする](#enable-automatic-reattachment-of-vhdx-disks-in-sessions)

  適用対象: プロファイルコンテナー、Outlook検索インデックスコンテナー、フォルダーミラーリングコンテナー、およびOneDriveコンテナー。

これらのコンテナーの詳細については、以下を参照してください。

- プロファイルコンテナー](/ja-jp/profile-management/2308/configure/citrix-profile-management-profile-container.html)
- Outlook検索インデックスローミング](/ja-jp/profile-management/2308/configure/enable-native-outlook-search-experience.html) (*Outlook検索インデックスコンテナー* と呼ばれます)
- フォルダーミラーリングソリューションの高速化](/ja-jp/profile-management/2308/policies/descriptions-and-defaults.html#accelerate-folder-mirroring) (*フォルダーミラーリングコンテナー* と呼ばれます)

- OneDriveコンテナー](/ja-jp/profile-management/2308/configure/enable-the-onedrive-container.html)

VHDコンテナのストレージ容量とパスを指定する

デフォルトでは、各VHDXコンテナはユーザー ストアに50 GBのディスク容量で保存されます。必要に応じて、別のストレージ パスを選択し、デフォルトの容量を変更できます。

以下に、VHDXファイルのデフォルトおよびカスタムのストレージ パスを示します。

- プロファイル コンテナ設定
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\ProfileContainer\\{OS_NAME_SHORT}\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\ProfileContainer\\{OS_NAME_SHORT}\
- Outlook検索インデックスのローミング
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\VHD\\{OS_NAME_SHORT}\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\VHD\\{OS_NAME_SHORT}\
- フォルダ ミラーリングの高速化
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\MirrorFolders\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\MirrorFolders\
- OneDriveコンテナを有効にする
  - デフォルト: {USER_STORE_PATH}\OneDrive\
  - カスタム: {VHDX_STORE_PATH}\OneDrive\

プロファイル管理は、現在のユーザーを偽装してVHDXファイルにアクセスし、Domain ComputersにVHDXファイルのストレージパスへの`full control`権限を付与しません。

ストレージパスを指定する

VHDXコンテナ用にネットワークストレージの場所を準備します。ユーザーにストレージの場所への`Modify`権限以上を付与していることを確認してください。

次手順に従って、VHDXコンテナのストレージパスを指定します。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。

2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > プロファイル管理 > 詳細設定**の下で、**VHDXファイルのストレージパスをカスタマイズ**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **VHDXファイルを保存するパス**フィールドに、ストレージの場所のフルパスを入力します。例：`\\myservername\vhdx_store`。
5. **適用**をクリックし、次に**OK**をクリックします。

設定を有効にするには、次の操作を行います。

1. ユーザープロファイルを使用しているすべてのセッションからログオフします。
2. コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

   ポリシーが有効になるタイミングは、ユースケースによって異なります。

   - VHDXファイルのストレージパスを初めて指定する場合、ポリシーはユーザーがログオンした後に有効になります。
   - VHDXファイルのストレージパスを変更する場合、ポリシーはユーザーが初めてログオフした後に有効になります。

`gpupdate`コマンドの詳細については、Microsoft ドキュメントを参照してください。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile ManagementはVHDXファイルをユーザー ストアに保存します。

VHD コンテナのデフォルトのストレージ容量を指定する

各VHDコンテナのデフォルトのストレージ容量は50 GBです。容量を変更するには、次の手順に従います。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > 詳細設定**で、**VHDコンテナのデフォルト容量（GB）**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **デフォルト容量（GB）**フィールドに、必要に応じて新しい数値を入力します。
5. **OK**をクリックします。

VHD ディスク圧縮設定を有効にして構成する

VHDディスク圧縮は、空き領域を削除し、ファイル内のデータを結合することでVHDファイルのサイズを縮小するプロセスです。**VHDディスク圧縮を有効にする**ポリシーを使用すると、Profile ManagementでVHDディスク圧縮を有効にできます。Profile Managementによって作成されたVHDファイルは、特定の条件が満たされると、ユーザーのログオフ時に自動的に圧縮され、中央ストレージまたはクラウドストレージのスペースを節約します。

このセクションでは、VHD ディスク圧縮を有効にし、デフォルトの圧縮設定と動作を調整する方法について説明します。

概要

VHDXディスク圧縮は、Profile Managementの次のVHDXファイルに適用されます。

- プロファイルコンテナ
- OneDrive コンテナ
- フォルダーミラーリングコンテナ

VHDディスクの圧縮を有効にするポリシーが有効になっている場合、以下のいずれかの条件が満たされると、ユーザーのログオフ時にVHDXファイルが自動的に圧縮されます。

- VHDファイルの空き領域の比率が指定された値（デフォルトでは20%）を超えている

  空き領域の比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

  * Microsoft Windowsオペレーティングシステムの`MSFT_Partition`クラスのGetSupportedSizeメソッドを使用して取得されます。詳細については、VHDファイルの必要な最小サイズを取得するを参照してください。
- 最後の圧縮以降のログオフ回数が指定された値（デフォルトでは5）に達している

> **注：**
>
> ユーザーがログオフすると、VHDディスクの圧縮プロセスはログオフプロセスと並行して実行されます。そのため、ディスク圧縮によってログオフ時間が長くなることはありません。ユーザーが再度ログオンしようとしたときにVHDディスク圧縮プロセスが完了していない場合、Profile Managementはログオン試行を阻止します。

必要性および利用可能なリソースに応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してこれらのデフォルト設定を調整できます。

- VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスク圧縮が有効になっている場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている`defrag`ツールを使用してデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスクのデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。必要に応じて、**詳細設定**で以下のポリシーを使用してデフラグを無効にできます。

- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

VHDディスク圧縮を有効にする

VHDディスク圧縮を有効にすると、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびフォルダミラーリングコンテナが消費するストレージスペースを節約できます。

GPOを使用してVHDディスク圧縮を有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**にアクセスします。
3. **VHDディスク圧縮**ポリシーをダブルクリックします。
4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

1. この設定がGPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™ (WEM) を使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がどこにも構成されていない場合、この機能は無効になります。

圧縮設定と動作を変更する

VHDディスク圧縮を有効にするとストレージスペースを節約できますが、システムI/Oとネットワーク帯域幅も消費します。圧縮プロセス中のシステムおよびネットワークリソースの使用状況を監視して、次の設定を調整するかどうかを決定できます。

- VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率
- VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数
- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

GPOを使用してデフォルトの圧縮設定と動作を変更するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**にアクセスします。
3. 圧縮をトリガーする空き領域の比率を変更するには、次の手順に従います。
    a. **VHD ディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、必要に応じてパーセンテージを入力し、**OK**をクリックします。
4. (最後の圧縮以降の) ログオフ回数を変更して圧縮をトリガーするには、次の手順に従います。
    a. **VHD ディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、必要に応じて値を入力し、**OK**をクリックします。
5. VHD ディスク圧縮のデフラグを無効にするには、次の手順に従います。
    a. **VHD ディスク圧縮のデフラグを無効にする**ポリシーをダブルクリックします。
    b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

構成の優先順位は次のとおりです。

- VHD ディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率
    a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
    b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の20 (%)が使用されます。
- VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフの回数
    a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
    b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフォルト値の5が使用されます。
- VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする
    a. この設定がGPO、Studio、またはWEMを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
    b. この設定がどこにも構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

VHDファイルの必要な最小サイズを取得する

詳細な手順は次のとおりです。

1. VHDファイルがオペレーティングシステムにアタッチされていることを確認します。
2. 管理者としてこのPowerShellコマンドを実行します。

   ```
   Get-WmiObject -Class MSFT_Partition -Namespace ROOT\Microsoft\Windows\Storage
   ```

   現在のデスクトップのすべてのパーティションが表示されます。
3. VHDファイルに対応するパーティションを見つけ、GetSupportedSizeメソッドを使用して必要な最小サイズ (`SizeMin`) を取得します。

VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする

注:

- この設定は、OneDriveコンテナと、ユーザープロファイル全体に対して有効になっているプロファイルコンテナに適用されます。
- プロファイルコンテナに対してこの設定が有効になっている場合、**プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする**設定は自動的に無効になります。

デフォルトでは、VHDコンテナは同時アクセスを許可します。必要に応じて、プロファイルコンテナとOneDriveコンテナの同時アクセスを無効にできます。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **グループポリシー管理エディター**を開きます。
2. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Citrix Components > Profile Management > プロファイルコンテナ設定**の下で、**VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. 排他的アクセスを有効にするコンテナを選択します。オプションには、**プロファイルコンテナ**と**OneDriveコンテナ**が含まれます。
5. **OK**をクリックします。

設定を有効にするには、次の操作を行います。

1. ユーザープロファイルを使用しているすべてのセッションからログオフします。
2. コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、設定は無効になります。

セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチを有効にする

セッションでのVHDXディスクの自動再アタッチ機能により、Profile ManagementはVHDXベースのポリシーの高い安定性を確保します。

各VHDX関連ポリシーは、適切に機能するために、関連するVHDXディスクに依存します。Profile Managementは、ログオン中にこれらのディスクをアタッチし、ログオフ中にデタッチします。しかし、これらのVHDXディスクはセッション中に誤ってデタッチされ、ポリシーが適切に機能しなくなる可能性があります。VHDXディスクがデタッチされる可能性のある原因は次のとおりです。

- ファイルサーバーで一時的なエラーが発生する
- ネットワーク接続が遅い

「**セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする**」ポリシーが有効になっている場合、Profile Managementは、以前のVHDXベースのポリシーで使用されているVHDXディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Managementはディスクを自動的に再アタッチします。

ポリシーを有効にする

デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。VHDXベースのポリシーの高い安定性を確保するために、デフォルト設定を維持することをお勧めします。

VHDXベースのポリシーでパフォーマンスの問題が発生した場合は、次の手順に従ってポリシー設定を確認してください。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **Citrix Components > Profile Management > Advanced settings**で、「**セッションでVHDXディスクを自動的に再アタッチする**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 設定が「**無効**」になっている場合は、「**有効**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、Microsoftの記事に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用され、デフォルトで「**有効**」になります。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ポリシーはデフォルトで有効になります。

競合するプロファイルを解決する

既存の展開にProfile Managementを追加すると、ローカルのWindowsユーザープロファイルとCitrix®ユーザープロファイル（ユーザー ストア内）との間で競合が発生する可能性があります。このシナリオでは、ローカルのWindowsプロファイル内のデータがどのように管理されるかを決定する必要があります。

1. Profile Managementで、プロファイル処理フォルダーを開きます。
2. **ローカルプロファイルの競合処理**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. ドロップダウンリストから次のいずれかのオプションを選択します。

    - **ローカルプロファイルを使用**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを処理しますが、いかなる方法でも変更しません。
    - **ローカルプロファイルを削除**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルを削除し、ユーザー ストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。
    - **ローカルプロファイルの名前を変更**。Profile ManagementはローカルのWindowsユーザープロファイルの名前を変更し（バックアップ目的）、ユーザー ストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。

ここでローカルプロファイルの競合処理が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

テンプレートまたは強制プロファイルを指定する

デフォルトでは、新しいCitrix®ユーザープロファイルは、ユーザーが最初にログオンするコンピューター上のデフォルトのユーザープロファイルから作成されます。プロファイル管理は、プロファイルを作成する際に、一元的に保存されたテンプレートを代わりに利用できます。このテンプレートは、任意のネットワークファイル共有に存在する標準のローミング、ローカル、または強制プロファイルである可能性があります。

異なるデバイスのデフォルトユーザープロファイルにどのようなバリエーションがあっても、ユーザーのために作成されるベースプロファイルに違いが生じます。テンプレートプロファイルの選択は、グローバルデフォルトユーザープロファイルと見なすことができます。

前提条件として：

- テンプレートプロファイルにユーザー固有のデータが含まれていないことを確認します
- ユーザーがテンプレートプロファイルへの読み取りアクセス権を持っていることを確認します
- 強制プロファイルをテンプレートプロファイルに変換するには、ファイルNTUSER.MANの名前をNTUSER.DATに変更します
- テンプレートプロファイル内のNTUSER.DATからSACLを削除します

既存のMicrosoftプロファイルをカスタマイズしてテンプレートプロファイルを作成する方法については、`<https://support.microsoft.com/kb/959753>`および`<https://support.microsoft.com/kb/973289>`を参照してください。

1. プロファイル管理の下で、フォルダーを開きます。
2. **テンプレートプロファイル**ポリシーをダブルクリックします。
3. を選択します。
4. **テンプレートプロファイルへのパス**で、テンプレートまたは強制プロファイルとして使用するプロファイルの場所を入力します。このパスは、NTUSER.DATレジストリファイルと、テンプレートに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーへの完全なパスです。

   重要：パスがNTUSER.DATのみで構成されている場合、パスにファイル名を含めないようにしてください。例えば、ファイル`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat`の場合、場所を`\\myservername\myprofiles\template`として設定します。

   絶対パスを使用します。これはUNCパスまたはローカルマシン上のパスである可能性があります。例えば、Citrix Provisioning™ Servicesイメージ上でテンプレートプロファイルを永続的に指定するために後者を使用できます。相対パスはサポートされていません。

このポリシーは、Active Directory属性、システム環境変数、または`%USERNAME%`および`%USERDOMAIN%`変数の展開をサポートしていません。

5. オプションで、既存のWindowsユーザープロファイルを上書きするためのチェックボックスを選択します。ユーザーにCitrixユーザープロファイルがない場合でも、ローカルまたは移動Windowsユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。そして、これが無効になっていない場合、このファイルはユーザーストアに移行されます。**テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする**または**テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする**チェックボックスを有効にすることで、この設定を変更できます。また、テンプレートをCitrix強制プロファイルとして識別します。Windows強制プロファイルと同様に、Citrix強制プロファイルには変更を保存できません。

ここで**テンプレートプロファイル**が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、テンプレートまたは強制プロファイルは使用されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

移行ポリシーを選択する

Profile Management が有効になった後、ユーザーが初めてログオンしたとき、そのユーザーの Citrix® ユーザープロファイルは存在しません。しかし、ログオン中に既存の Windows ユーザープロファイルを「オンザフライ」で移行できます。既存のどのプロファイル（ローミング、ローカル、またはその両方）をコピーして、以降のすべての処理で使用するかを決定します。

移行戦略の計画の詳細については、「プロファイルの移行または作成」を参照してください。さらに、「システム要件」で既存のプロファイルを移行するためのシステム要件を確認してください。

1. Profile Management の下で、 フォルダーを開きます。
2. ポリシーをダブルクリックします。
3. を選択します。
4. ドロップダウンリストから、次のいずれかのオプションを選択します。

    - ローカル。ローカルプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。

- ローカルおよびローミング。ローカルプロファイルとローミングプロファイル（以前はターミナルサービスプロファイルとして知られていたリモートデスクトップサービスプロファイルを含む）を移行する場合は、この設定を使用します。
- ローミング。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、この設定を使用します。

ここで が構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルとローミングプロファイルが移行されます。この設定が無効になっている場合、プロファイルは移行されません。この設定が無効になっており、ユーザーストアに Citrix ユーザープロファイルが存在しない場合、Profile Management がないセットアップと同様に、プロファイルを作成するための既存の Windows メカニズムが使用されます。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

どのグループのプロファイルを処理するかを定義する

プロファイルが処理されるユーザーと、処理されないプロファイルを定義できます。コンピューターのローカルグループとドメイングループ（ローカル、グローバル、ユニバーサル）の両方を使用できます。ドメイングループは`<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`の形式で指定します。ローカルグループは「GROUP NAME」の形式で指定します。

注： コンピューターのローカルグループは、新しく作成されたローカルグループである必要があり、メンバーはドメインユーザーである必要があります。

1. Profile Managementで、**処理対象グループ**ポリシーをダブルクリックします。
2. 「**Enabled**」を選択します。
3. **表示**をクリックします。
4. Profile Managementでプロファイルを処理するユーザーを含むグループを追加します。複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

   この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、除外グループポリシーを使用して除外しない限り、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。
5. Profile Management で、除外グループポリシーをダブルクリックします。
6. 「**Enabled**」を選択します。

7. **表示**をクリックします。
8. Profile Managementでプロファイルを処理しないユーザーを含むグループを追加します。複数のエントリを区切るにはEnterキーを使用します。

   この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、どのグループのメンバーも除外されません。
9. ローカル管理者のプロファイルを管理するには、Profile Managementで、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーをダブルクリックし、**有効**をクリックします。

   重要： デフォルトでは、Profile Managementは使用中のオペレーティングシステムを認識し、デスクトップオペレーティングシステム（サーバーではない）上のローカル管理者のアカウントを処理します。その理由は、ユーザーは通常デスクトップ上でのみローカル管理者グループのメンバーであり、サーバー環境での処理からローカル管理者を除外することはトラブルシューティングに役立つためです。したがって、デフォルトの動作を変更したい場合にのみ、このポリシーを有効にしてください。

   除外グループポリシーは、**ローカル管理者のログオンを処理する**ポリシーよりも優先されます。アカウントが両方のポリシーに表示される場合、Profile Managementはそれを処理しません。

   この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ローカル管理者のプロファイルは処理されません。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているとおり、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

ユーザー ストアの移行

Profile Management は、データを失うことなくユーザー ストアを移行するソリューションを提供します。この機能は、ユーザー ストアをよりスケーラブルなファイル サーバーに移行したい場合に役立ちます。

ユーザー ストアを移行するには、 ポリシーを ポリシーと組み合わせて使用します。 ポリシーでは、ユーザー設定（レジストリの変更と同期されたファイル）が以前に保存されていたフォルダーへのパス（以前使用していたユーザー ストアのパス）を指定できます。

パスは、絶対 UNC パスまたはホーム ディレクトリに対する相対パスのいずれかです。どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- システム環境変数（パーセント記号で囲む）
- Active Directory ユーザー オブジェクトの属性（ハッシュ記号で囲む）

例：

- フォルダー `Windows\%ProfileVer%` は、ユーザー ストアの `Windows\W2K3` というサブフォルダーにユーザー設定を保存します（%ProfileVer% が W2K3 に解決されるシステム環境変数である場合）。
- `\\server\share#SAMAccountName#` は、ユーザー設定を UNC パス `\\server\share\<JohnSmith>` に保存します（`#SAMAccountName#` が現在のユーザーに対して JohnSmith に解決される場合）。

パスでは、`%username%` と `%userdomain%` を除くユーザー環境変数を使用できません。

この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。

この設定がここで、または .ini ファイルで構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザー ストアに保存されます。

ポリシー設定の変更が有効になると、以前のユーザー ストアに保存されていたユーザー設定は、ポリシーで指定された現在のユーザー ストアに移行されます。

グループ ポリシーでユーザー ストアの移行を構成するには、次の手順を実行します。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management** の下で、**ユーザー ストアの移行**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. **オプション**ペインで、以前使用したユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンします。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

Citrix Studio で Profile Management ポリシーを構成することもできます。これを行うには、次の手順を実行します。

1. Citrix Studio の左ペインで、**ポリシー**をクリックします。
2. **ポリシーの作成**ウィンドウで、検索ボックスにポリシーを入力します。たとえば、「ユーザー ストアの移行」と入力します。
3. **選択**をクリックして、**ユーザー ストアの移行**ポリシーを開きます。
4. **有効**を選択し、以前使用したユーザー ストアのパスを入力します。
5. **OK**をクリックします。

証明書を保存する

セッション中に証明書ストアにインポートされた個人証明書を保存するには、次の手順に従います。デフォルトでは、証明書は自動的に同期されます。

設定 **同期するディレクトリ** にパス `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` を追加します。オペレーティングシステムの言語によって、この場所のアプリケーションデータフォルダーが決まります。多言語システムを構成するためにポリシーが使用されている場合は、各言語の場所をリストに追加します。

例

英語システムでは、パスは `Application Data\Microsoft\SystemCertificates\My` です。ドイツ語システムでは、`Anwendungsdaten\Microsoft\SystemCertificates\My` です。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

フォルダーリダイレクトの構成

フォルダーリダイレクトはMicrosoft Windowsの機能であり、Profile Managementと併用できます。

> **重要:**
>
> フォルダーリダイレクトは、Microsoft Active Directory (AD) GPOまたはCitrix®ポリシーのいずれか1つの方法のみを使用して構成してください。複数の方法を使用してフォルダーリダイレクトを構成すると、予期しない結果が生じる可能性があります。

> フォルダーリダイレクトを構成するには、次の手順を実行します。

1. 該当するユーザーを、Profile Managementが管理するOUに移動します。
2. GPOを作成し、編集用に開きます。
3. **User Configuration > Administrative Templates > Citrix Components > Profile Management > Folder Redirection**に移動し、リダイレクトするフォルダーを選択します。
4. 「`<folder name>`フォルダーのリダイレクト」ポリシーを有効にし、リダイレクトされたパスを入力します。リダイレクトされたフォルダーを除外として追加しないでください。パスにユーザー名やフォルダー名を追加しないでください。たとえば、**Desktop**フォルダーへのパスを`\\server\share\`に設定した場合、ユーザー環境のフォルダーは`\\server\share\<user name>\Desktop`としてリダイレクトされます。
5. 変更を有効にするには、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。詳しくは、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`を参照してください。

次のフォルダーをリダイレクトできます。

- AppData (ローミング)
- デスクトップ
- スタートメニュー
- ドキュメント
- 画像
- 音楽
- ビデオ
- お気に入り
- 連絡先
- ダウンロード
- リンク
- 検索
- 保存されたゲーム

フォルダーのリダイレクト時には、次の点に注意してください。

- 「**ドキュメント**」フォルダー。ユーザーのホームディレクトリにリダイレクトできます。

- 「**ミュージック**」、「**ピクチャ**」、「**ビデオ**」フォルダー。これらは「**ドキュメント**」フォルダーを基準としたフォルダーにリダイレクトできます。

フォルダーリダイレクトが機能していることを確認する方法

フォルダーのリダイレクトが機能することを確認するには、次の手順を実行します。

1. セッションで、リダイレクトしたフォルダーに移動し、フォルダーを右クリックして、**プロパティ**を選択します。
2. プロパティウィンドウで、「**ショートカット**」タブに移動し、「**ターゲット**」フィールドを確認します。フィールドにリダイレクトされたパスが表示されている場合、フォルダーリダイレクトは機能しています。そうでない場合、フォルダーリダイレクトは機能していません。

フォルダーリダイレクトのログ

> 「**注：**」:

> Profile Managementは、フォルダーリダイレクトが失敗した場合にのみ、Windowsイベントログに情報を書き込みます。

> Profile ManagementはWindowsイベントログに情報を書き込みます。Windowsイベントビューアーの「**アプリケーション**」ペインでイベントを表示できます。この情報は、フォルダーリダイレクト機能の使用時に発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

オフラインプロファイルを構成する

Citrix®オフラインプロファイルは、ネットワークへのアクセスが断続的であるラップトップユーザーまたはモバイルデバイスユーザーを対象としています。この機能により、プロファイルは可能な限り早くユーザーストアと同期できます。ネットワーク接続が切断されても、再起動または休止状態になった後でも、プロファイルはラップトップまたはデバイス上でそのまま維持されます。モバイルユーザーが作業するにつれて、プロファイルはローカルで更新され、ネットワーク接続が再確立されると最終的にユーザーストアと同期されます。

この機能は、ドメインに参加しているコンピューター（Citrix XenClient®を実行しているものを含む）でのみ機能します。ネットワーク接続が永続的である傾向があるサーバーやデスクトップコンピューターでの使用は意図されていません。

通常、オフラインプロファイルとストリーム配信ユーザープロファイルの両方を有効にすることはありません。このため、オフラインプロファイルが優先され、ストリーム配信ユーザープロファイルと「ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する」設定が無効になります。ユーザーが最初にログオンするときは、常にラップトップまたはモバイルデバイスに完全なプロファイルがあることを確認してください。

オフラインプロファイルは、次の方法で構成できます。

- **グループポリシーを使用する**。このポリシーにより、機能の一元的な管理制御が可能になりますが、オフラインプロファイルを使用するラップトップまたはデバイスを含む個別のOUを作成する必要があります。
- **.iniファイルを使用する**。ラップトップやモバイルデバイス専用の特別なOUを作成したくない場合は、より簡単なオプションです。ただし、この機能の制御は実質的に個々のデバイス所有者に委ねられます。このオプションでは、各ラップトップまたはモバイルデバイスに対して1回限りの構成が必要です。

オフラインプロファイルのサポートがグループポリシーを使用して構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。この設定がグループポリシーまたは.iniファイルで構成されていない場合、オフラインプロファイルは無効になります。

グループポリシーを使用する

1. Profile Managementによって管理されるすべてのコンピューターを含むOUを作成します。オフラインプロファイルを使用するラップトップおよびモバイルデバイス、Citrix Virtual Apps™ サーバー、および仮想デスクトップを含めます。
2. ラップトップとモバイルデバイスのみを含む子OUを作成します。
3. グループポリシー管理で、サイト全体のポリシーを適用するベースライングループポリシーオブジェクト（GPO）を作成し、両方のOUにリンクします。
4. すべてのコンピューターに共通するProfile Management設定でベースラインGPOを構成します。
5. 2番目のオフラインGPOを作成し、子OUにリンクします。
6. オフラインGPOを次のように構成します。
    a. プロファイル管理の下で、オフラインプロファイルサポートをダブルクリックします。
    b. 有効を選択し、OKをクリックします。
    c. ラップトップおよびモバイルデバイスにのみ適用したい他の設定を構成します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

.iniファイルの使用

前提条件として、ベースラインGPOとオフラインGPOの両方で、オフラインプロファイルサポートが未構成（デフォルト）であることを確認してください。これらの設定が構成されている場合、.iniファイルの設定は上書きされます。

1. 各ラップトップまたはモバイルデバイスで、プロファイル管理インストーラーによって作成された.iniファイルを見つけます。.iniファイルを見つけるには、ダウンロードに含まれるファイルを参照してください。
2. この行のコメントを解除します（セミコロンを削除して）。

   ```
   ;OfflineSupport=
   ```

3. .iniファイルを保存します。

   変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

カスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) を構成する

CEIP を構成するには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **コンピューターの構成 > ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > 詳細設定**で、**カスタマーエクスペリエンス向上プログラム**をダブルクリックします。
3. **有効**または**無効**を選択し、**OK**をクリックします。
4. 変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` に記載されているように、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。

> **注:**

- ヨーロッパ以外の地域のマシンでは、このポリシーが GPO で構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。このポリシーが GPO または .ini ファイルで構成されていない場合、CEIP は有効になります。
- ヨーロッパ地域のマシンでは、このポリシーが GPO で構成されていない場合、.ini ファイルの値に関係なく CEIP は無効になります。

CEIP の詳細については、「Citrix カスタマーエクスペリエンス向上プログラム (CEIP) について」を参照してください。

クロスプラットフォーム設定の構成

クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション

この記事では、このリリースのProfile Managementのクロスプラットフォーム設定機能でサポートされるアプリケーションとオペレーティングシステム（OS）について説明します。

定義ファイルについて

定義ファイルには、選択されたWindowsアプリケーションの共通のパーソナライズ設定が含まれています。各ファイルとその中の定義により、ユーザーは複数のOSで同じアプリケーションに接続でき、各プラットフォームで実質的に同一のプロファイルが提示されます。たとえば、ユーザーはMicrosoft Officeの2つのインスタンスにアクセスする場合があります。1つはWindows 7仮想デスクトップにインストールされ、もう1つはWindows Server 2003上のCitrix Virtual Apps™で公開されています。どちらのインスタンスにアクセスしても、ユーザーのOfficeエクスペリエンスは一貫しています。

事前構成された定義ファイルは、クロスプラットフォーム設定機能の重要な側面です。サポートされている各アプリケーションには定義ファイルがあります。定義ファイルはXML形式です。

重要: アプリケーションのすべてのOSでの動作を徹底的に分析し、この機能の操作を完全に理解しない限り、定義ファイルの編集は、トラブルシューティングが困難なユーザープロファイルへの予期しない変更を引き起こす可能性があります。このため、Citrix®は、提供されている定義ファイルの編集や新しい定義ファイルの作成をサポートしていません。さらに、Windowsユーザープロファイルの性質上、一部のアプリケーション設定はOS間で複製できません。

さらに、この機能はレジストリおよびアプリケーション設定には適していますが、ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト（たとえば、ブラウ

ザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など）には適していないことに注意してください。

サポートされるオペレーティングシステム

サポートされているシングルセッションOS間、およびサポートされているマルチセッションOS間でプロファイルをローミングできます。

以下がサポートされています（該当する場合はx86およびx64バージョン）：

- **シングルセッションOS**。Windows XP、Windows 7、およびWindows Vista。
- **マルチセッションOS**。Windows Server 2003、Windows Server 2008、およびWindows Server 2008 R2。

サポートされるCitrix製品

クロスプラットフォーム設定機能は、以下のCitrix製品をサポートしています。

- Windows Server 2003以降に対応したXenApp® 5 Feature Pack
- XenDesktop® 4 以降

サポートされるアプリケーション

このリリースでは、以下の定義ファイルが利用可能です。XMLファイル名には、サポートされるアプリケーションとバージョンが示されています。

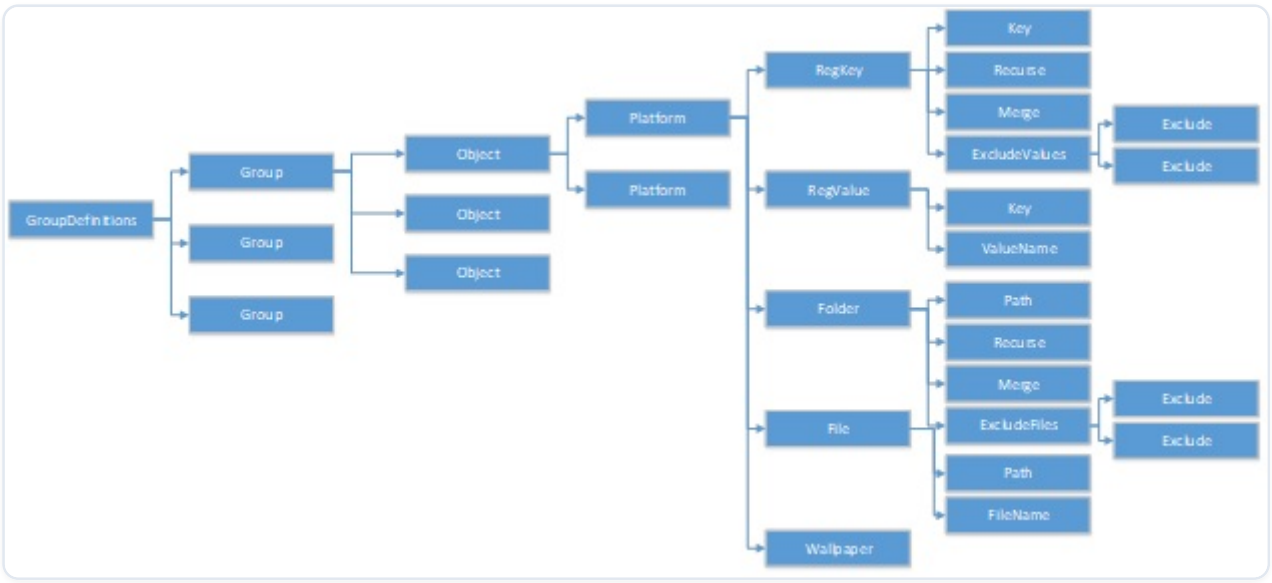
- **Internet Explorer 7 Plus.xml**。このファイルは、Internet Explorerのバージョン7、8、9（お気に入りを除く）のクロスプラットフォームでのローミングをサポートします。お気に入りおよびフィードのローミングはサポートされていません。
- **Office 2007.xml** ファイル。
- **Office 2010.xml** ファイル。
- **Wallpaper.xml**。このファイルは、デスクトップの壁紙のクロスプラットフォームでのローミングをサポートします。テーマのクロスプラットフォームでのローミングはサポートされていません。

重要: 各アプリケーションの定義ファイルは、前述のサポートされるシナリオでのみ使用してください。たとえば、Internet Explorer 7 Plus.xmlは、そのブラウザの複数のバージョン間で設定をローミングします。しかし、Office 2007.xmlまたはOffice 2010.xmlを使用して、Officeのバージョン間で設定をローミングすることはできません。

アプリケーション定義ファイルの構造

この記事では、プロファイル管理アプリケーション定義ファイルのXML構造について説明します。この構造は、アプリケーションプロファイラーとクロスプラットフォーム設定の両方に適用されます。

アーキテクチャ図



- XML宣言とエンコーディング属性

  XML宣言では、属性 \<?xml version="1.0"\> を指定する必要があります。

  Encoding="UTF-8" は推奨される属性です。

- GroupDefinitions

  グループのコレクションのコンテナ。XMLドキュメントのルート要素として機能します。その属性にはversionとGUIDが含まれます。これらは必須属性です。

- グループ

  サブアプリケーションの設定を定義します。その属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- オブジェクト

  サブアプリケーションの1つの設定を定義します。その属性はnameとGUIDです。これらは必須属性です。

- プラットフォーム

  Platformは、異なるオペレーティングシステムで異なる定義を提供します。オペレーティングシステムを指定するために、オプションの属性OSVersionNumberを使用できます。属性がない

場合、すべてのプラットフォームが設定の内部定義を受け入れます。Platformには、次のいずれかの要素が含まれている必要があります: RegKey、RegValue、File、Folder、および Wallpaper。

- RegKey

  レジストリ内のキーとして設定を定義します。Key要素を含める必要があります。オプションのサブ要素としてRecurseとMergeの2つが含まれます。RecurseとMergeは、Profile Managementがキーをローミングする際のパフォーマンスを定義します。別のオプションのサブ要素はExcludeValuesです。ExcludeValuesは、除外できるレジストリ値を定義します。

- RegValue

  レジストリ内の値として設定を定義します。親キーのパスを指定するためにKeyを含める必要があります。

- フォルダー

  フォルダーとして設定を定義します。フォルダーのパスを指定するためにPathを含める必要があります。オプションのサブ要素として、`Recurse` と `Merge` があります。RecurseとMergeは、Profile Managementがフォルダーをローミングする際のパフォーマンスを定義します。別のオプションのサブ要素は`ExcludeFiles`で、これは除外できるファイルを定義します。

- ファイル

  ファイルとして設定を定義します。親フォルダーのパスを指定するためにPathを含め、ファイルのパスを指定するために`FileName`を含める必要があります。

- 壁紙

  すべての壁紙設定を定義します。属性やサブ要素は必要ありません。Profile Managementはこれらの設定を自動的にローミングします。

- Key

  レジストリキーのパス、または親レジストリキーのパスを指定します。KeyはRegKeyとRegValueのサブ要素です。

- ValueName

  レジストリ値の名前を指定します。RegValueのサブ要素です。

- パス

  フォルダのパスまたは親フォルダのパスを指定します。これはFolderとFileのサブ要素です。Profile Managementの変数を採用できます。

- FileName

  ファイル名を指定します。これはFileのサブ要素です。

- 再帰

  RegKeyとFolderのオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Managementはキーとフォルダを再帰的にローミングします。

- マージ

  RegKeyとFolderのオプションのサブ要素です。この要素が存在する場合、Profile Managementはキーとフォルダをマージします（ただし、置換はしません）。

- ExcludeValues

  RegKeyのオプションのサブ要素です。キーをローミングする際に除外できる値を指定します。

- ExcludeFiles

  Folderのオプションのサブ要素です。フォルダをローミングする際に除外できるファイルを指定します。

- 除外

  ExcludeValuesとExcludeFilesのサブ要素です。ファイルまたはレジストリ値の除外項目を指定します。

注

ドキュメントに正しい構文形式が含まれていることを確認してください。これらのファイルがロードされる際、Profile ManagementはCPSValidationSchema.xsd検証ファイルを使用してこれらのファイルをチェックします。検証ファイルはProfile Managementのインストールパスにあります。Profile Managementは不正なファイルを無視し、エラーメッセージをログに記録します。

サンプル

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>



<!-- Copyright 2011 Citrix Systems, Inc. All Rights Reserved. -->
```

```
&lt;GroupDefinitions GUID="748E63D3-426E-4796-9C32-420B25DB2D9F"
Version="4.0.0.0">

<!-- Application Settings -->

&lt;Group GUID="0FCCCF29-0A0E-482d-A77E-3F39A8A854A6" Name="Application
Settings">

<!-- Registry Key Setting Example -->

&lt;Object GUID="637EC13C-2D47-4142-A8EB-3CEA6D53522A"
Name="Software\Application\certain key">

&lt;Platform>

&lt;RegKey>

&lt;Key>Software\Microsoft\Office\certain key&lt;/Key>

&lt;Merge/>

&lt;Recurse/>
```

```
&lt;ExcludeValues>

&lt;Exclude>excluded value 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 2&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded value 3&lt;/Exclude>

&lt;/ExcludeValues>

&lt;/RegKey>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- Registry Value Setting Example -->

&lt;Object GUID="3C896310-10C4-4e5f-90C7-A79F4E653F81"
Name="Software\Application\certain value">

<!-- Folder Setting Example -->
```

```
&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder">

&lt;Platform>

&lt;Folder>

<!-- We can use Citrix variable if necessary -->

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\setting folder&lt;/Path>

&lt;Merge/>

&lt;Recurse/>

&lt;ExcludeFiles>

&lt;Exclude>excluded file 1&lt;/Exclude>

&lt;Exclude>excluded file 2&lt;/Exclude>
```

```
&lt;Exclude>excluded file 3&lt;/Exclude>


&lt;/ExcludeFiles>


&lt;/Folder>


&lt;/Platform>


&lt;/Object>


<!-- File Setting Example -->


&lt;Object GUID="7F8615D0-5E63-4bd0-982D-B7740559C6F9" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\file.txt">


&lt;Platform>


&lt;File>


<!-- We can use Citrix variable if necessary -->


&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application&lt;/Path>
```

```
&lt;FileName>file.txt&lt;/FileName>

&lt;/File>

&lt;/Platform>

&lt;/Object>

<!-- Setting based on different OS -->

&lt;Object GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6" Name="!
CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder">

<!-- Assuming that the folder locates differently when in different
platforms -->

&lt;Platform OSVersionNumber="6.1">

<!-- Win7 -->

&lt;Folder>
```

```
&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder&lt;/Path>

&lt;Recurse/>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>

&lt;Platform OSVersionNumber="10.0">

<!-- Win10 -->

&lt;Folder>

&lt;Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder&lt;/Path>

&lt;Recurse/>

&lt;/Folder>

&lt;/Platform>
```

```
&lt;/Object>


&lt;/Group>


&lt;/GroupDefinitions>
```

クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ

クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行では、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。Windows 2003システムへの一般的な投資を考慮すると、かなりの共存期間が予想されます。この機能は、移行と継続的な共存の両方をサポートすることが期待されています。

このケーススタディは、Office 2007が稼働している既存のWindows 7およびWindows 2008環境から始まり、Windows 8の共有プロビジョニング済み仮想デスクトップを追加します。

このケーススタディは以下で構成されます。

- 初期構成
- 新しいサイトの計画
- 計画の実行
- その他の考慮事項

計画を実行する

フェーズ1: 新しいファイルサーバーを構成する

NewDomainに、クロスプラットフォーム設定（`\\FileServ3`）を管理し、`2k12_Farm`（`\\FileServ2`）のプロファイルを保存するためのファイルサーバーをセットアップします。

このケースでは、プロファイル用とクロスプラットフォーム設定用に別々のファイルサーバーをセットアップすることを選択します。この方法は厳密には必要ありませんが、クロスプラットフォーム設定サーバーを利用可能にする簡単な方法です。プロファイルサーバーは、たとえばDFS名前空間を使用するなど、異なる設計になっている可能性があり、実装に時間がかかる場合があります。

どちらの場合も、共有フォルダー上の移動ユーザープロファイルに関するセキュリティ推奨事項に従って、サーバー共有をセットアップします。詳しくは、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/storage/folder-redirection/deploy-roaming-user-profiles>`を参照してください。

フェーズ2：2k8_FarmのコンピューターをProfile Management 5.0にアップグレードする

手順については、「Profile Managementのアップグレード」を参照してください。

フェーズ3: 展開する定義ファイルを選択する

一部の構成ファイル（定義ファイルと呼ばれます）は、Microsoft Office、Internet Explorer、およびWindowsの壁紙用に提供されています。

重要：Citrix®の担当者から指示がない限り、これらのファイルを更新しないでください。

展開に関連する構成ファイルを選択し、これらのファイルのみを`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`にコピーします。この例では、Office 2007.xmlのみをコピーします。

フェーズ4：2k8_FarmのコンピューターをProfile Management 5.0用に構成する

アップグレードが完了したら、クロスプラットフォーム設定機能を（部分的に）有効にするために、以下の構成変更を行います。この段階では、`\\FileServ3\CrossPlatform`のみが利用可能である必要があります。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`	変更なし。このパスはOldDomainユーザーのみが使用するため、NewDomainユーザーをサポートするために変更する必要はありません。
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは定義ファイルが置かれている場所です。

ポリシー	値	注
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	クロスプラットフォーム設定ストアは両方のドメインのユーザーによって共有されるため、`%USERNAME%` と `%USERDOMAIN%` の両方をパスで指定する必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	有効	ユーザーがNewDomainリソースにアクセスする前に、OldDomainからのクロスプラットフォーム設定がクロスプラットフォーム設定ストアの初期化に使用されるようにします。

マシンのログオンスクリプトに変更は必要ありません。

フォルダーリダイレクトポリシーに変更は必要ありません。

OU `2k8_Farm` はこれで実行状態のままにできます。ユーザーがログオンすると、Profile Management は定義ファイル Office 2007.xml で識別された設定をクロスプラットフォーム設定ストアにコピーします。

フェーズ5：2k12_Farm のマシンを準備する

ファイルサーバーが `2k8_Farm` にセットアップされたので、Citrix仮想デスクトップサイトを構築する時が来ました。Windows 7仮想デスクトップが実行されているときにProfile Management 5.0をインストールします。適切な構成を以下に示します。

ポリシー	値	注
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ2\Profiles\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\%ProfVer%`	このファイル共有は両方のドメインのユーザーによって使用されるため、ドメイン情報を含めることも重要です。
アクティブライトバック	無効	
クロスプラットフォーム設定を有効にする	有効	

ポリシー	値	注
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	無効	すべてのユーザーグループが処理されます。
クロスプラットフォーム定義へのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Definitions`	このパスは定義ファイルが置かれている場所です。この設定は `2k8_Farm` の設定と一致する必要があります。
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	`\\FileServ3\CrossPlatform\Store\%USERNAME%.%USERDOMAIN%`	両方のドメインのユーザーがクロスプラットフォーム設定ストアを共有するため、`%USERNAME%` と `%USERDOMAIN%` の両方をパスで指定する必要があります。この設定は `2k8_Farm` の設定と一致する必要があります。
クロスプラットフォーム設定の作成元	無効	クロスプラットフォーム設定ストア内のプロファイルデータの初期設定にNewDomainからの設定が使用されるのを防ぎます。これにより、OldDomainからの設定が優先されるようになります。

システム環境変数 %ProfVer% を設定するマシンのログオンスクリプトが、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%	注
Windows 2012 上の XenApp サーバー	ウィン2012x64	計画されている 64 ビットサーバーが利用可能になったときに必要です。詳細については、「その他の考慮事項」を参照してください。
Windows 7 デスクトップ	Win7	Windows 7 の 32 ビット版と 64 ビット版の両方が展開されている場合、それぞれに個

マシンタイプ	%PROFVER%	注
		別のプロファイルを持たせることをお勧めします。そのため、%ProfVer% は各プラットフォームで異なるように構成する必要があります。

そのため、OldDomain ユーザーの john.smith は、Windows 7 デスクトップ用に `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win7` に、Citrix 仮想アプリサーバー用に `\\FileServ2\Profiles\john.smith.OldDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

そして、NewDomain ユーザーの william.brown は、Windows 7 デスクトップ用に `\\FileServ2\Profiles\william.brown .NewDomain\Win7` に、XenApp サーバー用に `\\FileServ2\Profiles\william.brown.NewDomain\Win2012x64` にプロファイルを持っています。

ここでも、グループポリシーを使用してフォルダーリダイレクトを設定します。ドメインは Windows Server 2012 に基づいているため、**<グループポリシーオブジェクト名\>** \> **ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windows の設定** \> **フォルダーリダイレクト** からフォルダーリダイレクトを設定します。

ポリシー	値
お気に入り	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Favorites`
マイドキュメント	`\\FileServ2\Redirected\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\Documents`

フォルダーリダイレクトパスに %USERDOMAIN% が追加されました。このポリシーは NewDomain ユーザーにのみ適用されるため、この設定は必須ではありません。しかし、将来的に OldDomain ユーザーを同じサーバーに移行することを決定した場合に役立つ可能性があります。現時点では、OldDomain ユーザーは OldDomain のフォルダーリダイレクトポリシーを引き続き使用し、フォルダーは `\\FileServ1` にリダイレクトされます。

フェーズ 6: ライブテスト

テストは 2 段階で実行します。

1. NewDomain のユーザーのプロファイルデータが正しく動作することを確認します。これらのユーザーは、クロスプラットフォーム設定ストアにデータが設定されていません。クロスプラットフォーム設定を作成するためのポリシーソースが無効に設定されているため、プロファイルの変更は OldDomain に伝播しません。
2. OldDomain の一部のユーザーでテストします。初めてログオンすると、クロスプラットフォーム設定データがプロファイルにコピーされます。その後のログオンでは、いずれかのドメインからの変更がもう一方にコピーされます。OldDomain のユーザーが NewDomain にログオンし、プロファイルデータが存在しない場合（OldDomain が Profile Management 5.0 にアップグレードされて以来、ユーザーが OldDomain でプロファイルを使用していないため）、クロスプラットフォーム設定ストアは更新されません。このトピックで説明されている構成では、ユーザーがドメイン間で設定をローミングする前に、OldDomain にログオンする必要があります。これにより、ユーザー設定（おそらく長年にわたって作成されたもの）が NewDomain のデフォルト設定によって上書きされないようにします。

その他の考慮事項

このケーススタディで構成されているように、Profile ManagementはNewDomainからの設定を使用してクロスプラットフォーム設定ストアを初期化しません。OldDomainからの設定のみがストアの初期化に使用できます。NewDomainに複数の種類のプロファイル（Windows 7 32ビット版やWindows 7 64ビット版など）が含まれるまでは許容されます。あるいは、NewDomainのユーザーがOldDomainのリソースにアクセスする必要があるかもしれません。これらの場合、さらに多くの種類のマシンで「クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース」ポリシーを適切に有効にする必要があります。

> **注意:**

> もし クロスプラットフォーム設定を作成するためのソースが誤って設定されている場合、新しいプロファイルが、多くの蓄積された大切な設定を持つ既存のプロファイルを上書きしてしまう可能性があります。そのため、このポリシーは一度に1つのプラットフォームタイプにのみ設定することをお勧めします。このプラットフォームは通常、ユーザーが保持したいと考える設定が蓄積されている、より古い（成熟した）プラットフォームです。

> このケーススタディでは、いくつかの点を説明するために別々のドメインを使用しています。また、クロスプラットフォーム設定機能は、2つのOU間、あるいは単一のOU内の異なる種類のマシン間で設定のローミングを管理できます。この場合、異なるマシンタイプに対

して「クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース」ポリシーを異なる方法で設定する必要があるかもしれません。この設定はいくつかの方法で実現できます。

- .iniファイル内の設定CPMigrationsFromBaseProfileToCPStoreを使用して、各マシンタイプでポリシーを異なる方法で設定します。「クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース」ポリシーは設定しないでください。
- Windows Management Instrumentation (WMI) フィルタリングを使用して、同じOU上の異なるGPOを管理します。OU内のすべてのマシンに適用されるGPOで共通設定を構成できます。しかし、「クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース」ポリシーのみを追加のGPOに追加し、WMIクエリを使用してフィルタリングします。

アプリケーションプロファイラーを有効にする

この機能は、アプリケーションベースのプロファイル処理を定義します。この機能を有効にすると、定義ファイルで定義された設定のみが同期されます。

アプリケーションプロファイラーを有効にするには、次の手順を実行します。

1. **Profile Management**の下で、**Citrix Virtual Apps™ Optimization settings**フォルダーを開きます。
2. **Enable Citrix Virtual Apps Optimization**ポリシーを有効にします。
3. **Path to Citrix Virtual Apps optimization definitions**ポリシーを有効にします。
4. Citrix Virtual Apps最適化の定義ファイルが配置されているフォルダーを指定します。
5. `gpupdate /force`コマンドを実行して、ポリシーの展開を適用します。

注:

定義ファイルの作成については、定義ファイルの作成を参照してください。

ログオフ中、定義ファイル内の設定のみが同期され、その他のすべての設定は破棄されます。セッションでユーザー文書を表示または更新したい場合は、フォルダーリダイレクトを使用してください。フォルダーリダイレクトの構成については、フォルダーリダイレクトの構成を参照してください。

ユーザーのログオフを強制する

デフォルトでは、問題が発生した場合（たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合）、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。しかし、代わりにProfile Managementを設定して、エラーメッセージを表示し、ユーザーをログオフさせることができます。エラーメッセージはトラブルシューティングに役立ちます。

1. **Profile Management**の下で、**詳細設定**フォルダーを開きます。
2. **問題が発生した場合にユーザーをログオフする**ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。

ファイルセキュリティ属性を同期する

Profile Management が、プロファイルがインストールされているシステムとユーザー ストアの間で、ユーザー プロファイル内のファイルとフォルダーをコピーするときに、セキュリティ属性を同期できます。この機能は、セキュリティ属性間の不整合を防ぐことを目的としています。Windows 10 以降、および Windows Server 2016 で必要です。

この機能はデフォルトで有効になっています。無効にするには、次の手順を実行します。

1. **UPMPolicyDefaults_all.ini** ファイルで、**General Settings** セクションに **SecurityPreserveEnabled=0** を追加します。
2. コマンドラインから、`gpupdate /force` コマンドを実行します。

Profile Management は、プロファイルの最終変更時刻に基づいてプロファイルの変更を同期します。変更がファイルのセキュリティ属性のみに対して行われた場合、Profile Management はファイルを同期しません。

ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに同期と非同期の2つの処理モードを提供します。Windowsは、次のユーザーログオンの処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。

レジストリ値はマシンレベルの設定であり、ユーザーとともにローミングされません。したがって、ユーザーが次の場合、非同期モードは期待どおりに適用されません。

- 異なるマシンにログオンする。

- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

Citrix Profile Managementは、この問題を解決するために**ログオン時にユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする**ポリシーを提供します。このポリシーを有効にすると、Profile Managementはレジストリ値をユーザーとともにローミングします。その結果、ユーザーがログオンするたびに実際の処理モードが適用されます。

この機能は、WindowsおよびWindows Server OSの両方に適用されます。

前提条件

Windowsマシンで非同期モードを有効にするために、追加のアクションは必要ありません。ただし、Windows Serverマシンでこのモードを有効にするには、次の要件を満たしていることを確認してください。

- リモートデスクトップセッションホストの役割がインストールされていること。
- グループポリシーが次のように設定されていること。
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > ログオン > コンピューターの起動とログオン時に常にネットワークを待つ**: 無効
  - **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > システム > グループポリシー > リモートデスクトップサービス経由でログオンする際に非同期ユーザーグループポリシー処理を許可する**: 有効

ポリシーを有効にする

ポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開き、「**ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management**」にアクセスします。
2. Profile Management の下で、「**詳細設定**」をクリックします。
3. 「**ユーザーグループポリシーのログオン時の非同期処理を有効にする**」ポリシーをダブルクリックします。
4. 「**有効**」を選択します。
5. 「**OK**」をクリックします。

変更を有効にするには、コマンドプロンプトから `gpupdate /force` コマンドを実行します。すべてのセッションからログオフし、再度ログオンしてください。詳細については、`<https://`

`docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>` を参照してください。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.ini ファイルの対応する設定が使用されます。
2. この設定がここで構成されておらず、.ini ファイルでも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

ポリシー

プロファイル管理ポリシー

この記事では、.adm および .admx ファイル内のポリシーの重要な側面について説明します。

プロファイル管理変数

このバージョンのプロファイル管理では、グループポリシーと .ini ファイルの両方で以下の変数を使用できます。

ファイルとレジストリエントリを定義するポリシーの場合、以下の変数は次のように展開されます。

変数	バージョン1プロファイルの展開	バージョン2プロファイルの展開
`!ctx_localsettings!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`
`!ctx_roamingappdata!`	`Application Data`	`AppData\Roaming`
`!ctx_startmenu!`	`Start Menu`	`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Start menu`
`!ctx_internetcache!`	`Local Settings\Temporary Internet Files`	`AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files`
`!ctx_localappdata!`	`Local Settings\Application Data`	`AppData\Local`

パスを構築するために使用されるポリシーの場合、`!ctx_osbitness!` 変数はオペレーティングシステムに応じて x86 または x64 に展開されます。以下の変数も展開されます。

- `!ctx_osname!` は、オペレーティングシステムに応じて次のように短い名前に展開されます。

- `!ctx_profilever!` は、オペレーティングシステムに応じて次のようにプロファイルバージョンに展開されます。

プロファイル管理サービスが開始されると、長い名前がログファイルに書き込まれます。

長い名前	短い名前	プロファイルバージョン
`Windows 11`	Win11	v6
`Windows 10 Redstone 6`	ウィンテンアールエスシックス	v6
`Windows 10 Redstone 5`	ウィンテンアールエスファイブ	v6
`Windows 10 Redstone 4`	ウィンテンアールエスフォー	v6
`Windows 10 Redstone 3`	ウィンテンアールエススリー	v6
`Windows 10 Redstone 2`	ウィンテンアールエスツー	v6
`Windows 10 Redstone 1`	ウィンテンアールエスワン	v6
`Windows 10`	Win10	v5
`Windows 8.1`	Win8.1	v4 または v2
`Windows 8`	Win8	v3 または v2
`Windows 7`	Win7	v2
`Windows Server 2022`	Win2022	v6
`Windows Server 2019`	Win2019	v6
`Windows Server 2016`	Win2016	v6
`Windows Server 2012 R2`	ウィン2012R2	v4 または v2
`Windows Server 2012`	Win2012	v3 または v2
`Windows Server 2008 R2`	Win2008	v2
`Windows Server 2008`	Win2008	v2

注:

20H1以降のWindows 10の場合、長い名前はWindows10 \<postfix\>で、対応する短い名前はWin10_\<postfix\>です。\<postfix\>の値は、次の2つの特定のレジストリエントリから取得されます。

- エントリ: `HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion` > 値の名前: DisplayVersion
- エントリ: `HKLM\Software\Microsoft\Windows NT\CurrentVersion` > 値の名前: ReleaseId

最初のレジストリエントリに値が含まれている場合、それが\<postfix\>として使用されます。それ以外の場合は、2番目のレジストリエントリの値が使用されます。

Windows 8、Windows 8.1、Windows Server 2012、およびWindows Server 2012R2の場合、`HLKM\System\CurrentControlset\Services\ProfSvc\Parameters`の下にある`UseProfilePathExtensionVersion`レジストリキーの設定によって、実際のプロファイルバージョンが変更される場合があります。

- 1に設定されている場合、プロファイルバージョンはオペレーティングシステムに応じてv3またはv4になります。
- 設定されていないか0に設定されている場合、プロファイルバージョンはv2です。

バージョン別のポリシー

移行を支援するために、以下の表は、Profile Managementのさまざまなバージョンで利用可能なポリシー、.adm（または.admx）ファイルおよび.iniファイル内の各ポリシーの場所、および各ポリシーが設計されている機能（またはすべての展開の基本構成の一部であるかどうか）を示しています。

.admまたは.admxファイル内の場所は`Citrix > Profile Management`を基準としています。

バージョン 2308 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
AutoExtend	\ProfileContainerSettings	AutoExtend	プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする
AutoExtendThreshold	\AdvancedSettings	AutoExtendThreshold	プロファイルコンテナの自動拡張しきい値
AutoExtendSize	\AdvancedSettings	AutoExtendSize	プロファイルコンテナの自動拡張増分
AutoExtendLimit	\AdvancedSettings	AutoExtendLimit	プロファイルコンテナの自動拡張制限
VhdCapacity	\AdvancedSettings	VhdCapacity	VHD コンテナーのデフォルト容量
DisableConcurrentAccessToProfileContainer	\ProfileContainerSettings	DisableConcurrentAccessToProfileContainer	VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする
DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	\ProfileContainerSettings	DisableConcurrentAccessToOneDriveContainer	VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする
EnableUwpAppsRoaming	\AdvancedSettings	EnableUwpAppsRoaming	UWPアプリのローミング

バージョン2305から利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
UserGroupLevelConfigEnabled	\AdvancedSettings	UserGroupLevelConfigEnabled	ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする
OrderedGroups	\AdvancedSettings	OrderedGroups	ユーザーグループの優先順位を設定する

バージョン 2303 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
PSMidSessionWriteBackSessionLock	\BasicSettings	PSMidSessionWriteBackSessionLock	セッションロック時および切断時のアクティブなライトバックを有効にする
AppAccessControl	\AppAccessControl	AppAccessControl	アプリケーションアクセス制御を有効にする
EnableVHDDiskCompaction	\ProfileContainerSettings	EnableVHDDiskCompaction	VHDディスクの圧縮を有効にする
FreeRatio4Compaction	\AdvancedSettings	FreeRatio4Compaction	VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率
圧縮のためのログオフ回数	\AdvancedSettings	圧縮のためのログオフ回数	VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数
圧縮のためのデフラグ回数	\AdvancedSettings	Nデフラグ4コンパクション	VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

バージョン 2209 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
SharedStoreFileInclusionList	\ファイル重複排除	SharedStoreFileInclusionList	重複排除のために共有ストアに含めるファイル
SharedStoreFileExclusionList	\ファイル重複排除	SharedStoreFileExclusionList	共有ストアから除外するファイル

バージョン 2206 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
SyncGpoStateEnabled	\AdvancedSettings	SyncGpoStateEnabled	ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする
OneDriveContainer	\AdvancedSettings	OneDriveContainer	ローミング OneDrive フォルダーを有効にする
OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingConcurrentSessionEnabled	同時セッションでの Outlook 検索データローミングを有効にする
PSForPendingAreaEnabled	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSForPendingAreaEnabled	ペンディングエリアのプロファイルストリーミングを有効にする

バージョン 2203 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
EnableVolumeReattach	\AdvancedSettings	EnableVolumeReattach	セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする

バージョン 2112 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナー設定	ProfileContainerExclusionListFile	プロファイルコンテナからファイルを除外する

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナー設定	ProfileContainerInclusionListFile	プロファイルコンテナにファイルを含める
VhdStorePath	AdvancedSettings	PathToVhdStore	VHDXファイルのネットワークストレージの場所を指定する

バージョン2109以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

バージョン2106以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
AccelerateFolderMirroring	\FileSystemSettings\FSSynchronization	AccelerateFolderMirroring	フォルダーのミラーリングを高速化する
CredBasedAccessEnabled	AdvancedSettings	CredBasedAccessEnabled	ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする
MultiSiteReplication	AdvancedSettings	MultiSiteReplication	ユーザーストアをレプリケートする

バージョン 2103 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
PSForFoldersEnabled	\PsSettings	PSForFoldersEnabled	フォルダーのプロファイルストリーミング
ProfileContainerLocalCache	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerLocalCache	プロファイルコンテナーのローカルキャッシュ

バージョン2009以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ProfileContainerExclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerExclusionListDir	プロファイルコンテナ
ProfileContainerInclusionListDir	\ProfileContainerSettings	ProfileContainerInclusionListDir	プロファイルコンテナ

バージョン2003以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
FSLogixProfileContainerSupport	\AdvancedSettings	FSLogixProfileContainerSupport	**バージョン2103より前:** FSLogix Profile Containerのマルチセッションライトバックを有効にする **バージョン2103以降:** Profile Containersのマルチセッションライトバックを有効にする

バージョン1909以降で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
MigrateUserStore		MigrateUserStore	UserStore の移行
OutlookEdbBackupEnabled	\AdvancedSettings	OutlookEdbBackupEnabled	Outlook 検索インデックス データベース - バックアップと復元
ApplicationProfilesAutoMigration	\AdvancedSettings	ApplicationProfilesAutoMigration	既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

バージョン 1903 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
ProfileContainer	**バージョン2009より前:** \FileSystemSettings\FSSynchronization **バージョン2009以降:** \ProfileContainer	ProfileContainer	プロファイルコンテナ

バージョン7.18以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
OutlookSearchRoamingEnabled	\AdvancedSettings	OutlookSearchRoamingEnabled	Outlook検索ローミング

バージョン7.16以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
XenAppOptimization Settings	\XenAppOptimization Settings	XenAppOptimization Settings	Citrix Virtual Apps and Desktops アプリケーションの最適化
XenAppOptimization DefinitionPath	\XenAppOptimization Settings	XenAppOptimization DefinitionPath	Citrix Virtual Apps and Desktops アプリケーションの最適化
LargeFileHandlingList	\FileSystemSettings	LargeFileHandlingList	ラージファイルの処理

バージョン 7.15 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイルの場所	.INI ファイルのポリシー	機能
LogonExclusionCheck	\FileSystemSettings	LogonExclusionCheck	ログオン除外チェック

バージョン 5.8 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイルの場所	.INI ファイルのポリシー	機能
StreamingExclusionList	\PsSettings	StreamingExclusionList	プロファイルストリーミング除外リスト

バージョン 5.6 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
`CEIPEnabled`	\AdvancedSettings	`CEIPEnabled`	CEIP
PSMidSessionWriteBackReg		PSMidSessionWriteBackReg	アクティブライトバックレジストリ

バージョン 5.5 から利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
デフォルトの除外リスト	\Registry	DefaultExclusionList Registry	ベース
NTUSER.DAT	\Registry	LastKnownGoodRegistry	NTUSER.DATのバックアップ
デフォルトの除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	DefaultSyncExclusionListDir	ベース

バージョン5.0〜5.4で利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
除外されるグループ		ExcludedGroups	除外グループ
自動構成を無効にする	\詳細設定	DisableDynamicConfig	自動構成
AppData (Roaming) フォルダーをリダイレクト、`Desktop` フォルダーをリダイレクト、...	\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成内)	注: 該当なし	XenDesktopとの統合
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	\プロファイルの処理	ProfileDeleteDelay	ベース

バージョン4.xから利用可能なポリシー

.ADMまたは.ADMX ファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMX ファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	\クロスプラットフォーム設定	CPUserGroupList	クロスプラットフォーム設定

.ADMまたは.ADMXファイル内のポリシー	.ADMまたは.ADMXファイル内の場所	.INIファイル内のポリシー	機能
クロスプラットフォーム設定を有効にする	\クロスプラットフォーム設定	`CPEnabled`	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定の作成元	\クロスプラットフォーム設定	CPMigrationFromBaseProfileToCPStore	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム定義へのパス	\クロスプラットフォーム設定	CPSchemaPath	クロスプラットフォーム設定
クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	\クロスプラットフォーム設定	`CPPath`	クロスプラットフォーム設定
オフラインプロファイルのサポート	\クロスプラットフォーム設定	OfflineSupport	オフラインプロファイル
問題が発生した場合にユーザーをログオフする	\詳細設定	LogoffRatherThanTempProfile	トラブルシューティングの改善

バージョン3.x以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
アクティブライトバック		PSMidSessionWriteBack	アクティブプロファイルのライトバック (バージョン 4.0 では「Active write back」に名称変更)
ミラーリングするフォルダー (バージョン 3.1 以降で利用可能)	\File system\Synchronization	MirrorFoldersList	フォルダーのミラーリング

.ADM または .ADMX ファイルのポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイルのポリシー	機能
ログオフ時にインターネット Cookie ファイルを処理する (バージョン 3.1 以降で利用可能)	\詳細設定	ProcessCookieFiles	フォルダーのミラーリング
リダイレクトされたフォルダーを削除する (バージョン 3.2、3.2.2、および 4.0 で利用可能)	\高度な設定	DeleteRedirectedFolders	フォルダーリダイレクトのサポート
常にキャッシュ	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSAlwaysCache	ストリーミングユーザープロファイル
プロファイルストリーミング	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	`PSEnabled`	ストリーミングユーザープロファイル
ペンディングエリアロックファイルのタイムアウト	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSPendingLockTimeout	ストリーミングユーザープロファイル
ストリーミングされたユーザープロファイルグループ	\ストリーム配信されたユーザープロファイル	PSUserGroupsList	ストリーミングユーザープロファイル

Version 2.x 以降で利用可能なポリシー

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ユーザーストアへのパス		PathToUserStore	ベース
処理されるグループ		ProcessedGroups	ベース
ローカルプロファイルの競合処理	\プロファイル処理	LocalProfileConflictHandling	ベース

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
既存プロファイルの移行	\プロファイル処理	MigrateWindowsProfilesToUserStore	ベース
テンプレートプロファイル	\プロファイル処理	テンプレートプロファイルパス, テンプレートプロファイルオーバーライドローミングプロファイル, テンプレートプロファイルオーバーライドローカルプロファイル	ベース
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	\プロファイル処理	DeleteCachedProfilesOnLogoff	ベース
MFTキャッシュファイルのディレクトリ (バージョン5.0で削除)	\詳細設定	`USNDBPath`	ベース
同期するディレクトリ	\ファイルシステム\同期	SyncDirList	ベース
除外リスト	\レジストリ	ExclusionListRegistry	ベース
同期するファイル	\ファイルシステム\同期	SyncFileList	ベース
包含リスト	\レジストリ	InclusionListRegistry	ベース
除外リスト - ディレクトリ	\ファイルシステム	SyncExclusionListDir	ベース
除外リスト - ファイル	\ファイルシステム	SyncExclusionListFiles	ベース

.ADM または .ADMX ファイル内のポリシー	.ADM または .ADMX ファイル内の場所	.INI ファイル内のポリシー	機能
ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	\詳細設定	LoadRetries	ベース
ローカル管理者によるログオンの処理		ProcessAdmin	ベース
Profile Management を有効にする		ServiceActive	ベース
ログの有効化	\ログ設定	LoggingEnabled	ログ
ログ設定	\ログ設定	LogLevel	ログ
ログファイルの最大サイズ	\ログ設定	MaxLogSize	ログ
ログファイルへのパス (バージョン 2.1 以降で利用可能)	\ログ設定	PathToLogFile	ログ

Profile Management ポリシーの説明とデフォルト

このトピックでは、Profile Management の .adm および .admx ファイル内のポリシーについて説明します。

ポリシーの詳細については、「Profile Management policies」を参照してください。

.adm および .admx ファイルのセクション

Profile Management ポリシーは、次のセクションにあります。

プロファイル管理

Profile Management\\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成)

プロファイル管理\プロファイル処理

プロファイル管理\詳細設定

プロファイル管理\ログ設定

プロファイル管理\レジストリ

プロファイル管理\ファイルシステム

プロファイル管理\ファイルシステム\同期

プロファイル管理\ファイル重複排除

プロファイル管理\ストリーム配信ユーザープロファイル

プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定

グループポリシーオブジェクトエディターでは、ほとんどのポリシーが**コンピューターの構成 \> 管理用テンプレート \> クラシック管理用テンプレート \> Citrix**の下に表示されます。フォルダーリダイレクトポリシーは、**ユーザーの構成 \> 管理用テンプレート \> クラシック管理用テンプレート \> Citrix**の下に表示されます。

グループポリシーエディターでは、ポリシーが**ユーザーの構成**というラベルのセクションにない限り、**コンピューターの構成**の下に表示されます。

プロファイル管理

Profile Management を有効にする

Profile Management を有効にできます。デフォルトでは、展開を容易にするため、Profile Management はログオンまたはログオフを処理しません。Profile Management は、他のすべてのセットアップタスクを完了し、Citrix® ユーザープロファイルが環境でどのように動作するかをテストした後にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、Profile Management は Windows ユーザープロファイルを一切処理しません。

処理されるグループ

プロファイルが処理されるユーザーを指定できます。次のユーザーグループを使用してユーザーを指定します。

- ドメイングループ (ローカル、グローバル、ユニバーサル) の形式で `<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`
- ローカルグループの形式で `GROUP NAME`

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されている場合、Profile Management は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、Profile Management はすべてのユーザーを処理します。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーグループのメンバーが処理されます。

除外されるグループ

プロファイルが処理されないユーザーを指定できます。次のユーザーグループを使用してユーザーを指定できます。

- ドメイングループ (ローカル、グローバル、ユニバーサル) の形式で `<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME>`
- ローカルグループの形式で `GROUP NAME`

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されている場合、Profile Management は、これらのユーザーグループのメンバーを除外します。
2. この設定が無効になっている場合、Profile Management はどのユーザーも除外しません。
3. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、いずれのグループのメンバーも除外されません。

ローカル管理者によるログオンの処理

Profile Management が `BUILTIN\Administrators` グループのメンバーのログオンを処理するかどうかを指定できます。このポリシーを有効にすることは、ほとんどのユーザーがローカル管理者である Citrix Virtual Desktops の展開に推奨されます。

Citrix Virtual Apps 環境は、マルチセッションオペレーティングシステムの典型的なユースケースです。マルチセッションオペレーティングシステムでこのポリシーが無効になっているか、構成されていない場合、Profile Management はドメインユーザーのログオンを処理しますが、ローカル管理者のログオンは処理しません。Citrix Virtual Desktops™ 環境は、シングルセッションオペレーティングシステムの典型的なユースケースです。シングルセッションオペレーティングシステムでは、Profile Management はローカル管理者のログオンを処理します。

ローカル管理者権限を持つドメインユーザーは、通常、割り当てられた仮想デスクトップを持つ Citrix Virtual Desktops ユーザーです。デスクトップで Profile Management に問題が発生した場合、このポリシーにより、ユーザーはログオン処理をバイパスしてログオンし、問題をトラブルシューティングできます。

> **注:**
>
> ドメインユーザーのログオンは、通常、製品ライセンスへの準拠を確実にするために、グループメンバーシップによって課される制限の対象となる場合があります。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、Profile Management はローカル管理者によるログオンを処理しません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、管理者は処理されません。

ユーザーストアへのパス

ユーザーストアのストレージパスを指定できます。ユーザーストアは、ユーザープロファイル（レジストリの変更と同期されたファイル）が保存される中央のネットワークロケーションです。

パスは次のいずれかです。

- ホームディレクトリに対する相対パス。ホームディレクトリは、通常、Active Directory のユーザーの `#homeDirectory#` 属性として構成されます。
- UNCパス。通常、サーバー共有またはDFS名前空間を指定します。
- 無効または未構成。この場合、パスは `#homeDirectory#\Windows` です。

パス設定では、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数（例: `%ProfVer%`）。システム環境変数は、通常、追加の設定が必要です。
- ハッシュで囲まれた Active Directory ユーザーオブジェクトの属性（例: `#sAMAccountName#`）。
- Profile Management変数。詳しくは、Profile Management変数の製品ドキュメントを参照してください。

`%username%`と`%userdomain%`を除き、ユーザー環境変数は使用できません。場所やユーザーなどを完全に定義するために、カスタム属性を作成することもできます。属性では大文字と小文字が区別されます。

例:

- `\\server\share#sAMAccountName#`は、ユーザー設定をUNCパス`\\server\share\JohnSmith`に保存します（現在のユーザーの#sAMAccountName#がJohnSmithに解決される場合）。
- `\\server\profiles$\%USERNAME%.%USERDOMAIN%\!CTX_OSNAME!!CTX_OSBITNESS!`は`\\server\profiles$\JohnSmith.DOMAINCONTROLLER1\Win8x64`に展開される場合があります。

重要: どの属性または変数を使用する場合でも、このポリシーが NTUSER.DAT を含むフォルダーより1レベル上のフォルダーに展開されることを確認してください。たとえば、このファイルが`\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64\UPM_Profile`に存在する場合、ユーザーストアへのパスを`\\server\profiles$\JohnSmith.Finance\Win8x64`に設定します（\UPM_Profile サブフォルダーではありません）。

ユーザー ストアへのパスを指定する際に変数を使用する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

- 複数のファイルサーバーで Citrix ユーザープロファイルを共有する
- OU内およびOU間でプロファイルを管理する
- Profile Managementによる高可用性と災害復旧

構成の優先順位:

1. ユーザーストアへのパスが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリの Windows サブディレクトリに保存されます。このポリシーが無効になっている場合、ユーザー設定はホームディレクトリの Windows サブディレクトリに保存されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ホームドライブ上のWindowsディレクトリが使用されます。

ユーザーストアの移行

Profile Managementが以前使用していたユーザーストアのストレージパス（以前指定した`path to user store`設定）を指定できます。

この設定が構成されている場合、以前のユーザーストアに保存されていたユーザー設定は、現在のユーザーストアに移行されます。

パスは、絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。

どちらの場合も、次の種類の変数を使用できます。

- パーセント記号で囲まれたシステム環境変数
- ハッシュ記号で囲まれたActive Directoryユーザーオブジェクトの属性

例:

- %ProfileVer%がW2K3に解決されるシステム環境変数である場合、`Windows\%ProfileVer%` フォルダーはユーザー設定をユーザーストアの`Windows\W2K3`というサブフォルダーに保存します。
- `#SAMAccountName#`が現在のユーザーに対してJohnSmithに解決される場合、`\\server\share#SAMAccountName#`はユーザー設定をUNCパス`\\server\share\<JohnSmith>`に保存します。

構成の優先順位:

1. パスでは、`%username%`と`%userdomain%`を除くユーザー環境変数を使用できます。この設定が無効になっている場合、ユーザー設定は現在のユーザーストアに保存されます。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルからの対応する設定が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザー設定は現在のユーザーストアに保存されます。

アクティブライトバック

アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能を有効にすると、Profile Managementは、セッション中にローカルコンピューターで変更されたファイルとフォルダーをユーザーストアに同期します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

アクティブライトバックレジストリ

Profile Managementが、セッション中にローカルコンピューターで変更されたレジストリエントリをユーザーストアに同期できるようにします。このポリシーは、**アクティブライトバック**ポリシーと併用してください。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定を構成しない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定をここでも.iniファイルでも構成しない場合、アクティブライトバックレジストリは無効になります。

セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック

このポリシーと**アクティブライトバック**ポリシーの両方が有効になっている場合、プロファイルファイルとフォルダーは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

このポリシーと**アクティブライトバック**および**アクティブライトバックレジストリ**ポリシーの両方が有効になっている場合、レジストリエントリは、セッションがロックまたは切断されたときにのみ書き戻されます。

構成の優先順位:

- この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、このポリシーは無効になります。

オフラインプロファイルのサポート

オフラインプロファイル機能を有効にできます。この機能により、プロファイルは可能な限り早くユーザーストアと同期できます。

この機能は、頻繁にローミングするラップトップまたはモバイルデバイスのユーザーを対象としています。ネットワークが切断されても、再起動または休止状態の後でも、プロファイルはラップトップまたはデバイス上でそのまま維持されます。モバイルユーザーがセッションを開始すると、プロファイルはローカルで更新されます。Profile Managementは、ネットワーク接続が復元された後にのみ、プロファイルをユーザーストアと同期します。

構成の優先順位:

- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、オフラインプロファイルは無効になります。

プロファイル管理\詳細設定

ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数

ロックされたファイルにアクセスする際のリトライ回数を指定できます。

このポリシーを有効にする必要はほとんどありません。

ログオフ中にロックされたファイルがある場合、Profile Management は指定された回数だけファイルへのアクセスを試行し、ユーザー ストアにコピーし直します。しかし通常、Profile Management はコピー操作を成功させるためにファイルを読み取るだけで（書き込みはせず）、ロックされたファイルが存在する場合、Profile Management はローカル プロファイルを削除せず、代わりに「古い」状態のままにします（適切なポリシーが有効になっている限り）。

このポリシーを有効にしないことをお勧めします。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、既定値の 5 回のリトライが使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、既定値が使用されます。

ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する

一部の展開では、`Index.dat` が参照しない余分なインターネットCookieが残されます。継続的なブラウジングの後、ファイルシステムに残された余分なCookieは、プロファイルの肥大化につながる可能性があります。このポリシーを使用すると、Profile Managementを有効にしてIndex.datの処理を強制し、余分なCookieを削除できます。このポリシーはログオフ時間を増加させるため、この問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、Index.dat の処理は行われません。

自動構成を無効にする

Profile Management は、Citrix Virtual Desktops 環境（たとえば、パーソナル vDisk の有無など）を検査し、それに応じてグループ ポリシーを構成します。未構成状態の Profile Management ポリシーのみが調整されるため、行ったカスタマイズはすべて保持されます。

このポリシーにより、展開を高速化し、最適化を簡素化できます。このポリシーを構成する必要はありません。ただし、次のいずれかの操作を行う場合は、自動構成を無効にできます。

- 以前のバージョンからの設定を保持するためにアップグレードする
- トラブルシューティング

自動構成は、実行時に環境に応じてデフォルトのポリシー設定を自動的に構成する動的な構成チェッカーと見なすことができます。これにより、設定を手動で構成する必要がなくなります。実行時環境には以下が含まれます。

- ウィンドウズ OS
- Windows OS のバージョン
- シトリックス バーチャル デスクトップの有無
- パーソナル vDisk の有無

環境が変更された場合、自動構成によって以下のポリシーが変更される可能性があります。

- アクティブライトバック
- 常にキャッシュ
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する
- キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延
- プロファイルストリーミング

異なる OS における上記のポリシーの既定の状態については、次の表を参照してください。

	マルチセッションOS	シングルセッションOS
アクティブライトバック	有効	有効
常にキャッシュ	無効	有効
ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する	有効	Citrix Virtual Desktops が割り当てられているか、Citrix Virtual Desktops がインストールされていない場合は *無効*。それ以外の場合は有効。
キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	0秒	ユーザーの変更が永続的でない場合は60秒。それ以外の場合は0秒。

	マルチセッションOS	シングルセッションOS
プロファイルストリーミング	有効	有効
フォルダーのプロファイル ストリーミング	有効	有効

ただし、自動構成が無効になっている場合、上記のすべてのポリシーはデフォルトで**無効**になります。

Windows 10、Windows Server 2016、および Windows Server 2019 でスタート メニューのローミングが正しく機能するようにするには、次の手順に従います。

1. 自動構成を有効にするか、**自動構成を無効にする**ポリシーを**有効**に設定します。
2. 構成手順を完了します。詳細については、Profile Management のベストプラクティスの記事を参照してください。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここで、または.iniファイルで構成されていない場合、自動構成がオンになります。この場合、環境が変更されるとProfile Managementの設定が変更される可能性があります。

問題が発生した場合にユーザーをログオフする

問題が発生した場合に Profile Management がユーザーをログオフさせるかどうかを指定できます。

このポリシーが無効になっているか、構成されていない場合、問題が発生すると Profile Management はユーザーに一時プロファイルを提供します。たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合などです。

構成の優先順位:

1. この設定が有効になっている場合、エラーメッセージが表示され、ユーザーはログオフされます。この設定により、問題のトラブルシューティングが簡素化されます。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここで、または.iniファイルで構成されていない場合、一時プロファイルが提供されます。

カスタマー エクスペリエンス向上プログラム

デフォルトでは、匿名の統計情報と使用状況データを送信することで、Citrix製品の品質とパフォーマンスを向上させるために、カスタマーエクスペリエンス向上プログラムが有効になっています。

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

Outlook の検索インデックス ローミングを有効にする

このポリシーを有効にすると、Profile Management は、Outlook 検索データをユーザープロファイルとともに自動的にローミングすることで、ネイティブの Outlook 検索エクスペリエンスをユーザーに提供します。このポリシーには、Outlook の検索インデックスを保存するための追加ストレージが必要です。

このポリシーを有効にするには、ログオフしてから再度ログオンしてください。

Outlook 検索インデックス データベース – バックアップと復元

Outlook の検索インデックス ローミングを有効にするポリシーが有効になっている場合に、ログオン中に Profile Management が何を行うかを指定できます。

このポリシーが有効になっている場合、Profile Management は、ログオン時に検索インデックス データベースが正常にマウントされるたびに、そのデータベースをバックアップします。Profile Management は、そのバックアップを検索インデックス データベースの良好なコピーとして扱います。データベースの破損により検索インデックス データベースのマウントが失敗した場合、Profile Management は検索インデックス データベースを最後に確認された良好なコピーに戻します。

> **注:**
>
> 新しいバックアップが正常に保存されると、Profile Managementは以前に保存されたバックアップを削除します。バックアップは利用可能なVHDXストレージを消費します。

Outlook検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする

Profile Managementにより、同じユーザーの同時セッションでネイティブのOutlook検索エクスペリエンスが提供されます。このポリシーは、Outlookの検索インデックスローミングポリシーと併用してください。

このポリシーが有効な場合、各同時セッションは個別のOutlook OSTファイルを使用します。

デフォルトでは、Outlook OSTファイルを保存するために使用できるVHDXディスクは2つだけです（ディスクごとに1ファイル）。ユーザーがさらにセッションを開始した場合、そのOutlook OSTファイルはローカルユーザープロファイルに保存されます。Outlook OSTファイルを保存するためのVHDXディスクの最大数を指定できます。

プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする

マルチセッションシナリオでプロファイルコンテナのライトバックを有効にできます。

> **注:**
>
> Citrix Profile Management プロファイルコンテナは、Citrix Profile Management 2103以降で利用可能です。FSLogix Profile Container は、Citrix Profile Management 2003以降で利用可能です。
>
> ポリシーが有効になっている場合、すべてのセッションでの変更はプロファイルコンテナにライトバックされます。そうでない場合、最初のセッションのみがプロファイルコンテナで読み取り/書き込みモードであるため、最初のセッションでの変更のみが保存されます。

FSLogix Profile Containerでこのポリシーを使用するには、以下の前提条件が満たされていることを確認してください。

- FSLogix Profile Container機能がインストールされ、有効になっていること。
- FSLogixでプロファイルタイプが **読み取り/書き込みプロファイルを試行し、読み取り専用にフォールバックする** に設定されていること。

ユーザーストアをレプリケートする

リモートユーザープロファイルストアを、ログオンおよびログオフごとに複数のパスにレプリケートできます。これにより、Profile Managementはユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供できます。

このポリシーを有効にすると、システムI/Oが増加し、ログオフが長くなる可能性があります。

> **注:**
>
> - この機能は、ユーザーストアとフルプロファイルコンテナの両方で利用できます。

- レプリケートされたプロファイルコンテナは、ユーザーログオンのプロファイル冗長性を提供しますが、セッション内フェールオーバーには対応していません。

ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする

ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にできます。

デフォルトでは、Citrix Profile Management は現在のユーザーを偽装してユーザーストアにアクセスします。そのため、現在のユーザーがユーザーストアにアクセスする権限を持っている必要があります。状況によっては、現在のユーザーがアクセス権を持たないストレージリポジトリ（Azure Filesなど）にユーザーストアを配置したい場合があります。そのような場合は、このポリシーを有効にして、Profile Management がストレージリポジトリの資格情報を使用してユーザーストアにアクセスできるようにします。

Profile Management が資格情報を使用してユーザーストアにアクセスできるようにするには、資格情報をWorkspace Environment Management™ (WEM) または Windows 資格情報マネージャーに保存します。Profile Management を実行している各マシンで同じ資格情報を構成する必要をなくすために、Workspace Environment Management を使用することをお勧めします。Windows 資格情報マネージャーを使用する場合は、ローカルシステムアカウントを使用して資格情報を安全に保存してください。

注:

このポリシーは、ファイルベースと VHDX ベースの両方のユーザー ストアで利用できます。Profile Management のバージョン 2212 より前では、このポリシーは VHDX ベースのユーザー ストアでのみ利用できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

VHDXファイルの保存パスを指定します

Profile Management で使用されるVHDXファイルを保存するためのストレージパスを指定できます。

Citrix Profile Management は、次のVHDXベースのポリシーを提供します: ネイティブのOutlook検索エクスペリエンスの有効化、Citrix Profile Management プロファイルコンテナ、およびフォルダミラーリングの高速化。デフォルトでは、VHDXファイルはユーザーストアに保存されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

VHD コンテナーのデフォルト容量

VHD コンテナーのデフォルトのストレージ容量 (GB 単位) を指定できます。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは50 (GB) です。

セッションで VHDX ディスクを自動的に再アタッチする

このポリシーを有効にすると、Profile Management は VHDX ベースのポリシーの高い安定性を確保します。デフォルトでは、このポリシーは有効になっています。

このポリシーが有効になっている場合、Profile Management は VHDX ベースのポリシーで使用されている VHDX ディスクを監視します。いずれかのディスクがデタッチされた場合、Profile Management はそのディスクを自動的に再アタッチします。

ログオン時のユーザーグループポリシーの非同期処理を有効にする

Windowsは、ユーザーグループポリシーに同期モードと非同期モードの2つの処理モードを提供します。Windowsは、次のユーザーログオンの処理モードを決定するためにレジストリ値を使用します。レジストリ値が存在しない場合、同期モードが適用されます。レジストリ値はマシンレベルの設定であり、ユーザーとともにローミングされません。したがって、ユーザーが次の場合、非同期モードは期待どおりに適用されません。

- 異なるマシンにログオンする。
- ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するポリシーが有効になっている同じマシンにログオンする。

このポリシーを有効にすると、レジストリ値はユーザーとともにローミングされます。その結果、ユーザーがログオンするたびに処理モードが適用されます。

VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率

VHDディスクの圧縮を有効にする が有効な場合に適用されます。VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率を指定できます。ユーザーログオフ時に空き領域の比率が指定された値を超えると、ディスクの圧縮がトリガーされます。

空き領域の比率 = (現在のVHDファイルサイズ – 必要な最小VHDファイルサイズ*) ÷ 現在のVHDファイルサイズ

* Microsoft Windowsオペレーティングシステムの `MSFT_Partition` クラスのGetSupportedSizeメソッドを使用して取得されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、デフォルト値20 (%)が使用されます。

VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数

VHDディスクの圧縮を有効にする が有効な場合に適用されます。VHDディスクの圧縮をトリガーするユーザーログオフ回数を指定できます。

最後の圧縮以降のログオフ回数が指定された値に達すると、ディスク圧縮が再度トリガーされます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、デフォルト値5が使用されます。

VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする

VHDディスク圧縮を有効にする が有効な場合に適用されます。VHDディスク圧縮のファイルデフラグを無効にするかどうかを指定できます。

VHDディスク圧縮が有効な場合、VHDディスクファイルはまずWindowsに組み込まれている `defrag` ツールを使用して自動的にデフラグされ、その後圧縮されます。VHDディスクのデフラグはより良い圧縮結果をもたらしますが、無効にするとシステムリソースを節約できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

2. この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、デフラグはデフォルトで有効になります。

プロファイルコンテナの自動拡張しきい値

プロファイルコンテナが自動拡張をトリガーするストレージ容量の使用率を指定できます。

構成の優先順位:

- ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトはストレージ容量の90 (%) です。

プロファイルコンテナの自動拡張増分

自動拡張がトリガーされたときに、プロファイルコンテナが自動的に拡張するストレージ容量（GB単位）を指定できます。

構成の優先順位:

- ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは10 (GB) です。

プロファイルコンテナの自動拡張制限

自動拡張がトリガーされたときに、プロファイルコンテナが自動的に拡張できる最大ストレージ容量（GB単位）を指定できます。

構成の優先順位:

- ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトは80 (GB) です。

OneDriveコンテナを有効にする

OneDriveフォルダーをユーザーとともにローミングできるようにします。

OneDriveコンテナは、VHDXベースのフォルダーローミングソリューションです。Profile Managementは、ファイル共有上にユーザーごとにVHDXファイルを作成し、ユーザーのOneDriveフォルダーをVHDXファイルに保存します。VHDXファイルは、ユーザーがログオンするときにアタッチされ、ログオフするときにデタッチされます。

UWP アプリのローミング

UWP (Universal Windows Platform) アプリをユーザーとともにローミングできるようにします。その結果、ユーザーは異なるデバイスから同じUWPアプリにアクセスできます。

このポリシーが有効な場合、Profile ManagementはUWPアプリを個別のVHDXディスクに保存することで、ユーザーとともにローミングできるようにします。これらのディスクは、ユーザーのログオン中にアタッチされ、ログオフ中にデタッチされます。

構成の優先順位:

この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。 この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この機能は無効になります。

ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする

このポリシーを有効にすると、マシンレベルのポリシー設定がユーザーレベルで機能し、ユーザーレベルの設定がマシンレベルの設定を上書きします。

構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

ユーザーグループの優先順位を設定する

ユーザーグループの優先順位を指定します。この順序は、ユーザーが異なるポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合に、どのグループが優先されるかを決定します。

ユーザーが競合するポリシー設定を持つ複数のグループに属している場合、以下を考慮してください:

- ユーザーがこのポリシーで定義されている1つ以上のグループに属している場合、最も優先順位の高いグループが優先されます。
- ユーザーがこのポリシーで定義されているどのグループにも属していない場合、アルファベット順で最も早くリストされているSIDを持つグループが優先されます。

構成の優先順位:

1. ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、優先順位は指定されません。

Profile Management\Citrix Virtual Apps最適化設定

Citrix Virtual Apps™最適化を有効にする

この機能を有効にすると、ユーザーが起動または終了する公開アプリケーションに固有の設定のみが同期されます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、Citrix Virtual Appsの最適化設定は適用されません。

Citrix Virtual Apps最適化定義へのパス

Citrix Virtual Appsの最適化の定義ファイルを保存するフォルダーを指定できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここまたは.iniファイルで構成されていない場合、Citrix Virtual Appsの最適化設定は適用されません。

> **注:**

> フォルダーはローカルストレージまたはSMBファイル共有に配置できます。

プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定

クロスプラットフォーム設定を有効にする

クロスプラットフォーム設定を有効にできます。クロスプラットフォーム設定機能は、主にWindows 7およびWindows Server 2008からWindows 8およびWindows Server 2012への移行に使用されます。この移行では、Microsoft Office 2003またはOffice 2007からOffice 2010への移行も含まれる場合があります。

既定では、展開を容易にするため、クロスプラットフォーム設定は無効になっています。このポリシーは、この機能の十分な計画とテストを行った後にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ

クロスプラットフォーム設定機能が適用されるWindowsユーザーグループを指定できます。たとえば、このポリシーを使用して、テストユーザーグループのプロファイルのみを処理できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが構成されている場合、Profile Managementのクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。このポリシーが無効になっている場合、この機能は、処理済みグループポリシーで指定されたすべてのユーザーを処理します。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

クロスプラットフォーム定義へのパス

定義ファイルが置かれているネットワークの場所を指定できます。

このパスはUNCパスである必要があります。ユーザーはこの場所に読み取りアクセス権を持っている必要があり、管理者は書き込みアクセス権を持っている必要があります。この場所は、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) ファイル共有である必要があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

クロスプラットフォーム設定ストアへのパス

クロスプラットフォーム設定ストアへのパスを指定できます。このストアは、ユーザーのクロスプラットフォーム設定が保存されるフォルダーを指します。

このストアは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが配置されているユーザーストアにあります。ユーザーはストアへの書き込みアクセス権を持っている必要があります。

パスは絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。**ユーザーストアへのパス**で使用される変数を使用できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、`Windows\PM_CP` パスが使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既定値が使用されます。

クロスプラットフォーム設定の作成元

そのプラットフォームのOUでこのポリシーが有効になっている場合、プラットフォームをベースプラットフォームとして指定できます。このポリシーは、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータを移行します。既定では、このポリシーは無効になっています。

各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、個別のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアをシードするためのベースプラットフォームとして使用するプラットフォームのプロファイルデータを決定します。

このポリシーが有効になっている場合、次のいずれかの状況が発生すると、Profile Management は、シングルプラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。

- クロスプラットフォーム設定ストアには、データのない定義ファイルが含まれています。
- シングルプラットフォームプロファイルのキャッシュデータは、ストア内の定義データよりも新しいです。

> **重要:**
>
> このポリシーが複数のOU、ユーザーオブジェクト、またはマシンオブジェクトで有効になっている場合、最初のユーザーがログオンするプラットフォームがベースプロファイルになります。

プロファイル管理\ファイルシステム

除外リスト - ファイル

Profile Managementが同期中に無視するファイルを指定できます。ファイル名はユーザープロファイル（%USERPROFILE%）に対する相対パスである必要があります。ワイルドカードが許可されており、再帰的に適用されます。

例:

- `Desktop\Desktop.ini` は、`Desktop` フォルダー内の `Desktop.ini` ファイルを無視します。
- `%USERPROFILE%*.tmp` は、プロファイル全体で `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。
- `AppData\Roaming\MyApp*.tmp` は、プロファイルの一部で `.tmp` 拡張子を持つすべてのファイルを無視します。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、ファイルは除外されません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ファイルは除外されません。

デフォルトの除外リストを有効にする - ディレクトリ

Profile Managementが同期中に無視するディレクトリのデフォルトリストを指定できます。このポリシーを使用して、GPO除外ディレクトリを手動で入力することなく指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Management はデフォルトでどのディレクトリも除外しません。
2. ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementは.iniファイルの値を使用します。
3. ここでも.iniファイルでもこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementはデフォルトでどのディレクトリも除外しません。

除外リスト - ディレクトリ

Profile Managementが同期中に無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイル（%USERPROFILE%）に対する相対パスとして指定する必要があります。

例:

- デスクトップはユーザープロファイル内のデスクトップフォルダーを無視します

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

ログオン除外チェック

ユーザーストア内のプロファイルに除外されたファイルまたはフォルダーが含まれている場合に、Profile Managementが何を行うかを指定できます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっているか、デフォルト値の**除外されたファイルまたはフォルダーを同期する**に設定されている場合、ユーザーがログオンすると、Profile Managementはそれらの除外されたファイルまたはフォルダーをユーザーストアからローカルプロファイルに同期します。
2. この設定が**除外されたファイルまたはフォルダーを無視する**に設定されている場合、Profile Managementはユーザーログオン時にユーザーストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを無視します。この設定が**除外されたファイルまたはフォルダーを削除する**に設定されている場合、Profile Managementはユーザーログオン時にユーザーストア内の除外されたファイルまたはフォルダーを削除します。
3. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile Managementは除外されたファイルまたはフォルダーをユーザーストアからローカルプロファイルに同期します。

大容量ファイルの処理 - シンボリックリンクとして作成されるファイル

シンボリックリンクとして作成されるファイルを指定できます。この設定は、ログオンパフォーマンスを向上させ、大容量ファイルを処理するために使用されます。

ファイルを参照するポリシーでワイルドカードを使用できます。例: `!ctx_localappdata!\Microsoft\Outlook*.OST`。

オフラインOutlookデータファイル（`*.ost`）を処理するには、**Outlook**フォルダーがProfile Managementで除外されていないことを確認してください。

これらのファイルは、複数のセッションで同時にアクセスすることはできません。

プロファイル管理\ファイルシステム\同期

同期するディレクトリ

親フォルダーが除外されている場合に、Profile Managementに同期させたいフォルダーを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対する相対パスである必要があります。

Profile Managementは、インストールされているシステムとユーザーストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。ユーザープロファイルのサブフォルダーをこのリストに追加して含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないフォルダーのみが同期されます。

同期するファイル

親フォルダーが除外されている場合に、Profile Management で同期するファイルを指定できます。

このリストのパスは、ユーザープロファイルに対する相対パスである必要があります。ワイルドカードはファイル名とフォルダー名で使用できます。ただし、ワイルドカードが再帰的に適用されるのはファイル名のみです。

例:

- AppData\Local\Microsoft\Office\Access.qat は、デフォルト設定で除外されているフォルダー内のファイルを指定します。
- AppData\Local\MyApp*.cfg は、プロファイルフォルダー AppData\Local\MyApp およびそのサブフォルダー内の拡張子 .cfg を持つすべてのファイルを指定します。

Profile Management は、インストールされているシステムとユーザー ストアの間で、各ユーザーのプロファイル全体を同期します。このリストにファイルを追加して、ユーザープロファイルに含める必要はありません。

このポリシーを無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、ユーザープロファイル内の除外されていないファイルのみが同期されます。

ミラーリングするフォルダー

このポリシーは、トランザクションフォルダー（参照フォルダーとも呼ばれる）に関連する問題を解決するのに役立ちます。この種のフォルダーには相互依存ファイルが含まれており、1つのファイルが他のファイルを参照します。

このポリシーを使用すると、Profile Management はユーザープロファイルを同期する際に、トランザクションフォルダーとその内容を単一のエンティティとして処理します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダーのミラーリングを高速化する

このポリシーと**ミラーリングするフォルダー**ポリシーの両方を有効にすると、Profile Managementはミラーリングされたフォルダーを VHDXベースの仮想ディスクに保存します。ログオン時に仮想ディスクをアタッチし、ログオフ時にデタッチします。このポリシーを有効にすると、ユーザーストアとローカルプロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなり、フォルダーのミラーリングが高速化されます。

プロファイル管理\ファイル重複排除

ユーザーストア内のさまざまなユーザープロファイルに同一のファイルが存在する場合があります。ユーザーストアにファイルの重複インスタンスが保存されていると、ストレージコストが増加します。

ファイル重複排除ポリシーにより、Profile Management はユーザーストアから重複ファイルを削除し、それらの単一インスタンスを中央の場所 (*共有ストア* と呼ばれる) に保存できます。これにより、ユーザーストアでのファイルの重複が回避され、ストレージコストが節約されます。

重複排除のために共有ストアに含めるファイル

ファイル重複排除を有効にし、重複排除のために共有ストアに含めるファイルを指定できます。

共有ストアから除外するファイル

共有ストアから除外するファイルを指定できます。このポリシーは、*重複排除のために共有ストアに含めるファイル* ポリシーと併用してください。

プロファイル管理\ログ設定

ログの有効化

Profile Management のログ記録を有効にするかどうかを指定できます。このポリシーは、Profile Management のトラブルシューティングを行う場合にのみ有効にしてください。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、エラーのみがログに記録されます。このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、エラーのみがログに記録されます。

ログ設定

Profile Management がログに記録するイベントまたはアクションを選択できます。Citrix の担当者から指示された場合にのみ、すべてを選択してください。

構成の優先順位:

1. ポリシーがここで構成されていない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、エラーと一般情報がログに記録されます。

このポリシーのチェックボックスは、.ini ファイルの次の設定に対応しています: LogLevelWarnings, LogLevelInformation, LogLevelFileSystemNotification, LogLevelFileSystemActions, LogLevelRegistryActions, LogLevelRegistryDifference, LogLevelActiveDirectoryActions, LogLevelPolicyUserLogon, LogLevelLogon, LogLevelLogoff, and LogLevelUserName.

ログファイルの最大サイズ

Profile Management ログファイルの最大サイズをバイト単位で指定できます。

Profile Management ログファイルの最大サイズの既定値は 10 MB です。十分なディスク容量がある場合は、この値を増やしてください。ログファイルが最大サイズを超えると、次のようになります。

1. 既存のファイルのバックアップ (.bak) が削除されます。
2. ログファイルの名前が .bak に変更されます。
3. 新しいログファイルが作成されます。

ログファイルは `%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager` または **ログファイルへのパス** ポリシーで指定された場所に作成されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、既定値の 10 MB が使用されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、既定値が使用されます。

ログファイルへのパス

ログファイルを保存する代替パスを構成できます。

パスはローカルドライブまたはネットワークベースのドライブ (UNC パス) を指すことができます。

- 大規模な分散環境では、リモートドライブが推奨されます。ただし、リモートドライブは大量のネットワークトラフィックを生成する可能性があり、ログファイルには適さない場合があります。
- ローカルドライブは、永続的なハードドライブを持つプロビジョニングされた仮想マシンでよく使用されます。

この設定により、マシンの再起動時にログファイルが保持されます。永続的なハードドライブを持たない仮想マシンの場合、UNCパスを設定することでログファイルを保持できます。ただし、マシンのシステムアカウントはUNC共有への書き込みアクセス権を持っている必要があります。オフラインプロファイル機能によって管理されるラップトップには、ローカルパスを使用してください。

ログファイルにUNCパスを使用する場合、Citrixはログファイルフォルダーに適切なアクセス制御リストを適用することを推奨します。アクセス制御により、承認されたユーザーまたはコンピューターアカウントのみが保存されたファイルにアクセスできるようになります。

例:

- D:\LogFiles\ProfileManagement.
- `\\server\LogFiles\ProfileManagement`

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトの場所である%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManagerが使用されます。

プロファイル管理\プロファイルコンテナー設定

プロファイルコンテナ

VHDXベースのネットワークディスク（プロファイルコンテナー）を使用してユーザープロファイルを保存できます。ユーザープロファイルを全体または一部保存するために使用できます。ユーザーログオン時に、プロファイルコンテナーはユーザー環境にマウントされ、プロファイルフォルダーはすぐに利用可能になります。

プロファイルコンテナのローカルキャッシュを有効にする

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナーのローカルキャッシュを有効にできます。このポリシーは、プロファイルコンテナーがユーザープロファイル全体に対して有効になっている場合にのみ適用されます。

ポリシーが**有効**に設定されている場合、各ローカルプロファイルは、そのCitrix Profile Managementプロファイルコンテナーのローカルキャッシュとして機能します。プロファイルストリーミングが使用されている場合、ローカルにキャッシュされたファイルはオンデマンドで作成されます。それ以外の場合は、ユーザーログオン時に作成されます。

プロファイルコンテナから除外するフォルダー

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナーから除外するフォルダーを指定できます。

プロファイルコンテナに含めるフォルダー

親フォルダーが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナーに保持するフォルダーを指定できます。

このリストのフォルダーは、除外されたフォルダーのサブフォルダーである必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。

この設定を無効にすると、有効にして空のリストを構成した場合と同じ効果があります。

プロファイルコンテナに含めるファイル

親フォルダーが除外されている場合に、Citrix Profile Managementプロファイルコンテナーに含めるファイルを指定できます。

このリストのファイルは、除外されたフォルダー内にある必要があります。そうでない場合、この設定は機能しません。

プロファイルコンテナから除外するファイル

Citrix Profile Managementプロファイルコンテナーから除外するファイルを指定できます。

VHDディスクの圧縮を有効にする

Profile ManagementのVHDディスク圧縮を有効にできます。有効にすると、特定の条件が満たされたときに、ユーザーのログオフ時にVHDディスクが自動的に圧縮されます。このポリシーにより、プロファイルコンテナ、OneDriveコンテナ、およびミラーフォルダコンテナによって消費されるストレージスペースを節約できます。

必要性と利用可能なリソースに応じて、詳細設定にある「**VHDディスク圧縮をトリガーする空き領域の比率**」、「**VHDディスク圧縮をトリガーするログオフ回数**」、「**VHDディスク圧縮のデフラグを無効にする**」の各ポリシーを使用して、デフォルトのVHD圧縮設定と動作を調整できます。

構成の優先順位:

1. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、この機能は無効になります。

プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする

プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にするかどうかを指定します。有効にすると、すべてのVHD自動拡張設定がプロファイルコンテナに適用されます。

構成の優先順位:

- ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする

デフォルトでは、VHDコンテナは同時アクセスを許可します。この設定を有効にすると、一度に1つのアクセスのみが許可されます。この機能は、プロファイルコンテナとOneDriveコンテナに適用されます。

> **注:**
>
> コンテナーベースのプロファイルソリューションでは、プロファイルコンテナーに対してこの設定を有効にすると、*プロファイルコンテナーの複数セッション書き戻しを有効にする*設定が自動的に無効になります。

> 構成の優先順位:

1. ここでこのポリシーが構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、設定は無効になります。

プロファイル管理\プロファイルの処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

ログオフ後にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除するかどうかを指定できます。

このポリシーが有効な場合、ユーザーのローカルプロファイルキャッシュはユーザーログオフ後に削除されます。この設定はターミナルサーバーに推奨されます。このポリシーが無効な場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

> **注:**
>
> 「キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延」ポリシーを使用して、ログオフ時にプロファイルキャッシュがいつ削除されるかを制御できます。

> 構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、キャッシュされたプロファイルは削除されません。

キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルが削除されるまでの遅延のオプションの延長を指定できます。ログオフ中にプロセスがファイルまたはユーザーレジストリハイブを開い

たままにしていることがわかっている場合、遅延を延長することは役立ちます。大規模なプロファイルの場合、この設定はログオフを高速化することもできます。

値が0の場合、ログオフプロセスの最後にプロファイルをすぐに削除します。

プロファイル管理は1分ごとにログオフをチェックします。値が60の場合、最後のチェックがいつ行われたかによって、ユーザーログオフ後1〜2分以内にプロファイルが削除されることを保証します。

重要: このポリシーは、「ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する」が有効になっている場合にのみ機能します。

このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、プロファイルはすぐに削除されます。

既存プロファイルの移行

ユーザーストアが空の場合に、プロファイル管理がどの種類のユーザープロファイルをユーザーストアに移行するかを指定できます。

ユーザーがユーザーストアにプロファイルを持っていない場合、プロファイル管理はログオン中に既存のプロファイルを「オンザフライ」で移行できます。ローミングプロファイルまたはリモートデスクトップサービスプロファイルを移行する場合は、**ローミング**を選択します。

ログオン中に次のイベントが発生します。ユーザーがユーザーストアにCitrixユーザープロファイルではなくWindowsプロファイルを持っている場合、プロファイル管理はWindowsプロファイルをユーザーストアに移行します。このプロセス後、プロファイル管理は、同じユーザーストアへのパスで構成された現在のセッションおよび他のセッションでユーザーストアプロファイルを使用します。

構成の優先順位:

1. この設定が有効な場合、プロファイル移行は、ローミングプロファイルとローカルプロファイル（デフォルト）、ローミングプロファイルのみ、ローカルプロファイルのみに対してアクティブ化できます。または、プロファイル移行を無効にできます。
2. このポリシーが無効な場合、かつユーザーストアにCitrixユーザープロファイルが存在しない場合、既存のWindowsプロファイル作成メカニズムが使用されます。
3. プロファイル移行が無効で、ユーザー ストアにCitrixユーザープロファイルが存在しない場合、既存のWindowsプロファイル作成メカニズムが使用されます。
4. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。

5. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、Profile Managementは既存のローカルプロファイルと移動プロファイルをユーザー ストアに移行します。

既存のアプリケーションプロファイルの自動移行

この設定は、異なるオペレーティングシステム間で既存のアプリケーションプロファイルを自動的に移行することを有効または無効にします。アプリケーションプロファイルには、**AppData**フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE`の下のレジストリエントリの両方が含まれます。この設定は、異なるオペレーティングシステム間でアプリケーションプロファイルを移行したい場合に役立ちます。

たとえば、オペレーティングシステム (OS) をWindows 10バージョン1803からWindows 10バージョン1809にアップグレードする必要があるとします。この設定が有効になっている場合、Profile Managementは、各ユーザーが最初にログオンしたときに、既存のアプリケーション設定をWindows 10バージョン1809に自動的に移行します。**AppData**フォルダー内のアプリケーションデータと、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE`の下のレジストリエントリが移行されます。

既存のアプリケーションプロファイルが複数ある場合、Profile Managementは次の優先順位で移行を実行します。

1. 同じOSタイプのプロファイル（シングルセッションOSからシングルセッションOS、マルチセッションOSからマルチセッションOS）。
2. 同じWindows OSファミリーのプロファイル（例：Windows 10からWindows 10、またはWindows Server 2016からWindows Server 2016）。
3. 以前のバージョンのOSのプロファイル（例：Windows 7からWindows 10、またはWindows Server 2012からWindows 2016）。
4. 最も近いOSのプロファイル。

> **注:**
>
> ユーザー ストアパスに`!CTX_OSNAME!`変数を指定して、OSの短い名前を指定する必要があります。これにより、Profile Managementは既存のアプリケーションプロファイルを特定できます。

> この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの設定が使用されます。

この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルトで無効になります。

ローカルプロファイルの競合処理

ユーザー ストア内のプロファイルとローカルのWindowsユーザープロファイル（Citrixユーザープロファイルではない）の両方が存在する場合に、Profile Managementがどのように動作するかを指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっているか、デフォルト値の**ローカルプロファイルを使用**に設定されている場合、Profile Managementはローカルプロファイルを使用しますが、いかなる方法でも変更しません。
2. このポリシーが**ローカルプロファイルを削除**に設定されている場合、Profile Managementはローカルのwindowsユーザープロファイルを削除します。その後、ユーザー ストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。このポリシーが**ローカルプロファイルの名前を変更**に設定されている場合、Profile Managementはローカルのwindowsユーザープロファイルの名前を変更し（バックアップ目的）、その後、ユーザー ストアからCitrixユーザープロファイルをインポートします。
3. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、既存のローカルプロファイルが使用されます。

テンプレートプロファイル

テンプレートとして使用するプロファイルの保存パスを指定できます。このパスは、NTUSER.DATレジストリファイルと、テンプレートプロファイルに必要なその他のフォルダーおよびファイルを含むフォルダーの完全パスです。

重要: パス設定に`NTUSER.DAT`を含めないでください。たとえば、`\\myservername\myprofiles\template\ntuser.dat`ファイルの場合、場所を`\\myservername\myprofiles\template`として設定します。 UNCパスまたはローカルコンピューター上のパスである絶対パスを使用します。後者は、たとえば、Citrix Provisioning™ Servicesイメージにテンプレートプロファイルを永続的に指定するために使用できます。相対パスはサポートされていません。

このポリシーは、Active Directory属性、システム環境変数、または`%USERNAME%`および`%USERDOMAIN%`変数の展開をサポートしていません。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、テンプレートは使用されません。

2. このポリシーが有効になっている場合、Profile Managementはユーザープロファイルを作成する際に、ローカルのデフォルトプロファイルの代わりにテンプレートを使用します。ユーザーにCitrixユーザープロファイルがない場合でも、ローカルまたは移動Windowsユーザープロファイルが存在する場合、デフォルトではローカルプロファイルが使用されます。このポリシーが無効になっていない場合、ローカルプロファイルはユーザーストアに移行されます。この設定は、**テンプレートプロファイルがローカルプロファイルを上書きする**または**テンプレートプロファイルが移動プロファイルを上書きする**チェックボックスを有効にすることで変更できます。また、テンプレートをCitrix強制プロファイルとして識別することは、Windows強制プロファイルと同様に、変更が保存されないことを意味します。
3. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
4. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、テンプレートは使用されません。

プロファイル管理\レジストリ

除外リスト

Profile Managementがログオフ時に無視するHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Policies

構成の優先順位:

- このポリシーが無効になっている場合、レジストリキーは除外されません。
- このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、レジストリキーは除外されません。

包含リスト

Profile Managementがログオフ時に処理するHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。

例: Software\Adobe。

構成の優先順位:

1. このポリシーが有効になっている場合、このリストのキーのみが処理されます。このポリシーが無効になっている場合、HKCUハイブ全体が処理されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、HKCU全体が処理されます。

デフォルトの除外リストを有効にする - Profile Management 5.5

Profile Managementがユーザープロファイルに同期しないHKCUハイブ内のレジストリキーを指定できます。このポリシーを使用して、GPO除外ファイルを手動で入力することなく指定できます。

構成の優先順位:

1. このポリシーを無効にすると、Profile Managementはデフォルトでレジストリキーを除外しません。
2. ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementは.iniファイルの値を使用します。
3. ここでも.iniファイルでもこのポリシーを構成しない場合、Profile Managementはデフォルトでレジストリキーを除外しません。

NTUSER.DATのバックアップ

NTUSER.DAT の最後に確認された正常なコピーのバックアップを有効にし、破損が発生した場合にロールバックできるようにします。

ここでこのポリシーを構成しない場合、Profile Management は .ini ファイルの値を使用します。ここでこのポリシーを構成せず、.ini ファイルでも構成しない場合、Profile Management は NTUSER.DAT をバックアップしません。

プロファイル管理\アプリのアクセス制御

ファイル、フォルダー、およびレジストリへのアクセスを制御できます。

アプリケーションアクセス制御

有効にすると、Profile Management は、指定されたルールに基づいて、項目 (ファイル、フォルダー、レジストリなど) へのユーザーアクセスを制御します。

アプリケーションルールを作成するには、次の方法を使用します。

- GUIベースのツール – **WEM Tool Hub > アプリケーションアクセス制御用ルールジェネレーター**
- PowerShellツール – Profile Managementインストールパッケージで利用可能

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

プロファイル管理\ストリーミングされたユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

プロファイルストリーミング機能を有効にできます。この機能を有効にすると、ユーザープロファイル内のファイルは、ユーザーがアクセスしたときにのみユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされます。`NTUSER.DAT` ファイルと保留領域にあるファイルは例外です。これらはすぐにフェッチされます。NTUSER.DAT にはレジストリエントリが保存されます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. ここでも.iniファイルでもこのポリシーが構成されていない場合、無効になります。

フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする

ユーザープロファイル内のフォルダーに対してプロファイルストリーミング機能を有効にできます。

このポリシーと **プロファイルストリーミング** ポリシーの両方が **有効** に設定されている場合、ユーザープロファイル内のフォルダーは、ユーザーがアクセスしたときにのみユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされます。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、無効になります。

常にキャッシュ

ログオン直後にユーザーストアからローカルコンピューターにフェッチされるファイルのサイズの最小値を指定できます。

プロファイルストリーミング機能が有効になっている場合、ユーザープロファイル内のファイルは、ユーザーがアクセスしたときにローカルコンピューターにフェッチされます。このオンデマンドファイルフェッチメカニズムは、ユーザーが要求するファイルが大きい場合に読み込みが遅くなる原因となります。このポリシーを有効にすると、Profile Management は、指定されたサイズより大きいファイルをログオン直後にローカルコンピューターにフェッチします。

ログオン直後にプロファイル全体をローカルコンピューターにフェッチするには、この制限をゼロに設定します。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、無効になります。

ペンディングエリアロックファイルのタイムアウト

Profile Management がユーザーのファイルを解放するまでのタイムアウト期間 (日数) を指定できます。タイムアウトが発生すると、ストレージサーバーが応答しなくなったときにユーザー ストアがロックされたままである場合、ユーザーのファイルは保留領域からユーザー ストアに書き込まれます。このポリシーを使用して、保留領域の肥大化を防ぎ、ユーザー ストアに常に最新のファイルが含まれるようにします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、デフォルト値の1日が使用されます。

ストリーミングされたユーザープロファイルグループ

ユーザープロファイルがストリーミングされるWindowsユーザーグループを指定できます。

このポリシーは、OU内のWindowsユーザーグループのサブセットのプロファイルをストリーミングします。他のすべてのグループのユーザーのプロファイルはストリーミングされません。

構成の優先順位:

1. このポリシーが無効になっている場合、すべてのユーザーグループが処理されます。
2. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。このポリシーがここでも.iniファイルでも構成されていない場合、すべてのユーザーが処理されます。

プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ

プロファイルストリーミングが無視するフォルダーを指定できます。フォルダー名は、ユーザープロファイルに対する相対パスとして指定する必要があります。

例: `Desktop` と入力すると、ユーザープロファイル内の `Desktop` ディレクトリが無視されます。

構成の優先順位:

1. この設定が無効になっている場合、フォルダーは除外されません。
2. この設定がここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
3. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、フォルダーは除外されません。

> **注:**
>
> プロファイルストリーミングの除外は、構成されたフォルダーがプロファイル処理から除外されることを意味しません。Citrix Profile Management は引き続きそれらを処理します。

ペンディングエリアのプロファイルストリーミングを有効にする

ペンディングエリア内のファイルとフォルダーに対してプロファイルストリーミング機能を有効にできます。

ペンディングエリアは、プロファイルストリーミングが有効になっている間、プロファイルの一貫性を確保するために使用されます。これは、同時セッションで変更されたプロファイルファイルとフォルダーを一時的に保存します。

既定では、このポリシーは無効になっており、ログオン時に保留領域内のすべてのファイルとフォルダーがローカルプロファイルにフェッチされます。このポリシーを有効にすると、保留領域内のファイルは要求されたときにのみローカルプロファイルにフェッチされます。このポリシーをプロファイルストリーミングポリシーと組み合わせて使用すると、同時セッションシナリオで最適なログオンエクスペリエンスを確保できます。

このポリシーは、フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にするポリシーが有効になっている場合に、保留領域内のフォルダーに適用されます。

プロファイル管理\フォルダーリダイレクト (ユーザー構成)

プロファイルに一般的に表示されるフォルダーをリダイレクトするかどうか、およびリダイレクトターゲットを指定できます。ターゲットは、UNCパス (サーバー共有またはDFS名前空間の場合) またはユーザーのホームディレクトリに対する相対パスとして指定します。ホームディレクトリは通常、Active Directory の `#homeDirectory#` 属性で構成されます。

ここでポリシーが構成されていない場合、Profile Management は指定されたフォルダーをリダイレクトしません。

> **注:**
>
> フォルダーリダイレクトにUNCパスを使用する場合、#homedirectory#変数はサポートされません。「**ユーザーのホームディレクトリにリダイレクト**」ポリシーを選択した後、パスを指定する必要はありません。

> `<folder-name>`フォルダーのリダイレクトポリシーを使用すると、`<folder-name>`フォルダーをリダイレクトする方法を指定できます。これを行うには、「**有効**」を選択し、リダイレクトされたパスを入力します。

> **注意:**

> データ損失が発生する可能性があります。

> ポリシーが有効になった後でパスを変更したい場合があります。ただし、変更する前に潜在的なデータ損失を考慮してください。変更されたパスが以前のパスと同じ場所を指している場合、リダイレクトされたフォルダーに含まれるデータが削除される可能性があります。

たとえば、連絡先パスを`path1`として指定します。その後、`path1`を`path2`に変更します。`path1`と`path2`が同じ場所を指している場合、ポリシーが有効になった後、リダイレクトされたフォルダーに含まれるすべてのデータが削除されます。

潜在的なデータ損失を回避するには、次の手順を実行します。

1. Active Directoryグループポリシーオブジェクトを介してProfile Managementが実行されているマシンにMicrosoftポリシーを適用します。詳細な手順は次のとおりです。
   a. グループポリシー管理コンソールを開きます。
   b. **コンピューターの構成 > 管理用テンプレート > Windows コンポーネント > エクスプローラー** に移動します。
   c. 「**リダイレクトする前に、古いフォルダーリダイレクトターゲットと新しいフォルダーリダイレクトターゲットが同じ共有を指していることを確認する**」を有効にします。
2. 該当する場合は、Profile Managementが実行されているマシンに修正プログラムを適用します。詳細については、`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/977229>`および`<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2799904>`を参照してください。

ファイルベースおよびコンテナベースのソリューションのポリシー

Profile Management は、ファイルベースおよびコンテナベースのプロファイルソリューションを提供します。次の表に、Profile Management のポリシーと、各ソリューションでの利用可能性を示します。

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
NA	プロファイルのリセット	Y	Y	この設定は、ポリシー設定ではなく、Profile Management WMI プラグインによって提供される WMI コマンドです。コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、Profile Management はユーザープロファイルを作成し、`Downloads` や `Pictures` などのプロファイルフォルダー内のレガシーコンテンツを復元しません。
プロファイル管理	プロファイル管理を有効にする	Y	はい	
	処理されたグループ	はい	はい	
	除外されたグループ	はい	はい	
	ローカル管理者のログオンを処理する	はい	はい	
	ユーザーストアへのパス	はい	はい	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ユーザーストアを移行する	はい	N	
	アクティブライトバック	Y	N	
	アクティブライトバックレジストリ	Y	N	
	セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック	Y	N	
	オフラインプロファイルのサポート	Y	N	
プロファイル管理\詳細設定	ロックされたファイルへのアクセス時の再試行回数	はい	いいえ	
	ログオフ時にインターネットクッキーファイルを処理する	はい	いいえ	
	自動構成を無効にする	はい	いいえ	
	問題が発生した場合にユーザーをログオフする	はい	はい	
	顧客体験向上プログラム	はい	はい	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ユーザーレベルのポリシー設定を有効にする	Y	Y	
	ユーザーグループの優先順位を設定する	Y	Y	
	Outlook の検索インデックスローミングを有効にする	Y	Y	
	Outlook 検索データローミングの同時セッションサポートを有効にする	Y	Y	
	プロファイルコンテナのマルチセッションライトバックを有効にする	Y	Y	
	ユーザーストアをレプリケートする	はい	はい	
	ユーザー ストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする	はい	はい	
	VHDX ファイルのストレージ パスをカスタマイズする	はい	はい	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	アプリのアクセス制御	はい	はい	
	セッションでVHDX ディスクを自動的に再アタッチする	はい	はい	
	ログオン時にユーザー グループ ポリシーの非同期処理を有効にする	Y	Y	
	OneDriveコンテナを有効にする	Y	Y	
	VHDディスクの圧縮をトリガーする空き領域の比率	Y	Y	
	VHDディスクの圧縮をトリガーするログオフ回数	Y	Y	
	VHDディスクの圧縮のためのデフラグを無効にする	Y	Y	
	プロファイルコンテナの自動拡張しきい値	Y	Y	
	プロファイルコンテナの自動拡張増分	Y	Y	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	プロファイルコンテナの自動拡張制限	Y	Y	
	UWPアプリのローミング	Y	Y	
	VHDコンテナのデフォルト容量	Y	Y	
プロファイル管理\アプリ アクセス制御	アプリのアクセス制御	Y	Y	
プロファイル管理\Citrix Virtual Appsの最適化	Citrix Virtual Appsの最適化を有効にする	Y	N	
	Citrix Virtual Apps™最適化定義へのパス	Y	N	
プロファイル管理\クロスプラットフォーム設定	クロスプラットフォーム設定を有効にする	Y	N	
	クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ	Y	N	
	クロスプラットフォーム定義へのパス	Y	N	
	クロスプラットフォーム設定ストアへのパス	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	クロスプラットフォーム設定を作成するためのソース	Y	N	
プロファイル管理\ファイル重複排除	重複排除のために共有ストアに含めるファイル	Y	N	
	共有ストアから除外するファイル	Y	N	
プロファイル管理\ファイルシステム	除外リスト - ファイル	Y	N	
	デフォルトの除外リストを有効にする - ディレクトリ	Y	N	
	除外リスト - ディレクトリ	Y	N	
	ログオン除外チェック	Y	N	
	大容量ファイルの処理 - シンボリックリンクとして作成するファイル	Y	N	
プロファイル管理\ファイルシステム\同期	同期するディレクトリ	Y	N	
	同期するファイル	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ミラーリングするフォルダー	Y	N	
	フォルダーミラーリングの高速化	Y	N	
プロファイル管理\ログ設定	ログ記録を有効にする	Y	Y	
	ログ設定	Y	Y	
	ログファイルの最大サイズ	Y	Y	
	ログファイルへのパス	Y	Y	
プロファイル管理\プロファイルコンテナ設定	プロファイルコンテナ	N	Y	
	プロファイルコンテナから除外するフォルダー	N	Y	
	プロファイルコンテナに含めるフォルダー	N	Y	
	プロファイルコンテナから除外するファイル	N	Y	
	プロファイルコンテナに含めるファイル	N	Y	
	プロファイルコンテナのローカ	N	Y	コンテナベースのソリューションでこのポリ

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	ルキャッシュを有効にする			シーが有効になっている場合、ファイルベースのソリューションに適用されるすべてのポリシー設定は、プロファイルストリーミングやアクティブライトバックなど、コンテナベースのソリューションでも機能します。
	VHDディスクの圧縮を有効にする	Y	Y	
	プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする	Y	Y	
	VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする	Y	Y	
プロファイル管理\プロファイル処理	ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除	Y	N	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ポリシーが無効になっていても、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは常に自動的に削除されます。

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	キャッシュされたプロファイルを削除するまでの遅延	Y	Y	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ポリシーが無効になっていても、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは常に自動的に削除されます。
	既存のプロファイルの移行	Y	N	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザーログオフ時にローカルプロファイルは自動的にコンテナに移行されます。
	既存のアプリケーションプロファイルの自動移行	Y	N	
	ローカルプロファイルの競合処理	Y	N	コンテナベースのソリューションが有効になっている場合、ユーザーのログオフ時にローカルプロファイルは自動的にコンテナに移行されます。

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	テンプレートプロファイル	Y	Y	
プロファイル管理\レジストリ	除外リスト	Y	N	
	デフォルトの除外リストを有効にする	Y	N	
	含めるリスト	Y	N	
	NTUSER.DAT バックアップ	Y	N	
プロファイル管理\ストリーミングされたユーザープロファイル	プロファイルストリーミング	Y	N	
	フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする	Y	N	
	保留領域のプロファイルストリーミングを有効にする	Y	N	
	常にキャッシュ	Y	N	
	保留中のエリアロックファイルのタイムアウト (日数)	Y	N	
	ストリーミングされたユーザー	Y	N	

カテゴリ	ポリシー名	ファイルベースに適用	コンテナベースに適用	コメント
	プロファイルグループ			
	プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ	Y	N	

統合

プロファイル管理とCitrix Virtual Apps™

Citrix Virtual Appsサーバーでこのバージョンの Profile Management を使用するには、Profile Management EULAに従う必要があります。また、Profile Managementをローカルデスクトップにインストールして、ユーザーがローカルプロファイルを公開リソースと共有できるようにすることもできます。

注： Profile Managementは、Citrix Virtual Desktops™環境では自動的に構成されますが、Citrix Virtual Apps環境では構成されません。Citrix Virtual Apps展開のProfile Management設定を調整するには、グループポリシーまたは.iniファイルを使用してください。

Profile Managementは、Remote Desktop Services（旧称Terminal Services）を使用するCitrix Virtual Apps環境で動作します。これらの環境では、サポートされている各オペレーティングシステムに対してOUを設定する必要があります。詳細については、Microsoftのドキュメントを参照してください。

異なるバージョンのCitrix Virtual Appsを含むファーム、または異なるオペレーティングシステムを実行するファームでは、Citrixは、各バージョンまたはオペレーティングシステムを実行するサーバーごとに個別のOUを使用することを推奨します。

重要：複数のユーザーで共有されるフォルダー（たとえば、Citrix Virtual Appsで公開された共有アプリケーションデータを含むフォルダー）の包含および除外はサポートされていません。

ストリーミングアプリケーション

Profile Managementは、アプリケーションがユーザーデバイスに直接ストリーミングされる環境、またはCitrix Virtual Appsサーバーにストリーミングされ、そこからユーザーに公開される環境で使用できます。

Citrix Virtual Appsのクライアント側アプリケーション仮想化テクノロジーは、アプリケーションを自動的に分離するアプリケーションストリーミングに基づいています。アプリケーションストリーミング機能により、アプリケーションをCitrix Virtual Appsサーバーおよびクライアントデバイスに配信し、保護された仮想環境で実行できます。ユーザーにストリーミングされるアプリケーションを分離する理由は多数あり、たとえば、アプリケーションの競合を防ぐためにユーザーデバイス上でアプリケーションがどのように相互作用するかを制御する機能などがあります。たとえ

ば、同じアプリケーションの異なるバージョンが存在する場合、ユーザー設定の分離が必要です。Microsoft Office 2003がローカルにインストールされ、Office 2007がユーザーのデバイスにストリーミングされる場合があります。ユーザー設定を分離しないと競合が発生し、両方のアプリケーション（ローカルおよびストリーミング）の機能に深刻な影響を与える可能性があります。

ストリーミングアプリケーションでのProfile Managementの使用に関する要件については、「システム要件」を参照してください。

プロファイル管理と シトリックス バーチャル デスクトップ™

重要: Citrix Virtual Desktops に統合されている Profile Management 機能を使用することをお勧めします。詳細については、Citrix Virtual Desktops のドキュメントを参照してください。 このトピックの情報は、別の展開、つまり、Profile Management コンポーネントが個別にインストールおよび構成されている Citrix Virtual Desktops の使用に適用されます。

Citrix Virtual Desktops 展開での Profile Management のインストールとアップグレード

このバージョンの Profile Management を Citrix Virtual Desktops で使用するには、Profile Management EULA に従う必要があります。EULA の条項に従い、Citrix Virtual Desktops 環境で Citrix Virtual Apps™ と Profile Management を使用することもできます。

Citrix Virtual Desktops 展開で Profile Management をアップグレードする場合、Profile Management のアップグレードで説明されているログファイルの場所への影響を考慮してください。

Quick Deploy セットアップの Citrix Virtual Desktops については、構成の決定の推奨事項を参照してください。

Citrix Virtual Desktops 展開での Profile Management の構成

イメージが展開される前に Profile Management が正しく構成されていない場合、グループポリシーが適用される前に Profile Management サービスが開始されます。これを回避するには、イメージを本番環境に投入する前に、文書化された手順を使用して構成を実行してください。

重要: 複数のユーザーで共有されるフォルダー（たとえば、複数の仮想デスクトップで共有できるデータを含むフォルダー）の包含と除外はサポートされていません。

Personal vDisk 展開での Profile Management の構成

Citrix Virtual Desktops の Personal vDisk 機能を使用する場合、Citrix ユーザープロファイルはデフォルトで仮想デスクトップの Personal vDisk（通常は P: ドライブ）に保存されます。プロファイルはユーザーの C: ドライブには保存されません。しかし、Profile Management はプロファイルをここに存在すると想定しています。そのため、Virtual Delivery Agent のインストールまたはアップグレード中に、マスターイメージのレジストリを変更する必要があります。さらに、Personal vDisk の空き容量を増やしたため、マスターイメージ上のアプリケーションのデフォルトのディスク領域割り当てを増やすことも良い習慣です。これらの変更に関する手順については、Citrix Virtual Desktops のドキュメントを参照してください。

Personal vDisk にコピーが残っている間に、ユーザーストア内のプロファイルのコピーを削除しないでください。これを実行すると、Profile Management エラーが発生し、仮想デスクトップへのログオンに一時プロファイルが使用されます。詳細については、一般的な問題のトラブルシューティングの「ユーザーが新規または一時プロファイルを受け取る」を参照してください。

ウィンドウズ アプリ - マイクロソフト ストア

Citrix Virtual Desktops 環境では、Microsoft Store のアプリケーション（UWP アプリとも呼ばれる）がサポートされています。プールされたマシン（プールされたランダム、静的、または RDS）で Microsoft Store アプリケーションを使用するには、グループポリシー管理エディターを開き、**［ポリシー］\>［管理用テンプレート］\>［従来の管理用テンプレート（ADM）］\>［Citrix］\>［Profile Management］\>［ファイルシステム］\>［同期］**で次の設定を構成します。

- ミラーリングするフォルダーを有効にし、次に、ミラーリングするフォルダーのリストに `appdata\local\packages` を追加します
- 同期するファイルを有効にし、`!ctx_localappdata!\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*` を同期するファイルのリストに追加します

ユーザーがパーソナルvDisk（推奨ソリューション）を備えた専用デスクトップにアクセスし、そのプロファイルがすでに別のデスクトップで作成されている場合、Microsoft Storeアプリケーションが機能しない可能性があります。

Citrix Virtual Desktopsの構成例

このトピックでは、一般的なCitrix Virtual Desktops展開で使用されるProfile Managementポリシー設定を一覧表示します。Windows 7仮想デスクトップはCitrix Provisioning™ Servicesで作成され、複数のユーザーで共有されます。この例では、プールされたランダムカタログから作成さ

れ、ログオフ時に削除されるデスクトップは、静的ワークステーション（モバイルラップトップではない）での使用を目的としており、パーソナルvDiskは使用されません。

ポリシーがリストされていない場合、グループポリシーで選択または入力は行われず、デフォルト設定が適用されます。

次の点に注意してください。

- **ユーザーストアへのパス** - Profile Management変数をユーザーストアへのパスに組み込むことができます。この例では、パスが解釈されるときにそれぞれWin7とx86に展開される\!CTX_OSNAME\!と\!CTX_OSBITNESS\!を使用しています。AD属性#sAMAccountName#もユーザー名を指定するために使用されます。
- **ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する** - デスクトップにはパーソナルvDiskが含まれておらず、ユーザーがログオフすると削除されるため、このポリシーを無効にしても安全です。したがって、ローカルにキャッシュされたプロファイルを保持する必要はありません。（ログオフ時にデスクトップが破棄されない場合は、このポリシーを有効にしてください。）」
- **プロファイルストリーミング** - この設定を有効にすると、この展開でのログオン時間が改善されます。
- **アクティブライトバック** - この展開のプールされたデスクトップはユーザーに一時的に割り当てられるだけであるため、このポリシーは有効になっています。そのため、ユーザーはプロファイルを変更する可能性がありますが、デスクトップセッションを閉じるのを忘れる（または気にしない）可能性があります。この設定を有効にすると、ログオフ前にプロファイル内のローカルファイルの変更がユーザーストアにミラーリングされます。

注: アクティブライトバックポリシーを有効にすると、セッション内で多数のファイル操作（ファイルの作成、ファイルのコピー、ファイルの削除など）を実行すると、システムI/Oアクティビティが高くなり、Profile Managementがファイルの変更をユーザーストアに同期している間、一時的なパフォーマンスの問題が発生する可能性があります。

- **ローカル管理者のログオンを処理する** - ほとんどのユーザーがローカル管理者であるCitrix Virtual Desktops展開では、この設定を有効にすることをお勧めします。
- **処理されたグループ** - すべてのドメインユーザーのプロファイルはProfile Managementによって管理されます。
- **除外リスト - ディレクトリ**（ファイルシステム）および**除外リスト**（レジストリ） - これらの設定は、リストされた一時ファイルまたはキャッシュファイル、およびリストされたレジストリエントリが処理されるのを防ぎます。これらのファイルとエントリは、一般的にユーザープロファイルに保存されます。

- **同期するディレクトリ**および**同期するファイル** - ユーザーのアプリケーションデータがどこに保存されているかを知ることで、これらの設定を定義するのに役立ちました。

重要: Citrix Virtual Desktopsの展開はさまざまであるため、決定するProfile Managementポリシー設定は、この例のものとは異なる可能性があります。設定を計画するには、 構成を決定するのガイダンスに従ってください。

Citrix/プロファイル管理

Profile Management を有効にする

> 有効

処理されるグループ

> `MyDomainName\Domain Users`

ユーザー ストアへのパス

> `\\MyServer.MyDomain\MyUserStore#sAMAccountName#\!CTX_OSNAME!_!CTX_OSBITNESS!`!

アクティブな書き戻し

> 有効

ローカル管理者によるログオンの処理

> 有効

Citrix/プロファイル管理/プロファイル処理

ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除する

> 無効

Citrix/プロファイル管理/詳細設定

ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する

有効

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム

除外リスト - ディレクトリ

```
$Recycle.Bin
```

```
`AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files`
```

```
`AppData\Local\Microsoft\Outlook`
```

```
`AppData\Local\Temp`
```

```
`AppData\LocalLow`
```

```
`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Start Menu`
```

```
`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\cache`
```

```
`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\log`
```

```
`AppData\Roaming\Sun\Java\Deployment\tmp`
```

Citrix/プロファイル管理/ファイルシステム/同期

同期するディレクトリ

> `AppData\Microsoft\Windows\Start Menu\Programs\Dazzle Apps`

ミラーリングするフォルダー

> `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`

Citrix/プロファイル管理/ストリーミングユーザープロファイル

プロファイルストリーミング

> 有効

プロファイル管理 と UE-V

Profile Management 5.x と Microsoft User Experience Virtualization (UE-V) 2.0 は、同じ環境で共存できます。UE-V は、複数のプロファイルバージョンが存在する場合（たとえば、バージョン1とバージョン2のプロファイル）に役立ちます。このため、UE-V が存在する場合は、Citrix Profile Management のクロスプラットフォーム設定機能を使用しないでください。UE-V は、より多くのアプリケーション、ユーザーセッション中の同期、およびアプリケーションの XML 構成と生成をサポートするため、その機能よりも優先される場合があります。

Profile Management が UE-V と共存する場合、クロスプラットフォーム設定機能が有効になっているかどうかにかかわらず、次の点に注意してください。

- `AppData\Local\Microsoft\UEV` フォルダーを除外します。UE-V によってキャプチャされたプロファイル設定は、Profile Management によってキャプチャされたプロファイル設定を上書きします。
- UE-V によって制御されるプロファイルを、Profile Management のみによって制御されるプロファイルと共有しないでください。共有すると、「最後の書き込みが優先」されます。つまり、プロファイルを同期する最後のコンポーネント（UE-V または Profile Management）が、どのデータが保存されるかを決定し、データ損失につながる可能性があります。

注： UE-V には Microsoft Desktop Optimization Pack (MDOP) が必要です。

プロファイル管理と Citrix Content Collaboration™

この記事の情報は、Citrix Content Collaboration の展開における Profile Management の使用に適用されます。一部は、他のインターネットベースのファイル共有システムにも役立つ場合があります。

Citrix Content Collaboration は、Profile Management 4.1.2 以降で使用できます。Citrix Content Collaboration は、オンデマンドモードでのみサポートされています。

インストール

ShareFile 2.7 を使用している場合、互換性の問題を避けるために、Profile Management をインストールする前にこのバージョンをインストールしてください。ShareFile 2.6 では、このインストール依存関係は存在しません。

除外

Citrix Content Collaboration は、構成データをローカルの `\AppData\Roaming\ShareFile` フォルダーに保存します。Citrix ユーザープロファイルを持つユーザーの場合、ユーザー固有の Citrix Content Collaboration 構成が保持されるように、このデータはユーザープロファイルとともにローミングする必要があります。この `ShareFile` フォルダーはプロファイルの一部であるため、Profile Management の構成は不要です。構成データはデフォルトでローミングされます。

ただし、Citrix Content Collaboration によって管理されるユーザーデータは、プロファイルのルートにある `ShareFile` フォルダー (`%USERPROFILE%\ShareFile`) に含まれています。このデータは Citrix Content Collaboration サーバーによって管理され、同期されるため、プロファイルとともにローミングしてはなりません。したがって、このフォルダーを Profile Management の除外対象として追加する必要があります。除外設定の手順については、「項目の含める/除外」を参照してください。

パーソナル vDisk

Personal vDisk を使用して仮想デスクトップを作成する場合、vDisk 上のユーザーデータの場所で Citrix Content Collaboration を構成します。これにより、デスクトップと Citrix Content Collaboration サーバー間でファイル同期が行われるようになります。デフォルトでは、Personal vDisk はデスクトップ上で P: ドライブとしてマップされるため、データは `P:\Users\<user` name\> に配置される可能性があります。この場合、Citrix Content Collaboration の LocalSyncFolder ポリシーを使用して場所を設定します。

重要: 仮想デスクトップで同期する必要がある場合を除き、大きなファイルを含むフォルダーでは **Folder-ID** 設定を使用することをお勧めします。これにより、Profile Management と Personal

vDisk のパフォーマンスに悪影響を与える可能性のある不要な同期を防ぐことができます。これは ShareFile の設定です。

プロファイル管理とApp-V

Microsoft Application Virtualization 5.x (App-V 5.x) と同じ環境でProfile Managementを使用できます。

> **注:**
>
> Profile Managementは、グローバルに公開されたApp-Vのみをサポートします。
>
> Profile Managementの除外を使用して、以下の項目を除外します。

- プロファイル管理\\ファイルシステム\\除外リスト\\ディレクトリ:
  - `AppData\Local\Microsoft\AppV`
  - `AppData\Roaming\Microsoft\AppV\Client\Catalog`
- プロファイル管理\\レジストリ\\除外リスト:
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Integration`
  - `Software\Microsoft\AppV\Client\Publishing`

除外設定の手順については、「項目の包含と除外」を参照してください。

App-Vで**UserLogonRefresh**設定が有効になっている場合、Profile Managementのプロファイルストリーミングポリシーを無効にします。この制限は、**UserLogonRefresh**とプロファイルストリーミングの非互換性によるものです。

App-Vアプリケーションをシーケンスする方法の例については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows/application-management/app-v/appv-sequence-a-new-application>`を参照してください。

App-Vが有効なサードパーティのProfile Managementソリューションの構成については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/microsoft-desktop-optimization-pack/appv-v5/performance-guidance-for-application-virtualization-50>`を参照してください。Microsoft Windows 10システムでは`Software\Classes`を含めないでください。

プロファイル管理とプロビジョニングサービス

この記事では、Citrix Provisioning Servicesで作成された仮想ディスク（vDisk）上のCitrixユーザープロファイルを維持するためのアドバイスを提供します。このアドバイスに従う前に、(/ja-jp/profile-management/2308/plan/upm-plan-decide-4a.html)で説明されているように、vDisk構成がプロファイル管理構成にどのように影響するかを理解してください。

サポートされているモード

プロファイル管理は、標準イメージモードとプライベートイメージモードで実行されているvDiskで使用できますが、差分ディスクイメージモードでは使用できません。

マスターターゲットデバイスから不要なローカルキャッシュプロファイルを削除するには

不要なローカルキャッシュプロファイルが保存されないようにするには、マスターターゲットデバイスイメージを取得する前に、標準イメージモードで実行されているvDiskからこれらのプロファイルを削除してください。ただし、現在ログオンしているローカル管理者のプロファイルは削除しないでください。これを実現する良い方法は次のとおりです。この手順中に、エラーメッセージが表示される場合があります。

1. コンピューターを右クリックします。
2. プロパティを選択します。
3. をクリックします。
4. タブで、 の をクリックします。
5. 削除する各プロファイルを強調表示し、 をクリックします。

vDiskイメージからログファイルを取得する

このトピックでは、Citrix Provisioning™ Servicesで作成された共有（vDisk）イメージに存在するログファイルの使用に関するガイダンスを提供します。プロファイル管理は、ログオフ時にファイルを保存します。しかし、vDiskイメージを使用する場合、ベースイメージがリセットされる可能性があり、その結果ログファイルが削除されるという事実を考慮してください。したがって、ファイルを取得するために何らかの措置を講じる必要があります。講じる措置は、ログファイルがログオン時に削除されるかログオフ時に削除されるかによって異なります。

vDiskイメージの使用はCitrix Virtual Desktops™の展開で一般的であるため、このトピックのガイダンスではその製品を例として使用します。

ログオフ時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイル全体またはその一部がネットワーク上のユーザーストアに保存されない場合、ログファイルもそこに保存されません。

Provisioning ServicesのライトキャッシュがProvisioning Servicesを実行しているコンピューターに保存されている場合、この問題は発生しません。そして、ログファイルはユーザーストアに保存されます。

ライトキャッシュがローカルに保存されている場合、この手順ではユーザーと同じデバイスからログオンする必要があるかもしれません。ただし、ライトキャッシュがRAMにローカルに保存されている場合、これも失敗する可能性があります。

ライトキャッシュがProvisioning Servicesを実行しているコンピューター上にない場合、vDiskイメージのコピーを作成する必要があるかもしれません。それを新しい仮想マシンに割り当て、そのコンピューターに保存されるようにイメージ上のライトキャッシュを変更します。

1. Citrix仮想デスクトップで、デスクトップグループを作成し、それに仮想マシンを1台追加し、vDiskイメージを指すようにします。
2. 仮想マシンへのアクセスを1人のテストユーザーと管理者に付与します。
3. デスクトップグループのアイドルプール数を終日1に変更します（電源管理によるマシンのシャットダウンを防ぐため）。ログオフ動作を「何もしない」に設定します（マシンの再起動やイメージのリセットを防ぐため）。
4. テストユーザーとして仮想デスクトップにログオンし、その後ログオフします。
5. XenCenter®またはVMwareコンソールから管理者としてログオンし、ログファイルを取得します。

デスクトップグループの作成とプロパティの変更に関する詳細については、Citrix Virtual Desktops documentationを参照してください。

ログオン時に削除されるログファイルを取得するには

プロファイルがネットワーク上のユーザーストアで最新であるにもかかわらず、ユーザーがログオンしたときに正しくロードされない場合、ログファイルのエントリは失われます。

1. `\\<vmhostname>\C$` にドライブをマップし、ユーザーがセッションからログオフする前にログファイルを特定します。ログファイルは完全ではありませんが（一部のエントリが欠落している可能性があります）、トラブルシューティングしている問題がログオン時に発生している場合、問題の原因を特定するのに十分な情報を提供できます。

Provisioning Servicesログファイルを再配置するには

標準イメージモードを使用している場合、システムがシャットダウンするとProvisioning Servicesのイベントログファイルは失われます。これを防ぐためにファイルのデフォルトの場所を変更する方法については、Knowledge Centerの記事CTX115601を参照してください。

プロビジョニングされたイメージでのProfile Managementの事前構成

Citrix Provisioning Services、Citrix XenServer、VMware ESXなどのプロビジョニングソフトウェアを使用すると、Profile Managementがプリインストールされたイメージを構築できます。その際、イメージのセットアップ中にレジストリに一部のグループポリシー設定が取り込まれる可能性があります。たとえば、Provisioning Servicesでプライベートイメージモードの場合に発生します。イメージを展開する際にも、その設定は残っています。たとえば、Provisioning Servicesで標準イメージモードに戻す場合などです。理想的には、仮想マシンが起動したときの状態と、ユーザーがログオンしたときの要件に適したデフォルトを選択してください。少なくとも、(/ja-jp/profile-management/2308/plan/upm-plan-decide-4a.html)で説明されているポリシーに対して適切なデフォルト設定があることを確認してください。

Citrix Profile Management Serviceが開始される前に`gpupdate`が実行されない場合、デフォルトが使用されます。したがって、ほとんどの場合に適切なデフォルト設定であることを確認するのが最善です。この手順を使用して、イメージに保持したいこれらの設定やその他の設定を事前構成してください。

注：Provisioning Servicesを使用する場合、まずProfile Managementの.iniファイルでイメージを事前構成することをお勧めします。そして、テストが成功した後にのみ、設定を.admまたは.admxファイルに転送してください。

1. .admまたは.admxファイルを使用する場合は、適切なGPO内のファイルを使用して目的の設定を変更します。 .iniファイルを使用する場合は、この手順を省略します。変更は後の手順で行います。
2. ログレベルにも同じ変更を加えます。
3. 次のいずれかを実行します。
    - イメージをプライベートイメージモード（Citrix Provisioning™ Services）に切り替え、その上でオペレーティングシステムを起動します。
    - オペレーティングシステムを起動します（Citrix XenServer®またはVMware ESX）。

4. 管理者アカウント（設定した可能性のあるテストユーザーアカウントではない）を使用してログオンし、`gpupdate /force`を実行します。この手順により、レジストリが正しく構成されます。
5. .iniファイルを使用する場合は、ファイル内の目的の設定を変更します。
6. Profile Management Serviceを停止します。
7. 新しく作成されるログファイルとの混同を避けるため、古いProfile Managementログファイルと構成ログファイルを削除します。これらは古いイメージの名前を使用するファイル名を持っています。更新されたイメージには新しいファイル（新しいイメージの名前を持つ）があるため、これらは冗長です。
8. 次のいずれかを実行します。
    - イメージを標準イメージモード（Citrix Provisioning Services）に戻します。
    - 更新されたイメージ (Citrix XenServer または VMware ESX) を保存します。
9. イメージ上でオペレーティングシステムを起動します。

プロファイル管理とセルフサービスプラグイン

デフォルトでは、プロファイル管理はWindowsの**スタートメニュー**フォルダーを除外します。Citrixセルフサービスプラグインのユーザーは、**スタートメニュー**でサブスクライブされたアプリケーションを表示できません。このデフォルトの動作を調整するには、**除外リスト - ディレクトリ**ポリシーからフォルダー`%APPDATA%\Microsoft\Windows\Start Menu`を削除します。さらに、構成にGPOを使用する場合は、Profile Managementの.iniファイルを削除することがベストプラクティスです。これらのアクションにより、サブスクライブされたアプリケーション（およびユーザーが作成したサブフォルダー）を含む**スタートメニュー**フォルダーがプロファイル管理によって処理されるようになります。

注: グループポリシーではなくProfile Managementの.iniファイルを使用している場合は、そのファイルのデフォルトの除外リストからこのエントリを削除してください。

プロファイル管理とOutlook

この記事では、Microsoft Outlookとローミングプロファイルを統合するためのベストプラクティスについて説明します。

ユーザーがOutlookデータをネットワーク共有やローカルではなくサーバーに保存するようにすることは、良い習慣です。

ローミングプロファイルを使用すると、環境変数 `%UserProfile%` で定義された場所（ローカルコンピューター上）にあるファイルとフォルダーは、`%UserProfile%\Local Settings` という1つのフォルダーを除いて、ユーザーとともにローミングします。この例外はOutlookユーザーに影響します。Microsoftの推奨により、既定で一部のOutlookデータ（たとえば、`.ost`、`.pst`、および `.pab` ファイル）がこの非ローミングフォルダーに作成されるためです。

重要: この場所にあるファイルは通常サイズが大きく、ローミングプロファイルのパフォーマンスを妨げます。

以下のプラクティスは、Outlookでのローミングプロファイルのトラブルシューティングを減らし、ユーザーと管理者による適切なメール管理を促進します。

- 可能であれば、`.pst` ファイルの使用を禁止するMicrosoft Office用のADMテンプレートを使用してください。
- ユーザーがより多くのスペースを必要とする場合は、ネットワーク共有ではなくMicrosoft Exchangeサーバーのストレージを増やしてください。
- 個々のユーザーに `.pst` ファイルの例外を付与したり、個人のストレージ容量を増やしたりするのではなく、会社全体でメール保持ポリシー（会社全体のメールストレージサーバーを含むもの）を定義し、適用します。このポリシーは、ユーザーが受信トレイへのメール復元を簡単に要求できるようにすることで、`.pst` ファイルへの依存を抑制する必要もあります。
- `.pst` ファイルを禁止できない場合は、プロファイル管理またはローミングプロファイルを構成しないでください。**Outlookの検索インデックスローミングを有効にする**機能は、`.pst` ファイル向けには設計されていません。

Password ManagerおよびシングルサインオンでのWindowsプロファイルの使用

この記事には、Profile Managementに固有の情報は含まれていません。Citrix Single Sign-onがローカルプロファイル、移動プロファイル、強制プロファイル、またはハイブリッドプロファイルで最適に動作するように、特定のWindowsオプションを構成する方法について説明します。このトピックは、Citrix Single Sign-on 4.8または5.0に適用されます。

ローカルプロファイル

ローカルプロファイルは、ユーザーがログオンしたローカルサーバーに保存されます。Password Managerとシングルサインオンは、ユーザーレジストリの `HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFrame Password Manager` ハイブにレジストリ情報を保存します。場所は次のとおりです。

`%SystemDrive%\Documents` および `Settings\%username%\NTUSER.DAT`。

ファイルは次の場所にも保存されます。

`%SystemDrive%\Documents and Settings\%username%\Application Data\Citrix\MetaFrame Password Manager`。

Windows 7では、シングルサインオンは以下を使用します。

`%APPDATA%\Roaming\Citrix\MetaFrame Password Manager`

重要: シングルサインオンが以下のファイルに対してフルコントロールアクセス権を持っていることが重要です。

ファイル名	説明
%ユーザー名%.mmf	aelist.iniへのポインターを持つユーザーの資格情報ファイル。
entlist.ini	同期ポイントまたはActive Directoryでエンタープライズレベルで作成されたアプリケーション定義ファイル。
aelist.ini	ユーザーのローカルアプリケーション定義ファイル (applist.ini) とエンタープライズアプリケーション定義 (entlist.ini) をマージして作成されたアプリケーション定義ファイル。

ローミングプロファイル

ローミングプロファイルはネットワーク共有に保存され、ユーザーがログオンするたびにローカルサーバーのコピーに同期されます。ローミングプロファイルの展開が成功するための特徴には、SAN (System Area Network) や NAS (Network Area Storage) などの高速ネットワーク接続が含まれます。その他の一般的な展開には、プロファイルが高可用性サーバーに保存されるクラスターソリューションが含まれます。

ローミングプロファイルと強制プロファイルの展開には、次の2つの問題が影響します。

- 単一のローミングプロファイルは、1つのファイル同期ポイントでのみ使用できます。複数の同期ポイントが使用されると、メモリマップファイル (MMF) 内のデータが破損する可能性があります。

- 複数の同時セッションでローミングプロファイルが使用される場合、バックエンドのMMFを共有します。すべてのアクティブなセッションは、再試行ロックカウンター、最終使用データカウンター、イベントログエントリなど、いくつかの共通セッションデータを共有します。

強制プロファイルまたはハイブリッドプロファイル

強制プロファイルは、定義上、ユーザーの読み取り専用プロファイルです。シングルサインオンは、**Application Data** の下のプロファイルフォルダーへの書き込み権限を必要とします。強制プロファイルでは、ユーザーが変更を加えることはできますが、ログオフ時にその変更はプロファイルに保存されません。強制プロファイルでシングルサインオンが正しく機能するためには、Application Data フォルダーをリダイレクトする必要があります。

レジストリの変更は、ユーザーがログオンするたびに書き込まれます。資格情報が同期ポイントと同期されますが、変更はプロファイルに保存されません。

Windows 2000以降、Microsoftは**Application Data** フォルダーをリダイレクトするメカニズムを提供しています。ただし、Windows NT4ドメインを使用する場合は、**Application Data** フォルダーの場所を変更できるログオンスクリプトが必要です。これを達成するには、`Kix` または `VBScript` のようなツールを使用して、**Application Data** フォルダーの書き込み可能な場所を定義できます。

次の例では、`Kix` を使用してユーザーログオン中に **Application Data** フォルダーをリダイレクトします。

重要: このサンプルスクリプトは情報提供のみを目的としています。最初にテストする前に、ご自身の環境で使用しないでください。

```
$LogonServer = "%LOGONSERVER%"

$HKCU = "HKEY_CURRENT_USER"

$ShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\Shell

Folders"

$UserShellFolders_Key =

"$HKCU\Software\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Explorer\User
```

```
Shell Folders"

$UserProfFolder =

"$LogonServer\profiles\@userID"

$UserAppData =

"$LogonServer\profiles\@userID\Application Data"

$UserDesktop =

"$LogonServer\profiles\@userID\Desktop"

$UserFavorites =

"$LogonServer\profiles\@userID\Favorites"

$UserPersonal = "X:\My Documents"

$UserRecent =

"$LogonServer\profiles\@userID\Recent"

if (exist("$UserAppData") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserAppData"'

endif

if (exist("$UserDesktop") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserDesktop"'

endif

if (exist("$UserRecent") = 0)

shell '%ComSpec% /c md "$UserRecent"'

endif

if (exist("$UserFavorites") = 0)
```

```
shell '%ComSpec% /c md "$UserFavorites"'

endif
```

ハイブリッドプロファイルは、強制プロファイルの問題に対するもう1つの解決策です。ユーザーがログオンすると、強制プロファイルがロードされ、カスタムアプリケーションが、ユーザーが利用できるアプリケーションに基づいてユーザーレジストリハイブをロードおよびアンロードします。強制プロファイルと同様に、ユーザーはセッション中にレジストリのそれらの部分を変更できます。強制プロファイルとの違いは、変更がユーザーのログオフ時に保存され、再度ログオンしたときに再ロードされることです。

ハイブリッドプロファイルが使用される場合、`HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\Citrix\MetaFrame Password` レジストリキーはログオンおよびログオフプロセスの一部としてインポートおよびエクスポートされる必要があります。

フォルダーリダイレクト

フォルダーリダイレクトは、グループポリシーオブジェクトとActive Directoryを使用して実装されます。ユーザープロファイルの一部であるフォルダーの場所を定義するためにグループポリシーを使用します。

4つのフォルダーをリダイレクトできます。

- マイドキュメント
- アプリケーションデータ
- デスクトップ
- スタートメニュー

グループポリシーを使用して、2つのリダイレクトモードを設定できます。基本リダイレクトと高度なリダイレクトです。どちらもシングルサインオンでサポートされています。Windows 2000では、アプリケーションデータを保存する共有を`%username%`変数を使用して参照する必要があります（例：`\\servername\sharename\%username%`）。

フォルダーリダイレクトはユーザーに対してグローバルであり、そのユーザーのすべてのアプリケーションに影響します。**Application Data**フォルダーを使用するすべてのアプリケーションは、それをサポートする必要があります。

フォルダーリダイレクトの詳細については、以下のMicrosoftの記事を参照してください。

HOW TO: フォルダーリダイレクトを使用して、セキュリティで保護されたリダイレクトフォルダーを動的に作成する

Windows のフォルダーリダイレクト機能

管理者がリダイレクトされたフォルダーにアクセスできるようにする

ベストプラクティス

- 可能な場合は、Application Dataフォルダーをリダイレクトします。このアプローチにより、ネットワークパフォーマンスが向上し、ユーザーがログオンするたびにそれらのフォルダー内のデータをコピーする必要がなくなります。
- Password Manager Agentのトラブルシューティングを行う際は、ログオンしているユーザーがApplication Dataフォルダーに対してフルコントロール権限を持っていることを常に確認してください。

トラブルシューティング

Profile Management の設定を確認する

問題のトラブルシューティングの最初のステップとして、現在の Profile Management の設定を次のように確認します。

1. Citrix Director でトラブルシューティングを開始します。このコンソールには、問題の診断と修正に役立つプロファイルのプロパティが表示されます。
2. UPMConfigCheck ツールを使用して、稼働中の Profile Management 展開を調査し、最適に構成されているかどうかを判断します。

   このツールのインストールと使用方法の詳細については、Knowledge Center の記事 CTX132805 を参照してください。
3. Profile Management の .ini ファイルが使用されている場合は、影響を受けるマシンでその構成を確認します。
4. リストとして入力する Profile Management ポリシー（除外リストや包含リストなど）を非アクティブ化するには、ポリシーを に設定します。 に設定しないでください。
5. 影響を受けるマシンで `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies` レジストリエントリを確認します。GP タトゥーの問題により古いポリシーが残っている場合は、それらを削除します。タトゥーとは、ポリシーが GP から削除されてもレジストリに残る場合に発生します。
6. 各ユーザーに適用されている Profile Management 設定を含む UPMSettings.ini ファイルを確認します。このファイルは、ユーザーストア内の各 Citrix ユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。

Profile Management ログファイルを確認する

ログファイルは、システム動作のトラブルシューティングに役立ちます。Profile Management の設定を確認した後、Profile Management のログ記録を有効にし、問題を再現してログファイルを確認します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションに対してProfile Management のログ記録を有効にする。

2. マシン上で問題を再現します。
3. `%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager`フォルダーにあるProfile Management ログファイル（例：#computername#.#domainname#_pm.log）でエラーと警告を確認します。それぞれ「ERROR」または「WARNINGS」という単語を検索して見つけます。

   ログファイルの詳細は、この記事の後半にあるリファレンスを参照してください。
4. ユーザー ストアへのパスが正しいことを確認します。
5. Active Directory からのすべての情報が正しく読み取られたことを確認します。
6. タイムスタンプを確認して、時間がかかりすぎるアクションがないか調べます。

> **ヒント:**
>
> Microsoft Excel を使用してProfile Management ログファイルを確認できます。詳細については、Knowledge Center の記事CTX200674を参照してください。

Profile Management のログ記録を有効にする

Profile Management の展開で問題のトラブルシューティングを行う場合にのみ、すべてのイベントとアクションに対してProfile Management のログ記録を有効にしてください。問題が解決したら、ログ記録を無効にし、機密情報が含まれている可能性があるためログファイルを削除してください。

このセクションでは、GPO と `UPMPolicyDefaults_all.ini` を使用して、すべてのイベントとアクションのログ記録を有効にする方法について説明します。

Citrix StudioおよびWorkspace Environment Management (WEM) を使用して、この目標を達成することもできます。詳細については、「Profile Managementを集中管理する場所を決定する」を参照してください。

GPO を使用してログ記録を有効にする

GPOを使用してすべてのイベントとアクションのProfile Managementログを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開き、グループポリシーオブジェクトを作成します。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMX ファイル) > Citrix コンポーネント > Profile Management > ログ設定**にアクセスします。

3. Profile Managementログを次のように有効にします。
   a. **ログを有効にする**をダブルクリックします。
   b. **有効**をクリックします。
   c. **OK**をクリックします。
4. Profile Managementですべてのイベントとアクションをログに記録するように有効にします。
   a. **ログ設定**をダブルクリックします。
   b. すべてのイベントとアクションを選択します。それらの説明の詳細については、「イベントとアクション」を参照してください。
   c. **OK**をクリックします。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、次の手順に従います。
   a. **ログファイルの最大サイズ**をダブルクリックします。
   b. **有効化**をクリックし、**最大サイズ（バイト単位）**フィールドにサイズを入力します。
   c. **OK**をクリックします。

   > **ヒント:**
   >
   > 最大サイズに達すると、Profile Managementは1つのバックアップファイル（例：Logfilename.log.bak）を保持します。

6. マシンで`gpupdate /force`コマンドを実行します。

   これらのポリシーはマシンに適用されます。

ログ設定ポリシーについて詳しくは、「Profile Managementポリシーの説明とデフォルト」を参照してください。

.iniファイルを使用したログの有効化

`UPMPolicyDefaults_all.ini`を使用してすべてのイベントとアクションのProfile Managementログを有効にするには、次の手順に従います。

1. Profile Managementのインストールフォルダー（デフォルトではC:\Program Files\Citrix\User Profile Manager）で`UPMPolicyDefaults_all.ini`を開きます。
2. **ログ設定**を検索して設定を見つけます。

```
; Log settings
;
;LoggingEnabled=
;LogLevelWarnings=
;LogLevelInformation=
;LogLevelFileSystemNotification=
;LogLevelFileSystemActions=
;LogLevelRegistryActions=
;LogLevelRegistryDifference=
;LogLevelActiveDirectoryActions=
;LogLevelPolicyUserLogon=
;LogLevelLogon=
;LogLevelLogoff=
;LogLevelUserName=
;MaxLogSize=
;PathToLogFile=
```

3. `LoggingEnabled`に`1`を入力します。
4. `LogLevelWarnings`から`LogLevelUserName`までの各パラメーターに`1`を入力します。これらのパラメーターについて詳しくは、「イベントとアクション」を参照してください。
5. ログファイルのデフォルトの最大サイズを変更するには、必要に応じて`MaxLogSize`にサイズを入力します。
6. ログファイルのデフォルトフォルダを変更するには、必要に応じて`PathToLogFile`のパスを入力します。

リファレンス

このセクションでは、以下の情報を提供します。

- ログの種類
- イベントとアクション
- Profile Managementログファイルのフィールド

ログの種類

この表には、Profile Managementのトラブルシューティングに使用できるログが一覧表示されています。

非公式名	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
Profile Management ログファイル	#computername#.#domainname#_pm.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	情報メッセージ、警告、エラーは、Profile Management ログファイルに書き

非公式名	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
			込まれます。ドメイン名はコンピューターのドメインです。コンピューター名を特定できない場合、このログファイルはUserProfileManager.logと呼ばれます。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインを特定できない場合、ログファイルは#computername#_pm.logと呼ばれます。
Profile Management構成ログファイル	#computername#.#domainname#_pm_config.log	%SystemRoot%\system32\LogFiles\UserProfileManager	構成ログファイルは、ログ記録がオフになっている場合でも、GPOおよび.iniファイルの設定をキャプチャします。コンピューター名を特定できない場合、UserProfileManager_pm_configと呼ばれます。コンピューター名が利用可能であるにもかかわらずドメインを特定できない場合、ログファイルは#computername#_pm_config.logと呼ばれます。
Windowsイベントログ	Application.evtx	%SystemRoot%\System32\winevt\Logs	Microsoftイベントビューアーで表示するWindowsイベントは、主にエラー報告

非公式名	ログファイル名	場所	ログ情報の種類
			に使用されます。エラーのみが書き込まれます。

イベントとアクション

この表は、Profile Managementがログに記録できるイベントとアクションを示します。

種類	説明	.INIのパラメーター
一般的な警告	すべての一般的な警告。	LogLevelWarnings
一般情報	すべての一般的な情報。	LogLevelInformation
ファイルシステム通知	処理されたファイルまたはフォルダーが変更されるたびに、1つのログエントリが作成されます。	LogLevelFileSystemNotification
ファイルシステムアクション	Profile Managementによって実行されるファイルシステム操作。	LogLevelFileSystemActions
レジストリアクション	Profile Managementによって実行されるレジストリアクション。	LogLevelRegistryActions
ログオフ時のレジストリの相違点	セッション中に変更されたHKCUハイブ内のすべてのレジストリキー。重要: この設定は、ログファイルに大量の出力を生成します。	LogLevelRegistryDifference
Active Directoryアクション	Profile ManagementがActive Directoryをクエリするたびに、エントリがログファイルに書き込まれます。	LogLevelActiveDirectoryActions
ポリシー値	Profile Managementサービスが開始されるか、ポリシーの更新が行われると、ポリシー	LogLevelPolicyUserLogon

種類	説明	.INIのパラメーター
	値がログファイルに書き込まれます。	
ログオン	ログオン中のアクションのシーケンスがログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogon
ログオフ	ログオフ中のアクションのシーケンスがログファイルに書き込まれます。	LogLevelLogoff
パーソナライズされたユーザー情報	該当する場合、ユーザー名とドメイン名はログファイルの専用列に記録されます。	LogLevelUserName

ログファイルフィールド

Profile Managementログファイルの各行には、セミコロンで区切られた複数のフィールドがあります。この表は、ログファイルフィールドの一覧です。

フィールド	説明
日付	ログエントリの日付
時刻	ログエントリの時刻（ミリ秒を含む）
重大度	INFORMATION、WARNING、またはERRORのいずれか
ドメイン	ユーザーのドメイン（該当する場合）
ユーザー名	ユーザー名 (該当する場合)
セッションID	セッションID (該当する場合)
スレッドID	この行を作成したスレッドのID
機能と説明	その時点で実行されていたProfile Management機能の名前、およびログメッセージ

Windowsイベントの確認

Profile Managementによってログに記録されたWindowsイベントは、トラブルシューティングのための診断情報も提供します。Windowsイベントは、`%SystemRoot%\System32\winevt\Logs\`フォルダー内のApplication.evtxファイルに保存されます。

Windowsイベントビューアーを使用してイベントを表示するには、次の手順に従います。

1. Windowsマシンで**イベントビューアー**を起動します。
2. 左ペインで**Windowsログ > アプリケーション**ノードを選択します。

   イベントは右ペインに表示されます。

イベントのリスト

Profile Managementによってログに記録されるイベントは、すべてが連続して番号付けされているわけではなく、このバージョンのProfile Managementですべてが使用されるわけではありません。ただし、以前のバージョンからアップグレードした場合は、ログに記録される可能性があります。

イベントID	説明	原因	アクション
6	Citrix Profile Managementサービスが開始されました。	Citrix Profile Managementサービスが開始されました。これは、自動開始、手動開始、または再起動の結果である可能性があります。	起動または再起動が計画的でなかった場合は、イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是正措置を講じてください。
7	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。	Citrix Profile Managementサービスが停止しました。これは、手動による停止、またはシャットダウン処理の一部として発生した可能性があります。	サービス停止が計画的でなかった場合は、イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示されている是

イベントID	説明	原因	アクション
			正措置を講じてください。
8	ユーザーのプロファイルが、新しいバージョンのCitrix Profile Managementによって変更されたため、このバージョンでは使用できません…	このマシンのCitrix Profile Managementサービスは、新しいバージョンのProfile Managementがユーザープロファイルをユーザーストア内で変更したことを検出しました。データ損失の可能性を防ぐため、以前のバージョンのProfile Managementは一時プロファイルの使用に戻ります。	このコンピューター（およびユーザーストアを共有し、以前のバージョンのProfile Managementを使用している他のすべてのコンピューター）をアップグレードして、最新バージョンを使用してください。
9	ログオンフックの検出で問題が発生しました…	Citrix Profile Managementサービスは、ログオン通知の設定中に問題を検出しました。Citrix Profile Managementサービスでは、インストールパスにスペースが含まれていないか、サービスがインストールされているボリュームで8.3ファイル名サポートが有効になっている必要があります。	Citrix Profile Managementをスペースのないパスに再インストールするか、Profile Managementがインストールされているボリュームで8.3ファイル名サポートを有効にしてください。
10	ユーザーストアへのユーザーパスは…	指定された場所に有効なCitrixユーザープロファイルが見つかりました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。

イベントID	説明	原因	アクション
11	spsMain: CreateNamedPipe が失敗しました…	(このイベントは現在使用されていません。)	なし。
12	StartMonitoringProfile: ログオン中にWindows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されるすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
13	StopMonitoringProfile: ログオフ中にWindows変更ジャーナル管理で問題が検出されました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーの監視を停止できませんでした。Windows変更ジャーナル管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できませんでした。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。ユーザーのファイルおよ	Profile Managementによって管理されるすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示され

イベントID	説明	原因	アクション
		びレジストリの変更は同期されません。	ている是正措置を講じてください。
14	CJIncreaseSizeIfNecessary: 変更ジャーナルの作成/サイズ変更に失敗しました…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルを作成またはサイズ変更しようとしたときに問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
15	CJInitializeForMonitoring: ジャーナルを照会できません…	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルを照会しているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わ	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含

イベントID	説明	原因	アクション
		りにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	め、示されている是正措置を講じてください。
16	CJInitializeForMonitoring: 初期MFTスキャンがエラーで終了しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの初期スキャンを実行しているときに問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
17	CJInitializeForMonitoring: サービス開始以降のFS変更の処理に失敗しました。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行しているときに問題が検出されました。このエラーは、サービスが変更を監視するのを妨げません。Citrix Profile Management	このエラーはProfile Managementの動作を妨げるものではありませんが、念のためエラーを確認してください。Profile Managementによって管理されているすべてのボリュームで、変更ジャーナル処理が構成され、動作していることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認し

イベントID	説明	原因	アクション
		はこのディレクトリを通常どおり処理します。	てください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含め、示されている是正措置を講じてください。
18	CJProcessAvailable Records: 内部エラー…	Citrix Profile Managementサービスで、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視しているときに障害が発生しました。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの更新スキャンを実行中に問題が検出され、サービスが最近の変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。
19	USNChangeMonitor: 変更ジャーナルの初期化に失敗しました…	Citrix Profile Managementサービスで、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視しているときに障害が発生しました。ボリューム上のNTFS変更ジャーナルの初期ス	Citrix Profile Managementサービスは、プロファイルまたは拡張同期用に構成されたフォルダーを監視できませんでした。Windows変更ジャーナルイベント管理で問題が検出され、サービスが

イベントID	説明	原因	アクション
		キャンを準備中に問題が検出され、サービスが変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのディレクトリの処理を完了しません。重要なデータを手動でバックアップしてください。	変更を監視できなくなりました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。
20	CADUser::Init: DNSドメインとADsPathの特定に失敗しました…	ログオンユーザーに関する情報をActive Directoryにクエリしているときに問題が発生しました。Citrix Profile Managementはこのフォルダーを処理しません。代わりにWindowsユーザープロファイルが使用されます。	コンピューターがドメインコントローラーへの機能するネットワークパスを持っていることを確認してください。コンピューターに十分なシステムリソースがあることを確認してください。イベントログでエラーを確認し、Profile Managementのトラブルシューティング手順を含む、示された是正措置を講じてください。
21	DNSドメインとADsPathの特定に失敗しました…	この問題は、Microsoft TechNetの記事263693に記載されているように、メモリ割り当ての制限によって引き起こされる可能性があります。	この問題の解決策は、Citrix Knowledge Centerの記事 CTX124953に記載されています。
22	ファイルアクセスが遅かった。ユーザー	ユーザーがファイルにアクセスしようと	エンタープライズアンチウイルス製品の

イベントID	説明	原因	アクション
	は、ユーザー ストアからファイルがフェッチされる際に遅延を経験しました。	しましたが、Profile Management はこの操作で遅延を検出しました。ユーザーは警告メッセージを受け取りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザー ストア内のファイルへのアクセスを妨げていることが原因である可能性があります。	トラブルシューティングと構成に関するアドバイスについては、Profile Management のドキュメントを参照してください。
23	ファイルアクセスが拒否される可能性があります。ユーザーは、ユーザー ストアからファイルがフェッチされる際に長い遅延を経験しました。	ユーザーがファイルにアクセスしようとしましたが、Profile Management はこの操作でアクセスが拒否される可能性のある重大な遅延を検出しました。ユーザーはエラーメッセージを受け取りました。このエラーは、アンチウイルスソフトウェアがユーザー ストア内のファイルへのアクセスを妨げていることが原因である可能性があります。	エンタープライズアンチウイルス製品のトラブルシューティングと構成に関するアドバイスについては、Profile Management のドキュメントを参照してください。
24	RevertToSelf がエラーコードで失敗し、Profile Management がシャットダウンされました。	一部のログオンおよびログオフ処理は、偽装を使用して実行されます。RevertToSelf 関数は通常、偽装が完了したときに呼び出されます。この場合、関	セキュリティ侵害が疑われる場合は、組織の手順に従って対処し、Profile Management を再起動してください。

イベントID	説明	原因	アクション
		数は呼び出されませんでした。そのため、セキュリティ上の理由から、Profile Management ソフトウェアはシャットダウンされました。ユーザーはエラーメッセージを受け取りました。	
25	ユーザーのプロファイルは Citrix Profile Management によって管理されていますが、ユーザー ストアに到達できません…	このコンピューター上のCitrix Profile Management Serviceは、指定されたユーザー ストアに到達できません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザー ストアをホストしているサーバーが利用できないことが原因です。	ユーザー ストアをホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。
26	デフォルトのプロファイル場所が無効です。この場所にあるプロファイルは正しく監視できません…	このコンピューター上のプロファイルは、ドライブ文字（例: C:）にマウントされたディスク上にある必要があります。	このコンピューター上のプロファイルをドライブ文字にマウントされたディスクに移動し、Profile Managementを再起動してください。
27	ユーザーのプロファイルフォルダーがデフォルトのプロファイル場所にありません…	レジストリでは、このユーザーのプロファイルの場所とデフォルトプロファイルの場所が一致しません。これは、たとえば、Profile Management Serviceを実行しているマシ	このユーザーのプロファイルがデフォルトのフォルダーの場所にあることを確認してください。必要に応じて適切なツールを使用し、ファイルシステム内のプロファイルデータがプ

イベントID	説明	原因	アクション
		ン上の異なるボリューム間でプロファイルが移動された場合に発生する可能性があります。	ロファイルのレジストリ設定と一致するようにしてください。
28	ユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしようとしているときにエラーが発生しました。	このCitrixユーザープロファイルを作成するために使用されたデフォルトまたはテンプレートプロファイルのレジストリに権限の問題がある可能性があります。	必要に応じて、SetAclなどのサードパーティユーティリティを使用して、Profile Management ユーザー ストア内のユーザーのレジストリハイブのセキュリティ権限をリセットしてください。
29	テンプレートプロファイルパスが構成されていますが、プロファイルが見つかりませんでした…	指定されたフォルダーにはNTUSER.DATファイルが含まれていないため、テンプレートプロファイル設定で使用できません。この問題は、NTUSER.DATファイルを含むフォルダーではなく、NTUSER.DATファイルのフルパスが構成されている場合に頻繁に発生します。テンプレートプロファイル設定は、Active Directory属性、システム環境変数、または `%USERNAME%` および `%USERDOMAIN%` 変数の展開をサポートしていません。	テンプレートプロファイルを含むフォルダーへの有効なパスが構成されていることを確認してください。パスにNTUSER.DATが含まれていることを確認してください。このファイルが有効であり、すべてのファイルへの読み取りアクセスを許可するようにフォルダーのアクセス権が正しく設定されていることを確認してください。

イベントID	説明	原因	アクション
33	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにあるローカルプロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
34	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにある移動プロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています。
35	Citrix Profile Managementは、LOCATIONにあるテンプレートプロファイルからユーザーストアにプロファイルを作成しました	指定された場所からユーザーストアにプロファイルが作成されました。	なし。このメッセージは情報提供のみを目的としています
36	USER の既存のプロファイルフォルダーを、このユーザーの新しい Citrix 強制プロファイル用に準備できません。可能な場合、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。	Citrix 強制プロファイルは、ログオンごとにテンプレートプロファイルのコピーを使用します。既存のプロファイルはすべて削除され、Citrix 強制プロファイルは指定されたテンプレートの場所からコピーされます。このプロセスは失敗しました。	既存のプロファイルフォルダーを手動で削除します。削除が失敗する原因となる別のプロセスによってファイルがロックされている場合は、コンピューターを再起動する必要がある場合があります。テンプレートフォルダーが存在し、ユーザーがその内容を読み取る権限を持っていることを確認してください。

プロファイル管理 2308

イベントID	説明	原因	アクション
37	user のユーザー ストア パスに到達できません。このユーザーには一時プロファイルが作成され、このユーザー ストアのプロファイルには変更が保存されません。	このコンピューター上の Citrix Profile Management Service は、指定されたユーザー ストアに到達できません。これは通常、ネットワークの問題、またはユーザー ストアをホストしているサーバーが利用できないことが原因です。	ユーザー ストアをホストしているサーバーが利用可能であり、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作していることを確認してください。
38	user のプロファイルは Citrix Profile Management によって管理されていますが、ユーザー ストア パスが見つかりません。このユーザーには一時プロファイルが作成され、このユーザー ストアのプロファイルには変更が保存されません。	このコンピューター上の Citrix Profile Management Service は、指定されたユーザー ストア内のプロファイルを見つけることができません。これは、ネットワークの問題、またはユーザー ストアをホストしているサーバーが利用できないことが原因である可能性があります。しかし、ユーザー ストア内のプロファイルが削除または移動されたためである可能性もあります。あるいは、ユーザー ストアへのパスが変更され、ユーザー ストア内の既存のプロファイルを正しく指していない可能性もあります。	ユーザー ストアをホストしているサーバーが利用可能であることを確認してください。また、このコンピューターとサーバー間のネットワークが動作しており、ユーザー ストアへのパスが既存のプロファイルを指していることを確認してください。ユーザー ストア内のプロファイルが削除されている場合は、ローカル マシンのプロファイルを削除してください。

イベントID	説明	原因	アクション
42	ユーザー `<userdomain>\<username>` のポリシー設定を更新しようとしているときにエラーが発生しました。ポリシー設定が正しく適用されていない可能性があります。エラーコード: `<error code>`	Citrix Profile Management は、Citrix グループ ポリシー設定の更新に失敗しました。	Citrix Group Policy Client-Side Extension がインストールされ、正しく動作していることを確認します。
3005	`<path1>` からアクセスポイント `<path2>` への仮想ディスクのマウントに失敗しました。	Citrix Profile Management は仮想ディスクをアクセスポイントにマウントできませんでした。この問題は、仮想ディスクにアクセスできない場合、アクセスポイントが空でない場合、または仮想ディスクがすでにマウントされている場合に発生する可能性があります。	マシンを再起動し、問題が解決したかどうかを確認します。解決しない場合は、CDF トレースを収集し、Citrix テクニカルサポートにお問い合わせください。
3008	`<path1>` からアクセスポイント `<path2>` への検索データベースのマウントに失敗しました。	Windows Search サービスは検索データベースをマウントできませんでした。この問題は、検索データベースが破損している場合に発生する可能性があります。	CDF トレースを収集し、Citrix テクニカルサポートにお問い合わせください。

一般的な問題のトラブルシューティング

この記事では、一般的なProfile Managementの問題をトラブルシューティングする方法について説明します。

ログオンが遅い

ユーザーのログオンが遅い場合は、以下の手順でトラブルシューティングを行ってください。

1. Citrix Directorのログオン期間パネルでプロファイルの読み込み時間を確認します。予想よりも大幅に長い場合は、ユーザープロファイルの読み込みが原因でログオンが遅くなっています。

   詳細については、「ユーザーログオンの問題の診断」を参照してください。

2. Citrix Profile Managementログファイルでプロファイル処理時間を確認します。

   `C:\Windows\System32\Log Files\User Profile Manager`にあるProfile Managementログファイルで、`DispatchLogonLogoff`で始まるエントリを探します。次の例は、ログオン処理時間が10.22秒であることを示しています。

   `DispatchLogonLogoff: ---------- Finished logon processing successfully in [s]: <10.22>.`.

3. 推奨されるProfile Managementポリシーが適用されていることを確認します。

   「ユーザーログオンパフォーマンスの向上」に記載されているログオンパフォーマンスを向上させるための推奨事項に従ってください。

4. Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。

   ログオンの遅延が続く場合は、Citrixテクニカルサポートに連絡してさらにサポートを受けてください。詳細については、「Citrixテクニカルサポートへのお問い合わせ」を参照してください。

プロファイルがストリーミングされていることを確認する

ストリーミングユーザープロファイルを有効にしており、この機能がユーザーのプロファイルに適用されていることを確認したい場合は、次の手順を実行します。

1. Profile Managementログファイルで次の種類のエントリを確認します。

   ```
   2010-03-16;16:16:35.369;INFORMATION;;;;1140;ReadPolicy: Configuration value read from policy: PSEnabled=<1>
   ```

最後の項目は、機能が有効になっている場合、PSEnabled=\<1\> に設定する必要があります。

2. Profile Management ログファイルで、ユーザーの次のエントリを確認します。

```
2010-03-16;20:17:30.401;INFORMATION;<domain name>;<user
name>;2;2364;ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile
support enabled.
```

ストリーミングユーザープロファイルが適用されていない場合、項目には「ProcessLogon: User logging on with Streamed Profile support disabled」と表示されます。

適用されているポリシーを特定する

UPMSettings.ini ファイルを使用して、適用されている Profile Management ポリシーを特定します。このファイルは、ユーザーストア内の各 Citrix ユーザープロファイルのルートフォルダーに存在します。このファイルを調べることは、ポリシーの結果セット (RSoP) を使用するよりも便利な場合があります。特に、GPO と .ini ファイル設定を組み合わせてポリシーを決定している場合に便利です。

UPMFRSettings.ini ファイルを使用して、除外リストにあるため処理されないプロファイルフォルダーを特定します。UPMFRSettings.ini ファイルもルートフォルダーに存在します。

破損したプロファイルデータを除外する

ユーザープロファイルが破損しており、特定ファイルまたはフォルダーに問題があると確信している場合は、同期プロセスから除外します。その方法は、そのファイルまたはフォルダーを除外リストに追加することです。

レジストリエントリへの接続をクリーンアップする

一部のシナリオ (Profile Management が関与するものに限らない) では、ユーザーがログオフした後もレジストリプロファイルデータへの接続が保持されます。この保持により、ログオフが遅くなったり、ユーザーセッションが完全に終了しなかったりする可能性があります。Microsoft の User Profile Hive Cleanup (`UPHClean`) ツールは、これらのシナリオの解決に役立ちます。

ローカルプロファイルを削除する

Microsoft Delprof.exe と Sepago Delprof2 は、ユーザープロファイルの削除に役立つツールです。

プロファイルが保存されている場所を特定する

プロファイルの問題を診断するには、ユーザープロファイル内のファイルがどこに保存されているかを特定する必要があります。次の手順は、プロファイルが保存されている場所をすばやく特定する方法を提供します。

1. イベントビューアーで、左ペインの をクリックします。
2. 右ペインの「ソース」の下で、目的のCitrix Profile Managementイベントを見つけてダブルクリックします。
3. イベントに関連付けられたユーザー ストアへのパスは、「全般」タブにリンクとして表示されます。
4. ファイルを探索したい場合は、リンクをたどってユーザー ストアを参照してください。

サーバーの確認

サーバーがユーザーのログオンとログオフを正しく処理しているかどうかを確認するには、ユーザー ストア内のユーザー プロファイルにあるPmCompatibility.iniというファイルを確認します。このファイルはプロファイルのルートフォルダーにあります。ファイルの最後の項目は、ユーザーが最後にログオフしたサーバーの名前です。たとえば、サーバーがProfile Management 5.0を実行している場合、項目は次のようになります。

```
[LastUpdateServerName]

5.0=<computer name>
```

ロールバック

Profile Managementの以前のバージョンにロールバックするには、ユーザー ストアをホストしているファイルサーバーでコマンドラインから**del /s**を実行します。このコマンドは、各プロファイルからPmCompatibility.iniファイルを削除します。たとえば、ユーザー ストアへのローカルパスが`D:\UpmProfiles`の場合、次を実行します。

```
del /s D:\UpmProfiles\pmcompatibility.ini
```

コマンドが完了すると、ユーザーは以前のバージョンを実行しているコンピューターにログオンし、ユーザー ストアからプロファイルを受け取ることができます。

ユーザー ストア内の除外フォルダー

除外されたフォルダーはユーザー ストアに表示されます。これは想定内の問題であり、修正措置は必要ありません。除外リストにあるフォルダーはユーザー ストアに作成されますが、その内容は同期されません。

ログファイル内の情報が不足している

デバッグモードをアクティブにしても、完全なログ記録が自動的に有効になるわけではありません。ログ設定で、ログに記録したいイベントのすべてのチェックボックスが選択されていることを確認してください。

ヒント：リストの最後のチェックボックスを有効にするには、下にスクロールする必要がある場合があります。

GPO設定が機能しない

GPO設定を変更しても、Citrix Profile Management Serviceを実行しているコンピューターで機能しません。この問題は、GPがすぐに更新されず、展開で指定されたイベントまたは間隔に基づいているために発生します。GPをすぐに更新するには、コンピューターで`gpupdate /force`を実行します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

ユーザーが新規または一時プロファイルを受け取る

デフォルトでは、問題が発生した場合（たとえば、ユーザー ストアが利用できない場合）に、ユーザーには一時プロファイルが与えられます。または、Profile Managementを構成して、エラーメッセージを表示し、ユーザーをログオフさせることもできます。このアプローチは、トラブルシューティングに役立ちます。

この機能の構成手順については、「ユーザーの強制ログオフ」を参照してください。

状況によっては、ユーザーがログオンしたときに、キャッシュされたプロファイルの代わりに新しいプロファイルを受け取ることがあります。

ユーザー ストア内のコピーが削除された後にローカル プロファイルが存在する場合、ユーザーは一時プロファイルを受け取ることもあります。この状況は、ユーザー ストアがクリアされたにもかかわらず、ログオフ時にローカル プロファイルが削除されなかった場合に発生する可能性があります。

Profile Managementは、このような部分的なプロファイルの削除をネットワーク、共有、または権限のエラーとして扱い、ユーザーに一時プロファイルを提供します。このため、部分的な削除は推奨されません。この問題を回避するには、影響を受けるコンピューターにログオンし、プロファイルを手動で削除してください。

展開にパーソナルvDiskが含まれている場合、これらのディスクのデフォルト処理が正しく調整されていないと、ユーザーは一時プロファイルを受け取る可能性があります。詳細については、「ユーザープロファイルの移行」を参照してください。

仮想デスクトップセッションが応答しなくなったときにプロファイルデータが失われる

Citrix仮想デスクトップの展開では、リモートデスクトッププロトコル（RDP）セッションから切断すると、仮想デスクトップが応答しなくなったり、再起動したりする可能性があります。この動作は、セッション終了時にプロファイルデータが失われるため、Profile Managementに影響を与えます。この問題は、Citrix Virtual Delivery Agentバージョン3.1.3242以降で修正されています。

ユーザーがログオンできない（イベントID: 1000、ソース: Userenv）

ユーザーはCitrix環境にログオンできず、次のエラーメッセージを受け取ります: 「Windowsはローミングプロファイルをロードできませんでした。ローカルプロファイルでログオンしようとしています...ネットワーク管理者に連絡してください。」このエラーは、Windowsアプリケーションイベントログ（イベントID: 1000、ソース: Userenv）に表示されます。

印刷

Citrix virtual desktops™環境では、ユーザーはデフォルトのプリンターを選択できますが、ログオン間でその選択が保持されないことがあります。この問題は、Citrix Provisioning Services Personal vDiskを標準イメージモードで使用するプールされた仮想デスクトップでプリンターを設定するために、Citrix仮想デスクトップのポリシーが使用された場合に観察されています。

この問題はProfile Managementに起因するものではありません。Profile Managementのログファイルには、プリンターのレジストリエントリがログオフ時にコピーされたことが示されていますが（これは予期される動作です）、ユーザーのNTUSER.datにはそのエントリが含まれていません（これは予期されない動作です）。この問題は実際には、Citrix仮想デスクトップが`DefaultPmFlags`レジストリ設定を使用する方法に起因しています。

プロファイルに予期しないプリンターが追加されることがあります。ユーザーがそれらを削除しても、次回のログオン時にプリンターが再表示されます。詳細については、Profile Managementサポートフォーラムを参照してください。

複数のプラットフォームでのアプリケーション設定に関する問題

複数のプラットフォーム間でアプリケーション設定が正しくローミングされないという問題が発生する場合があります。通常、これらの問題は次の原因で発生します。

- あるシステムから別のシステムに適用できない設定。たとえば、すべてのシステムに存在しないハードウェア固有の設定などです。
- 異なるシステムに異なる方法でインストールされているアプリケーション。例：
  - あるシステムではC:ドライブにインストールされているが、別のシステムではD:ドライブにインストールされているアプリケーション。
  - あるシステムでは `C:\Program Files` にインストールされているが、別のシステムでは `C:\Program Files (x86)` にインストールされているアプリケーション。
  - あるシステムにはインストールされているが、別のシステムにはインストールされていないExcelアドイン。
- 設定情報をプロファイルに保存しないアプリケーション。たとえば、ローカルマシンの設定内またはユーザープロファイルの外部に保存されている情報などです。
- レジストリに保存されている言語固有の構成設定。Profile Managementは、バージョン1プロファイルの言語固有のフォルダー名を自動的に翻訳しますが、レジストリ内のものは翻訳しません。

ほとんどの場合、これらの問題を引き起こすシステムの標準化を改善することで、問題を最小限に抑えることができます。ただし、多くの場合、問題はOSまたはそれぞれのアプリケーションの（複数のプラットフォームとの）固有の非互換性に起因します。問題のある設定が重要でない場合は、プロファイルから除外することで問題が解決する可能性があります。

不明なアカウントが所有するプロファイル

まれに、プロファイルが不明なアカウントに属しているように見えることがあります。コンピューターの**システムプロパティ**ダイアログボックスの**詳細設定**タブで、ユーザープロファイルの**設定**をクリックすると、「アカウント不明」と表示されます。この問題は、イベントログエントリ *「コンポーネント \<アプリケーションID\> のイベント作成のプロファイル通知に失敗しました。エラーコードは???」* とともに発生します。レジストリでは、アプリケーションIDはMicrosoftコンポーネントであるSHACCTプロファイル通知ハンドラーを指しています。

この問題が環境で発生していることを確認するには、Profile Managementがデータを処理しないユーザーとしてログオンし、これらの症状を確認します。

これはProfile Managementの問題ではなく、Active Directoryが仮想マシンのスナップショットと適切に連携しないことが原因である可能性があります。Citrixユーザープロファイルの操作には影響ありません。ユーザーはログオンおよびログオフでき、プロファイルの変更は保持されます。

高度なトラブルシューティングを実行する

現在のProfile Management設定を確認し、Profile Managementログが有用な情報のソースではないと判断した後、このチェックリストを使用してさらにトラブルシューティングを行ってください。

- 分析しているマシンから結果ポリシーセット (RSoP) レポートを確認し、すべてのGPOが期待どおりに適用されていることを確認します。

  レポートを生成するには、マシンで `gpresult` コマンドを実行します。
- 最新バージョンのProfile Managementがインストールされていることを確認します。詳細については、「Profile Managementのバージョンを確認する」を参照してください。
- 他のユーザーからの解決策については、Profile Managementサポートフォーラムを確認してください。
- 影響を受けるマシンと同じオペレーティングシステムを持つクリーンなマシンで問題を再現してみてください。ソフトウェア製品を1つずつインストールし、各インストール後に問題が再現できるか確認します。詳細については、「テスト環境にProfile Managementを展開する」を参照してください。

Profile Managementのバージョンを確認する

バージョン情報を確認するには、次の手順に従います。

1. WindowsエクスプローラーでUserProfileManager.exeファイルを右クリックします。
2. **［プロパティ］>［バージョン］** をクリックします。
3. 最新バージョンでない場合は、My Accountサイトから最新バージョンをダウンロードします。Citrix®製品を選択し、ダウンロードセクションからProfile Managementをダウンロードします。

> **ヒント:**
>
> アップグレード後、必要に応じて後続の機能を有効にできます。

テスト環境にProfile Managementを展開する

ログファイルが問題のトラブルシューティングに役立たない場合は、次の例で使用されているトラブルシューティングアプローチを試してください。このアプローチは、次の目的で使用できます。

- どの構成設定が読み取られているかを特定します。
- (複数のADMファイルが存在する場合に) 構成設定がどこから読み取られているかを特定します。
- ログファイルがプロファイルへの変更を正しく追跡していることを確認します。

展開例

この例での展開は次のとおりです。

- Citrix Virtual Apps™サーバーはWindows Server 2022で実行されています。
- ユーザーは、Windows用Citrix Workspaceアプリを使用して公開リソースに接続しています。
- INIファイルベースの構成の代わりに、OUベースのGPOが使用されます。

> **注意:**
>
> レジストリを誤って編集すると、オペレーティングシステムの再インストールが必要になるような深刻な問題が発生する可能性があります。レジストリエディターの不適切な使用によって生じる問題が解決できることを保証することはできません。レジストリエディターは自己責任で使用してください。編集する前に必ずレジストリをバックアップしてください。

トラブルシューティングのワークフロー

この例には、1台のサーバーのみで構成される小さなテストOUが含まれています。サーバーのプロファイル設定を編集できます。その後、ログファイルとポリシーの結果セット (RSoP) レポートで設定の変更を追跡します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. 実稼働環境から、Citrixユーザープロファイルをホストする Citrix Virtual Appsサーバーの1つを削除します。次に、そのサーバーを新しいOUに追加します。
2. サーバーからProfile Managementを削除して再インストールします。
3. ドメイン管理者としてサーバーにログオンします。
4. ローカルポリシーを調べて、このレベルのADMファイルを削除します。

5. 新しいOUに割り当てられているGPOへのリンクをすべて削除します。
6. サーバーで、レジストリエディターからキーとすべてのサブキーを削除します: `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\`。
7. Profile Managementの.iniファイルをすべて削除します。
8. **マイコンピュータ \> プロパティ \> 詳細設定**を使用して、テストしたいプロファイル以外のすべてのプロファイルを削除します。表示されるエラーを調査します。
9. Authenticated Usersグループにファイルのフルコントロールを付与します。これにより、ユーザーとしてログオンしたときにProfile Managementのログファイルを確認できます。ログファイルは `C:\Windows\System32\LogFiles\UserProfileManager\<domainname>#<computername>_pm.log` です（\<domainname\>はコンピューターのドメイン、\<computername\>はその名前です）。ドメインを特定できない場合、ログファイルはUserProfileManager.logです。
10. 次の設定のみを含むGPOを作成し、新しいOUにリンクします。GPOがAuthenticated Usersグループに割り当てられていることを確認してください。これらの設定を有効にして構成します。

    a. Profile Managementを有効にします。
    b. ユーザーストアへのパス。
    c. ログ記録を有効にします。
    d. ログ設定。すべてのイベントとアクションを選択します。
    e. 既存のプロファイルの移行。ローミングプロファイルとローカルプロファイルを選択します。
    f. ローカルプロファイルの競合処理。ローカルプロファイルの名前を変更を選択します。
    g. ログオフ時にローカルにキャッシュされたプロファイルを削除します。
    h. *ローカル管理者ログオンの処理*設定を無効にします。これにより、Profile Managementが誤って構成され、ユーザーのログオンが妨げられた場合でも、管理者としてログオンできます。

11. OUを右クリックし、**継承のブロック**を選択して、GPOリンクがOUに適用される方法を制御します。
12. サーバー上で一度もログオンしたことがなく、どのローカル管理者グループのメンバーでもないドメインテストユーザーを作成します。
13. このユーザーにフルデスクトップを公開し、そのユーザーがRemote Desktop Usersグループに属していることを確認します。

14. ドメインに複数のドメインコントローラー（DC）がある場合は、サーバーと同じサイト内のすべてのDC間でADレプリケーションを強制します。
15. ドメイン管理者としてサーバーにログオンし、ログファイルを削除し、Citrix Profile Managementサービスを再起動して、`gpupdate /force`を実行します。
16. レジストリを確認し、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Policies\Citrix\UserProfileManager\`内の値が新しいGPOの値のみであることを確認します。
17. 管理者としてログアウトします。
18. Internet Explorerの設定をいくつか変更し、My Docsフォルダーに空のテストファイルを作成します。
19. Profile Managementログファイルへのショートカットを作成します。それを開いてエントリを調べます。注意が必要な項目を調査します。
20. ドメイン管理者としてログアウトし、再度ログオンします。
21. `gpresult`を実行して、テストユーザーとサーバーのRSoPレポートを生成します。

レポートに期待する内容が含まれていない場合は、注意が必要な項目を調査します。

Citrixテクニカルサポートへのお問い合わせ

このセクションのトラブルシューティングアドバイスを確認し、発生した問題がProfile Managementに起因すると考えられる場合は、Citrixテクニカルサポートにお問い合わせください。常に以下のファイルと、可能な限り多くのその他の情報を収集して提供してください。

Profile Managementログファイルを収集する

詳細な手順は次のとおりです。

1. すべてのイベントとアクションをログに記録するように、マシンでProfile Managementを有効にします。詳しくは、「Profile Managementログの有効化」を参照してください。
2. 影響を受けるマシンで問題を再現します。
3. `%SystemRoot%\System32\Logfiles\UserProfileManager`からProfile Managementログファイルとそのバックアップファイルを収集します。

影響を受けるマシンからのログファイルには、少なくとも以下の情報が含まれています。

- サービスの開始 (Profile Managementのバージョンとビルド番号を含む)
- サービスによる構成の読み取り

- 影響を受けるユーザーの完全なログオンプロセス
- 問題発生時にユーザーが行ったアクティビティ
- 影響を受けるユーザーの完全なログオフプロセス

Windowsイベントログファイルを収集する

影響を受けるマシンで問題を再現した後、以下の手順に従ってWindowsイベントログファイルを収集します。

1. `%SystemRoot%\System32\winevt\Logs` フォルダーを見つけます。
2. Application.evtx ファイルを収集します。

インストールされているソフトウェアの詳細を収集する

影響を受けるマシンにインストールされている以下のソフトウェアの詳細を収集します。

- オペレーティングシステム、言語、およびバージョン。
- Citrix 製品およびバージョン。

.ini ファイルを収集する

Profile Management に関連付けられている .ini ファイルを収集するには、次の手順に従います。

1. ユーザー ストア内の各 Citrix ユーザー プロファイルのルート フォルダーを見つけます。
2. 次の .ini ファイルを収集します。
    - UPMSettings.ini
    - UPMFRSettings.ini
    - PmCompatibility.ini

Always On Tracing ログファイルを収集する

Always On Tracing (AOT) ログは、Profile Management の重大な問題を特定するのに役立つ情報を提供し、問題の再現の必要性を減らします。

AOT ログファイルを収集するには、次の手順に従います。

1. 問題が発生したマシンで、`C:\ProgramData\Citrix\TelemetryService\CitrixAOT` に移動します。すべての AOT ログファイルが表示されます。

> **注:**

> マシンに AOT が有効になっている他の Citrix コンポーネントがインストールされている場合、AOT ログファイルにはそれらのコンポーネントからのログも含まれます。

2. 最新のログファイルを手動で生成するには、次の手順に従います。
   a. **Windows PowerShell** を管理者として実行します。
   b. コマンドを実行します: `Restart-Service -Name "Citrix Telemetry Service"`
3. すべての AOT ログファイルを集めて、Citrix テクニカルサポートに送信してください。

CDFControl を使用して診断トレースログを収集する

CDFControl を使用して診断トレースログを収集するには、次の手順に従います。

1. Knowledge Center の記事 CTX111961 から CDFControl ツールをダウンロードします。
2. CDFControl 実行可能ファイルを実行します。
3. 表示されるウィンドウで、必要に応じて1つ以上のトレースモジュールを選択します。機能の説明の詳細については、次の表を参照してください。
4. をクリックします。
5. 問題を再現します。
6. をクリックします。
7. CDFControl 実行可能ファイルと同じフォルダーでトレースログを見つけます。

この表は、CDFControl の追跡モジュールの機能を示しています。

トレースモジュール	説明
UPM_DLL_GPCSE	Profile Management から Citrix Group Policy クライアント側拡張機能に送信されたユーザーグループポリシー評価要求をトレースします。
UPM_DLL_OUTLOOK_HOOK	Outlook の Profile Management フックモジュールをトレースします。Outlook 検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。

トレースモジュール	説明
UPM_DLL_Perfmon	Profile Management に関連付けられた Windows パフォーマンスモニターカウンターと、Profile Management によって生成されたエラーをトレースします。
UPM_DLL_SearchSvc_Hook	Windows Search Service の Profile Management フックモジュールをトレースします。Outlook 検索インデックスのローミング機能に関する問題をトレースするには、これを選択します。
UPM_DLL_WfShell	公開アプリケーションのデスクトップ準備完了イベントを報告する Profile Management `Wfshell` プラグインをトレースします。
UPM_Driver	Citrix ストリーミングユーザープロファイルドライバーが使用されるたびに、ファイルシステムの変更をトレースします。
UPM_Service	Profile Management Service が呼び出されるたびに情報をトレースします。例としては、ログオン時、ログオフ時、セッション中の同期、または定期的なメンテナンスが行われる場合などがあります。
UPM_SessionLaunchEvaluation	Profile Management の一意のトランザクション ID に関連付けられた起動イベントをトレースします。
UPM_WMI	Profile Management VDA WMI プラグインイベントをトレースします。

その他の情報の収集

可能であれば、以下の情報を収集してください。

- `gpresult` コマンドを実行して、影響を受けるマシンとユーザーのポリシーの結果セット (RSoP) レポート。
- アプリケーションイベントログ。

- 利用可能な場合は、**Userenv** デバッグファイル。このツールに関する情報については、Microsoft のドキュメントを参照してください。

注:

Citrix Provisioning Services が展開の一部であり、プロファイルが初期化されているときに問題が発生する場合、データ収集は複雑になる可能性があります。そのシナリオでは、.ini ファイルで前述の構成更新を行い (GPO ログ設定を無効にし)、プロビジョニングされたイメージでの Profile Management の事前構成 の指示に従うことをお勧めします。

方法

ユーザーログオンパフォーマンスの向上

Profile Management は、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるためのさまざまなポリシーを提供します。例としては、**ストリーム配信ユーザープロファイル**、**フォルダーミラーリングの高速化**、および**プロファイルコンテナー**ポリシーがあります。これらのポリシーは、ユーザープロファイルが日常の使用で増え続けるシナリオで役立ちます。

このセクションでは、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるための2つの Profile Management ソリューションについて説明します。

ストリーム配信プロファイルを有効にし、フォルダーミラーリングを高速化する

環境にユーザーストアを展開した後、ユーザーログオンパフォーマンスを向上させるために、次のポリシーを有効にします。

1. **Profile Management > ストリーム配信ユーザープロファイル**に移動し、**プロファイルストリーミング**と**フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする**を有効にします。
2. **Profile Management > ファイルシステム**に移動し、**フォルダーミラーリングの高速化**を有効にします。

完全なプロファイルに対してプロファイルコンテナーを有効にする

ログオンパフォーマンスを向上させるために、VHDXベースのCitrix®プロファイルソリューション（プロファイルコンテナーと呼ばれます）を展開できます。これらのVHDXファイルは、ユーザーログオン時に動的にアタッチされます。 VHDXベースのソリューションを展開するには、完全なユーザープロファイルを保存するようにプロファイルコンテナーを次のように有効にします。

1. **Profile Management > プロファイルコンテナー設定**に移動します。
2. **プロファイルコンテナー**を有効にし、プロファイルコンテナーリストにアスタリスク (*) を入力します。

パフォーマンスの比較

通常のユーザープロファイルを使用したテストに基づいて、上記のソリューションを推奨します。詳細については、Knowledge Center の記事 CTX463658 を参照してください。以下の表に示すように、いずれかのソリューションを展開した後、ユーザーのログオン時間とログオフ時間は大幅に短縮されました。

ストリーム配信ユーザープロファイルと**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にしたテスト結果:

パラメーター	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 秒 / 56.48 秒	1.80 秒 / 4.45 秒
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 秒 / 43.67 秒	5.62 秒 / 6.89 秒

完全なプロファイルに対して**プロファイルコンテナ**ポリシーを有効にしたテスト結果:

パラメータ	変更前	変更後
ログオン時間 / 合計ログオン時間	53.81 s / 56.48 s	2.66 s / 5.26 s
ログオフ時間 / 合計ログオフ時間	42.49 s / 43.67 s	3.63 s / 4.99 s

ファイルの重複排除を使用してストレージ容量を節約する

ユーザー ストア内のさまざまなユーザー プロファイルに、同一のファイルが存在する可能性があります。たとえば、異なるユーザーが同じファイルをダウンロードしたり、同じソフトウェアを自分のユーザー プロファイルにインストールしたりする場合があります。**ファイルの重複排除**ポリシーを使用すると、Profile Management はファイルの重複インスタンスをユーザー ストアから中央の場所 (*共有ストア*と呼ばれる) に移動し、他の重複インスタンスを削除します。そのため、ストレージ コストが削減されます。

前提条件

ファイルの重複排除を有効にするには、次のことを確認してください。

- 共有ストアが自動的に作成されるように、**ユーザー ストアへのパス**設定で **%username%** または **#samaccountname#** を使用します。
- Citrix Profile Management バージョン 2209 以降をインストールします。

ファイルの重複排除ポリシーを有効にして構成する

Workspace Environment Management™ (WEM) Web コンソールを例にとります。コンソールを使用してファイルの重複排除を有効にして構成するには、次の手順に従います。

1. **プロファイル > Profile Management 設定 > ファイルの重複排除** に移動します。
2. **ファイルの包含を有効にする** を選択し、重複排除するファイルを指定します。必要に応じて、**ファイルの除外を有効にする** を選択し、含まれるファイルから除外するファイルを指定します。詳細については、「ファイルの重複排除を有効にする」を参照してください。

変更頻度の低いファイルのみを重複排除することをお勧めします。例:

- ユーザーがインストールするプログラム ファイル:

  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\Teams*.dll`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.exe`,
  `AppData\Local\Microsoft\OneDrive*.dll`

- ユーザーがダウンロードするインストーラーまたはイメージ ファイル:

  `Downloads*.exe`, `Downloads*.msi`, `Downloads*.iso`

以下のファイルの重複排除は推奨しません。

- ユーザーが頻繁に編集する可能性のあるドキュメント:

  `Documents*.xlsx`、`Documents*.docx`

- 頻繁に変更される可能性のあるデータファイル:

  `AppData\Local*.dat`

> **注：**
>
> ファイルの重複排除の効果は、ユーザー環境や重複排除の対象として指定するファイルによって異なります。実際の状況に基づいてファイル設定をカスタマイズすることをお勧めします。

権限設定を変更する

共有ストアフォルダーを作成すると、Profile Managementは以下のプリンシパルにフォルダーを付与します。

- ドメインコンピューター（フルコントロールアクセス権付き）
- ドメインユーザー（読み取りアクセス権付き）

これらのデフォルトの権限設定では、ファイルの重複排除はドメイン参加済みマシンでのみ機能します。ドメインに参加していないマシンで機能させるには、共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を持つユーザーアカウントをそれらのマシンに割り当てる必要があります。詳細な手順は次のとおりです。

1. 共有ストアサーバーで、ユーザーアカウント（例: `admin0`）に共有ストアフォルダーへのフルコントロールアクセス権を付与します。
2. 各VDAで、`admin0`ユーザーアカウントが共有ストアフォルダーにサインインするためのWindows資格情報を追加します。これを行うには、Windows資格情報マネージャーまたはWorkspace Environment Managementを使用します。詳細については、「ユーザーストアへの資格情報ベースのアクセスを有効にする」に記載されている手順を参照してください。
3. （オプション）共有ストアサーバーで、共有ストアフォルダーを見つけて、ドメインコンピューターの権限エントリを削除します。

重複排除されたファイルのデータ変更のサポート

この機能は、重複排除されたファイルのデータ変更を処理できます。たとえば、2人のユーザーがソフトウェアXYZバージョン1をインストールし、それをファイル重複排除に含めるとします。その後、1人のユーザーがバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは共有ストアにファイルの新しいバージョンを作成します。もう1人のユーザーもバージョン2にアップグレードすると、Profile Managementは古いバージョンのファイルを削除します。

__index__

アクティブライトバックを構成する

既定では、ユーザーがログオフすると、Profile Managementはローカルユーザープロファイルに加えられた変更をユーザーストアに書き戻します。ユーザーが最初のセッションをログオフする前に2番目のセッションを開始した場合、最初のセッションで行われたローカルプロファイルの変更は2番目のセッションでは利用できません。

同時セッション間でのプロファイルの一貫性を向上させるために、アクティブライトバック機能を有効にできます。この機能により、Profile Managementはユーザーがログオフするまで待つのではなく、*セッション中に*ローカルプロファイルの変更をユーザーストアに書き戻します。

概要

Profile Managementは、**アクティブライトバック**ポリシーと、以下の2つの拡張ポリシーを提供します。

- **アクティブライトバック**。Profile Managementは、ローカルの*プロファイルファイルとフォルダー*に加えられた変更をユーザーストアに書き戻します。既定では、Profile Managementは5分ごとにアクティブライトバックを実行します。
- **アクティブライトバックレジストリ**。**アクティブライトバック**ポリシーと組み合わせて使用します。Profile Managementは、ローカルの*レジストリエントリ*に加えられた変更をユーザープロファイルに書き戻します。
- **セッションロックおよび切断時のアクティブライトバック**。**アクティブライトバック**ポリシーと組み合わせて使用します。Profile Managementは、5分ごとではなく、セッションがロックまたは切断された場合にのみアクティブライトバックを実行します。

アクティブライトバックを有効にする

GPOを使用してアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。

1. グループポリシー管理エディターを開きます。
2. **ポリシー > 管理用テンプレート: ポリシー定義 (ADMXファイル) > Citrix Components > Profile Management**にアクセスします。
3. **Active write back**をダブルクリックします。

4. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。 既定では、アクティブライトバックは5分ごとに発生します。
5. レジストリエントリのアクティブライトバックを有効にするには、次の手順に従います。
   a. **Active write back registry**をダブルクリックします。
   b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。
6. Profile Managementで、セッションがロックまたは切断された場合にのみアクティブライトバックを実行するには、次の手順に従います。
   a. **Active write back on session lock and disconnection**をダブルクリックします。
   b. 表示されるポリシーウィンドウで、**有効**を選択し、**OK**をクリックします。

> **注：**
>
> ベストプラクティスとして、**Active write back on session lock and disconnection**ポリシーを有効にすることをお勧めします。

アクティブライトバックポリシーの構成の優先順位は次のとおりです。

- GPO、Studio、またはWorkspace Environment Management™ (WEM) を使用して設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
- 設定がどこにも構成されていない場合、Profile Managementが動的に構成します。

変更を有効にするには、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-server/administration/windows-commands/gpupdate>`に記載されているとおりに、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

クロスプラットフォーム設定の構成

重要: この機能に関する以下の重要な情報に注意してください:

- Profile Management のクロスプラットフォーム設定は、サポートされているオペレーティングシステム (OS) とアプリケーションのセットをサポートしています。この機能は、本番環境でのみ構成してください。
- Microsoft Office の設定は、そのアプリケーションのバージョン間ではローミングされません。詳細については、「クロスプラットフォーム設定でサポートされるオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。

- この機能は、レジストリ設定およびアプリケーション設定に適しています。ファイルやフォルダー、またはフォルダーリダイレクトで通常使用されるオブジェクト (たとえば、ブラウザーのお気に入り、デスクトップ、スタートメニューの設定など) には適していません。
- この機能を使用して、異なるプロファイルバージョンのシステム間でユーザープロファイルを移行する場合は、すべてのユーザーの移行が完了した後にこの機能を無効にしてください。この機能を使用すると、主にログオフ時にパフォーマンスに影響があります。したがって、プロファイルバージョン間のローミングをサポートしない限り、無効にしておくのが最善です。

このトピックでは、クロスプラットフォーム設定を構成するために実行できる手順の例を説明します。より詳細なケーススタディについては、「クロスプラットフォーム設定 - ケーススタディ」を参照してください。

ヒント: この機能を本番環境に導入する前に、少数のテストユーザーに限定することをお勧めします。そのためには、 **クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ**オプションを使用します。この設定が構成されている場合、Profile Management のクロスプラットフォーム設定機能は、これらのユーザーグループのメンバーのみを処理します。この設定が無効になっている場合、この機能は、 処理対象グループ設定で指定されたすべてのユーザーを処理します。もし **クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ**がグループポリシーまたは .ini ファイルで構成されていない場合、すべてのユーザーグループが処理されます。

1. すべてのプラットフォームに共通する設定については、共通のグループポリシーオブジェクト (共通 GPO) を作成し、それを Profile Management の .adm または .admx ファイルにリンクして、必要に応じて設定を構成します。この設定は、重複する設定を最小限に抑えるため、後のトラブルシューティングが困難になるのを防ぐため、ベストプラクティスです。要件に応じて、**ユーザーストアへのパス**を除くすべての Profile Management 設定は複数のプラットフォームで機能します。バージョン 1 とバージョン 2 のプロファイルのユーザーストア構造が異なるため、各プラットフォームでユーザーストアへのパスを個別に構成してください。共通 GPO では、この設定を未構成のままにしてください。
2. 異なるプラットフォーム用に個別の OU を作成します。たとえば、Windows 7 から Windows 8 に移行する場合は、これらのオペレーティングシステム用に個別の OU を作成し、各 OU でユーザーストアへのパスを適切に設定します。
3. プラットフォーム間で機能させたいパーソナライズを持つサポート対象アプリケーションの定義 (.xml) ファイルを見つけます。これらのファイルは、ダウンロードパッケージの CrossPlatform フォルダーにあります。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。詳細については、「定義ファイルの作成」を参照してください。
4. .xml ファイルをネットワーク上の適切な場所にコピーします。

5. グループポリシー管理エディターで共通 GPO を編集します。Profile Management の下にあるクロスプラットフォーム設定フォルダーを開き、次の設定を構成します:

   - クロスプラットフォーム設定ユーザーグループ。クロスプラットフォーム設定を体験するユーザーを制限します。この設定はオプションです。この機能をテストする場合や、段階的に展開する場合に役立ちます。
   - クロスプラットフォーム定義へのパス。ダウンロードパッケージからコピーした定義ファイルのネットワーク上の場所を識別します。このパスは UNC パスである必要があります。ユーザーはこの場所への読み取りアクセス権を持ち、管理者は書き込みアクセス権を持つ必要があります。この場所は、Server Message Block (SMB) または Common Internet File System (CIFS) ファイル共有である必要があります。
   - クロスプラットフォーム設定ストアへのパス。これは、複数のプラットフォームで共有されるプロファイルデータが格納されるユーザー ストアの共通領域です。ユーザーはこの領域への書き込みアクセス権を持っている必要があります。パスは絶対UNCパスまたはホームディレクトリに対する相対パスにすることができます。**ユーザー ストアへのパス**と同じ変数を使用できます。

6. そのプラットフォームのOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」が「有効」に設定されていることを確認して、ベースプラットフォームを指定します。この設定は、ベースプラットフォームのプロファイルからクロスプラットフォーム設定ストアにデータを移行します。他のプラットフォームのOUでは、このポリシーを「無効」または「未構成」に設定します。各プラットフォーム独自のプロファイルセットは、個別のOUに保存されます。クロスプラットフォーム設定ストアのシードに使用するプラットフォームのプロファイルデータを決定する必要があります。これをベースプラットフォームと呼びます。クロスプラットフォーム設定ストアにデータのない定義ファイルが含まれている場合、または単一プラットフォームプロファイルのキャッシュデータがストア内の定義データよりも新しい場合、この設定を無効にしない限り、Profile Managementは単一プラットフォームプロファイルからストアにデータを移行します。 重要: 複数のOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」が有効になっている場合、最初にユーザーがログオンしたプラットフォームがベースプロファイルになります。

7. 「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を「有効」に設定します。デフォルトでは、展開を容易にするため、この設定をオンにするまでクロスプラットフォーム設定は無効になっています。

8. グループポリシーの更新を実行します。

9. プロファイルをプラットフォーム間で移行するが、それらのローミングをサポートしない場合は、移行が完了したら、「クロスプラットフォーム設定を有効にする」を**無効**に設定します。

ここで「クロスプラットフォーム定義へのパス」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

「クロスプラットフォーム設定ストアへのパス」が無効になっている場合、デフォルトパス`Windows\PM_CP`が使用されます。ここでこの設定が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、デフォルトパスが使用されます。

ここで「クロスプラットフォーム設定を有効にする」が構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。ここでも.iniファイルでもこの設定が構成されていない場合、クロスプラットフォーム設定は適用されません。

例: Windows Server 2008とWindows 7間でのMicrosoft Office設定のローミング

この例では、バージョン2プロファイルを作成する2つのオペレーティングシステム間でユーザーのアプリケーション設定をローミングできるようにするための主要な手順について説明します。Microsoft Office 2010が例のアプリケーションであり、Windows Server 2008上のCitrix XenApp 6.5とWindows 7の間でローミングが行われます。両方のOSは64ビットです。

1. ユーザーは、Citrix Virtual Apps™サーバー上の公開アプリケーションとしてOffice 2010およびInternet Explorer 9にアクセスすることに慣れており、これらのアプリケーションでいくつかの設定を変更します。たとえば、Officeでメール署名を変更したり、Internet Explorerで新しいホームページを選択したりします。
2. 将来、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™で作成）が作成されますが、まだユーザーにはリリースされていません。デスクトップはWindows 7を実行し、Office 2010とInternet Explorer 9がプリインストールされています。
3. ユーザーは、新しいデスクトップでも設定が同じであることを期待しています。このトピックの手順に従って、クロスプラットフォーム設定機能を構成します。これには、Windows Server 2008のOUで「クロスプラットフォーム設定作成元」を有効にすることが含まれます。
4. ユーザーが次に公開バージョンのアプリケーション（新しい仮想デスクトップではない）を実行すると、その設定はクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされます。
5. その後、新しいデスクトップがユーザーにリリースされます。ユーザーがログオンしてOfficeおよびInternet Explorerのローカルバージョンを実行すると、以前のWindows Server 2008セッションからの設定が使用されます。ユーザーが変更したメール署名とホームページは、Windows 7マシンで利用できます。

6. ユーザーは仮想デスクトップからInternet Explorerで閲覧し、ホームページを再度変更することにしました。
7. ユーザーはログオフして退社します。彼らは自宅で仮想デスクトップにアクセスできませんが、リモートで公開版のInternet Explorer 9を実行できます。彼らは、前の手順でWindows 7で作成された最新のホームページが保持されていることを確認します。

定義ファイルを作成する

定義ファイルは、同期するフォルダー、ファイル、またはレジストリを定義します。独自のアプリケーション定義ファイルを作成できます。

Microsoft UE-Vテンプレートジェネレーターを使用して、UE-Vテンプレートファイルを作成します。

1. MicrosoftのWebサイトからWindows 10用の**Windows Assessment and Deployment Kit** (Windows ADK) をダウンロードします。
2. Windows ADKをインストールします。**Microsoft User Experience Virtualization (UE-V) Template Generator**を選択します。**Install**をクリックします。インストールが完了したら、**Finish**をクリックしてウィザードを閉じます。
3. **Start**をクリックし、**Microsoft User Experience Virtualization**をクリックし、**Microsoft User Experience Virtualization Generator**をクリックします。
4. **Create a settings location template**をクリックします。
5. ウィザードに従って、アプリケーション関連のパラメーターを指定します。**Next**をクリックして続行します。

   メモ帳を例にとります。ファイルパスを**`C:\Windows\System32\notepad.exe`**として指定します。
6. 指定したアプリケーションが起動したら、閉じます。
7. プロセスが完了したら、**Next**をクリックして続行します。
8. 左ペインで**Review Locations**を選択します。標準および非標準のレジストリ/ファイルのリストにあるすべてのチェックボックスを選択します。
9. **Create**をクリックして、テンプレートXMLファイルを保存します。

   メモ帳を例にとります。テンプレートXMLファイルを**Notepad.xml**として保存します。

> **注**

> 単一のUE-Vテンプレートファイルに複数のアプリケーションが定義されている場合があります。

> UE-Vテンプレートファイルをクロスプラットフォーム定義ファイルに変換するには、次の手順を実行します。

1. 変換ツールをこちらからダウンロードします。
2. コマンドプロンプトから、定義ファイル内のすべてのアプリケーション名を表示するには、**convert show filename** コマンドを実行します。
3. UE-V テンプレートファイルを定義ファイルに変換するには、次のコマンドを実行します。

   convert source destination \[/Index\] \[/V\]

   \[/Index\]: インデックス番号で指定されたアプリケーションのみを変換します。

   既定では、このツールは UE-V テンプレート内のすべてのアプリケーションを変換します。

   \[/V\]: 変換の詳細情報を表示します。

クロスプラットフォーム設定の場合、他のオペレーティングシステムに対して前述の手順を繰り返し、定義ファイルを1つにマージする必要があります。ファイルをマージするには、**OSVersionNumber** 属性を持つ **Platform** 要素を使用できます。Windows 7 では、設定フォルダーは `AppData\Application\Win7\folder` にあります。Windows 10 では、`AppData\Application\Win10\folder` にあります。

Windows 7 で作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">
```

```
        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">


            <Platform>


                <Folder>


                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>


                    <Recurse/>


                </Folder>


            </Platform>


        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

Windows 10 で作成した定義ファイルは次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>



<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">



    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">



        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">



            <Platform>



                <Folder>



                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>



                    <Recurse/>



                </Folder>



            </Platform>
```

```
        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

マージ後、定義ファイルの内容は次のようになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>


<GroupDefinitions Version="4.0.0.0"
GUID="93E41C6E-2091-1B9B-36BC-7CE94EDC677E">


    <Group Name="Common Settings" GUID="32D83BB6-F3AD-985F-
D4BC-655B3D9ACBE2">


        <Object Name="!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\%osname%\folder"
GUID="1B43DE3F-EC9C-463c-AC19-CD01D00219B6">


            <!-- Assuming that the folder locates differently when in
different platforms -->


            <Platform OSVersionNumber="6.1"> <!-- Win7 -->


                <Folder>
```

```
                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win7\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>

            </Platform>

            <Platform OSVersionNumber="10.0"> <!-- Win10 -->

                <Folder>

                    <Path>!CTX_ROAMINGAPPDATA!\Application\Win10\folder</
Path>

                    <Recurse/>

                </Folder>

            </Platform>
```

```
        </Object>


    </Group>


</GroupDefinitions>
```

クロスプラットフォーム設定の構成については、「クロスプラットフォーム設定の構成」を参照してください。

定義ファイルのアーキテクチャについては、「アプリケーション定義ファイルの構造」を参照してください。

アプリケーションプロファイラーの有効化については、「アプリケーションプロファイラーの有効化」を参照してください。

初期構成

次の図は、このケーススタディにおける環境構成を示しています。

グラフィック(/en-us/profile-management/2308/media/upm-cross-platform-settings-case-study-initial-1.png)

Windows 7マシンは、Citrix XenApp 6.5で公開されているOffice 2007を使用するように構成されています。

ドメインには、Windows 2008レベルでActive Directoryを実行しているWindows 2008ドメインコントローラーが含まれています。すべてのマシンは2k8_FarmというOUに属しており、Profile Management 5.0の.admファイルは2k8_Farm_POというGPOに追加されています。以下のポリシーが構成されています。

ポリシー	値
ユーザーストアへのパス	`\\FileServ1\Profiles#sAMAccountName#\%ProfVer%`
プロファイルストリーミング	有効

ポリシー	値
アクティブライトバック	有効

システム環境変数`%ProfVer%`を設定するマシンログオンスクリプトは、OU内のすべてのマシンで実行されます。

マシンタイプ	%PROFVER%
Windows 2008上のXenApp®サーバー	Win2008
Windows 7デスクトップ	Win7

例えば、ユーザーjohn.smithは、Windows 7デスクトップ用には`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win7`に、Citrix仮想アプリサーバー用には`\\FileServ1\Profiles\john.smith\Win2008`にプロファイルを持っています。デスクトップとサーバーで個別のプロファイルが維持されています。管理者は、ワークステーションとマルチセッションオペレーティングシステム間でプロファイルがローミングする際に問題が発生することを知っており、慎重に対応しています。

フォルダーリダイレクトは、**ユーザーの構成** \> **ポリシー** \> **Windowsの設定** \> **フォルダーリダイレクト** のグループポリシーを使用して設定されます。

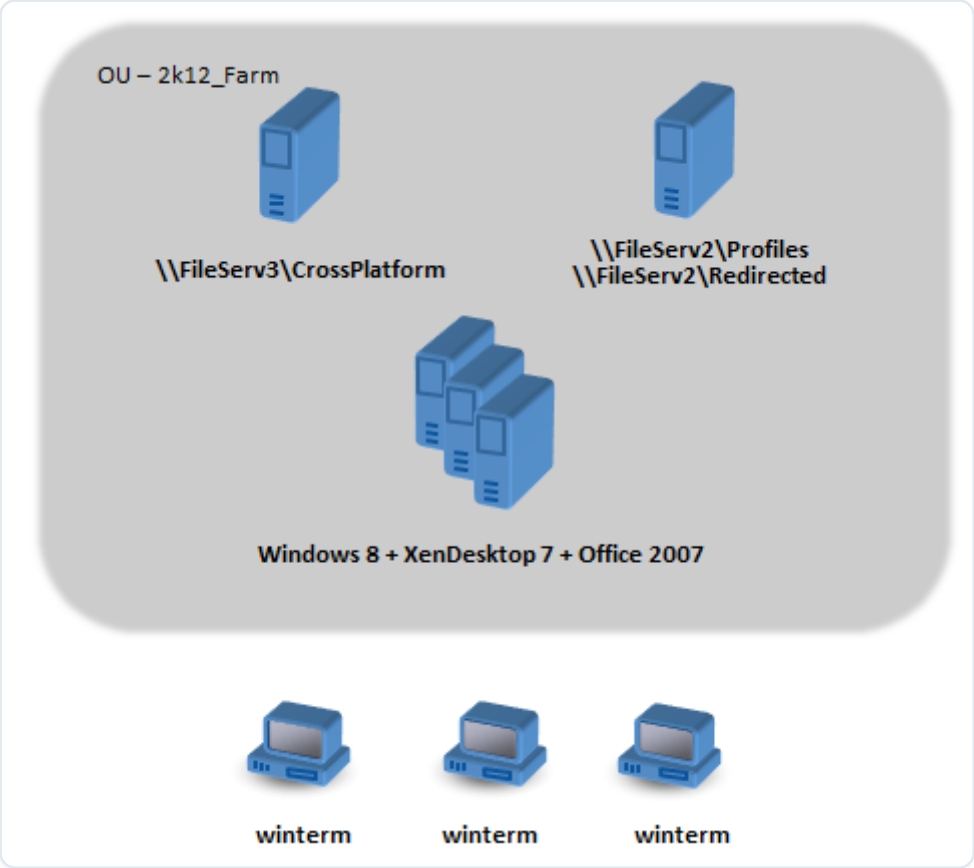
新規サイトの計画

ネットワーク管理者は、Windows Server 2012ドメインコントローラーとActive Directory 2012に基づいた、新しい環境用の新しいドメインをセットアップすることを決定しました。最終的には、仮想アプリを実行するWindows Server 2012に基づいた新しい仮想アプリサイトが計画されています。しかし、今のところ、新しいドメインはWindows 7仮想デスクトップサイトのみに使用されています。

このサイトは、Citrix Hypervisor™環境でホストされ、Windows端末からアクセスされる共有のWindows 7ベースイメージに基づいています。Office 2007はベースイメージに含まれています。

両方のドメインのユーザーが新しいドメインを使用すると予想されるため、OldDomainとNewDomainの間で双方向の信頼関係が設定されます。両方のドメインは同じADフォレストに属している必要があります。

次の図は、新しい仮想デスクトップサイトの構成を示しています。



トランザクションフォルダの管理

トランザクションフォルダとは、相互に依存するファイル（あるファイルが他のファイルを参照する）を含むフォルダを指します。「**ミラーリングするフォルダ**」ポリシーは、プロファイル同期中にトランザクションフォルダの整合性を確保します。このポリシーにより、Profile Managementはユーザーストアとローカルユーザープロファイルの間でトランザクションフォルダ全体をミラーリングします。

「**フォルダミラーリングの高速化**」ポリシーは、Profile Management 2106以降で利用できます。

この記事では、「**ミラーリングするフォルダ**」ポリシーを使用してトランザクションフォルダを管理するプロセスについて説明します。また、このポリシーを使用してInternet ExplorerのCookieフォルダを管理する方法の例も示します。

フォルダミラーリングの仕組み

通常、Profile Managementがユーザーストアとローカルプロファイル間でユーザープロファイルを同期する場合、タイムスタンプを比較して更新されたファイルのみを同期します。しかし、トランザクションフォルダ内のファイルは関連付けられているため、Profile Managementは整合性の問題を避けるためにフォルダ全体を同期する必要があります。トランザクションフォルダの例としては、トランザクションログファイルとそれに対応するデータベースファイルを含むフォルダが

あります。異なるセッションからのトランザクションログファイルとデータベースファイルを混在させると、トランザクションの整合性の問題が発生する可能性があります。

トランザクションフォルダを正しく同期するために、Profile Managementは「**ミラーリングするフォルダ**」ポリシーを提供します。トランザクションフォルダをターゲットに同期する際、Profile Managementは以下の手順を使用してフォルダをターゲットにミラーリングします。

1. フォルダ内のすべてのコンテンツを、タイムスタンプを無視してターゲットにコピーします。
2. ターゲット内の追加コンテンツをすべて削除します。

> **注意：**
>
> トランザクションフォルダをミラーリングするということは、「最後の書き込みが優先される」ことを意味します。複数のセッションで変更されたファイルは、最新の更新によって上書きされ、プロファイルの変更が失われる可能性があります。

ミラーリングするフォルダを指定する

「**ミラーリングするフォルダ**」ポリシーを有効にし、ミラーリングするフォルダを指定します。

Google Chromeを例にとってみましょう。`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default`内のブックマーク関連ファイルとサブフォルダは相互に依存しており、プロファイル同期中に全体として処理される必要があります。この目的を達成するには、このフォルダを「**ミラーリングするフォルダ**」ポリシーに追加する必要があります。

ミラーリングするフォルダからファイルやサブフォルダを除外することもできます。前の例では、`AppData\Local\Google\Chrome\User Data\Default`フォルダにはブックマークとは無関係なファイルやサブフォルダも含まれています。それらを除外するには、「**除外リスト – ディレクトリ**」および「**除外リスト – ファイル**」ポリシーを使用できます。

詳細な手順は次のとおりです。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期** に移動し、**ミラーリングするフォルダー** ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効** を選択します。
3. **ミラーリングするフォルダーのリスト** フィールドに、ユーザー ストアへの相対パスの形式でミラーリングするフォルダーのリストを入力します。フォルダーを区切るには `Enter` を入力します。

> **注：**
>
> このポリシーは再帰的に機能します。サブフォルダーをリストに追加しないでください。
>
> たとえば、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies` を追加した場合、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies\Low` は追加しないでください。

4. **OK** をクリックします。
5. ミラーリングされたフォルダー内の特定のファイルとサブフォルダーをミラーリングプロセスから除外するには、次の手順に従います。
   a. **Profile Management \> ファイルシステム** に移動し、**除外リスト – ディレクトリ** ポリシーまたは **除外リスト – ファイル** ポリシーをダブルクリックします。
   b. 除外するファイルとサブフォルダーを指定します。

構成の優先順位：

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.ini ファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも .ini ファイルでも構成されていない場合、フォルダーはミラーリングされません。

フォルダーミラーリングの高速化

Profile Management 2106以降、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にすることで、フォルダーミラーリングを高速化できます。

このポリシーを有効にすると、Profile Managementはミラーリングされたフォルダーを VHDXベースの仮想ディスクに保存します。Profile Managementはログオン時に仮想ディスクをアタッチし、ログオフ時にデタッチするため、ユーザーストアとローカルプロファイルの間でフォルダーをコピーする必要がなくなります。

このポリシーを有効にするには、次の手順に従います。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**で、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーをダブルクリックします。
2. **有効**を選択します。
3. **OK**をクリックします。

構成の優先順位:

1. このポリシーがここで構成されていない場合、.iniファイルの値が使用されます。
2. この設定がここでも.iniファイルでも構成されていない場合、ポリシーは無効になります。

例: Internet ExplorerのCookieフォルダーを管理する

Internet ExplorerのCookieフォルダーを管理する場合、プロファイルの肥大化を抑えながらトランザクションの整合性を確保する必要があります。この目標を達成するには、**ミラーリングするフォルダー**ポリシーと**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを使用します。

詳細な手順は次のとおりです。

1. ミラーリングするCookieフォルダーを指定する。
2. プロファイルの肥大化の問題が発生した場合は、ユーザーログオフ時に古いCookieの削除を有効にする。

変更を有効にするには、このMicrosoftの記事に記載されているように、コマンドプロンプトから`gpupdate /force`コマンドを実行します。

概要

このセクションでは、2つのポリシーがCookieフォルダーの管理にどのように役立つかを説明します。

Internet Explorer 8のCookieフォルダーを例にとってみましょう。このフォルダーには、index.datとCookieファイルが含まれています。index.datは、ユーザーがインターネットを閲覧する際にCookieファイルを参照します。たとえば、ユーザーが異なるデバイスからそれぞれ2つのInternet Explorerセッションを持ち、各セッションで異なるサイトにアクセスするとします。各サイトからのCookieは、対応するデバイスに追加されます。

トランザクションの整合性を確保する方法

前の例で、ユーザーが両方のセッションからログオフした場合に何が起こるかを見てみましょう。セッションからのCookieはマージされ、index.datファイルは最後にログオフしたセッションのものと同期されます。その結果、CookieファイルとIndex.dat内のそれらのCookieファイルへの参照が一致しなくなります。

「**ミラーするフォルダー**」ポリシーがこの問題を解決します。このポリシーを設定すると、Profile Managementはプロファイルの同期中にフォルダー全体を宛先にコピーします。このポリシーの動作の詳細については、「トランザクションフォルダーの管理」を参照してください。

プロファイルの肥大化を回避する方法

新しいセッションでのブラウジングは、Cookieフォルダーの肥大化につながります。また、Webサイトを再訪問すると、古いCookieが蓄積されます。「**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**」ポリシーは、ユーザーがログオフしたときにプロファイルから古いCookieを削除することで、この問題を解決します。

> **注：**

> Internet Explorer 9以前のCookieおよび閲覧履歴情報は、Internet Explorer 10以降のCookieおよび閲覧履歴情報とは互換性がありません。ユーザーは、異なるバージョンのInternet Explorerがインストールされている複数のシステム間で移動しないことをお勧めします。\[#474200\]

ミラーするCookieフォルダーを指定する

「**ミラーするフォルダー**」ポリシーを有効にします。このポリシーで、展開でサポートされているOSのバージョンに基づいて、ミラーするCookieフォルダーを指定します。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**に移動します。
2. 「**ミラーするフォルダー**」ポリシーをダブルクリックします。
3. **有効**を選択します。
4. 「**List of folders to mirror**」フィールドに、以下のCookieフォルダーを追加します。フォルダーを区切るには`Enter`を使用します。
   - バージョン2プロファイルの場合、`AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies`。
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies` (Windows 8.1以降のCookieフォルダー)
   - `AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies` (Windows 7およびWindows 8のCookieフォルダー)
   - `AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache` (Internet Explorer 10以降で利用可能なフォルダーで、Cookieデータベースファイル`Webcache01.dat`が保存されます)
5. 「**OK**」をクリックします。
6. Profile Management 2106以降を使用している場合は、「**Accelerate folder mirroring**」ポリシーをダブルクリックし、「**Enabled**」を選択します。

(オプション) ログオフ時に古いCookieを削除する

Profile Managementでユーザーログオフ時に古いCookieを削除するには、「**Process Internet cookie files on logoff**」ポリシーを有効にします。

このポリシーはログオフ時間を増加させるため、プロファイルの肥大化の問題が発生した場合にのみ有効にしてください。

1. 「**Profile Management**」\>「**Advanced Settings**」に移動します。
2. 「**Process Internet cookie files on logoff**」ポリシーをダブルクリックします。
3. 「**Enabled**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。

用語集

この記事では、Profile Managementソフトウェアおよびドキュメントで使用される用語と定義を一覧表示します。他のCitrix®ソフトウェアで使用されるプロファイル関連の用語も含まれています。Windowsユーザープロファイルに関連する他の概念を理解するには、MicrosoftのWebサイトをご覧ください。

用語	定義
ベースプラットフォーム	クロスプラットフォーム設定ストアを参照してください。
ベースプロファイル	ベースプロファイルは、ユーザーストア内のプロファイルへのUNCパスによって定義されます。クロスプラットフォーム設定機能が使用されている場合、レジストリ設定とファイルは、ベースプロファイルのサブセットからプラットフォーム間で共有できます。このサブセットはクロスプラットフォーム設定ストアにコピーされ、そこから移行またはローミングのターゲットとして使用されるプロファイルに追加されます。クロスプラットフォーム設定ストアにはベースプロファイルのサブセットが含まれていますが、これ（およびターゲットプロファイル）は常に完全なプロファイルとして保存されます。そして、必要に応じて、標準のWindowsローミングプロファイルまたはローカルプロファイルとして使用でき

用語	定義
	ます。ただし、ストリーム配信ユーザープロファイル機能が使用されている場合、ベースプロファイルは一時的に不完全になる可能性があることに注意してください。ユーザーがログオフするまで、一部のファイルは保留領域に存在する可能性があります。ローミングシナリオでベースプロファイルを定義する際の考慮事項については、ローミングを参照してください。
キャッシュ	キャッシュと同期という用語は、ユーザーストアからファイルをダウンロードしたり、ユーザーストアにファイルをアップロードしたりする行為を指します。フェッチという用語はより具体的で、ストリーム配信ユーザープロファイル機能が、ログオン後いつでもユーザーが必要とするときに、ユーザーストアからファイルのサブセットをダウンロードする方法を指します。
Citrix強制プロファイル、Citrixローミングプロファイル、Citrixユーザープロファイル	Citrixユーザープロファイルは、Profile Managementがインストールされ有効になっているときにユーザーが受け取るプロファイルの一般的な用語です。Citrixユーザープロファイルには、Citrixローミングプロファイルと Citrix強制プロファイルの2種類があります。Citrixローミングプロファイルは、ユーザーが日常業務でカスタマイズし、ログオフ時にユーザーストアに保存され、Profile Managementポリシーによって処理されるファイル、フォルダー、およびレジストリ設定の標準的なコレクションです。Citrix強制プロファイルは、Profile Managementがそれらを処理する方法においてCitrixローミングプロファイルに似ています。しかし、ログオフ時にユーザーストアに変更は保存されません。ログオン時には、強制プロファイルの新しいコピーがロードされます。Citrixユーザープロファイルは、Microsoftローカルプロファイル、Microsoftローミングプロファイル、また

用語	定義
	はMicrosoft強制プロファイルとは異なります。
コンピューター	これらのProfile Managementトピックで使用される一般的な用語「コンピューター」は、Citrix Profile Management Serviceがインストールされている任意のマシンを指すことができます。これは、ユーザーデバイス、仮想デスクトップ（Citrix Virtual Desktops™仮想マシンからプロビジョニングされた可能性のあるもの）、または公開アプリケーションをホストするCitrix Virtual Appsサーバーである可能性があります。
クロスプラットフォーム定義ファイル	このファイルは、クロスプラットフォーム設定機能を動作させるために必要な情報を含む、Profile Managementに付属の.xmlファイルです。サポートされているアプリケーションごとに1つのファイルがあります。
クロスプラットフォーム設定ストア	この場所はユーザー ストアとは別で、クロスプラットフォーム設定機能が構成されると、サポートされているアプリケーションの設定を保持します。どのプラットフォームのプロファイル データを使用してクロスプラットフォーム設定ストアをシードするかを選択します。それがベースプラットフォームです。
フェッチ	キャッシュを参照してください。
レガシーアプリケーション	レガシーアプリケーションは、設定を非標準の場所に保存するため、適切に動作しないアプリケーションです。これには、一時的なアプリケーションデータをユーザープロファイルに保存し、それによってプロファイルの肥大化を引き起こすシステムが含まれます。
移行	移行とは、プロファイルをあるプラットフォームから別のプラットフォームへ（たとえば、Windows XPからWindows 7へ）計画的に一方向へ移動させることです。

用語	定義
プロファイルの肥大化	一時ファイルが削除されない場合、Windows ユーザープロファイルのサイズが増加することがあります。これはログオンの遅延を引き起こし、プロファイルの肥大化と呼ばれます。
ローミング	ローミングとは、複数のコンピューターまたはセッションから異なるベースプロファイルを使用することです（たとえば、Windows 2008 R2を実行しているコンピューター用のベースプロファイルと、Windows 7用の別のベースプロファイル）。ユーザーは、異なるベースプロファイルを持つコンピューターまたはセッション間を行き来するときにローミングします。組織単位（OU）の構成方法によっては、ベースプロファイルをプラットフォーム間で共有できます。たとえば、Windows 2008 R2とWindows 7の両方のOUで同じプロファイルを使用できます。この場合、同じベースプロファイルが共有されているため、ユーザーはローミングしません。ベースプロファイルは、同じプロファイルバージョン（バージョン1またはバージョン2のプロファイル）を持つオペレーティングシステムでのみ共有できます。バージョン1とバージョン2の両方のプロファイルがアクティブな場合、ユーザーは常にローミングします。
同期	キャッシュを参照してください。
ユーザー ストア	ユーザー ストアは、Citrix ユーザープロファイルを保存するための中央ネットワークロケーションです。クロスプラットフォーム設定ストアも参照してください。
vディスク、パーソナル vディスク	vDiskは、Citrix Provisioning™ Servicesによってマスターイメージから作成される仮想ディスクです。Personal vDiskは、Citrix仮想デスクトップがプロファイル、ユーザーがインストールしたアプリケーションおよび部門別アプリケーション、ユーザーデータを保存するために使用するディスクです。Personal vDisk

用語	定義
	は、オペレーティングシステム、レジストリ、および基本アプリケーションに使用されるディスクとは別個のものです。
バージョン1プロファイル、バージョン2プロファイル	Microsoft Windows XPおよびWindows Server 2003のプロファイルは、バージョン1プロファイルとして知られています。Windows Vista、Windows 7、Windows Server 2008、およびWindows Server 2008 R2のプロファイルは、バージョン2プロファイルとして知られています。バージョン1プロファイルとバージョン2プロファイルは異なる名前空間を持つため、構成の一部に影響を与えます。

プロファイルについて

Windowsユーザープロファイルは、ユーザーアカウントでログオンするユーザーの環境を定義する、フォルダー、ファイル、レジストリ、および構成設定のコレクションです。これらの設定は、管理構成に応じて、ユーザーがカスタマイズできます。カスタマイズできる設定の例は次のとおりです。

- 壁紙やスクリーンセーバーなどのデスクトップ設定
- ショートカットとスタートメニューの設定
- Internet Explorerのお気に入りおよびホームページ
- Microsoft Outlookの署名
- プリンタ

一部のユーザー設定とデータは、フォルダーリダイレクトによってリダイレクトできます。ただし、フォルダーリダイレクトが使用されていない場合、これらの設定はユーザープロファイル内に保存されます。

プロファイルの種類

Windowsには、いくつかの種類のプロファイルが含まれています。

プロファイルの種類	保存場所	構成場所	アプリケーション	変更を保存しますか？
ローカル	ローカルデバイス	ローカルデバイス	ローカルデバイスのみ	はい
ローミング	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	はい
強制 (強制ローミング)	ネットワーク	アクティブディレクトリ	アクセスされた任意のデバイス	いいえ
一時的	該当なし	該当なし	ローカルデバイスのみ	いいえ

一時プロファイルは、特定のプロファイルタイプを割り当てられない場合にのみ割り当てられます。強制プロファイルを除き、通常、各ユーザーには個別のプロファイルが存在します。強制プロファイルでは、ユーザーはカスタマイズを保存できません。

リモートデスクトップサービスユーザーの場合、リモートデスクトップサービスセッションとローカルセッションで同じプロファイルがユーザーに割り当てられた場合に発生する可能性のある問題を回避するために、特定のローミングプロファイルまたは強制プロファイルを割り当てることができます。

プロファイルバージョン

Microsoft Windowsユーザープロファイルのバージョンは次のとおりです。

- バージョン 6 – Windows 11、Windows 10 1607 以降、Windows Server 2016、Windows Server 2019、および Windows Server 2022
- バージョン 5 – Windows 10 RTM
- バージョン 4 – Windows 8.1 および Windows Server 2012 R2
- バージョン 3 - Windows 8 および Windows Server 2012
- バージョン 2 - Windows Vista、Windows 7、Windows Server 2008、および Windows Server 2008 R2
- バージョン 1 – Windows Vista および Windows Server 2008 以前のオペレーティングシステム

Microsoft のバージョン 1 プロファイルのフォルダー構造 (または名前空間) は、ほとんど互換性があります。たとえば、Windows XP および Windows Server 2003 のフォルダーはほとんど同じです。同様に、バージョン 2 プロファイルの構造もほとんど互換性があります。

しかし、バージョン 1 とそれ以降のプロファイルでは名前空間が異なります。このフォルダー構造は、ユーザーおよびアプリケーションデータ用に分離されたユーザー固有のフォルダーを提供するために、後のオペレーティングシステムで変更されました。バージョン 1 プロファイルは、ルートフォルダーである **Documents and Settings** にデータを保存します。バージョン 2 プロファイルは、より直感的な名前のフォルダーである **Users** にデータを保存します。たとえば、Windows Vista の **AppData\Local** のフォルダーの内容は、Windows XP の `Documents and Settings\<username>\Local Settings\Application Data` の内容と同じです。

バージョン 1 とそれ以降のプロファイルの違いの詳細については、Managing Roaming User Data Deployment Guide を参照してください。

インストールとセットアップ

この記事では、Profile Managementをインストーラーを使用してインストールするための一般的なワークフローについて説明します。また、Profile Managementをセットアップするためのベストプラクティスも提供します。

Profile Managementをインストールするための一般的なワークフローは次のとおりです。

1. インストールパッケージをダウンロードする
2. Profile Managementをインストールする

Profile Managementをセットアップする際は、以下のベストプラクティスを参照してください。

- ローカルGPOでProfile Managementをテストする
- ユーザー ストアを作成する

デプロイメントを計画する

Profile Managementの展開を計画するには、環境とユーザーに適した構成を形成する一連のポリシー設定を決定します。自動構成機能は、Citrix仮想デスクトップの展開における意思決定の一部を簡素化します。任意の展開でこの重要なタスクを実行するためのガイドとして、「構成を決定する」を参照してください。

構成を決定し、それをレビューおよびテストした後、一般的な展開は次の要素で構成されます。

1. ユーザーストアの作成
2. Profile Managementのインストール
3. Profile Managementの有効化

.iniファイルを使用したパイロットスタディの計画

以下の情報は、パイロットスタディまたは評価中にProfile Managementの.iniファイルを使用する際に役立つことを目的としています。

重要: 評価目的で.iniファイル（UPMPolicyDefaults_all.ini）を使用する予定がある場合は、本番環境でグループポリシー（GP）の使用に切り替える前に、ファイルの名前を変更してください。たとえば、ファイル名をUPMPolicyDefaults_all_old.iniに変更します。ファイルの名前を変更することで、本番設定のみが適用され、評価中に指定した設定が使用されないことを確実にできます。

ファイルの名前が変更されていない場合、Profile Managementはグループポリシーで構成されていない設定がないかファイルを調べ、見つかった非デフォルト設定を採用します。したがって、不要な設定が導入されるリスクを排除するために、本番環境で使用したいすべての設定を.iniファイルではなくグループポリシーを使用して構成してください。

.iniファイルには.admファイルおよび.admxファイルと同じポリシーが含まれていますが、ポリシーの名前は異なります。GPでの名前に慣れていて、.iniファイルを使用したパイロットスタディを計画している場合は、「Profile Managementポリシー」の表を使用して名前を比較してください。

.iniファイルの展開の詳細については、「Profile Managementのアップグレード」および「ローカルGPOを使用したProfile Managementのテスト」を参照してください。

ベストプラクティス

Windowsユーザープロファイルは、特定のユーザーアカウントでログオンするユーザーの環境を定義する、フォルダー、ファイル、レジストリ、および構成設定の集合です。ユーザーは、管理構成に応じてこれらの設定をカスタマイズできます。

Profile Managementを1つの場所から構成する

Profile Managementを構成できる場所は3つあります。Profile Managementを構成するには、次のいずれかの方法を使用します。

- アクティブディレクトリのGPO
- Citrix Studioのポリシー
- ワークスペース エンバイロメント マネジメント™

Profile Managementを構成するには、3つの場所のうち1つだけを選択することをお勧めします。

詳細については、このビデオをご覧ください:

Cookieの処理

Profile Managementは、Internet Explorer 10およびInternet Explorer 11の古いCookieの削除をサポートしています。**ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する**ポリシーを使用して、古いCookieを削除し、Cookieフォルダーの肥大化を防ぐことができます。さらに、ミラーリングするフォルダーのリストに次のフォルダーを追加します。

- AppData\\Local\\Microsoft\\Windows\\INetCookies
- AppData\\Local\\Microsoft\\Windows\\WebCache
- AppData\\Roaming\\Microsoft\\Windows\\Cookies

アウトルックとオフィス 365

Microsoft は、一貫したオンラインおよびオフラインの Microsoft Outlook エクスペリエンスを有効にするために、キャッシュされた Exchange モードを推奨しています。Microsoft Outlook クライアントからキャッシュされた Exchange モードをオンにできます。詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/exchange/outlook/cached-exchange-mode>` を参照してください。

キャッシュされた Exchange モードを使用すると、ユーザーの Exchange メールボックスのコピーが常にオフライン Outlook データファイル (*.ost) に保存されます。このファイルは大きくなる可能性があります。

Microsoft Outlook データをローカルまたは共有ドライブに保存しないことをお勧めします。代わりに、ネイティブ Outlook 検索エクスペリエンスを有効にする機能を使用してください。この機能を使用すると、オフライン Outlook データファイル (*.ost) とユーザー固有の Microsoft 検索データベースがユーザープロファイルとともにローミングされます。この機能により、Microsoft Outlook でメールを検索する際のユーザーエクスペリエンスが向上します。この機能の使用方法の詳細については、ネイティブ Outlook 検索エクスペリエンスを有効にする を参照してください。

Microsoft Credentials Roaming が有効なプロファイルストリーミング

デフォルトでは、構成ファイルの以下のフォルダーはプロファイルストリーミングから除外されます。

- AppData\\Local\\Microsoft\\Credentials
- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\Credentials
- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\Crypto

- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\Protect
- Appdata\\Roaming\\Microsoft\\SystemCertificates

プロファイルストリーミングの除外を手動で構成する場合は、上記のフォルダーを「プロファイルストリーミング除外リスト - ディレクトリ」に追加してください。

スタートメニューのローミング

スタートメニューにピン留めされたアプリケーションは、数回のログオン後に、以下のオペレーティングシステムで消える可能性があります。

- Windows 10 Version 1607 以降、32ビット版および64ビット版
- Windows Server 2016 Standard および `Datacenter` エディション
- Windows Server 2019 Standard および `Datacenter` エディション
- Windows 10 Enterprise 仮想デスクトップ用

> **注:**
>
> Windows 10 と Windows Server 2016/2019 の両方で同じポリシーを使用することはできません。VDI および共有デスクトッププラットフォームには個別のポリシーを構成するか、Profile Management 2103 以降を使用している場合は自動構成を使用してください。

スタートメニューのローミングを自動的に有効にする

Profile Management 2103 以降を使用している場合、スタートメニューのローミングは自動的に有効になります。

Profile Management 2106 以降を使用している場合、**フォルダーミラーリングの高速化**ポリシーを有効にすることをお勧めします。このポリシーは、**Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**の下にあります。この設定により、フォルダーミラーリング機能のユーザーログオンおよびログオフエクスペリエンスが向上します。詳細については、「フォルダーミラーリングの高速化」を参照してください。

Windows 10 でスタートメニューのローミングを手動で有効にする

Profile Management 2012 以前を使用している場合、次の手順に従ってください。

1. **Profile Management \> ファイルシステム \> 同期**に移動します。

2. **ミラーリングするフォルダー**ポリシーを**有効**に設定し、次に、以下のフォルダーをミラーリングするフォルダーのリストに追加します。

   - `Appdata\Local\Packages`
   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\Caches`
   - `!ctx_localappdata!\TileDataLayer` (Windows 10 バージョン 1607 以前にのみ適用されます)

   > **注:**
   >
   > Citrix Profile Management 1912以降、**Default exclusion list – directories**または**Exclusion list – directories**に追加されたフォルダーは、**Folders to mirror**に追加した場合でも同期できません。**Folders to mirror**に追加する前に、除外リストから`appdata\local\packages`フォルダーを削除してください。

3. **Files to synchronize**ポリシーを**Enabled**に設定し、次のファイルを同期するファイルのリストに追加します。

   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*`

Windows Serverでスタートメニューのローミングを手動で有効にする

Profile Management 2012以前を使用している場合は、次の手順に従います。

1. **Profile Management \> Advanced settings**に移動し、**Disable automatic configuration**ポリシーを**Enabled**に設定します。
2. **プロファイル管理 \> ファイルシステム \> 同期** に移動します。
3. **Folders to mirror**ポリシーを**Enabled**に設定し、次のフォルダーをミラーリングするフォルダーのリストに追加します。

   - `Appdata\Local\Microsoft\Windows\Caches`

4. **Exclusion list – directories**ポリシーを**Enabled**に設定し、次のフォルダーを除外するフォルダーのリストに追加します。

   - `Appdata\Local\Packages`

5. **Exclusion list – files**ポリシーを**Enabled**に設定し、次のファイルを除外するファイルのリストに追加します。

- `Appdata\Local\Microsoft\Windows\UsrClass.dat*`

プロファイルを効率的に同期する

同期が不十分なユーザープロファイルは、ログオンの遅延、ユーザー設定の損失、プロファイルの破損につながる可能性があります。また、過剰な管理作業が必要になる場合もあります。プロファイルを効率的に同期するには、この記事で説明されている推奨事項に従ってください。

フォルダーリダイレクト

フォルダーリダイレクトは、Profile Management とともに使用できる Microsoft Windows の機能です。フォルダーリダイレクトは、プロファイルソリューションを成功させる上で重要な役割を果たします。

フォルダーリダイレクトを使用するには、関連するユーザーが Profile Management が管理する OU に属していることを確認してください。Active Directory で GPO を使用してフォルダーリダイレクトを構成することをお勧めします。

たとえば、**ユーザーの構成 \> 管理用テンプレート \> 従来の管理用テンプレート (ADM) \> Citrix \> Profile Management \> フォルダーリダイレクト** の下にある対応するポリシーを有効にすることで、次のフォルダーをリダイレクトできます。

ドキュメント、ピクチャ、ミュージック、ビデオ、お気に入り、連絡先、ダウンロード、リンク、検索、保存したゲーム

> **注：**
>
> - フォルダーリダイレクトにより、ユーザーがログオンするたびにそれらのフォルダー内のデータをコピーする必要がなくなり、ユーザーのログオンが高速化されます。
> - アプリケーションやスタートメニューで問題が発生する可能性があるため、**AppData (Roaming)** および **スタートメニュー** の **フォルダーリダイレクト** を有効にしないことを強くお勧めします。
> - **デスクトップ** フォルダーが大きすぎる場合はリダイレクトしないでください。そうしないと、ユーザーがログオンしたときにブラックスクリーンが発生する可能性があります。

ファイルとフォルダーの包含と除外

Profile Management では、包含リストと除外リストをカスタマイズすることで、同期しないファイルとフォルダーを指定できます。プロファイルの肥大化を避けるため、サードパーティ製アプリケーションのキャッシュファイル（例：Appdata\Local\Google\Chrome\UserData\Default\Cache にある Chrome のキャッシュファイル）を除外してください。詳しくは、「項目の包含と除外」を参照してください。

プロファイルストリーミング

Profile Management は、ユーザーがログオン後にプロファイル内のファイルにアクセスした場合にのみ、ユーザーストアからローカルコンピューターにファイルをフェッチします。これにより、ログオンプロセスが高速化され、プロファイルサイズが削減されます。たとえば、使用されないファイルは、ローカルプロファイルフォルダーにコピーされることはありません。また、**常にキャッシュ** ポリシーを使用して、ストリーミングされるファイルのサイズに下限を設けることもできます。このサイズ以上のファイルは、ログオン後できるだけ早くローカルにキャッシュされます。

フォルダーのプロファイルストリーミングを有効にする ポリシーと **プロファイルストリーミング** ポリシーの両方を有効にすることで、アクセスされないフォルダーをフェッチする必要がなくなります。

フォルダのプロファイルストリーミングを有効にする(/en-us/profile-management/2308/media/enable-profile-streaming-for-folders.png)

アクティブライトバックとレジストリ

この機能は、特に変更されたファイルが多い場合に、プロファイルストリーミング機能と比較してログオフ時間を短縮します。この機能は、変更されたファイルとフォルダー（レジストリエントリは除く）をセッション中に、ログオフ前にユーザー ストアに同期します。

Internet Explorer 10/11 クッキー サポート

Profile Management 5.0以降では、Internet Explorer 10およびInternet Explorer 11を使用する際のCookieの処理が強化されています。Cookieフォルダーの肥大化を防ぐには、「ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理する」ポリシーを使用して、古いCookieを削除します。ミラーリングするフォルダーのリストに、次のフォルダーを追加できます。

- AppData\Local\Microsoft\Windows\INetCookies
- AppData\Local\Microsoft\Windows\WebCache
- AppData\Roaming\Microsoft\Windows\Cookies

詳細については、ログオフ時にインターネットCookieファイルを処理するを参照してください。

トラブルシューティングのベストプラクティス

潜在的な構成エラーを特定するには、常にProfile Management構成チェッカーツール（UPMConfigCheck）を使用してください。

Profile Managementが機能しない場合は、まず構成されているユーザー ストアにアクセスできるかどうかを確認してください。

Windows 10 のスタートメニューのカスタマイズ

部分的なロックダウンカスタマイズレイアウトを使用し、グループポリシーを介してカスタマイズを展開することをお勧めします。スタートメニューのレイアウトのカスタマイズの詳細については、`<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-hardware/customize/desktop/customize-start-layout>`を参照してください。

セキュリティ

このトピックでは、Profile Management を保護するための推奨されるベストプラクティスについて説明します。一般に、Citrix® ユーザープロファイルデータへの不要なアクセスを防ぐために、ユーザーストアが配置されているサーバーを保護してください。

安全なユーザーストアの作成に関する推奨事項は、Microsoft TechNet Web サイトの「移動ユーザープロファイル用のファイル共有を作成する」という記事で確認できます。これらの最小限の推奨事項は、基本的な操作に対して高いレベルのセキュリティを確保します。また、ユーザーストアへのアクセスを設定する際には、Citrix ユーザープロファイルを変更または削除するために必要な Administrators グループを含めてください。

権限

Citrix は、ユーザーストアおよびクロスプラットフォーム設定ストアに対して、以下の権限をテストし、推奨しています。

- 共有権限: ユーザーストアのルートフォルダーに対するフルコントロール
- Microsoft が現在推奨している以下の NTFS 権限:

グループまたはユーザー名	権限	適用先
作成者/所有者	フルコントロール	サブフォルダーとファイルのみ

グループまたはユーザー名	権限	適用先
Profile Management の制御下にあるアカウントのグループ	フォルダーの内容の一覧表示 / データ読み取り、フォルダーの作成 / データ追加	このフォルダーのみ
ローカルシステム	フルコントロール	このフォルダー、サブフォルダー、およびファイル

継承が無効になっていない場合、これらの権限により、アカウントはストアにアクセスできます。また、アカウントはユーザープロファイル用のサブフォルダーを作成し、必要な読み取りおよび書き込み操作を実行できます。

この最小限の権限を超えて、サブフォルダーとファイルのみを完全に制御できる管理者グループを作成することで、管理を簡素化することもできます。そうすれば、プロファイルの削除（一般的なトラブルシューティングタスク）がそのグループのメンバーにとって容易になります。

テンプレートプロファイルを使用する場合、ユーザーにはそのプロファイルへの読み取りアクセス権が必要です。

アクセス制御リスト (ACL)

クロスプラットフォーム設定機能を使用する場合、定義ファイルを保存するフォルダーにACLを次のように設定します。認証済みユーザーには読み取りアクセス権、管理者には読み取り/書き込みアクセス権。

Windowsローミングプロファイルは、ネットワーク上のプロファイルデータを含むフォルダーから管理者権限を自動的に削除します。Profile Managementは、ユーザーストア内のフォルダーからこれらの権限を自動的に削除しません。組織のセキュリティポリシーによっては、手動で削除できます。

注：アプリケーションがユーザープロファイル内のファイルのACLを変更しても、Profile Managementはそれらの変更をユーザーストアにレプリケートしません。これはWindowsローミングプロファイルの動作と一致しています。

プロファイルストリーミングとエンタープライズウイルス対策製品

Citrix Profile Managementのストリーム配信ユーザープロファイル機能は、高度なNTFS機能を使用して、ユーザープロファイルから欠落しているファイルの存在をシミュレートします。この点で、この機能は階層型ストレージマネージャー (HSM) と呼ばれる製品群に似ています。HSMは通常、あまり使用されないファイルを磁気テープや書き換え可能な光ストレージなどの低速大容量

ストレージデバイスにアーカイブするために使用されます。そのようなファイルが必要な場合、HSMドライバーは最初のファイル要求を傍受し、要求を行っているプロセスを一時停止し、アーカイブストレージからファイルを取得します。そして、ファイル要求の続行を許可します。この類似性から、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーであるupmjit.sysは、実際にはHSMドライバーとして定義されています。

このような環境では、ウイルス対策製品がHSMドライバーを認識するように構成する必要があり、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーも例外ではありません。最も高度な脅威から防御するために、ウイルス対策製品はデバイスドライバーレベルで一部の機能を実行する必要があります。そして、HSMドライバーと同様に、ファイル要求を傍受し、元のプロセスを一時停止し、ファイルをスキャンして再開することで機能します。

ウイルス対策プログラムを誤って構成して、ストリーム配信ユーザープロファイルドライバーのようなHSMを中断させ、ユーザーストアからファイルを取得できないようにしたり、ログオンがハングアップしたりすることは比較的簡単です。

幸いなことに、企業向けウイルス対策製品は、HSMのような高度なストレージ製品の可能性を念頭に置いて作成されています。そして、HSMが処理を完了するまでスキャンを遅延させるように構成できます。家庭用ウイルス対策製品は、この点ではそれほど高度ではありません。そのため、家庭用およびSOHO（小規模オフィス/ホームオフィス）のウイルス対策製品は、ストリーミングされたユーザープロファイルではサポートされていません。

ストリーミングされたユーザープロファイルで使用するためにウイルス対策製品を構成するには、次の製品機能のいずれかを探してください。機能名はあくまで目安です。

- **信頼済みプロセスリスト**。ウイルス対策製品にHSMを識別させ、これによりHSMはファイル取得プロセスを完了できます。ウイルス対策製品は、信頼されていないプロセスによってファイルが最初にアクセスされたときにファイルをスキャンします。
- **オープンまたはステータスチェック操作時にスキャンしない**。ウイルス対策製品を構成して、データがアクセスされたとき（たとえば、ファイルが実行または作成されたとき）にのみファイルをスキャンするようにします。その他の種類のファイルアクセス（たとえば、ファイルが開かれたときやそのステータスがチェックされたとき）は、ウイルス対策製品によって無視されます。HSMは通常、ファイルオープンおよびファイルステータスチェック操作に応答してアクティブになるため、これらの操作でのウイルススキャンを無効にすると、潜在的な競合が解消されます。

Citrixは、主要な企業向けウイルス対策製品のバージョンでストリーミングされたユーザープロファイルをテストし、それらがProfile Managementと互換性があることを確認しています。これらのバージョンには以下が含まれます。

- マカフィー ウイルススキャン エンタープライズ 8.7
- シマンテック エンドポイントプロテクション 11.0
- トレンドマイクロ オフィススキャン 10

これらの製品の以前のバージョンはテストされていません。

他のベンダーの企業向けウイルス対策製品を使用している場合は、それがHSM対応であることを確認してください。スキャンを実行する前にHSM操作を完了できるように構成できます。

一部のウイルス対策製品では、管理者が読み取り時スキャンまたは書き込み時スキャンを選択できます。この選択は、パフォーマンスとセキュリティのバランスを取ります。ストリーミングされたユーザープロファイル機能は、この選択の影響を受けません。

ストリーミングおよびウイルス対策展開におけるProfile Managementのトラブルシューティング

ログオンがハングしたり、時間がかかったりするなどの問題が発生した場合、Profile Managementと企業向けウイルス対策製品の間で構成ミスがある可能性があります。次の手順をこの順序で試してください。

1. Profile Managementの最新バージョンを使用していることを確認してください。問題はすでに発見され、修正されている可能性があります。
2. Profile Managementサービス (UserProfileManager.exe) を、企業向けウイルス対策製品の信頼済みプロセスリストに追加します。
3. HSM操作（開く、作成、復元、ステータスチェックなど）でのウイルスチェックを無効にします。ウイルスチェックは読み取りまたは書き込み操作のみで実行してください。
4. その他の高度なウイルスチェック機能を無効にします。たとえば、ウイルス対策製品は、実際のファイルタイプを特定するために、ファイルの最初の数ブロックをクイックスキャンする場合があります。これらのチェックは、ファイルの内容を宣言されたファイルタイプと照合しますが、HSM操作を妨げる可能性があります。
5. 少なくともプロファイルがローカルドライブに保存されているフォルダーについては、Windows検索インデックスサービスを無効にします。このサービスは不要なHSM取得を引き起こし、ストリーミングされたユーザープロファイルとエンタープライズウイルス対策製品との間で競合を誘発することが観察されています。

これらの手順のいずれも機能しない場合は、ストリーミングされたユーザープロファイルを無効にします（**プロファイルストリーミング**設定を無効にすることで）。それが機能する場合は、その機能を再度有効にし、エンタープライズウイルス対策製品を無効にします。それも機能する場合は、機能しないケースのProfile Management診断情報を収集し、Citrixテクニカルサポートに連絡

してください。彼らはエンタープライズウイルス対策製品の正確なバージョンを知る必要があります。

Profile Managementを引き続き使用するには、エンタープライズウイルス対策を再度有効にし、ストリーミングされたユーザープロファイルを無効にすることを忘れないでください。この構成では、Profile Managementの他の機能は引き続き機能します。プロファイルのストリーミングのみが無効になります。

システム要件

ソフトウェア要件

Profile Managementを実行するシステムは、以下のいずれかのオペレーティングシステムに基づいている必要があります。

- **デスクトップ** - Microsoft Windows 11、Windows 10、Windows 8.1、およびWindows 7 Service Pack 1。

  Citrix virtual desktops™環境では、Windowsストアアプリケーション（UWPアプリとも呼ばれる）がサポートされています。
- **サーバー** - Windows Server 2022、Windows Server 2019、Windows Server 2016、Windows Server 2012 R2、Windows Server 2012、および Windows Server 2008 R2 サービスパック 1 の Standard エディションと Datacenter エディション。

> **注:**

> Citrix Profile Managementは、製造元によってサポートされているオペレーティングシステムのバージョンでのみサポートされます。オペレーティングシステム製造元から拡張サポートを購入する必要がある場合があります。

> 拡張保護モード（EPM）が有効な場合、Microsoft Internet Explorer 10以降のCookieはWindows 7以降ではサポートされません。EPMが有効な場合、Profile ManagementはCookieを処理または操作しません。

すべてのユーザーは、プロファイルが集中管理されるネットワークフォルダーであるユーザーストアにアクセスできる必要があります。または、必要に応じて、プロファイルをユーザーのホームドライブに保存することもできます。詳細については、「Profile Managementアーキテクチャ」を参照してください。

Profile ManagementがCitrix Studioに統合されているXenDesktop 7を使用しない限り、構成にはActive Directory（AD）グループポリシーオブジェクト（GPO）が必要です。Windows Server 2008およびWindows Server 2012ネイティブモードのADフォレスト機能レベルとドメイン機能レベルがサポートされています。詳細については、「Profile Managementでのドメインとフォレストのサポート」を参照してください。または、構成設定にローカルの.iniファイルを使用することもできますが、一般的に.iniファイルはテスト目的でのみ使用されます。.iniファイルの設定は、GPOで構成されていない設定、つまり「未構成」状態のままになっているグループポリシー設定に適用されます。

Profile Managementで使用しているCitrix製品またはコンポーネントで短いファイル名（8.3形式のファイル名とも呼ばれる）が必須である場合、Profile Managementの展開で短いファイル名のサポートを無効にしないでください。無効にすると、ユーザーストアとの間でファイルをコピーする際に問題が発生する可能性があります。

Profile Management Serviceを実行しているコンピューターでは、プロファイルをドライブ文字でマウントされた単一のディスクに保存します。ユーザープロファイルを保存するために使用されるフォルダーにディスクがマウントされている場合（一般的な例は`C:\Users`）、サービスからマスクされ、処理されない可能性があります。

Citrix製品の互換性

Profile Managementは、以下のCitrix製品で使用できます。

- シトリックス バーチャルデスクトップ
- シトリックス バーチャルアプリ™
- シトリックス バーチャルアプリおよびデスクトップ™
- Citrix DaaS™ (旧 Citrix バーチャルアプリおよびデスクトップ サービス)

Profile ManagementとCitrix Virtual Apps and Desktopsの互換性マトリックスについては、「Citrix Profile Managementの追加ライフサイクル情報」を参照してください。

このCurrent Release (CR)をLong Term Service (LTSR)環境で使用する方法やその他のFAQについては、Knowledge Centerの記事を参照してください。

ダウンロード

Profile Managementをダウンロードするには

1. Citrixダウンロードページに移動します。

2. マイアカウントにログオンします。アカウントは、展開したCitrix製品のライセンス資格に関連付けられている必要があります。アカウントがライセンス資格に関連付けられていない場合は、Citrixカスタマーサービスにお問い合わせください。
3. ［ダウンロードの検索］で、製品を選択し、ダウンロードの種類として［コンポーネント］を選択します。
4. Profile Managementの最新バージョンをダウンロードします。

診断機能

Citrix Diagnostic Facilityを使用してトレースログをキャプチャする前に、監視するプロファイルを持つデバイス、仮想デスクトップ、またはCitrixサーバーで使用されているCitrix製品またはコンポーネントでそれが利用可能であることを確認してください。

クロスプラットフォーム設定

このリリースでクロスプラットフォーム設定機能を使用するには、Profile Management Serviceを実行しているすべてのコンピューターにMicrosoft Core XML Services (MSXML) 6.0 Service Pack 1以降をインストールします。このコンポーネントはMicrosoft .NET Framework 3.5の一部であり、定義ファイルを処理するために必要です。

この機能は、サポートされているオペレーティングシステムとアプリケーションのセットでのみ使用してください。詳しくは、「クロスプラットフォーム設定でサポートされているオペレーティングシステムとアプリケーション」を参照してください。

既存のプロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行する

以下のプロファイルタイプからCitrixユーザープロファイルへの移行がサポートされています。

- Windowsローミングプロファイル
- 以下のいずれかのオペレーティングシステムに基づくローカルプロファイル：
    - ウィンドウズ 11
    - ウィンドウズ 10
    - ウィンドウズ 8
    - ウィンドウズ 7
    - Windows ビスタ
    - Windows エックスピー
    - ウィンドウズ サーバー 2022

- Windows サーバー 2019
- Windows サーバー 2016
- ウィンドウズ サーバー 2012 R2
- Windows サーバー 2012
- Windows サーバー 2008 R2
- ウィンドウズ サーバー 2008
- ウィンドウズ サーバー 2003

- User Profile Manager 2.0 で作成された Citrix ユーザープロファイル

次のプロファイルの種類から Citrix ユーザープロファイルへの移行はサポートされていません。

- Microsoft の強制プロファイル。 ヒント: Profile Management のテンプレートプロファイル機能を使用して、Microsoft の強制プロファイルを Citrix の強制プロファイルとして構成できます。Citrix の強制プロファイルはすべてのログオンで使用され、ユーザーの変更が保存されない点を除けば、通常の Citrix ユーザープロファイルとまったく同じように機能します。詳しくは、 テンプレートプロファイルまたは強制プロファイルを指定するを参照してください。
- Citrix の強制プロファイル。
- User Profile Manager のテクニカルプレビューリリースまたはベータリリースで作成された Citrix ユーザープロファイル。
- サードパーティプロファイル（sepagoPROFILE を含む）。

32 ビットの Citrix ユーザープロファイルから 64 ビットのプロファイルにアップグレードすることはできません。

トラブルシューティング

このセクションでは、Profile Management のトラブルシューティング方法について説明します。

一般的なトラブルシューティングのワークフローは次のとおりです。

1. Profile Management の設定を確認する。
2. Profile Management のログファイルを確認する。
3. Profile Management によってログに記録された Windows イベントを確認する。
4. 一般的な問題をトラブルシューティングする。
5. 高度なトラブルシューティングを実行する。

6. 上記の手順を試しても問題が解決しない場合は、できるだけ多くの診断情報を収集し、Citrixテクニカルサポートに連絡してください。

アップグレードと移行

このセクションでは、Profile Managementソフトウェアをアップグレードする手順と、既存のWindowsユーザープロファイルをCitrixユーザープロファイルに移行するための情報について説明します。たとえば、これらの手順を使用して、バージョン3.xからバージョン5.xに簡単にアップグレードできます。

アップグレードする前に、アップグレード元およびアップグレード先のリリースで利用可能なProfile Managementの機能と設定を理解してください。この情報を確認するには、「Profile Managementのポリシー」を参照してください。.iniファイルからグループポリシーへのアップグレードを容易にするため、このトピックでは.iniファイルの設定を.admおよび.admxファイルの設定にマッピングしています。

アップグレード中は、Profile Managementを（グループポリシーまたは.iniファイルのいずれかで）構成しないでください。まず展開をアップグレードし、次に必要に応じて設定を構成することで、これら2つのタスクを分離します。理想的には、「構成の決定」の質問に答えることで設定を構成します。

ヒント：Profile Management 2.1.1以降の展開は、最新バージョンにアップグレードすることでホットフィックスを適用できます。アップグレード後、必要に応じてそれ以降の機能を有効にできます。

混在展開

異なるバージョンのProfile Managementが共存する展開では、次の操作を行います。

- 混在展開が存在する時間を最小限に抑えます。
- 最新バージョンの.admまたは.admxファイルを、すべてのドメインコントローラー上の各グループポリシーオブジェクトに追加します。すべての新機能が無効になっていることを確認し、新しいポリシーが伝播する時間を確保してください。
- すべてのコンピューターを最新バージョンのProfile Managementにアップグレードしてから、ポリシーを有効にしてください。

バージョン5.xと3.2を含む混在展開はサポートされています。ただし、このような展開は、以前のバージョンから新しいバージョンへの移行中に存在する一時的な状態として扱ってください。

重要: バージョン5.xとバージョン2.1.1以前のバージョン（Citrix Technical Previewまたはベータリリースを含む）が混在する展開はサポートされていません。ただし、アップグレードできず、これらのバージョンが展開内で共存する必要がある場合は、このトピックの残りの部分が役立つかもしれません。

Profile Management 2.1.1以前を含む混在展開

このトピックの残りの部分では、Profile Management 2.1.1以前とProfile Management 3.xまたは5.xの共存に関する情報が含まれています。あるバージョンから別のバージョンへ移行する方法について説明します。このトピックでは、これらのバージョンの略語として「バージョン2」と「バージョン5」という用語を使用しています。

各バージョンを別々のOUに分離し、各バージョンを実行しているコンピューター用に別々のユーザーストアを維持します。あるいは、単一のユーザーストアが両方のバージョンを実行しているコンピューターにサービスを提供する場合、すべてのコンピューターがバージョン5にアップグレードされるまで、すべてのバージョン5の設定が無効になっていることを確認してください。「混在」ユーザーストアでバージョン4の設定を有効にすると、ユーザーはバージョン2を実行しているコンピューターにログオンできます。しかし、一時的なWindowsユーザープロファイル（ネットワーク上のCitrix®ユーザープロファイルではない）を受け取り、そのプロファイルに行った変更は保存されません。混在展開は一時的なものと見なし、アップグレードを完了する前にその存在期間を最小限に抑える必要があります。

別々のOUとユーザー ストアを使用すると不便な場合があります。これらの制約を回避するには、次の2つの戦略のいずれかを使用できます。Profile Managementの適切なバージョンで、Processed groups設定を使用して各グループを構成します。戦略2は戦略1よりも手間がかかります。前者の場合、バージョン5の処理済みユーザーグループを更新し続けることになります。また、2つのアプリケーションとデスクトップのセットを維持します（ただし、Citrix virtual apps™からアプリケーション定義をエクスポートすることで自動化できます）。利点は、移行に時間をかけることができる点です。

注：以下の戦略の代替として、Windows Server 2008 Active Directoryでは、WMIフィルタリングを使用してGPOをOU内のコンピューターのサブセットに適用し、どのバージョンのProfile Managementがインストールされているかを判断できます。これにより、適用されるポリシーをバージョンに合わせて自動的に調整できます。

戦略1：一括移行

このシナリオでは、ある程度のダウンタイムが許容されることを前提としています。すべてのコンピューターは同時に移行されます。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。後者は以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。
2. すべてのバージョン5の設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの**無効**に依存しないでください。
3. すべてのコンピューターをバージョン2からバージョン5にアップグレードし始めます。これを通常のメンテナンスおよび更新スケジュールに合わせます。1つの例外を除き、バージョン5の設定を有効にするまでは、バージョン5はバージョン2として機能します。例外は次のとおりです。これはまれですが、このアップグレード手順が長期間にわたって段階的に行われる場合に発生する可能性が高くなります。ユーザーが複数のサーバーからCitrixユーザープロファイルにアクセスすると、複数のバージョン4セッションが作成されます。たとえば、最初にワークステーションを使用してあるサーバー上の仮想デスクトップにアクセスし、次にラップトップを使用して別のサーバー上の公開アプリケーションにアクセスします。Profile Managementは、2番目のラップトップセッションに保留領域を使用する必要があります。この時点で、OU全体がバージョン5の展開として扱われます（ただし、バージョン5の機能は何も構成されていません）。そして、PmCompatibility.iniはこの変更を反映するように更新されます。
4. オプションで、バージョン5の処理済みユーザーグループに、小規模なパイロットグループのメンバーのみを含めるように設定します。ADグループポリシーの変更がネットワーク全体に伝播するのを待ちます（たとえば、週末にかけて）。この変更が行われている間、他のユーザーのアクセスを妨げる必要はありません。パイロットグループのプロファイルをバックアップします。その後、パイロットグループにProfile Managementをテストさせます。
5. パイロットグループの結果に満足したら、他のユーザーのプロファイルをバックアップしていることを確認してください。
6. 次回の定期メンテナンス期間を利用して、残りのユーザーをバージョン5の処理済みユーザーグループに追加します。ADグループポリシーの変更が伝播するのに十分な時間を確保し、残りのユーザーがログオンできるようにします。

戦略2：段階的移行

このシナリオでは、すべてのマシンまたはユーザーを一度に新しいバージョンに移行できないことを前提としているため、ユーザーのサブセットを選択してバッチで移行します。複数のデータセンターや地理的に分散したユーザーがいる展開に適しています。

移行戦略は次のとおりです。

1. バージョン2のADMファイルをバージョン5のファイルに置き換えます。後者は以前のバージョンと互換性があるため、バージョン2のコンピューターは引き続き正常に動作します。

2. すべてのバージョン5設定が無効になっていることを確認します。デフォルトの「無効」に依存しないでください。
3. いくつかのコンピューター（最初のバッチ）をバージョン5にアップグレードします。または、新しいコンピューターにバージョン5をインストールします。デフォルトでは、バージョン5で処理されるユーザーグループには空のグループが含まれているため、どのユーザーもバージョン5ユーザーとして処理されません。フェーズ移行でコンピューターをアップグレードする場合にも適用される可能性がある、戦略1で説明されている例外に注意してください。
4. バージョン5コンピューターから新しいアプリケーション（Citrix Virtual Appsを使用）または仮想デスクトップ（Citrix Virtual AppsまたはCitrix Virtual Desktops™を使用）を公開します。これらのアプリケーションとデスクトップは、名前を除いて、以前にバージョン2コンピューターから公開されたものと同一です。これらの名前は、バージョン5ユーザーが使用するためのものであることを示します。
5. このバッチで選択されたユーザーは、アプリケーションまたはデスクトップにログオンします（たとえば、Web Interfaceを使用）。彼らは新しいアプリケーションを選択します。（ユーザー名またはグループメンバーシップに基づいて、Web Interfaceを使用してこの手順を強制します）。その結果、彼らのセッションはバージョン4コンピューターで実行されますが、バージョン2の設定で処理されます。
6. すべてのユーザープロファイルをバックアップしたことを確認してください。
7. ユーザーをバージョン2処理済みユーザーグループからバージョン4グループに移動します。ADグループポリシーの変更がバージョン5コンピューターに伝播するのを待ちます。次回ログオンするとき、ユーザーのセッションはバージョン5の設定で処理されます。
8. 前述のとおり、次のバッチのコンピューターをアップグレードし、次のバッチのユーザーを移行します。

ユーザープロファイルの移行

この記事では、次の2つの移行ワークフローについて説明します。

- Citrix®コンテナベースのプロファイルソリューションへの移行
- Windowsローミングプロファイルソリューションへの移行

移行戦略の詳細については、「アップグレードと移行」を参照してください。

Citrixコンテナベースのプロファイルソリューションへの移行

Profile Managementインストールパッケージに含まれる移行ツールを使用して、以下のプロファイルソリューションからCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションにユーザープロファイルを移行できます。

- Windowsローカルプロファイルソリューション
- Citrixファイルベースのプロファイルソリューション
- FSLogix プロファイル コンテナ

移行ワークフロー

現在のプロファイルソリューションをCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションに移行するには、次の手順に従います。

1. ストレージサーバー上にCitrixユーザーストアをセットアップし、そのWindowsアクセス制御リスト（ACL）を構成します。

   詳細については、「ユーザーストアの作成」を参照してください。

2. Profile Managementに付属の移行ツールを使用してユーザープロファイルを移行します。

   詳細については、「例: FSLogix Profile Containerのユーザープロファイルを移行する」を参照してください。

3. マシンにProfile Managementをインストールします。

   詳細については、「インストールとセットアップ」を参照してください。

4. 特定のProfile Managementポリシーを構成して、コンテナベースのプロファイルソリューションをセットアップします。基本的なワークフローは次のとおりです。

   a. Profile Managementを有効にする

   b. ユーザーストアへのパスを指定します（ユーザーストアへのパス）

   c. ユーザープロファイル全体に対してプロファイルコンテナを有効にします（プロファイルコンテナ）

   プロファイルコンテナの詳細設定については、「Citrix Profile Managementプロファイルコンテナ」を参照してください。

5. （FSLogix Profile Containerの場合）マシンでFSLogix Profile Containerを無効にします。そうしないと、Citrixコンテナベースのソリューションが正常に機能しません。詳細な手順は次のとおりです。

   a. **レジストリエディター**で、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\FSLogix\Profiles`に移動します。

   b. **Enabled**を**0**に設定します。

例：FSLogix Profile Containerのユーザープロファイルを移行する

このセクションでは、VHDXベースのFSLogix Profile ContainerからCitrixコンテナベースのプロファイルソリューションにユーザープロファイルを移行する方法について詳しく説明します。

開始する前に、次の要件を満たしていることを確認してください。

- ストレージサーバーにCitrixユーザーストアをセットアップし、そのWindowsアクセス制御リスト（ACL）を構成していること。
- FSLogix Profile ContainerのVHDXの場所を把握していること。
- ドメイン管理者の資格情報を持っていること。

詳細な手順は次のとおりです。

1. ドメイン管理者アカウントを使用してマシンにログオンします。
2. 管理者として **Windows PowerShell ISE** を実行します。
3. PowerShell コンソールで、Profile Management インストールパッケージ内の **\tool** フォルダーにアクセスし、**CPM_ProfileContainer_Migration_Tool.ps1** を実行します。
4. プロンプトが表示されたら、移行タイプ **3** を選択します。これは、FSLogix Profile Container (VHDX) から Citrix コンテナベースのプロファイルソリューションへのユーザープロファイルの移行を表します。
5. 移行するユーザーとグループをコンマで区切って入力します。例: `<DOMAIN NAME>\<USER NAME1>,<DOMAIN NAME>\<GROUP NAME1>`
6. FSLogix Profile Container の VHDX の場所を入力します。
7. Citrix VHDX ストアへのパスを入力します。

> **注:**
>
> - Citrix VHDX ストアとして、Citrix ユーザー ストアまたは別のネットワーク ストレージを使用できます。
> - すべての変数の中で、`%USERNAME%` のみがサポートされています。

8. マシンの Windows OS バージョンを短縮名で指定します。Windows OS バージョンの短縮名を取得するには、「Profile Management policies」を参照してください。

> **注:**

> 指定された OS タイプを持つユーザープロファイルのみが移行されます。

> 完了すると、移行結果が画面に表示されます。

Windows ローミングプロファイルへの移行

Citrix ユーザープロファイルをいつでも Windows ローミングプロファイルに移行できます。プロファイルデータを、ローミングプロファイルが保存されているネットワークの場所に移動します。移行後、Profile Management はユーザーログオンやアプリケーション設定の処理に関与しません。

1. すべてのユーザーがログオフしていることを確認してください。
2. ソフトウェアが管理するすべてのコンピューターから Profile Management Service を削除します。
3. ユーザー ストアで、`\UPM_Profile` の内容をローミング プロファイルの場所に移動します。クロスプラットフォーム設定ストアの内容を移動する必要はありません。
4. (バージョン 1 プロファイルのみ) `\UPM_Profile` のすべてのサブフォルダーから _upm_var サフィックスを削除します。 注: スクリプトを使用すると、この手順が簡素化される場合があります。

新機能

2308の新機能

このリリースには、以下の新機能と機能強化が含まれています。また、全体的なパフォーマンスと安定性の向上に役立ついくつかの問題も解決されています。

拡張されたアプリのアクセス制御

*アプリのアクセス制御*機能が、従来のドメイン環境外のユーザーおよびマシンにも適用されるようになりました。この機能を使用すると、ドメインに参加していないマシンに対してアプリのアクセス制御を実装し、Active DirectoryおよびAzure Active Directoryのユーザーアカウントに基づいてアプリのアクセスを制御できます。

組み込みのPowerShellルールジェネレーターも強化されました。このツールを使用すると、ADユーザーとマシンだけでなく、Azure Active Directoryユーザーとドメインに参加していないマシンに対してもアプリのアクセスルールを設定できるようになりました。

詳しくは、「アプリケーションへのアクセスを制御する」を参照してください。

Citrix®コンテナベースプロファイルソリューション用のプロファイル移行ツール

Citrix Profile Managementは、Citrixコンテナベースプロファイルソリューションへの移行プロセスを容易にするプロファイル移行ツールを提供するようになりました。このツールを使用すると、以下のプロファイルソリューションからCitrixコンテナベースプロファイルソリューションにユーザープロファイルを移行できます。

- Windowsローカルプロファイル
- エフエスロジックス プロファイル コンテナ
- Citrixファイルベースプロファイルソリューション

詳しくは、「ユーザープロファイルを移行する」を参照してください。

プロファイルコンテナの自動拡張ポリシー

Citrix Profile Managementは、プロファイルコンテナ用のストレージ自動拡張ポリシーのセットを提供するようになりました。

- プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にする
- プロファイルコンテナの自動拡張しきい値
- プロファイルコンテナの自動拡張増分
- プロファイルコンテナの自動拡張制限

これらのポリシーにより、ユーザープロファイルの増加に合わせてプロファイルコンテナを自動的に拡張できます。これにより、手動での拡張が不要になり、ユーザーエクスペリエンスが向上します。詳細については、「プロファイルコンテナのVHD自動拡張を有効にして構成する」を参照してください。

VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にするサポート

デフォルトでは、VHDコンテナは同時アクセスを許可します。新しいポリシー「**VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする**」を使用すると、プロファイルコンテナとOneDriveコンテナの同時アクセスを無効にし、一度に1つのアクセスのみを許可できます。詳細については、「VHDコンテナへの排他的アクセスを有効にする」を参照してください。

UWPアプリのローミング (プレビュー)

新しいポリシー「**UWPアプリのローミング**」により、UWP（ユニバーサルWindowsプラットフォーム）アプリがユーザーとともにローミングできるようになりました。その結果、ユーザー

は異なるデバイスから同じUWPアプリにアクセスできます。詳細については、「UWPアプリのローミングを有効にする」を参照してください。

Profile Managementのドキュメント履歴

次の表に、Profile Management 2305のドキュメントに対する重要な変更点を示します。これらの更新に関する通知を受け取るには、RSSフィードを購読してください。

日付	変更	説明
14 Sep 2023	Profile Management 2308の初期リリース	Profile Management 2308の初期リリース。詳しくは、「新機能」を参照してください。